THE CENTRAL REVIEW

中央公論

1915
no.3

三月號

第三十年第三號　第三百五十號

印度タゴール著　三浦關造先生譯

森林哲學 生の實現

四六判上製　全一冊
正價金八拾錢　郵税十錢

忽再版

▼初版三千部二日にして賣切れ、再版亦盡きんとす。

近頃丸善書店で何部取り寄せても、直ぐに羽のはえた様に飛んで往く英書がある。それは歐米の識者をして『今後はタゴールの時代也』とまで驚歎せしめ、最近に世界的名譽の月桂冠たるノベル賞金を贈られたる印度人タゴールの書いた本書(タゴールは英文で之を書いた)で、今三浦先生の明快流麗なる其全譯が出たのである。云ふ迄もなくタゴールは現代東洋第一の神秘的宗教的の文豪で、本書は實に東洋精神の美妙雄大なる詩的表現、西洋文明の根本的批判、東洋思想勝利の熱烈なる大文字である。オイケン、ベルグソンの未成品と異り、渾然たる眞理の奥底より出づる新しき生の叫びである。其思想に天涯無窮の平和があり、人類の永遠な秘義が解決されてある。文學、倫理、宗教に心ある人、新生に憧がるゝ人の熟讀を要する經典はこれである。

東京市本郷區西片町十番地　玄黄社　振替東京七九九五番　電話下谷一三九番

■明治大正に亘れる新文藝の精華■

代表的 名作選集

非常なる歡迎を受け
販賣高既に六萬部を超ゆ

島村抱月氏 生田長江氏
中澤臨川氏 相馬御風氏 選

■羽二重表紙極美本
■定價一部金參拾錢
■郵税　一部四錢

各編取揃
應御注文

第一■牛肉と馬鈴薯　國木田獨步作
第二■坊っちやん　夏目漱石作
第三■蒲團　田山花袋作
第四■透谷選集　北村透谷作
第五第六■春（上下二册）　嶋崎藤村作
第七■わが袖の記　高山樗牛作
たけくらべ　樋口一葉作
第八■爛れ　德田秋聲作
第九■平凡　二葉亭四迷作
第十■高野聖　泉鏡花作

東京市牛込區矢來町中の丸　新潮社　電話番町二二三番　振替東京一七四二番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告は掲載謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

是れ美人と美酒との藝術也

情話文庫

是れ歡樂と陶醉との藝術也

近松秋江氏作

新刊出來

舞鶴心中

秋江子苦心の傑作『舞鶴心中』一たび世に公にせらるゝや、世評籍甚、文壇の視聽此の一作に鍾り、作者の文名忽ち九天に達するの觀あり。今大訂正を全篇に加へ、本文集第一編として發行す。裝畫は夢二畫伯の筆に成り、丸髷姿のお京が炬燵によりて遣瀬なき物おもひに沈めるさま、眞に凄惋無比と云ふべきものたり。

竹久夢二氏裝畫

極美本 ▼價參拾五錢 ▼送料金四錢

長田幹彦氏作

新刊出來

舞妓姿

新たに稿を起せる長篇「しぐれ茶屋」を始め、近業中の佳作數篇を收めて本集成る。口紅濃かなる京の舞妓が友禪の袂に秘めたる戀物語也。此の種の情話を描くに於て當代倫を絶せる作者が、本集は會心の作なりと自ら稱せるに看て、いかに自信あるものたるかを知る可く、まさに魅力に富める作者の藝術の最高頂を示すものたり。

竹久夢二氏裝畫

極美本 ▼價參拾五錢 ▼送料金四錢

東京市牛込區矢來町中ノ丸 新潮社 電話番町二二三番 振替東京一七四二番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

一 當會社の保險料は低廉にして且つ利益金の百分の五十以上を五箇年目毎に契約者に分配す

一 當會社の保險料拂込方法は保險證券訂正の煩を要せず其變更契約者の隨意とす

一 當會社は拂濟保險の便法を設けあり

古河家經營

博愛生命

社長 男爵 中島久萬吉
專務取締役 小原元美
專務取締役 鈴木市之助
常任監査役 安達仁造

本店 東京市日本橋區本町四丁目十五、十六番地
電話長本局一八五六、五一五〇、二三八七番
振替貯金口座東京一七一七番
支店 大阪市東區本町一ノ一三(電長本局二三一一番)

一 當會社は低利なる金融機關の設あり

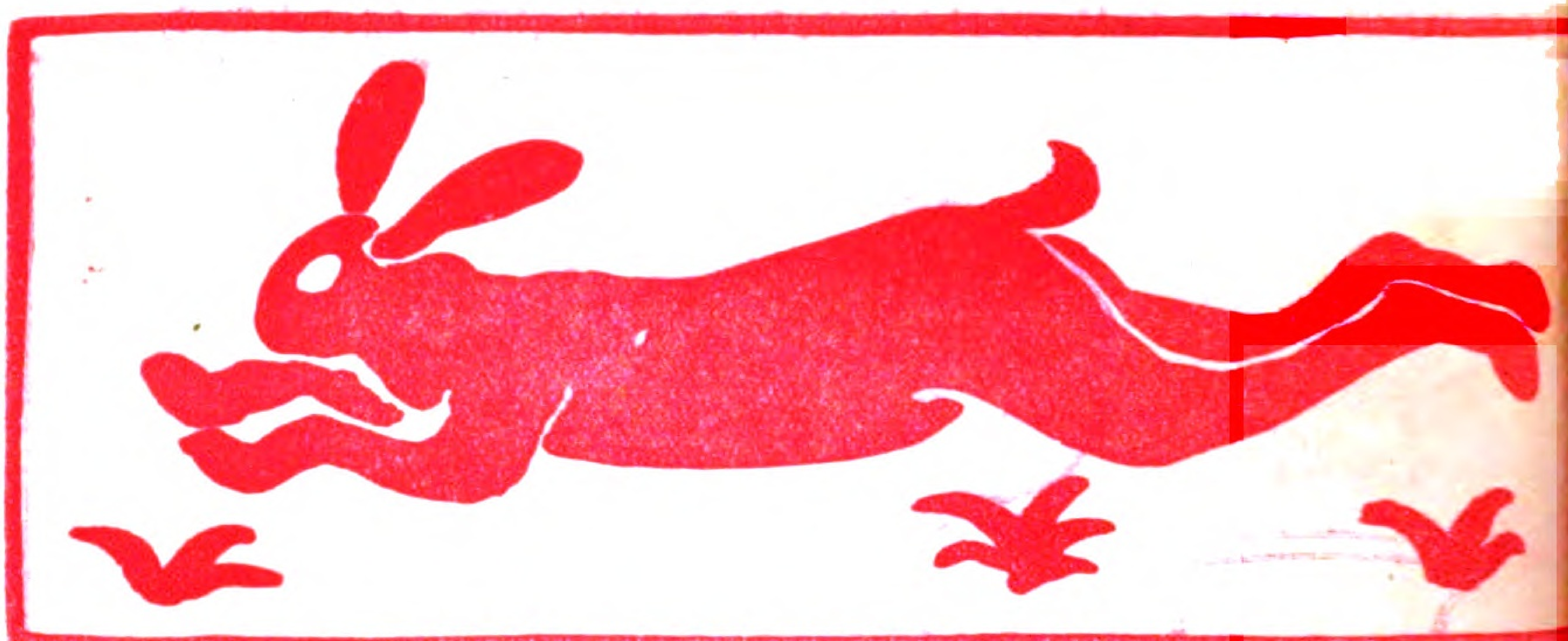
一 當會社は被保險者の年齢範圍最も廣く滿九年七箇月以上滿六十年六箇月迄契約す

一 當會社の保險金支拂は最も迅速なり是れ保險契約の目的を遂行せんが爲なり



中央公論第三十年三月號目次

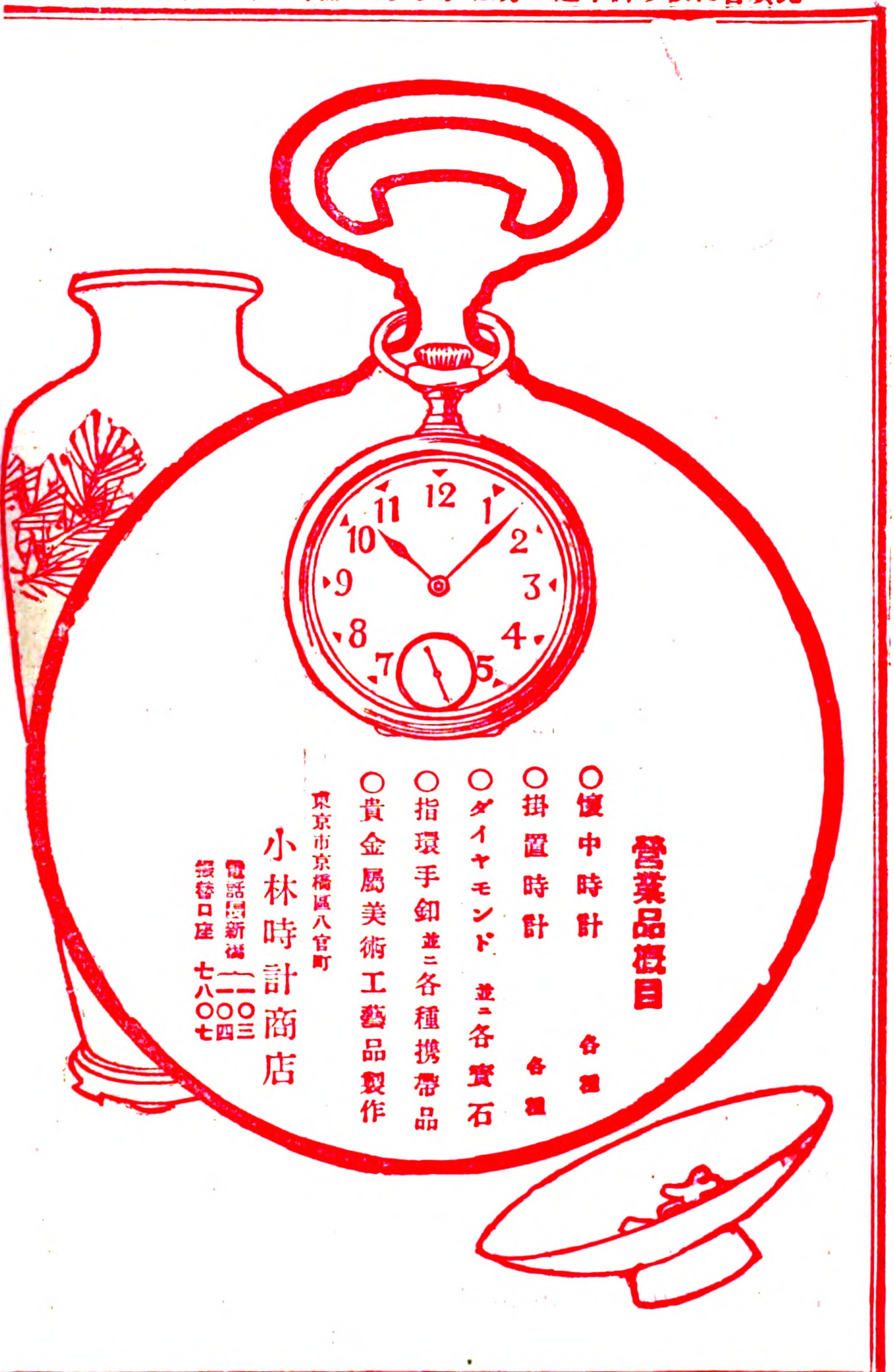
▼公論



▼論說

▼評論

《小說》



營業品目
○懐中時計 各種
○掛置時計 各種
○ダイヤモンド並ニ各寶石
○指環手釦並ニ各種携帶品
○貴金屬美術工藝品製作
東京市京橋區八官町
小林時計商店
電話局新橋 一二〇三 二〇〇四
振替口座 七八〇七

COLOMBI



The Mountain

中央公論



三月號
第三十年第三號
第三百十五號

今代の支那氣質に就て

(一) 問題の提起

日支兩國の交際は既てに千有餘年の久きに及び、彼れの聖經賢傳は我が倫理道徳の教科書たり、其歴史、詩文は我が教育の一大要素たり、殊に地形上より觀れば僅に一衣帶水を距て兩國民ともに黃色人種に屬し、若しも我邦人をして辮髮漢服せしむれば支那人と區別すべからず、彼國人をして散髮和裝せしむれば毫も日本人と擇むところなし、文字亦た殆んと共通し、彼我の文學直に移し以て相互の時文となすを得べく、更に對支貿易に至りては彼我特に親密の關係あり毎歳の總額殆んと二億圓に上り、英と伯仲の間に在り其他の米露獨等に對照せば我は遙かに之を凌駕するを見る、更に又た日支政治上の關係を觀

れば與に輔車脣齒も啻ならず白晳人種滔天の壓力に抗し極東の平和及び獨立を支持すべきは一に繋りて日支協同の力にあるは兩國識者の夙に認むる所たらずはあらず。

然るに日支兩政府の關係を見れば大小の懸案常に机上に堆積し、動もすれば外交危機を告ぐ、最近又々多年の懸案兩政府の議に上り、北京の政情頗る激越の徵あり、我政府の要求なるもの頗る穩正なりと云ふに關はらず支那當局は容易に之に應ぜんとはなさず、漫に辭柄を構へて一に遲滯延期を圖らんとするに似たり、然らば則ち國民と國民の個人關係に於て果して幾何の同情ありや、果して幾許の思想の疏通ありやと云ふに、是れ單に彼の革命派の少數人士と我が之に對する更に少數の同情者との關係あるの外、殆んど何等の關係なく、思想の交通若しくは民族的共同の向上と云ふが如きに至りては實に皆無なりと云ふも過言ならず、試みに我邦と米國との關係を觀よ、人種文字全然相異し、殊に近年勞働問題の生起せし以來、兩者の國交必ずしも圓滿ならず、更に極東に對する米人の經濟的發展は時に我に對し挑發的傾向なきにあらずして、日米戰爭の叫びさへ近年頻りに海を越へて吾人の耳朶を打つに至れり、然れども米人と我邦人の間には此間尙ほ一道の氣脈相通ずるものあり同憂の人士互に相往來して意志の疏通を謀り誓つて百年平和の基礎を堅ふせんことを努めつゝあり、異文異人種の米國人との間に於て猶且つ斯の如きものあり、然るに千有餘年の交誼あり且つ輔車脣齒の關係ある同文同種の日支間、其精神の共通同情を缺ぐこと胡越も啻ならざるに至りては豈に奇々怪々ならずや、吾人は刻下の懸案の何物たるを知らず、假令之を忖度し中らずと雖も遠からずと做すも之を記すること能はず、但だ其解決の豫期に違

よて延期せらるゝの傾きある、案件提起の爲め著しく支那民間の反日感情を激發せし形跡ある、假令今次の案件は滯りなく能く之を解決し得べしとするも日支間の意志は毫も疏通せず益々疎隔せられんとするが如きを觀るに於て吾人は兩國の前途の爲め益々深く憂ふる所なくんばあらず、猥りに暴言を放つて彼は日本人の野心を攻撃し我は支那人の頑愚を罵るも果して何の益ぞ、是れ只だ事毎に日支間を離間せんとして張膽明目する某國人を利せんのみ、畢竟するに日支間の解誤は双方共國民性を理解せず互に相敬重するの念なきに基因す、是れ吾人が玆に今代の支那氣質を論じて聊か日支兩邦人の參考に資せんとする所以なり。

（二）　支那の自大思想

支那人は數字の奴隷にして毎に自大思想に捕はる、其の稱して四海の內皆な兄弟なりと云ふもの無慮四億三千餘萬人を算す、是れ殆んど全歐洲及び露領亞細亞の人口總計に匹敵するものにして、彼等が居常その同胞兄弟の多きを竊かに賴みとするは無理ならぬことなり、例せば支那人が容易に其辮髮の舊習を改めざるを嘲笑するは然ることながら、試みに支那側に立ちて一考せば其舊慣墨守も亦た無理とのみ云ふ可らず、即ち支那人は四億何千萬人の同俗者を有することなれば、散髮洋裝して少數の日本人などより模造文明人の取扱を受けんよりは舊慣を墨守して多數の同俗者の同情を惹くを以て優かに便利なりとなすなるべし、兎に角多數と云ふことは支那人の最後の賴みたるは否む可らず、百萬の訓練なき粗兵よりも十萬の精銳は確かに眞實の依賴たるべきも、十萬の精兵を以て百萬の精兵と相對せば勝利は必ず多

數の方にあるべく、支那人の狭くに呑取して竊に前途を賴める所なるべし。

更に國土に就て觀るに其面積四百二十七萬方哩は北米合衆國より遥かに擴く、未だ大英帝國又は露細亞帝國の其だ廣きに及ばずと雖も、英帝國の如く地球上の各方面に散布して團結力を缺くの憂なく又た露西亞帝國の北方に偏在し自然の天惠に浴することと少なく殊に不凍港を有せるに苦しむが如きに似ず、其尨大なる領土内には地球上自然界の精華を集め北及西は沙漠と世界第一の高原を境場となし東と南は海洋又は安南暹羅緬甸の高嶺峻峰により包圍せらる、其大川中には世界第一の楊子江あり以て海岸より六百哩の内地たる漢口阜頭外にまで一萬噸の巨船を航行するを得べきなり、其風景奇勝には娥眉山あり三峽の險あり、其物産に至りては米麥雞豚は以て優に民衆の食を足すべく、金銀、銅鐵、石油、石炭の無盡藏なるは以て全世界に誇るに足れり、只だ此等地中の利を未だ發掘せざるのみ、日清戰後の馬關條約に由り支那内地の河川は擧げて列國漕運業の競爭に委せられ、此時よりして列強は爭ふて鐵道鑛山に關する利權の獲得に汲々たり、此形勢に對し支那人間には一時盛んに利權回收熱の勃興を見るに至りしが、玆に彼等は始めて其無盡藏の富源あるを覺知したるなるべく、譬へば地方の大地主が鐵道の開通に由り地價の騰貴に狂喜する如く、山林の持主が鑛山の發見により乍ら百萬圓の權利者となるが如く、今の支那人は前途の富を想像して既に豪富者たるかの自負心なきを得じ、强兵も將來にあり富國も將來にあり、而かも想像は無を有とするの力あれば更に將來を化し今となし、今の貧弱を忘れて自尊傲語を事とする亦た無理なりとせず、少しく彼れが心理を究むれば亦た同情に價すべきものなきにしもあらず。

〔三〕 支那人は歴史に捕はる

支那は世界の舊國にして其歴史の起原は埃及、カルデヤに及はずと雖も若しも堯舜禹湯を以て歴史的人物となさば世界最古國たる該二國の壘を摩するに近しと謂ふべきが如し、希臘のオリムピヤット紀元、及び少しく降りて羅馬建國の頃に當りて支那は周代の初期に屬し既に其の制度文物燦然として備はり、當時世界第一の地位にありしと云ふも妨げず、而して支那人は最も歴史を尙ぶの國にして、古來その列國各々史あり紀年體を以て事を書せり、晋乘、楚檮杌の類已に亡びて存せずと雖も魯史にして孔子の筆削を經たる春秋は今尙ほ存して當時の形勢を傳ふ、司馬遷の史記、班固の漢書に至りて史體大に備はり、シユシデデース、タイタスに比するも遜色ある可らず、司馬光の資治通鑑の如き敎訓的色彩を帶ぶること濃厚に過ぎて歴史としては遺憾とすべき點なきを得ざるも、亦た是れ堂々たる大著述なり、英の歴史家ギボンが羅馬帝政の衰運を叙するに際し資治通鑑の佛語譯に由りて同時の支那に側面觀を試み以て大に錦上花を添ゆるを得たる素より其所なり、爾來歴代亦た各史ありて、支那建國の太古より今日に及ぶ前後幾千載、歴朝の興亡隆替、國家の治亂分合、北方蠻族の侵入と文明の破壞、漢種民族の興起と傳統的制度文物の復活、即ち幾度の變遷を經過せるも此間支那人民たるものは綿々として其系統を失はず、假令蠻民の新血液を混和して活素を加ふるあるも傳來の文明の理想は曾て地に墜ちず以て今日に至れるものは寔に亦世界歴史上の一大偉觀と云ふべからずや、而して斯の如き傳說の下に養はれ、斯の如き空氣を呼吸して生長せし、今代の支那人が一種悠長の氣風を帶び、事に臨みて迫らず、偶々表面に

は悲壯慷慨の態度あるも胸間自ら生理を忘れざる閑日月をす存るある必ずしも異とするに足らず、但だし是れ歴史上の世故を經ること少なく、國土少にして政治範圍の狹きに慣れ、毎に直情徑行を喜ぶ日本人の頗る理解に苦しみ同情に難しとする所たらずんばあらず、然れども一たび今代の支那人と爲り其過去五千載の歷史の前に立つを假想せば其悠々運命に安せんとする態度に對し自ら一種の同情を挑ふことを禁ずる能はざるものあらん、試に思へ、古來支那が其朝を更ゆること幾回なるを知らずと雖も新陳代謝の際には必ず幾多年月の間、國内大紛擾を免れざるを常とせり、例せば後漢亡びて唐朝の興るまで約四百年間の狀態を觀るに、初め五十年間は魏蜀吳の三國に分立して大紛擾を釀せし後ち晉朝起り漸く天下を統一したるも亦直ちに國政を誤まり國土の一半を擧げて動亂に委せり、晉朝約百五十年にして亡ぶるや天下亂麻の光景を呈し是より約二百年間は即ち南北朝時代に屬し、而かも兩朝以外尚ほ十國の割據するあり四海統一の理想は殆んと永久に實行すべからずと思はれたり。

蓋し晉氏初めて政を執るに當り國内の大に亂れしは所謂五胡の亂に基づくものにして、宛も此際匈奴、氐、羯、鮮卑、羌の蠻族は盛んに北方の國疆を越へて中國に侵入し各地方を征服して之に割據したるを以て自然國内の分離紛擾を釀もせしものなり、晉代より南北朝を經て唐朝に至り統一の業成りし所以のものは此の數百年間に於て諸蠻も漸く文明に化せられ支那傳來の理想を奉ずるに至り以て唐朝の統一を可能ならしめしに由れり、是と相前後して歐洲方面に於てもフランク、バンタル、ヴイシゴース、匈奴等の蠻族が西羅馬帝國の版圖を犯して擅に各地に割據し竟に之を滅亡し（四七六年即ち南朝宋の後廢帝

元徽三年なり）而して蠻族等は却て羅馬の敎化に俗し其制度文物を奉じて新獨立國を建てたり、西班牙のヴアンダル國、ゴール（佛國）のフランク國、北伊のロムバルヂー、其他英國、獨逸皆な同時に建國の業に着手せり、但し此時歐洲に於ては各國分離獨立の傾向最も猛烈なりしに反し支那に於ては却て統一の氣運を誘致したる所以のものは首として地形上の影響に因るものと判斷するを妥當とせん、更に降りて唐宋兩朝の間に『五代』の時期あり、此間五十年に過ぎずして五回朝を更ゆ以て國家紛擾の狀態察すべからずや、然れば今の支那人として刻下の政局を觀れば淸朝廢れて共和政體創立せられしと雖も、果して今の儘にして直に天下太平を見るべきや否やは頗る豫想し能はざる所なるべく、又假令萬一にも袁氏馭を失して民國の業敗れ一時は國家分離の傾向盛なることあらんも、誰か知らん是れ却て他日に來るべき眞の國家統一の前提に非ざるなきを、支那人にして此般の形勢に對す何ぞ必ずしも周章狼狽せん須らく悠々閑々たらざる可らず、一面慷慨悲壯の言語を爲すも同時に非運の下處世の術を講ずるを忘る可らざるなり。

（四）建國の理想と統一

古來支那には一の建國の理想あり、即ち堯舜禹湯文武周公先づ之を具體にして範を萬世に垂れ、孔子之を祖述顯彰して後世を指導せり即ち孔氏を宗として初めて仁義を崇め王を貴み覇を賤しむ所以を知るを得べきなり、後世孔子を尊崇して前に孔子なし後に孔子なしとなす所以のもの他なし孔子が堯舜三代の大道を後世に傳ふるに於て唯一の解釋者とせられしが故なり、後の爲政者は秦の始皇帝及び商鞅李斯

輩を除くの外孰れも孔子を以て宗とせざるはなく、孔子の祖述したる王道の何たるを能く理解して其實施に努めたるものは甚だ多からずと雖も、兎に角孔子を尊崇し其道を以て天下を治むるの大經大法なりと標榜し、其威權を藉りて天下の人心を鎭撫するを得たりしなり、秦の始皇帝の如き儒教を排斥し刑名法術の學を採用し一時天下を征服するを得たるも終に民心を得ること能はず、寧ろ其苛酷なる政法よりも學者の横議反抗の爲め秦朝の齡を短くしたりと謂ふを至當とせん、爾來支那は革命に次ぐに革命を以てし、帝室を更ゆること數十の多きに及べるも、一として血統上正統と云ふべきものなく、漢の高祖は沛の民間より起り、唐の太祖は唐公の位にありて平民にはあらざりしも素より前代よりする皇統の人に非ず、宋の太祖は一方の將軍にして前朝の臣下のみ、明の太祖は還俗の僧より身を起したり、而して元清に至りては從來漢民族の理想よりせば殆んど禽獸と同一視せられし夷狄の種族のみ、斯る輩が偶々亂世の氣運に乘し兵方を以て天下の柄を取るや、精神的に天下の人心を治むるに足るべき威權を有せず、自然に孔子を以て名分の本原と爲し其絶大なる名聲、庇蔭の下に新たなる朝廷の權威を鞏固にせり、殊に秦の失敗に顧みて然らざるを得ざりしなり、獨り元の世宗（忽必烈）に至り素より孔子及教學を尊重せざるに非ざりしも、前代の統治が既に廣く西部西細亞に及びし關係上、帝の人を採るや必ずしも支那傳來の素養あるものに限らず波斯人阿合馬を丞相とし西藏人八思巴を以て帝師と爲し伊太利人マルコ、ポーロを以て顧問とせしより察するに決して支那固有の理想に憧憬せしものに非ざるや明なり、元朝が世宗より以後僅々八十餘年にして廢されしも或は孔子の權威を十分に利用するに至らざりしに由らずや、明に至り

ては大に秦元の覆轍に顧みる所ありしもの丶如く、最も教學を尊重し學者を採用し、辮髮を强ゐし一事は支那人をして異朝の下にあることを全く忘るる能はざらしめしも、而かも二百五十年の統治の間民心を得ることと頗る深く、長髮賊の亂に際し一代の名儒曾國藩を初め、俊傑左宋棠李鴻章の輩が滿洲朝廷の爲め勤王の師を起せしが如き異朝の觀念殆んと人心に跡を止めざりしを察するに難からず、而して最近に至り革命軍の勃興するや興漢倒滿の高旆を立て丶一擧に清帝を退位せしめ共和政を創立するを得たるも、一人の滿族追放の議を立つるものありしを聞かず、清朝は依然として一種の尊嚴を保有し且つ支那共和政府より厚き供給を受けて社稷を安んずるを得たり、是れ畢竟支那人が列國環視の間に於て內訌を憚る深慮に出てしならんも、亦た滿人が毫も夷種の民族として漢人の怨恨を受け居らざるを示すものに非ずや、而して斯の如く滿漢能く相親和することを得たる所以のもの主として滿人が全然漢人の敎化に服せしに由れりと斷ぜざる可らず、吾人は玆に於て支那に於ける孔子及儒敎は一の教學に止らず寧ろ道德上、社交上、政治上の最大至上の權威なりしの感なくんばあらず、宛も我邦の　皇室が過去の我歷史に於て、假令亂世の鑑に於ても、最大至上の權威たりしに髣髴たるものありと謂はざるを得ざるなり、古來支那には逆取順守の說行なはれて、天下を取らん爲めには非人倫の行爲を敢てせし人も少なからざれども、後に孔孟の理想に從ひ仁政を行ふに於ては自ら前科を償ふて餘ありと思惟せられしに似たり。

《五》　崇敬の標的を失へる支那

若しも前段論じたるが如く孔子及儒敎は支那唯一の結合力なりしとせば近年泰西思想の注入と共に此

の結合力の權威の大に失墜されしは明かに現代の支那統一を困難ならしむる一大理由ならずとせず、滿朝の末葉變法自强の論盛にして、朝廷亦た新學の士を採用するに至り、民間には共和民國の說稱に宣傳せられ、傳來の敎學は爲めに多大の打擊を受けて信用を失墜せり、清帝退位し袁世凱氏共和民國の主となりてよりは益々精神的統一の權威なきを感ずること深きものの如く、儒敎復興の議ありて袁大總統は昨秋親ら天壇に立ちて祭天の式を復活せり、吾人は支那が二十世紀の學問に向つて門戶を公開したる今日に於て儒敎を舊時の權威ある地位に復せしめんことの極めて困難なるべきを思はざるを得ず、然れども此の企圖あるは偶々以て今代の人心を統一するの甚だ困難なるを一部識者の漸く識認するに至れるを示すものなり、蓋し既に建國の理想を失へる支那は果して之に代はるべき理想を有せるかと云ふに、共和主義は或は之に近きが如きも、現代の支那に於て共和主義の眞髓を理解せるもの果して幾人かある、又た一人般民中にありて共和政體と舊來の帝政の區別を辨知するもの果して幾人かある、共和政體とは袁大爺を以て滿洲朝廷に取換へしのみとは必ずしも北京街頭一御者の言のみに非ず、政府の有司を初め民間の縉紳又は一般の民衆の中華民國政府に對する心事を叩かば多くは一御者の言と殆んど撰む所なけん、然らば則ち共和主義の名分の下に支那四億餘萬の精神的統一を謀らんことは到底不可能に屬し、共和政體は袁氏に威望を加へず寧ろ袁氏の威望ありて僅かに國家の形式を保つを得るものなり、袁世凱氏の苦辛亦た察すべからずや。

るに相違なきも支那の如き傳説を貴び先王の大經大法を以て建國の理想する國情の下に於ては變法自强は如何に已むを得ざるとするも、同時に國家組織を破壞し亂離の因を爲すを免れざればなり、國家百年後の隆盛を思へば一時の騷亂亦た已むを得ずと爲すべきも、時の皇室を擁護し其社會の平和を把持せんと欲せば自ら變法自强の説を退けざる可らざるの場合蓋し少しとせじ、宋の神宗の時に當り王安石一代の偉材を以て新法を提議し自ら局に當りて之を行ふや數載、終に司馬光蘇軾を初め學者間の非常なる反抗に遭ひ民間の苦情に接し、施行央ばにして失敗を以て朝を去れり、其所謂新法とは曰く保甲法即ち民家十家を保とし保長あり五十家を大保とし大保長あり十六保を都保とし都保正副あり以て社會の秩序を維持するに便にせんとし、曰く募役法は人戸の等第によりて免役錢を徴り人を募りて役に當てんとするなり、曰く市易法即ち官に市易務を置き商賈の賣れざる貨物を買ひ又は交換を爲さしむるなり、曰く保馬法即ち保甲にして馬を養はんと欲するものには官より馬又は其直を給せんとするものなり、曰く方田均税法即ち東西南北千歩を一歩とし地の肥瘠を檢し五等となし以て税法を均足するなり、要するに王安石の新法は唐末より五代の間に及び離散せる亡民を撫育し其困弊を濟はんとするには頗る適當の方法なるべく考へらるゝも、舊を戀ひ新を喜ばざる支那の人情は當時の新法を便とせざりしなり、若しも之を更に强制せんと欲せしならば恐らく革命の騷亂を惹起せざれば止まざりしなるべし、輓近光緒帝の變法自强の企圖の如き若し袁世凱氏の裏切りなく帝をして能く其大改革を實行せしめたらんには忽ち保守黨の大反抗を促がして遂に清朝の終末を早めしやも未だ知るべからず。

然ればとて吾人は保守派に同意せんとするに非ず、吾人は保守派の脚地に向ひ同情を表するも其彼等が新說新法に反對する努力の每に徒勞に歸するを憫むものなり、玆に至りて吾人は思ふ、古來支那の儒者輩が孔孟を本尊として一種の保守的氣風を作り出せるは歷代の支那統一の爲めには偉大の効果ありしに相違なきも、支那人民の進步開發の點より見れば非常の害毒を流かせしものに相違なきを、而して今日に於て袁氏が劇かに孔子教を復興せんとし祭天の式を行ふが如き其動機の同情に價すべきものなきに非ざるも亦た時勢後れの一愚策と評するの外あるべからず、但し現在支那人民の間其の崇敬の中心なく、精神的統一の權威なきの一事は如何にも今後統治上の一大憂患たり、試みに我邦維新改革に際し恐れ多くも　先帝が國民崇敬の中心たると同時に變法自强の先鋒たり給ひしことを思へば、斯の如き中心なき支那が果して其國家改造の業に於て如何許の成功を遂ぐべきやは最も興味ある問題にして、吾人は其前途を豫言せんとて大に躊躇せざるを得ざるものなくんばあらず。

（六）　同情寬容の必要

之に由て之を觀れば我々日本人の支那に對する態度に於て大に反省するの必要なからずや、吾々邦人は吾人の萬事に機敏にして、事の停滯なきに顧み往々支那人の悠揚迫らざるを以て遲緩なりとし、其自尊自大の風あるを見て傲慢度すべからずとなす、然れども是れ實に支那人民の境遇を辨ぜざるの甚だしきものにして、吾人が尙ほ歷史を讀まず世界を知らざる田舍漢たるを自白するに外ならず、又は支那人の如く幾千年間常に保守的氣風に養成せられしものが、頓に進步自由の風潮に接するや往々に非常なる保

[illegible]るに國會議員を選擧せんとすと云ふこと已に突飛なるが、更に女子參政權の主張あり廣東行の議會には幾多女子議員の席を占むるありと云ふに至りては到底我日本人の想像し能はざる處たり、之を觀て我々は支那人を以て頗る非常識の人民なりと速斷すべきも、今代の支那人は千載一遇の過渡時代に際會しつゝあることを記憶せざるべからず、我邦に於ても維新前後の如きは隨分突飛なる議論をなせしものあり、森有禮氏が英語を以て我國語と爲すの案を立て米國各方面の學者の意見を徵せしが如き、今にして之を思ひ且森氏が後に國家主義教育行政家として大勳功ありしを記憶すれば殆んど隔世の感なきを得じ、然れば吾人が支那人を批評し又た之と交はるに於て最も必要缺くべからざるは我々の胸中常に多大の同情と寬容を貯へんことに在り而して他年極東平和の基礎成りて日支兩國民眞に輔車脣齒の實を擧ぐるを得ることありとせば是れ必ず今日の同情寬容の結果たらずんばあらざるなり。

世人は支那問題の解決を急ぐ、然れども吾人を以て之を觀れば眞の支那問題の解決は猶ほ幾多の年所を要すべく、若しも之を强ゐて今日に解決せんとするものありとせば是れ政略の必要上功を求むる急なるの政治家なるか、左もなくば遠謀深慮なき空論者に外ならず、眞の支那問題とは日支國民の親和提契に在り、是れ決して急き立てて成遂げ得べきことに非ず、鳴かざれば殺して見せん杜鵑と云ふ如き信長流の外交は吾人の與せざる所なり、若夫れ滿洲租借期限の延長や、滿洲內地雜居や、山東租借の問題や、重要問題に非ずとせざるも之を解決し得たればとて直に支那問題を解決し得たりと謂ふ可らず、吾人は

刻下我政府と北京政府との間に交渉中に屬する案件の首尾よく解決せられんことを希望すると同時に、日支の關係は前途猶ほ幾多の難關あるべきを思ふ、從つて我の彼に對するや其長所を敬し其短所を寬容し深く同情を致して以て和親平和の基礎を益々堅固にするの必要を思はざるを得ざるなり。

總選擧の豫想

現政府が選擧界の取締を嚴重にすべしと云ふの觸れ出しは選擧界の腐敗分子に對し多大の威嚇たりしに相異なし、御即位の大典を主一の目的に出馬せんとする成金の速成政客も違犯檢擧を恐れて躊躇逡巡するもの少なからず、坊間傳れる處に因れは尾崎法相は其與黨に告げて曰く余君等の爲めに運動費を分配する能はざるも余を尤むること勿れ、君等宜しく理想選擧を爲し次點者三點者四點者の位地を占むべし、余れ檢事に命し當選者を檢擧し君等次點以下の爲めに進路を開かんと、果せるかな、從來幾多の總選擧ありしも今回の如く多くの理想選擧を標榜するものあるを聞かず、其多くは文士なり宗教家なり米國仕込の高襟徒なり、多くは是れ當選者の失脚を僥倖せんとするものに非ざるなきか、檢擧可なり大に可なり、唯た其各派に對し一視同惡、毫も與黨の次點三點者の爲めに殊に途を開くの偏頗なからんことを祈るのみ。

更に今次の總選擧に於ける一の現象は各政派公認の爭なりとす、蓋し公認の効果は既に前數回の選擧に於て認識せられし所にして、今次に於て其爭論は殊に政府黨間に於て之を見る、今の政府黨なるものは同志會、中正會、大隈伯後援會等を含むを以て各派に屬するもの其選擧區に於ける非政友候補者たらんことを爭ふは怪むべきに非ず、但だし公認競爭の盛なるに因て一には政府黨の弱點實に玆に在るを知るべく又た一には黨派地盤の近年益々鞏固ならんとして、黨派の公認に非ざれは選擧競爭上多大の困難に遭遇すべきことを察すべし、殊に檢擧嚴正なるべしと思惟せらるゝ今次の如きに於ては政黨關係を利して當選を期すれは自ら惡錢を使ふの危險を少なくするの事實あるを察すべし、黨派の義理人情は今の選擧界に於ける殆んど唯一の道義なり、知るべし政黨の發達は政界腐敗を防ぐべき唯一の方便にして、政黨を無視せんとする選擧運動は所謂眞の理想選擧を除くの外、多くは却て腐敗惡德の媒介に外ならざるを選擧界の廓清を標榜し腐敗事件の檢擧を聲言する大隈内閣の下に於て、大浦内相に直屬する舊中央派の方面より選擧と聯關して種々腐敗事件の計畫ある報道の頻々として來るは吾人の頗る嚬蹙する處なり、素より此種の報道は多く反對黨新聞に由り叫喚せらるゝものなるが故に吾人は此種の報道を一より十迄悉く信ぜんとはなさず、然れども舊臘解散前に於ける政府當局の反對派を誘拐せんと欲して用ゐし手段の如何に惡辣なりしかを回顧せは、何人も現内閣の政界廓清の標榜を全然信用する能はざるべし、試みに尾崎法相の檢擧宣言を純然善意に解釋するも、大浦内相方面より出づる裡面の惡辣手段は遂に法相の善意をして偏頗なる味方擁護と化せしむるの危險なからずや、況んや内相の操縱を待たずと雖も單調の法

相を利用すべき如何はしき人物の其周圍を取卷くものあるに於てをや、吾人は選擧界の廓淸を必要とする現內閣の聲言に全然同意なるが故に殊に此苦言を呈して以て當局の反省を促さざるを得ず。

選擧の結果如何に至りては今日に於て（二月中旬）何人も斷言し得べからず、然れども政府側に於ても反對黨側に於ても甚だしき樂觀者あるは何時もながら面白き現象なり、即ち尾崎行雄氏は政友會は大に減して百三十人となるべしと云ひ、床次竹次郎氏は政友會が優に現狀を維持すべきを云ふ、若し兩說即ち百三十と二百を折衷せば百六十五の數を得、是蓋し事實に近からんか。

政友會も非政友派も其公認候補者の數を未だ豫定數に迄滿たすを得ず、是れ主として檢擧の聲言に威嚇されたる結果にして面白き現象なり、然れども如何に躊躇するも希望者は稱に過多なるが故に三月十日にも至らば必ず双方とも其戰陣を整齊して堂々相對峙するに至るべし、吾人は現內閣が其美なる聲言に對し實行の之に背馳する勿らんことを希望し、且つ在野各派の亦能く公明の態度を持して誤るなからんことを希望す、今次の選擧は現內閣の信任を問へるものたる耳ならず、立憲主義の興廢に關するや大なり、在朝在野の領袖輩は須らく勝敗の問題以上に着眼して憲政濟美の理想を以て常に北斗の明星となさんことを要す。

獨逸論

法學博士　神戸正雄

（一）

獨逸は戰前に於て世界の最大の注意國民であつた。戰爭となつては又此活劇の主人公の役目を勤めつゝある。獨逸を知ること決して無用の業でない。但し其獨逸を明にする爲めには、直ちに獨逸其ものを說くよりは先づ他諸國と相並べて相對的に說くことが便利である。其れで此には先づ獨逸を各國の間に觀察して、然る後に之を單獨に說明しやうと思ふ。

（二）

世界に國を成すものは數多くあるが、其等は決して對等でない。貴族國もあれば平民國もある。平民國は貴族國に對して彼何ものぞと思つて居るかも知らぬが實際は力の問題で、平民國は到底貴族國の意を迎へねば立行かぬといふ有樣である。個人間には平等の思想が可なり廣く行はれて居るが、國家間では何うも未だ其處迄進んで居らぬ。自分の見る所では理想は正さに國家平等であると思ふが、事實は遺憾ながら其樣になつて居らぬ。此國家間の階級は固より世襲不動のものとはいへない。其努力如何により前の平民國が貴族國に上ぼることもあれば、反對に貴族國が平民國に下ることもある。油斷は出來ない。常に國民相戒めて向上を計らなければならない。予輩が貴族國といつたのは

大國又は一等國のことで、英獨米佛露墺伊日は其れであるが、此內、墺伊日は他の五のものに比しては劣る所があり、墺は獨の腰巾着、日本は英國の屬國（斯の如き惡口が行はれて居るから、暫らく此詞を用ゐて反省を促す）、伊に至ては無貞操なる幇間國といふ格である。此國家間の格式は主として其軍事上の力の程度によつたもので、隨て一國が貴族國となり又此地位を維持するには相當の量及質の武力を充實し且つ維持しなければならぬが、然し眞に其格式に相應したる尊敬を拂はるゝには、尙別に文化力と經濟力との伴ふものがなければならぬ。武力のみ一等國格であつても、他の二力の後れて居つては十分に尊敬を拂はるゝに足らない。武力は此格式を定むる形式上の要件ではあるが、隨て之を相當に充實するの必要があるが、國政としては文化力經濟力の充實を中心と爲し、武力は單に其補助又は防衞といふことになり、而も其武力が一等國格を保つに足るといふのが寧ろ理想であらう。

（三）

世界の貴族國の中で右三拍子揃つて萬國が瞻仰し、心から尊敬の念を禁ずる能はずといふ程の國は一もない。强いて英國然りともいへるが、其軍事力にては陸軍が不完全なるは勿論のこと、世界一と稱せらるゝ海軍すらも缺點ありといふことで威信を落して居る、其は英國の國情、海軍さへ大丈夫なれば良いともいへるし缺點ありといはれて居るにせよ今日迄獨逸の侵入を喰止めただけでも英國海軍尙ほ在也ともいひ得るから此はまだ良しとして、經濟力も過去の結果に屬する富の蓄積多く、殖民に於て商業に於て金融に於て交通保險に於て又少くとも或種の工業に於て世界一たることは優に英國の權威を保つに足るともいへるが、唯だ諸多の工業に於て後進獨逸等の爲めに壓倒せられ、其經營振の動もすれば一體に保守的なることに於て輕蔑を招きつゝあることは聊か遺憾としなければならぬ。特に文化力の中につきて學問上の研究の見劣りする所あるを免れずして、此點に於て尊敬を拂はれずといふ根がある。唯だ其國民の宗教を善用したる社會道德上の

訓練は到底他の國民と比較にならぬ程良好なることに於て英國の第一位國としての品格は大に備はつて居る。英國は決して理想的に各力圓滿に發達した國とはいへぬが、尙ほ比較的優秀なる國といはなければならぬ。獨逸は此と丁度反對で其社會道德の方面に於て隨分不良の分子が少くない、此點に於て人をして尊敬の念を起さしめないが、其學問は優に世界に冠たるものがあり、其經濟には活氣充滿して後世恐るべしとせられ、軍事に於ては陸軍は世界一、海軍は數量に於て英國に及ばぬが、品質に於ては頗る優良なりと稱せられ其尙ほ足らざる數量も益々進展の勢を示し居たるに於て、大體英國の保守退嬰又は受動的なるに對して、獨逸は少くとも進取及び致動的なるの特徴に於て畏敬せられて居つた。見様によつては英國よりも獨逸の方が理想的發達を爲しつゝありともいはるゝ。佛國は文藝に於て世界一であり、科學に於ては箇々の獨創力に富むが、其組織力に缺くる恨があり、此點に於て獨逸に讓り、社會道德も英國に比しては劣るものあること獨逸と異らず、經濟上には資力割合に豐富であるが、蓄財的利喰的で、因循姑息、自ら事業を企畫するの活動力の乏しき弱點があり、軍事上に於ても海軍は駄目、英國の助なくして獨逸に對して守ることは出來ない、近頃陸軍に全力を注ぎつゝあつたが、其れすら數量も公示に掛値があり、品質も餘り香ばしからぬので、到底十分の尊敬を拂はれない、米國は其富力既に偉大なるのみならず、未開の富源に富み活動力充實せるに於て嘆賞の外はないが、軍事上には海軍は稍々良しとして、陸軍は大國不相應に少勢の嘆があり、學問は將來益々有望であらうが、今日迄の處は獨逸の弟子分たるを免れぬ。社會道德は近時益々改善の傾向があり、人の想像するほど惡くはないが、尙ほ可なり暗黑面を有つて居る。未だ此について吾人をして十分尊敬せしむるには足らぬ。露國に至ては軍事上特に陸軍に於て世界一の大數量を有つては居るが、品質は稍々不滿足の所があり、海軍は甚だ微力、而して經濟上には原始産業は盛であるが、商工業に於ては到底他國特に獨逸の

爲めに壓倒さるゝを免れぬ。學問も幼稚、他の大國に及ばざること遠く、教育の如き最後れて目に一丁字なきもの人口の八割といふに於て到底尊敬の價値がない。

（四）

斯く列記し來ると孰れの國も完全に理想的とはいへぬが、獨逸の如きは道德上の訓練さへ積めば理想に近き發達傾向を示しつゝあること爭ふべからずで、特に彼が國內を充實し且つ國外にも伸張するの勢を示すに於て、其活氣の横溢せる洵に羨望すべきものがある。此外張の一段となると、英佛二國は既に其海外領域も相當に大で、其力を以てしては最早保守に出づるの外なき域に在る。獨米露の三國は積極進取的外張に向つては居るが、而かも米國では實は此は主要の國勢ではなく、內部の充實の方が主要で、其餘地は頗る廣い。米國に日本と同稠密度の人口を容るゝとすると、今日の米國人の十四倍の人口が入り得るといふによつても其の如何に內部充實の餘地が多いかが明かである。彼が近年、中南米に勢力を張らんとし、太平洋諸島にも手を伸ばしつゝあるが、彼自身より見れば別に重きを置くには足らぬ。露國は米國ほどではないが、假令其氣候概して寒冷で農業的活動を制限するものありとはいへ、尙ほ日本と同稠密度の人口を包容するとなれば現在の五倍以上の人口を入れ得る譯であるから、經濟上國內充實の餘地があるし、教育の普及せず工業の發達せざること前にいふ所の如くであるから、彼が外張が殆んど專ら軍事に限られて居るといふて良い。獨り獨逸は軍事に於て經濟に於て學問に於て力餘つて外を征服せずんば止まずとの慨がある。即ち彼が各方面に於ける發展には戰鬪的精神（カンプガイスト）を以て貫いて居る。其が又組織的の特徵を帶びて居る。詳しくいへば彼が向ふ所何ものに對しても戰鬪し征服せざれば止まずとの精神が行渡り而も其行動は組織的に秩序系統を正して行く所で、即ち大膽なる所に細心なる所があり、彼は實に他諸國民の一般に畏敬する所である。其軍事上の活動力が偶々諸國の嫉視を買ひ彼をして世界の同情を失はしめ國際間に孤立の地位に立ち至らしめたが、此は無

理もないことで、彼は此點に於て少しく張り過ぎた嫌がある。過ぎたるはなほ及ばざるが如しである。其の軍事上過大の擴張を爲したのは、全く人の頬を擲いて置いて其持つて居るものを取つてやらうといふ强盜的の事業を爲すものであるから、側の人々國々が之を危險視し惡感を懷くのも無理ならぬことである。然し之と反對に彼の學問上の成果に至ては、他の國々、敵國と雖も、之を敬重し、又敬重しない譯に行かぬ所のものである。此成果は彼自身のみならず他の國人即ち全人類が恩澤に俗するものであるからである。學問的努力の求むるものは軍事的努力の求むるが如き他國又は他人類のもつものではなくて、自然の持つもの、造化の秘密である。或意味に於て人類共同の敵である。人類共同の敵を征服する彼獨逸人は世界萬國の歡迎する所とならなければならぬ。彼が經濟上の發展に至ては此は他國民の既に占めて居た地位を奪ふことになるから、他國の好む所ではないが、然し此は正々堂々たる競爭で、丁度個人間に人が其營業に於て勤勉努力によつて競爭して其地位を高めて行くのと同じで、他の競爭國が假令敗けたからとて、之を以て不當の競爭を爲すもの也として排斥することは出來ない。英國が如何に獨逸を經濟上の敵として惡むとも、之を理由として獨逸を窮地に陷るゝことは出來るものでない。獨逸をして今日あらしめたるは全く獨逸の軍事擴張主義に外ならぬ。

（五）

更らに獨逸の各方面に於ける行動の工合を見るに、學問では彼が他國に比しての長所は其組織的なることに在る。個々の新機軸獨創力については英國も特に佛國の如きは敢て獨逸に譲るものでない。が學問を全體の體系の中に纏むるの材能に獨逸人の最優れたる所である。彼は此組織力に加ふるに、强烈なる研究心、不撓不屈の努力心を以て益々學問の進歩を計る。其學問界に於ては組織的なることは恰かも軍隊的といつても良からうか。歩兵に當るもの、騎兵に當るもの、砲兵工兵輜重兵に當るもの等皆其れ〲に聯絡を取り相補助

し合つて進みつゝある。彼の學問界は何一つ不具的に發達して居るとか遲れて居るとかいふことはない。皆一齊に相當の發達を遂げつゝあり、其が突飛に行くのではなく、大體は一歩〳〵と小さな石を積み上げて、限なき大なる山を築きつゝあるのである。其根底は頗る堅い。而も其學問が佛國の如く單純なる空論に限らずして、實際界に必ず反響を及ぼし、純理に得たるものは直ちに之を實際界に應用することを工夫することになる。即ち學問に實用實益が伴ふて來る。然し其れかといふて、學者が實際家に接近し、實利の餘粕を貰つて得々たるのではなく、學者は學者として眞理を好愛し、學問に忠實で、其學問探求の結果が世の公益に利ありや害あるや無交渉なりや我れ不關焉を定め込むだけの好漢もある。學問の根底は決して薄ぺらのものでない。最近獨逸學者が愛國的の口吻を漏したりとて贔屓するものがあるが、此は佛國側にもあり、英國側のいふ所でも我々の如き局外者より見れば我儘の議論が多いので、此は戰時非常の場合のことで之を以て彼等を彼是いふべき限でない。國の存亡に關するとき、我身までも置くに所がなからうとする時に其言動に常規を逸するもの〻生ずるのは免れ難いことである。軍事上に於ては獨逸の組織的なること最有名で多辯の必要もなからう。或は其が餘りに形式に流れて精神に缺けて居る所あるに非ずやとの疑ひも懷かれて居つたが、實戰となつて見ると、遺憾なく彼の蠻勇が發揮せられて、彼の軍隊が形實共に優秀なることが證明せられた。突貫や、肉彈は日本の專賣でないことになつた。彼の兵卒は又一人〳〵としての活動に多少機敏を缺くといふ嫌はあるが、團體としての行動は申分なく、所謂一絲亂れず、上官一令を發すれば水火を辭せず、退却の命令なき以上は、伍侶皆倒れて己一人となるも尙ほ退かずといふ風がある。彼は軍人として飽迄組織的に且つ進取的である。彼は此力を以て先づ其近接の諸强を抑へ、弱小を呑んで、結局は世界大帝國を作らうといふのである。勿論此が單純なる軍事的名譽心から出たものではない。少くとも其口實としては經濟上の關係

を以つて居る。彼の實力は彼の現在の領土に甘んじて閉塞するには餘りに大きくなつて居る。之に甘んずることは最早其の堪ゆる所でない。彼は各國の領域は各國民の能力に應じて分配せらるべきもので、現在の領域の分配が不公平であるから之を更正しやう、然し之を更正するには武力の外に道がないから、之を以て之を斷行しやうといふのである。一寸一通り理屈は貫いて居るやうであるが、本來一國の經濟上の發達は決して單に領土範圍に拘束せらるゝものでなく、經濟力さへあれば他の領土の中にも平和的に發展することの出來るものであるから、獨逸の如く暴力に訴へて分配の公平を計らうといふのは當を得ない。恰も激烈なる社會主義者、「サンヂカリズム」等と同樣決して健全なる方法ではない。經濟上に於ては獨逸が右にいふ學問を基礎として益々根底ある發展を爲しつゝあること勿論であるが、特に其組織力を以て進取攻撃的に外に當ることが其特徴で、彼には各種産業毎に「カルテル」が同業組合かゞあり、更に産業組合も利用せられて、同業者の聯絡統一が甘く行はれ、日本に見るが如き不統一同志打はなく、組合聯合で定めたることは嚴重に勵行せられ、內國同業者相助合うて外敵に對抗し其勢力を伸張して行くのである。丸で軍隊的であるといふことが出來る。此組合聯合は金融上にも有利であり、旁々其經濟上の効用は大きい。日本の商工業者の孤立的なる又は偶々組合はあつても其規約の勵行されざるものを以て、此秩序整然たる獨逸の經濟軍に當るは、恰かも昔時の一騎打の武士を以て近世的の軍隊に對抗するに齊しい。勝敗の數、初めより明かである。特に獨逸には右の組織的なる商工業者の對外活動を指導するの參謀本部的機關もあつて益々對外發展が利便になつて居る。獨逸は恐らく今度の如き戰爭を爲さなくとも、平和の裡に平和の戰爭によつて優に其國の地位を向上することが出來るであらう。獨逸の失敗といふべしである。

（六）

斯く獨逸が色々の方面に積極的に外張しつゝあるが惡德的方面にも亦同樣なるものがあつて、此は彼の

大の弱點といふべく、其社會上の風儀は決して善良でない。其品格の惡きことが、軈がて彼の發展傾向をして餘りに實利的に傾かしめ、正々堂々と能力を角して我利を伸ばすに止まること能はずして、暴力に訴へ人の頬を擲きて他物を强奪し以て私腹を肥やし、尙且つ力を角するものなりとか、能力に應じたる公平なる分配を爲す所以也といふ野卑なる考を懷かしむるに至つたことゝ思ふ。此に於て社會品格の下劣なる日本も亦顧み改むることなくて良からうか。敢て獨逸論を綴るは他山の石と爲さんが爲めに外ならぬ。

文藝家と政治運動

田中王堂

從來の衆議院議員を取つて、彼等を職業別にして見るに、相應に數多い種類を網羅して居る。農、工、商は無論のこと、辯護士、新聞記者、醫師、行政官吏、大學教授、さては退職陸海軍人等に至るまで、隨分多樣な階級に屬する人々が見出される。世人は是等の階級の孰れにか屬するならば、大して政治的經綸や政治的手腕を有つて居さうにもないのみならず、政治的理會、又は政治的感情さへも有つて居さうにも見えぬ或るものが、議員の候補に立つても毫も怪まぬ癖に、今回の如く、纔かに二三の文藝家が候補者の名乘りを擧げたとか、擧げるとかの噂を聽くと、何故に新聞なぞでは、さも珍しさうに、そして多少は、其れは突飛な仕業であるとか、多分物にはなるまいとか、云ふやうな意味を諷して噪ぎたてるのであるか。私は是等健氣な新人物に對する新聞の調子の如何にも輕薄なのを惡むものである。是れまでとて、三百の議員の中には、賢愚の差別なく、殆ど社會のあらゆる階級に屬する人々を集めて居るのに文藝に携はる人々の五人や六人を其

の中に見出すことの出來なかつたのこそ寧ろ不思議な位であると私は思ふ。文藝家は、尠なくも、彼れの平生の修養や、興味だけから云つても、政治を理會し、鑑賞する點に於て、たゞに選擧費の潤澤を唯一の武器として出で來たる滔々たる農、工、商の徒に優さることは無論のこと、辯護士、新聞記者の輩に比しても決して劣るといふことは信ずべからざることである。

して見ると、かの新聞の下品なそして輕薄な調子は、たゞ是れまで文藝家で代議士となつたものは一人もなかつたといふ事實よりして、因襲に囚はれて居るに過ぎない。確かに大體に於てさうとしか思はれない。

然し、尠しでも、新聞の三面記者をして、斯かる不見識極まる獨斷を敢へてせしめるに到つたのには、現今の文藝家なるものにも、多少の責任はあるやうである。例へば、今假りに、ヴイクトル・ユゴオとかトルストイとか、バアナアド・ショウとか云ふやうな文豪が衆議院議員たらんとして畫策して居るとしたならば、新聞は如何に是の風聞を受け容れるであらうか。この場合には如何に三面記者といへども、彼等の平常に徵して、たゞ當然といふ感に打たれる外はあるまいと思はれる。何故ならば、政治上に於ける彼等の手腕や經綸はどうであつても、兎に角、彼等は其の著作に於て政治に對して興味と親しみとを有つて居ることを證據立てゝ居る。彼等は意識的に、否、執意的に、政治の中に生き、政治を呼吸して居るからである。

飜つて、我國の文藝家なるものを看るに、彼等の私の生活、私の言論に於てはどうであるにしても、彼等の公けにする作物に於ては、彼等の政治に對する理會も興味も兩つながら極めて稀薄のやうに見える。政治に對する彼等の態度はマシュウ・アヽノルドのそれよりも尚ほ一層消極的であり、一層心細いもののやうに見える。彼等は創作に、評論に、政治の要素を考慮の中に入れなければ到底滿足なる、徹底せる歸結に到着しない場合にも、尚ほ無智からでなければ、故意に、其れを輕視し蔑視して居る傾がある。世人をして彼等はアヽサア・シモンス一派の人々の如く、文藝の極致は政

治の上に、外に、超然たることによつて、始めて達せらるゝものと思惟して居ると推測せしめるにも一理ある。斯くの如く、從來、沒交涉であつた、又、沒交涉たることを誇りとして居つたと、世人より思はれて居る文藝家が、今飜然、政治界に驀進して居るのである。嘗てジオルジ・エリオットは、藝術家の職分は、美的に公衆をして不正に對して嫌惡の念を起さしめるにある。之れが救濟の設備をするのは、立法家の職分に屬するといふやうなことを云つた。我が文藝家は、是れまで一度も美的に公衆をして不正に對して嫌惡の念を起さしめようと努めたことはなくして、暗中に飛躍して、直ちに立法家となつて之れが救濟の設備を企てようとして居る。世人が彼等の所爲に對して疑惧の念、驚異の情に惱まされるのにも一理あるではないか。

然し、私は文藝家は今日のまゝで、已に政治に關する見識と理會とに於て、三百の代議士中、極めて少數なる聰明者の群に入り得るものなることを知つて居る。而かして、其の色彩と、視野とに於て彼等と大に異なるところがあるだけ反つて結構であると思ふ。三百人の中に三人乃至五人では、彼等にして偉人でない限りは、或は偉人であつても、直接に、短時期に感ぜらるゝ彼等の感化は大したものでないであらうといふことは分り切つて居る。然し、彼等の起す新らしき氣分、新らしき評價の波動が尠しでも、從來の單調を破り、沈靜を搖すだけでも效果はある。

然し、くれぐれも彼等に忠告せねばならぬことは、彼等が決して大した期待を有たぬことである。大した效果がないとて、決して絶望せぬことである。今より五十年前の英國の議會は、今日の我國の其れより劣惡のものであつたとは云へぬ。當時、兩ミルはベンザム、リカアド等と共に思想界の主權者であつたが、彼等の友人、及び門下生は主理急進黨 Philosophic Radicals と呼ばれた一團を形作つて居つたものである。彼等の五六人が議會に席を得たときに、兩ミルを始めとして、彼等の與黨は大に爲すあるべきを祝福した。然し、結果はどうであつたか。黨派の機關（メカニズム）に依つて萬事の運ば

れる議會に在つては、彼等の言論は議會の大勢に何等の影響するところもなくして止んだのであつた。之れには兩ミルともに非常に失望した。而して、英國の議會は、決して少數の識者の意見の行はるゝところでないことをつくゞ感得したのであつた。其後、小ミル自身が議席を占めるに到つたが、直接に彼れの言論が議會の行動を左右したやうなことは聽いて居らぬ。彼れが、一、自分は選擧費は一錢も支出せざること、二、自分は決して地方的利益のために動らかぬことゝいふ、廉潔な、男らしき二條件を提出して、一たび議席を得たのは英國の誇りであらうが、次ぎの改選期に於ては彼れの如き高士にしても落選を免れなかつたのであつた。彼れ及び彼れの與黨は、皆な政治や經濟の問題に關しては甚深の經驗と思想とを有ち、當時に於てすでに、はやく徐ろに英國の輿論と傾向とを作りつゝあつたところの人々である。然るも猶ほ、彼等にして大なる既成の黨派に屬せず、獨立して事を成さうとすれば其の成り行きはこの始末である。

思想の程度は極めて幼稚であつて、同時に、黨派操縱の機關だけが驚くべき程に發達して居るのが我國の議會の現狀である。少數の文藝家が卓越せる識見、秀拔なる學殖を有するにしても、今、彼等が議會に入つて、彼等が施すところの餘りに尠なからんことを私は氣遣ふものである。彼等が議會に入り來たるには、定めし半生懷抱し來たつた理想の實現を目的としてであらうから、一箇の陣笠として、政友會、同志會、乃至國民黨に入つて、其等の政綱や、政略に盲從して了ふのならば、折角の發憤も大した意味のないことになる。されば、彼等の取るべき道は、唯二つしかない。其の一つは既成の政黨の一つに入つて、彼等の見識と手腕とで、彼等の理想の如くに其れを改造することであり、も一つは、一人一黨主義で自己の理想をどこまでも主張することである。前の方針では、十年、二十年の苦節を積んだからとて、平生の理想の十分の一をも實現することは容易ではあるまい。そして、彼等が是れまでの修養や、氣分からしては、情實や、黨弊の堆積し

て居る中に居つて、是れより先き、十年も、二十年も馬鹿になつて、着々自家の地位と勢力とを作つて行くことの辛抱があるかどうか頗る疑はしい。して見ると、單獨に進退する方針に出でるより他に道はない。この方針では、軍備だとか、外交だとか、歳出豫算だとか、議會の內の所謂重大問題に關しては、まゝ發言だけは許されたにしても、大政黨の爲す儘にまかす外に仕方はなからうが、或る特殊の問題に就て、根氣よく十年一日の如く主張し通したら、嘗て、ウヰルバアフォスが監獄改善を成し遂げたと同樣位の効績は成し得られないこともあるまい。今日、中年以上の文藝家が議會に入つてはたらく道は、恐らく、近き將來に於ては、この他に一つもあるまいと思はるゝ。

私も斯くは云ふものの、人每に、他人には度られざる動機もあり、道樂もあるものであるから、私は決して、文藝家が代議士になるのを非難する考へは、毛頭有たぬ。のみならず、其れが爲めに、拂ふ勢力の消耗とか、苦痛とか云ふことを計算の中に加へないならば、議會自身に取つては、何等かの利益のあることと考へる。然し、實際に獲らるゝ利益と其れが爲めに拂ふ多大の犧牲を淸算するときは、文藝家が政治的に社會的に活動するには、代議士たるよりも、一層も、二層も有効な道が他にあると、私は確く信じて居る。

ダアシイと云ふ人は、嘗て『輿論と法律』といふ書を著はして、英國の法律は、悉とく輿論の反映であると論じ、個人主義の旺んな時には、其の原理に基づく法律が制定せられ、共同主義が興つて來ると、法律は忽ち其の主張の色彩を持つて來たといふことを證據立てゝ居る。是れは、至極當然の觀察である。近世の社會の改善は、先づ民衆を教育して、健全なる輿論を作ることが先決問題であり、根本問題である。民衆の聰明、民衆の自覺の上に立たぬ議會の如きは、ほんの空中の一樓閣に過ぎぬ。重ねて私は云ふ、私は決して今日の文藝家が議會に入るのを悪いとは思はぬ。然し、其れがためには、必然に多くの犧牲や、勞苦を拂はねばならぬとすると、彼等は、もつと彼等の氣分に適した、

もつと經濟的に我國の政治、道德を進める方法がありさうに思はるゝ。是れまで代議士でなかつたから政治に對して全くはたらかなかつた。代議士となつたから、始めてはたらけて來ると考へる考方には、尠なからぬ淺慮や、謬見が含まれて居ると私は思ふ。政治を社會化し、科學化して行くのが、即ち政治の進步であるとはコントの意見であつた。而して文藝家諸氏に取つては、今日の我國に於て、斯くすることは議會の中に在るよりも、外に在る方が、寧ろ便利ではないか。

私は、是れまでに他人の書いた手紙を可なり、多く讀んで居るが、其の中で、特に深き感銘を私に與へたのが二つある。一つは、ジエ・エス・ミルが彼れの結婚に際して、當の相手たるテエラア夫人に寄せたものであつて、も一つは、フデリック・ハリソンが、代議士の候補を辭退するとて、彼れの選擧民に贈つたものである。こゝでは、ミルの手紙には用はないが、ハリソンの手紙に就ては、少しく述べる必要がある。其れは、實に高邁なる見識と、惻々たる情味とに充ちた名文であるが、今、手許に其れが無いから、全文を譯出して讀者と共に、この高人の風丰に接することの出來ないのを遺憾とする。然し、この手紙の趣旨は、大抵下のやうなものであつたと記憶する。

私は今度私を――區の候補者に擬せらるゝ諸君の御厚情に對して深く感謝します。英國の男子として、議會に席を有することは大なる名譽に相違ありません。然し、議會といふ處は決して高い理想の行はれ得るところではありません。否結局は極めて卑き意見が勝を占めて了ふところであります。今私が議會に入つたとて、私の意見が少しでも行はれようとは思ひません。されば、私は議會の外に立つて、何人の掣肘も受けずに、單獨に私の理想を將つて、この英國の社會を發展さして行きたいと望んで居ります。是れが私の終生の願ひであります。この理由で、諸君の御厚意は感謝しますが、代議士の候補者たることは辭退致します。

大分、文句は違つて居らうが、意味に於ては、大し

て間違つては居らぬと信じて居る。若し、間違つて居つたら、他日原文に據つて訂正します。一代の才人バジエオットでさへ、一旦或る選擧區から確かに當選を期して、候補者として立つたが、不幸にして落選して了つた。然し、何時までも其れに對して、執着の念が記憶に殘つて居つてしようが無かつたと、彼れ自づから嘲つて居るやうに、英國に於ては、一般に男子が席を議會に有つといふことが、非常に花々しきことと見做されて居るに拘はらず、カアライルの如く議會を愚人の一圍に過ぎずと熱罵し去らぬまでも、自家の本領を自覺し、尊重して、最も有意義に、最も經濟的に、自分の能力と、修養とを善用しようとすることとハリソンの如き人士の往々そこに見出さるゝのを私は奥床しくもあり、賴もしくもあることと思つて居る。ハリソンは政治社會の問題に關して、忠實なる研究者であると同時に、上品にして、熱心なプロパガンヂストであつた。彼れは、彼れの Order and Progress に於て深遠なる論理家たるを示し、彼れの National and Social Problems に於て、精到なる評論家たることを示して居る。然し、彼れは英國に在つてさへ、議會の討論の案外『高等政治』(大隈伯の使つた意味ではなく)に貢獻するところの尠なきものであることを知悉し居つたのであつた。

最後に私はカアライル除幕式の席上に於て物理學の泰斗ジヨン・チンダルの述べた言葉を回想せずにこの不完全なる稿を畢はるわけに行かぬ。

カアライルは私に道德的刺激を與へて、社會の爲めにはたらくように私を招いだ。而して、私は之の招きに應じた。然し、私は自分を吟味して、私が最も善く社會のためにはたらく道は、物理學の研究にあることを知つた。そして、方針は自づから撰んだ。されば、若しさきにカライルが無かつたならば、私は到底、物理學者として今日の位地を占めることは出來なかつたであらう。

と是れが彼れの言葉であつた。

日支國交觀

法學博士　末廣重雄

近年日支兩國の國交兎角圓滿を缺き、何か問題の起るたびに眼に角立てゝ爭ふ狀態である。最近に起つた所謂交戰地域撤廢問題に關し益々その甚だしきを見るに至つた。支那政府が信義を沒却するは云ふまでもなく、更に支那の新聞紙は筆鋒を揃へて我が國の態度を惡罵し、殆んど正氣の沙汰とは見られなかつた。目下交渉しつゝある問題に就ても支那の將軍連中や參政院の人々は大騷ぎを爲し、支那政府は誠意我が交渉に應せず、提案以來既に二十五日に及ぶも一向進捗せざる狀態であるが、これは曠日彌久對手を翻弄し一時を糊塗せんとする支那古來の慣用手段を繰返しつゝあるが爲ばかりでなく、獨逸が日支の國交を離間すべく努めて居る結果であらう。斯くも獨逸をして乘ぜしめる隙間が日支間にあることは、甚だ遺憾であると云はねばならぬ。支那が獨逸に親しみ兎角日本を排斥するは、獨逸が今次の大戰爭に於て終局の勝利者であると見込む爲ばかりでない、支那に於ける排日思想は蓋し甚だ深かい原因があるからである。邦人は常に支那人の忘恩を責め、世界の大勢に暗く同文同種の誼を忘れることを批難するが、予の觀るところを以てすれば、支那人が我が國を輕んじ、恨みを抱き、憎惡の念を有するのは、其の罪彼にあらずして我にある。我が國は過去に於て自ら蒔いた種の熟したのを今や收穫しつゝあるのである。

過去二十年間支那人の我が國に留學して、法制經濟其他百般の學問を研究した者は頗る多い。業成つて故鄉に歸つた者は既に數萬に上り、今日東都に學びつゝある者だけでも數千人あるであらう。此等多數の

留學生が業を卒へて歸國した曉、其の多くが排日思想を抱くのは何故であらうか。曾て一度師表と仰いだ我が國に對し批難攻擊の鋒先を向ける者の多きは何故であらうか。惟ふに邦人は常に極東の覇者、其の平和の守護者を以て自任し、支那人を指導誘掖すると云つては居るもの丶、過去に於て支那人に對して些しの同情も親切も有つて居なかつた。邦人の支那人に對する態度を見れば此の事實は明瞭である。過去に於ての支那人が我が國に留學する時代に、彼等相手の私立學校は數十を以て數ふる程建設せられた。此等の學校は何れも純然たる營利を目的とするものであつた。如何に敎育事業とは云へ算盤を外れてまで支那人の爲に盡すことは、私人の事業としては不可能であるが、此等の學校たるや餘りに我利的であつた。傳へ聞くところに依れば支那留學生一名に付き報酬幾圓といふ約束で、橫濱長崎遠くは上海地方までもポン引を出し、斯くして集めた留學生に對し此等の學校は商買人根性を極端に發揮し、貪れるだけ貪つて純然たる學問の切賣を爲し、金錢さへ拂へば卒業證書をドシ〳〵賣つたのである。學校も斯うなつては、淺草奥山あたりの大道商人と何の擇ぶところがあらう。米國が曩に團匪事件の賠償金を返還する代りに支那留學生を自國に收容し、其の公私の諸學校が競つて親切なる取扱をしたのに較べて、雲泥の相違であると云はねばならぬ。獨り學校許りでなく、支那留學生を客とする下宿屋でも、彼等の萬事に不案內であるのに乘じて能ふ限り多くを貪り、甚だしきは醜業婦を當てがつて金を絞り取つた者が少くない。彼等を相手の一般商人も亦同樣、胡摩化し放題胡摩化した。親切や人情は露ほどもなく、此等の連中が四方から寄つてたかつて剝ぎ取りにしたのであるから、留學生達の眼には定めし、日本人は恐ろしい人間と映じたであらう。京都の七條附近にある、お上りさんを相手とする曖昧宿屋の亭主や、掏摸の樣な人間の寄り合ひとしか思はれなかつたに相違ない。これを歐米諸國の下宿屋の日本人や支那人に對する取扱ひに比較すれば耻入つた次第である。斯かる取扱を受けてま

我が國に對し何の愉しい印象、慕はしい記憶が殘らう。何の尊敬信頼の念があらう。邦人は支那人の忘恩を責め、感謝の念を有つて居らぬことを詰つて居るが、其の實邦人は何等感謝して貰ふだけのことをして居らぬ、彼等の反感を買ひ憤怒を招く樣なことをしたに過ぎないのである。我が國に惡感情を抱ける數萬の留學生は、今や支那の朝野に於て相等の地位を占むるやうになつて國内の輿論を動す力を有つて居るから、彼等の爲に排日の氣焔が高まるに至つたのは、當然のことゝ云はねばならぬ。

從來、我が國より敎習として支那に赴任したものは多數あるが、其中に學も德もなく、支那人の尊敬を受ける資格がない者もある。或る者は教科書事件で醜名を流して内地で職を失つた結果、活路を求むる爲に出掛たのである。そうでなくても單に金錢を目的として行つた者が多數ある。中には來朝した支那顯官の旅館に伺候し平身低頭嘆願して漸く採用せられたのであるから、其の地位を失ふことを是れ恐れて、敎習の威嚴も名譽も顧るところがない。更に此等の敎習は不見識にも日々の講義に於て西洋學者の說を列擧するだけで、我が國の學者の名を擧げぬから、支那學生は例へば公法學者としてはラバンド、ザイデル、ボルンハックの徒あるを知つても我が國に如何なる學者のあるやを知らぬ。それで或る支那學生は日本には立派な學者は一人もない、何れも西洋學者の受賣をするに過ぎないと嘲つたといふことである。內地でも同樣の話がある。要するに日本敎習は、歐米諸國より招聘されて居る敎習に比較すると甚しく遜色があるから、支那學生の尊敬を受けぬどころでなく、往々甚しく輕蔑されるのは當然である。唯我が敎習中北京にある嚴谷孫藏博士の如きは鐵中の錚々たるもので、支那人の深き尊敬と厚き信賴を有して居る。博士の如き人が敎習として三四十名も支那にあつたならば、決して今日の如き惡評は立たなかつたであらうと思はれる。不幸にして我が敎育界に人材乏しき爲、支那人敎育の方面に於て何等の權威もなく、全く失敗に終つたのは遺憾千萬である。

我が國が支那人の信頼を失つて排斥せられるやうになつたのは、單り教育家の罪でない。先年支那に革命騷ぎのあつた時の邦人の態度も亦、頗る排日の因をなして居るのである。孫逸仙、黃興等の武漢地方に據つて亂を起すや、我が支那浪人の赴て之れを援けた者が多かつた。此等支那浪人が滿を排して漢を助け、專制政治を敵として自由の味方となると云ふのは、名義は頗る立派であるが果して其の實があつたであらうか。此等支那浪人の中には自由とか正義とかは何等眼中になく、唯阿賭物を目的とするものが少くなかつた。金錢の爲め動くクーリーと何等擇ぶところのないものがあつた。尤も金錢を目的として居ても、眞劍に革命軍の爲に働くならば何の咎むることはないが、彼等に誠意が全くなかつた。革命の眞最中に强て助力の報酬を要求し、久しく枯渇した懷中の遽に豐かになつたまゝ軍を去つて上海に出で、娼樓に登つて放歌亂舞痴態を盡した。當時之れを親しく見た在住日本人さへ憤慨した位であるから、革命軍に屬する支那人に至つては定めし邦人の信義に乏しく、賴み效のないことに痛く失望立腹したであらう。假りに彼等が義に依つて起つたものとしても、革命軍に加擔すると云ふことが愚の至りである。予の觀るところでは、彼の革命騷ぎは一つの喜劇に過ぎぬ。孫逸仙、黃興等は、新聞紙上でこそ偉大なる人物であるかの如く傳へられて居るけれども、其の實決して天下の大事を爲すに足るの大人物でない。到底老猾なる袁世凱の敵手たる器でない。此の孫と黃を中心として共和の何たるやを解せず、民主主義の何たるを辨せざる民衆に依つて企てられた革命の成功せざるは當然のことである。多年支那に在て其の上下の事情に通曉して居ると自慢する支那浪人が、此の分り切つたことの觀察を誤つて革命軍に馳せ參じ、世上の嘲笑の的となつたばかりでなく、袁政府の怨恨を招いたことは實に遺憾千萬であると云はねばならぬ。彼等ばかりでなく、當時支那に對する態度の統一を缺いて居た我が政府にも罪がある。傳ふるところに依れば、外務省は袁政府に同情して居た。少くとも之を敵として

は居なかつたが、陸軍省は革命軍に同情して居たさうである。傳ふるところ果して眞ならば、陸軍當局者が天下の大勢に通ぜざるも亦甚だしのである。これを當時の獨逸の態度に較べて我が國の及ばざること遙かに遠く、袁世凱が近時獨逸に親しみ、我が國を疎外するのは、必ずしも理由のないことではない。

邦人は歐米人には遠慮勝ちであるが、一度び支那人に對する時は一等國民として威張り散らし、彼等を眼下に見下すといふ風があるが、支那人は決して之を承知せぬ。何故とならば支那人は歷史的に我が國を輕んずるばかりでなく、現在に於ても何事につけても邦人の貧弱なるを視て經蔑の念を抱いて居る。一體邦人の物質的に貧弱であることは、何如に最負眼を以て觀ても爭はれぬことで、支那在住の邦人が如何に文明國民を標榜し一等國民として己惚ても、同國在住の英、米、獨、露、佛諸國人に比較して、殘念ながら少なくとも物質的に非常に見劣りがする。此の見劣りのする邦人が無闇矢鱈に威張ることは、甚しく支那人の反感を招く所以である。支那人の眼には日本その者も頗る貧弱に映じて居る。戰爭にかけては我が國が世界第一の國であることは、曩に世界一の陸軍國と誇稱した露國を破り、今又た獨逸を屠つたので之を疑ふては居らぬが、我が國の價値は强兵唯それのみにある。然るに目下の支那にあつては我が國の强兵よりも更に必要なるものがある。即ち金である。金に關しては我が國は何等の滿足を與ふることが出來ぬ程貧弱で、一向賴りにならぬから、財力に富むだ米國や獨逸に賴るのは無理ならぬことである。米國又は獨逸から借財することには危險が伴つて來る。若し一歩を誤れば經濟的に支那は其の獨立を失ふの虞れはあるが、目下のところ領土的には先づ心配がない。然るに一番肝心の金に付ては相談相手とならぬ我が國の一部有力者間には、支那に何か事ある度びに滿蒙問題の解決を主張し動もすれば領土的野心を有するやうな態度を示すから、支那人は定めし我が國は領土侵略の野心滿々たるものがあると信じて居るであらう。今日支那に對する列强を假へ

て我が國を强盗とすれば、米國や獨逸は恰度娼婦のやうなものである。强盗は有金を奪ひ去る位が關の山であるが、娼婦に至つては菩薩の如く外面こそ優しく見えて居るが、海山千年の怪腕を振つて、何時しか家倉までも巻き揚げて仕舞ふ危險千萬の魔物である。勿論支那と雖も米國や獨逸の油斷のならぬことは知つては居やうが、娼婦の强盗以上に懼るべき者であることに、氣付いて居るか否や甚だ覺束ない次第である。

話が横道に入るが予は滿蒙問題の解決は果して我が國百年の大計であるかを疑ふ者である。論者或は曰はん、滿洲は朝鮮の防衛の爲、是非必要であると。然し露國に對する朝鮮の防衛は朝鮮を以て充分である。若し論者の議論を推し進むる時は、滿洲防衛の爲には蒙古を要し、蒙古を守る爲には西伯利亞を必要とする。更に西伯利亞の爲には露國本國を奪取せねばならぬ。斯くて究極我が國の防衛の爲めには世界を併合せざれば安んずることが出來ないことゝなる。論者果して斯くまで主張するの勇氣があるであらうか。然し理論を一貫する爲には斯く云はざるを得ないのである。今日我が國は僅か二百方里の租借地、七百哩の鐵道、十萬内外の在留邦人の爲に國力不相應なる大陸軍を設けなければならぬことになつて居る。我が陸軍は現在十九ヶ師團を有するも未だ不足であるから、二十五ヶ師團の計劃がある。二十五ヶ師團完成の曉には又々増師は唱へられて、三十ヶ師團更に四十ヶ師團の必要ありとするに至るであらう。予決して陸軍當局が不必要なる軍備を設けるものであると云つて批難するのではない。滿蒙が我が有となつた曉には、露國に對抗する爲此位の軍備は缺くことが出來ぬであらう。然し滿蒙に果して何れだけの富源があるか。

此の地方には未だ手を着けぬ富が散在して居るであらうけれども、到底大々的軍備を支へる丈の價値のないことは予の斷言するを憚からざるところである。尤も我が國は領土擴張の必要があるから、如何に貧弱の土地でも多額の費用を要せざる場合には、之を領有することも宜しいが、世界の大勢に鑑みる時は今日我が

國の事情は、國力不相應の陸軍擴張を許さぬのである。何となれば太平洋上に於ける米國との衝突が刻々迫りつゝあるからである。日米の關係は恰も今次の大戰前に於ける英獨の關係に酷だ似て居て、我が國が退嬰、屈讓せぬ限り、戰爭を避くることは六ヶ敷さうである。我が國は何を措いても海上の軍備を充實せしめなければならぬ。日米關係が危險に瀕して居る今日滿蒙問題を解決すれば、貧弱なる我が國力を二分して益々國防を弱からしむる所以で、東方米國に對し北方露國に對して同時に國防を充實することは、我が財力の到底之れを許さゞるところである。滿蒙問題の解決は我が國を危きに誘ふやうなものであるから、予は斷じて之に與することが出來ぬ。

話が本論に戻るが、歐米諸國に對しては從順羊の如き我が國は、一度び支那に對する時は忽ち虎の如く猛く鎧袖一觸と云ふやうな劍幕となる。これが果して同文同種の誼みを重んずる者の態度であらうか。日支親善を唱ふる者の擧動であらうか。邦人は其の自任するが如く支那人の恩人でもなく、又親切なる友人でもない。支那人が我が國及邦人を信賴せざるは勿論のこと、輕蔑、不信、猜疑、怨恨を以て我に對する以上日支國交の疎隔は當然の結果と云はねばならぬ。尤も予は日支兩國の不和は其の罪全く我が國にありとは云はぬが、主として我が國の罪であると考へる。

今日日支間の問題が容易に解決せぬは、必ずしも外交當局者の無能なるが爲でない。外交界の第一人たる加藤外相も支那の事情には餘り明でないやうであり、日置公使も亦其の器であるまいと思はれる。然し今日の如く日支關係が險惡である時は如何なる支那通の手腕家を以て代ふるも、所謂猿を柙中に置けば則ち豚と同じきもの、對支那外交は依然振はぬであらう。要するに我が對支外交の不振は日支兩國の關係が根本に於て病的になつて居るからである。斯く病的たらしめたのは過去に於ける我が當局者と我が國民の罪であつて、今や吾人は蒔かぬ種は生へぬの教訓に接しつゝあるのである。此の病的狀態を根治せぬ限り日支の圓滿

は決して見ることが出來ぬ。我が國の爲、支那の爲極東平和の爲甚だ悲しむべきことである。今次の大戰爭が如何に落着するにせよ、獨逸が勝つも聯合軍の勝利に歸するも、支那問題は將來一層世界的大問題となるに相違ない。列國は大戰爭の創痍の癒えるまでは極東へ手を出し兼ねるであらうが、遠からず列國の大角逐は支那を舞臺として始まるであらう。之と共に白人の黄人に對する壓迫は益々激烈となるであらう。此の秋に際し我が國も支那も、互に反目孤立しては大なる不利益であつて、所謂吳越同舟の時であるから、協心同力白人の壓迫に抵抗せねばならぬ。多少の怨恨は水に流し相提携して同文同種の誼みを實現せなければならぬ。各方面に於て我が對支態度を根本的に改善し日支親善の策を講ずることは刻下の急務である。

東京市長論

田川大吉郎

一、理想の市長

一昨年の春、愛爾蘭自治案が、英國の上院で否決された際、保守派の闘將、前の愛蘭尙書、ロード、アシュボーンは、その反對の意見を述ぶるに、自治案の結果として、來るべき愛蘭太守(若くば總督)の資格を、左の如く論じて、滿場の興趣をそゝり、大喝采を博した、

彼れ愛蘭太守は、毎々盲目で、時には聾者で、最も多くの場合には啞者で無くてはならぬ、彼は優しきことモーゼの如く、烈しきことクロ・ンウエルの如く、鋭きことマキアヴエリの如く、而してターレランの

外交術を有せねばならぬ、それが、理想の愛蘭太守である、故に其人を得ること極めて困難である。

想ふに、此評論は、直に、東京市長の評論に充て得べきが如し、理想の東京市長は、蓋、此の如き資格、才能を具備し、而して時には盲目と爲り、聾者と爲り、唖者と爲る、忍耐、機略、駈引を要する者であらう、當時、僕は、尙東京市の一吏員として、以上の新聞記事を讀み、我れ知らず、東京市長の境遇を思ひ、之ある哉と、破顏微笑した次第であつた。

若し此の如き人あらば、總理大臣たるに於て何かあらん、好箇の愛蘭太守は、即ち好箇の英國首相である、好箇の東京市長は、即ち好箇の日本の首相である、而して此の如き人果して求め得べきか、何事にも非實際的な日本人は、此の如き八宗兼學、具足圓滿の人物を、東京市長に期待して居るとしても、それは、非實際的な日本人の思想の僻、若くは、完きを人に責める、世間一般の傾向として、已むを得ない希望でもあらうが、それにしても、割合に、實際的な英國の政治家、實務家が、此の如き希望を、新太守の將來に繫くるのは、何故であらうか、外の點は除き、僕は、之を以て、太守の位地が新らしいからと思ふものである、過去に愛蘭太守なかりしに非ず、新自治案の運用に依る、愛蘭太守の位地が新らしいから、そこに、さま〳〵の憂慮と、希望と、夢と、怖れと、冷嘲とが、混じ合つて起り來ると思ふのである。

同樣の事情に依る、さま〳〵の批評は、今、現に東京市長の周圍を取り捲いて居る、彼に在つては、新太守は、尙、未來の夢に屬するも、我に在つては、東京市長は、現に、現在せる實際の機關である、然も、その新らしさ加減は全く相似て居る、即ち、東京市長の位地には、何等の傳統的思想が無く、習慣が無く、威嚴も無い、人民の眼にも、固より之なければ、政府の眼にも之なく、歷史の眼にもこれが無い、東京市長たる者は、總て、我より古へを成さねばならぬ、而して我より古へを成すことは、非常人の事業である、非常の人にして、始めて爲し得る事である、東京市長には、

今、その非常の人を要する、日本の自治制を、較々本物らしく、その本を据へ、その備へを立て、工合好く出帆し、航進せしむるためには、此際、非常の人の働きを要する、總理大臣の働きは、無論易しくないが、東京市長の働きは、より多く難かしい、若し、輕重大小を論ずれは別に在る、難易を論ずれば、即ち此く言はざるを得ない、彼に在つて、愛蘭太守の位地が、首相に優る才幹力量の人を要すと思惟せらるゝ如く、我に在つて、東京市長に對し、動もすれば、首相以上の才幹力量の人を豫期し、抑想せらるゝ所以である。

二、市長の職責

東京市長の職責も、其他の市長の職責も、日本の市長の職責は、總て法律で定まつて居る、日本の市長は、言ふ迄も無く、法律の結果たる産物で、法律が先に出來て、その上に、人爲的に作られたる機關の一部であるから、その職責も、簡單にして分り易く、何の疑ひも、問題も無い、それだけ、本人の智慧を要し、苦心を要し、働きを要する範圍は、至つて狹い、何も爲さずに、盲目判を捺して、ぢいつと控へてさへ居れば、市長の位地は、大概は勤まる、大概は事なく勤まるやうに出來て居る、たゞ、法律と實際の扞格をどうするか位ゐの問題のあるばかしである。

英國あたりのは、餘程、これと趣を異にして居て、實際の働きを要する場合が、割合に多いやうに思はれる、彼ゝに、法律の無いと謂ふのでは無い、法律は澤山にある、十分にある、然も、それは實際の産物である、皆、實際で經驗して、多年の習慣で、鍛へ上げ、研き上げた産物である、故に多く實際的である、從つて、その市長の職責にも、變に、固定した、窮屈な、制限、束縛が無い、彼には、法律はあるけれど、その働きは、實際に於て、變通自在である、善く、そのところ〳〵、その場合〳〵に、人民の要求を滿たし、國家の要求を滿たし、時代の要求を滿たすことに出來て居る、實に、その通りに成り來つて居る、

早い話が、昨年以來の歐洲戰爭である、英國の首相は、直ぐ、それを倫敦市長に訴へた、倫敦市長のみならず、他のエデンボルグと、ダブリンと、カーデフと、合せて四ケ所の市長に訴へた、その書面の要領は、略ぼ左の如くに爲つて居る。

市長閣下

我國家の現に從事しつゝある、有史以來、未曾有の戰爭に關し、吾等は、吾等の協力を必要とする切迫の時期に會して居る。

何人も、此前古未曾有の大事業を進捗するに、傍觀者たることを許されない、余は、その第一着手の事業として斯く思ふ、各種の集會が御互の市に於てのみならず、その他の町にても、村にても、到る處に行はれ、その會合に於て、吾等の戰爭に取りかゝつた原因の正當なる所以を説明し、その義務のため、各人が、皆々熱心果敢なるべく、奬勵

して貰ひたいと。

余は、敢て諸君に望む、諸君が四大都市に市長として、先づ此途を開かれんことを、余自身も、余の公務の許す限り、その種の集會に出席し力を添へたく希望して居る、此目的のため演説することは、余の幸ひとする所である。

余は、尙、各黨各派の先達も、此目的の爲め、協力を吝まれないことに信ずへき理由を有つて居る。

看るべし、首相の胸中に、此度の大戰爭の第一の相談相手は市長であつた、彼は、眞つ先かけて、之を市長に相談し、市長は、其の意を承けて、懇切に市民を指導し、而して市長と首相との間に、隔意なき協商、努力が出來た、今回の戰爭に於る、英國の各市の活動は實に目醒しきものである、知らず、日本の首相の胸中に、東京市を始め、全國の市は、此の如き重要の地位を占めつゝありや。

法律や制度の規定を云々せず、最も簡單に、市若くは市長の職責を約言すれば、僕は、市を以て、市民の自由の代表機關と思ふて居る、市を以て、市民の生活上の代表機關と思ふて居る、一方は、主義に關し、一方は實利に關して居る、而して市長は、その直接の代表者である、此故に、市長は、常に、市民の生活上の安固、便利、繁榮を思ひ、且、その思想上の自由、康福、發達を圖らねばならぬ、これが、市長の本來の職分である、之を英國に押しあてゝ言へば、未だ十分とは往くまいが、較々此目的に叶つた働きをし、發達を遂げ來つて居るが、日本では、此二つの趣意が、二つとも、茫然、漠然、未だ本當に意識されてすら居ない言ひ換へれば、日本の市は、それらの目的には、全然沒交渉である、日本に於る市の位地は、極めて輕いもので、未だそこまで發達して居ない而して發達し相な樣子も、殆んど見えない、而して之を發達させたいと着眼し、努力して居る人も、殆んど見えない、日本の市の位地は、何が何だか、殆んど分らない、それだけ、市長の職責は、極めて難い。

三、尾崎氏阪谷男

尾崎氏と阪谷男の批評は、嘗ても求められ、不十分ながら、幾分か述べて置いたから、重ねて申すまい、たゞ、一言を加へれば、僕は、二人ながら、いゝ人だと思ふて居る、學識の優れた、品格の高い、氣象の優しい、物事の善く解る、辯舌の共に爽かな、立派な市長だと思ふて居る、且、尾崎氏の市長たるや、いろいろ大きな事に手を着け、その割合に、財政上の手腕、經綸に乏しく、較々やり放しの弊があつたと難ぜられ、阪谷男は、その財政上の後を善くすべく、官民、朝野に期待して迎へられたといふ評判があつたが、今日如何、若し、尾崎氏の時代が、財政上不整理の時代であつたなら、今日阪谷男の時代も亦財政上不整理の

時代であらう、若し、今日の阪谷男の時代が、財政整理の可なり出來た時代であつたなら、前の尾崎氏の時代も、同じく財政上の始末の善くついて居た時代であつたらう、二者の間には大差なし、大抵、似たり寄つたりである、その間に、一は不整理の時代で、一は整理の時代と、事々しく區別を立てゝ、長短、優劣、成敗を論ずる譯に往かないと、僕は、極めて概括的に左樣に思ふて居る、而して若し細かに論ぜよとなら、何時でも、確實の資料を擧げて、精細に論證をすることが出來ると信じて居る。

それにも拘はらず、二氏ともに、割合に不評判であつた、一は、民間政黨界の雄で、一は、官界能吏の俊で、其々に、深く天下に期待せられ乍ら、それ程の働きの出來なかつたやう評せられつゝあるのは、遺憾の至りである、僕は、二氏の爲に之を惜むよりも、寧ろ東京市の爲に之を惜んで居る、東京市は、人を發達させ、進歩させ、成就さす所であらうか、否やと、時折疑ふ事もある。

四、阪谷男と電燈問題

電燈問題の、世に喧しく傳へられたのは、既に一昨年五月以來の事である、一昨年五月、既に一旦、世の視聽を動かしてから、昨年十月まで、まる一年半、阪谷男は、名を調査に藉つて、何事もせずに過ぎられたこれは如何なる理由か、僕の評する能はざる所であつた、而して世に、緩慢、冷淡、無爲、無能の聲が起つた、電燈問題に對する阪谷男の第一責任は、此遷延、逡巡の間に在る、但、僕の負ふだけの責任は僕も負ふ第二は、昨年十月以後、買收策を作るに至るまで、五十錢案料金を、或は可能と信ぜしむる如き方針態度を示し、强ゐてそのやうな數字を作らした所に在る。

五十錢料金にすることを不可と謂ふのでは無いが、阪谷男は、その以前に、五十錢說は、不可能說だと言明して居た、演說に於ても、文書に於ても、方針に於ても、之を明示して居た、故に、後の五十錢可能の方針は、前の五十錢不可能の說に撞着する、而して孰れも市長の責任を負ふての言明である、而してその兩說

は、何と見ても、兩立の餘地は無い、故に、阪谷男の眞の責任問題は、此五十錢可能說を作つた瞬間に在つた、勿論、それを出來るやうに打算し、工夫し、進步した骨折は、之を看取するとしても、前に、五十錢說を不可能なりとして、之を冷笑し、罵倒し、非難し、拒否し、而して波瀾を起し、衝突を起し、疑惑を起し來つた、その事に關する責任は到底免れやうも無かつた次第である。

第三は、統一案の數字である、これは澁澤男等、仲介者の作つた數字とのみは謂へない、東京市に於て負ふべき責任のある數字である、僕は只その一點を指摘して置く、それは電球費である、電球費は最初仲介者が新聞記者團に示した時は、一年百三十五萬八千餘圓と爲つて居た、それは一月十七八日の事である、次で二十二三日、最後に公表された時には八十七萬三千餘圓と爲つて居た、即ち、そこに五十三萬圓だけの減と爲つて居た、それでは、それだけ、收支の勘定に剩餘が出來たかと謂ふに、一文も剩餘は出來て居なかつた、簡單なる電球費である、少くとも昨年九月、市會に特別委員を設けた以後、研究に研究を重ねられた事業である、それが、僅か一週間の前後に、突如として此く變じた理由は何處に在るか、無論、それにも理由の有る事であらう、然も、淺心の人は之を笑はん、深心の人は、之を疑はん、而してすらりと之を信じ得る人は、一人も無い筈である、旁々、阪谷男の進退問題は、餘議なき事情となつた。

四、市民の態度

市民、並に市會議員の態度に就ては、いろ／＼申したいが、今回は、その餘裕が無い。

若し概括的に一言を加へれば、曰く、自ら治むるといふことは、自ら制するといふことである、自ら制するといふは、他人の眼の上の瘤を氣にするよりは、自家の頰邊のほくろを氣にせよといふことである、東京市民にも、別して市會議員にも、此樣の氣風、節制が缺けて居る。

六、名譽の市長

僕は、市長を名譽職、無報酬制度にしたいと思つて居る、報酬の有ることが、市長の累を爲しつゝありとは、確言し得ない筋であるけれど、市長に對する市會議員等の態度を洗新させ、どこ迄も市長の位地、品格

を高め、滅多に市會議員等に、おしも、おされもせぬ習慣を作るには、無報酬制度にでも由るの外は無いのであるまいかと案じて居る、それに關して言ふべき事は、いろ／＼ある、他日を期しませう。

七、眼前の諸長老

理想の市長は、如何にもあれ、實際の市長――一日も缺ぐべからざる――は、どうしても、市長の長老から擧ぐるが可い、一概に官吏の古手は惡いともいはない、官吏の古手も、市民の長老は長老である、實業家の古手も、市民の長老は長老である、敎育家の上りも市民の長老は長老である、市長は、その敎育家からでも、實業家からでも、將た官吏上りの人からでも、要するに長老らしい人物を擧ぐべきである。

東京市は、言ひ換へれば、一つの大家で、市長は、その家長である、故に、必らずしも、その功名を競はすべきで無い、功名の爲にあらず、榮達の爲にあらず利得の爲にあらず、家あり、こゝに家長あり、その家長の心持の市長を擧げねばならぬ、僕は、阪谷男隱退後の市長は、先づ此心持を以て、選定せられんことを祈る。

然らば誰を、東京市の現時の長老と視るか、市長に適したる東京市の長老を視るかといふに、第一は澁澤男であらう、この舊幕人としての關係に於て、維新以後、引き續きたる東京市との關係に於て、その閲歴に於て、その信用に於て、その力量に於て、僕は、澁澤男を恰好の市長と看て居る、第二は、森村氏も其の一人であらう、兩人とも、所謂電燈統一に關係はあったが、それは、何にも兩人の新らしき進路の邪魔を爲すものであるまい、第三は莊田平五郎氏である、僕は、夙うから此人の才幹、力量、見識を、尋常の富豪では無いと眺めて居た、然し、近來、健康の勝れない噂を聞くのは遺憾である、第四は朝吹英二氏である、或意味に於ては、氏は長老中の、殊に長老らしい長老かとも思はれる、而して江戸つ兒以來の、東京市民の氣風を、一番よく代表して居る人かも知れぬ、僕は、略ぼかやうな人々を、市長たるに相應しい、眼前の諸長老と認めて居る。

辯ずる迄も無いが、僕が、此く言ふことを以て、僕が、無暗に富豪を揚げ、若くは殊更に富豪に媚びると貶する者は、滅多に有るまい。

歐洲動亂史論（三）

吉野作造

墺洪國と塞國（下）

墺洪國内のスラヴ民族と塞國との關係

予は前號に於て、墺洪國と塞國との不和の來歷、又其反目の最近の歷史を述べた。之れ丈けでも兩國の反目が遂に皇儲殿下の暗殺となり、續いて其の開戰となつた譯は略ぼ明かになつたと思ふ。併し尚其外に、皇儲殿下が特に塞國から睨まれて居つたと云ふ事情がある。即ち塞國では如何にしても皇儲殿下を斥けなければならぬと考へて居つた事情がある。本號に於ては特に此點を明かにしようと思ふが、此事を明かにするには、墺洪國内の南スラヴ民族殊にクロアシア民族と塞國との關係を明かにする必要がある。

墺洪國は元來人種關係の極めて復雜な國である。一方の墺國に於ては其中堅をなすものはゼルマン民族であるけれども、ゼルマン民族は全體の人口の約三分の一を占むるに過ぎない。他の三分の二は羅甸民族とスラヴ民族が之を占めて居る。

參考までに墺國内の人種別と其人口とを示せば次の如し。

ゼルマン族…………九・九五〇・〇〇〇

- 羅甸族
  - イタリア民族……七六八・〇〇〇
  - ルーマニア民族……二七五・〇〇〇
- スラヴ族
  - 西スラヴ族
    - チエツク民族……六・四三六・〇〇〇
    - 波蘭民族……四・九六八・〇〇〇
    - ルセニアン民族……三・五一九・〇〇〇
  - 南スラヴ族
    - スロヴエーネン民族……一・二五三・〇〇〇
    - クロアシア民族……七八三・〇〇〇
- 洪牙利族……一一・〇〇〇・〇〇〇

他方の洪國に在ては所謂洪牙利人が其中堅をなして居るけれども、之れ亦全體の人口の約半數足らずで、他はゼルマン民族と羅甸民族とスラヴ民族とである。

参考までに洪國内の人種別と其人口とを示せば次の如し。

- 洪牙利族……一〇・〇五一・〇〇〇
- ゼルマン族……二・〇三七・〇〇〇
- ルーマニア民族……二・九四九・〇〇〇
- スラヴ族
  - 西スラヴ族
    - スロヴアク民族……一・九六八・〇〇〇
    - ルセニアン民族……四七三・〇〇〇
  - 南スラヴ族
    - セルビア民族……一・一〇六・〇〇〇
    - クロアシア民族……一・八三三・〇〇〇

斯くて墺洪兩國を通じてスラヴ民族の數は非常に多いのである。即ち墺にあつては全人口の約半數以上を占め、洪に於ても尚全人口の四分の一を占めて居る。併し此等のスラヴ人は皆互に連絡があつて、即ち共同の文明の許に統一して居ると思ふならば誤りである。若し夫れスラヴ民族が更に隣邦の露西亞民族を盟主として互に共同一致の行動を執ると考ふる者あるに至りては之れ大なる誤りである。よく世間では汎スラヴイズムてふ事を云ふ。汎スラヴ主義と云ふのは、若しスラヴ民族中最も强盛なる、例へば露西亞民族の如きものが、自ら旗頭となつて廣く同種族を統一して纒つた獨立の勢力を樹てると云ふ事であるならば、斯くの如き意味の汎スラヴ主義と云ふものは今日世界に存在しない。若し存在するとならば、それは露西亞の一部の軍國主義者の夢想に止るであらう。彼等は曾て嚴しき露化政策を以て波蘭に臨んだ。其結果として、今日同じスラヴ民族でありながら、露西亞と波蘭とは到底和すべからざる程の敵味方となつたではないか。露西亞はまた曾て巴爾幹に於けるスラヴ諸邦の保護者を以て任

じ、今日でも之等諸邦は、都合のよい時は露國の保護を求めんとはするが、併し眞實彼等の心は既に遠うの昔から露國を離れて居ることは公知の事實である。然らば何處に露西亞を中心とする汎スラヴ主義が存在するといふのか。尤も汎スラヴ主義と云ふ言葉は、露西亞を盟主とすると云ふ考を離れて、同じくスラヴ民族に屬して居て、而かも從來よく調和融合して居なかつたものが、更により大いなる統一的の勢力とならんとするの目的を以て、互に提携し合ふと云ふ意味にも取れる。若し此意味の汎スラヴ主義と云ふものが墺洪國内にあつたとするならば、之は墺洪國に取つては由々しき大事である。何となれば墺洪國全體を通じてスラヴ民族は實に全人口の約五分の二を占めて居るからである。然るに墺洪國のスラヴ民族の間には決して斯の如き民族的融合の考と云ふものはない。スラヴ民族の中にもいろ〳〵の種類があるので、其中の或者と或者との間には融和の關係はあつても、他の者は又非常に反撥して居るものもある。故に墺洪國內のスラヴ民族は決して統一した一つの勢力とはなつて居ないのである。從つて後に述べた意味の汎スラヴ主義といふものも亦墺洪國には存在しないのである。

一體スラヴ人種といふのは墺洪國内に在住する者のみに限らないことは言ふまでもない。普通にスラヴ人種と云ふときは、人種學者の所謂東スラヴ、西スラヴ及び南スラヴの三族を總稱するのである。東スラヴといふのは主として今日の露西亞人をいふので、澳國ガリシア地方に居るルセニアン民族も亦其一部族である。次に西スラヴは今日墺、露、普の三國に跨つて居る所の波蘭民族、主として墺洪國西北部に居る所のボヘミア人即ちチェック民族及びスロヴァーケン民族を總稱する。此等の民族は他の東スラヴや、次の南スラヴと聯絡がないのみならず、其相互間に於ても實に交通が薄い。境を接して住んで居るからとて仲のいゝ間柄と解するは甚しき誤謬である。終りに南スラヴとは如何なる民族を包括するやと云ふに、其最も主たるものは所謂塞耳比亞族である。けれども、其以外に我々は尙總人口四

百六十萬を算ふる勃牙利民族と百四十萬に達するスロヴエーネン民族とを數へねばならぬ。勃牙利人は主として今日の勃牙利國を成すと云ふ事は今更ら說明の必要はない。スロヴエーネン人は今日墺國の南部諸州殊にクライン（英名カルニオラ）州に多い（全人口の九割四分弱を占む）。其他スタイエルマルク（英名スティリヤ。全人口の三割二分）ケルンテン（英名カリンスヤ。全人口の二割八分）イストリエン（全人口の一割四分）地方に亘つて相應に居る。此等は後にも說くが如く、塞耳比亞種族と密接の關係はあるが、然し人種上は全く別のものである。斯くの如く南スラヴの中にも塞耳比亞族にあらざる人種が存在して居るのであるから、往々世人が誤るが如く、南スラブ人即ち塞耳比亞人と云ふのは正當でない。然しながら、南スラヴ人から勃牙利人とスロヴエーネン人を除いた他の部分は廣く塞耳比亞人といはるゝのであるけれども、此場合の塞耳比亞と云ふ言葉は、大塞耳比亞主義など云ふ場合の塞耳比亞と、全然其意義を同じうするものと思ふならば之亦大なる誤りである。一體塞民族と云ふ言葉は三つの意義に用ひられて居るやうである。最も廣い意義に於ては、今申したやうに南スラヴ族全體より勃牙利民族とスロヴエーネン民族とを除いた他の全部である。此等の全部は人種上は全く同一であるからして之を一つの種族として塞民族と云ふのは固より誤りではない。次に最も狹い意味に於ては、塞民族と云ふ言葉、は塞耳比亞に國籍を有する民族、即ち塞耳比亞國民と云ふ意味に用ひらるゝ。之は法律上の見解としては正當である。然し以上二つの意味は共に大塞耳比亞主義など云ふ場合の政治上の意義に於ける塞民族の解ではない。政治上の用語としては前者は餘りに廣きに失し後者は餘りに狹きに失する。大塞耳比亞主義など云ふ場合の政治上の用例に於ける塞耳比亞民族とは之を最廣義と最狹義の中間の意味に用ひなければならぬ。此普通の意義と云ふのは、所謂廣い意味の塞民族を東方西方の二部類に分つて、其西方のものをクロアシア民族と云ふに對して、東方の部族のみを指稱するに用ふ

居てはいたけれども、塞國の事情があつて全然異つた文明を有し、全然獨立の宗教、言語、歴史を有するに至り、最後に至るまで彼此交渉のない、政治的には二つの全く異つた國體として發達して來たのである。さう云ふ狀態を明かにする爲めに、一方をクロアシア民族といひ、他方を塞耳比亞民族と云つたのである。此意味の塞民族は今日塞耳比亞及び黑山兩國を成すの外、纏つた團まりとしては墺洪國領のボ・ヘ二州に居る。其外土耳古及び墺洪の諸邦にも少しづゝ散在して居る。所謂大塞比亞主義といふのは、塞國を中心として之等の諸地方を統一せんとするの運動であつて、所謂クロアシア民族の住する地方には及ばない。故に政治上塞比亞民族を云々するときは、クロアシア民族に對する意義に之を解すべきである。近來では斯くて廣義の塞民族の意義と混同するの恐ある所よりして、後者は特に之をセルヴォ・クロアシア民族と稱するやうになつて居

ン人及塞民族の三に分れ、第三の塞民族は更に分れて所謂塞民族とクロアシア民族との二となることを記憶することが必要である。

先にも述べた如く、各種のスラヴ人種間には不思議に思はるゝ程統一融和の關係がない。塞民族とクロアシア民族との間亦同樣である。外の方面のことは姑く之を措く、只此セ、ク兩族の分離對抗の關係は我々の研究する問題に直接の關係があるから、特に記憶せられんことを希望する。之より予は此兩民族の對立が、如何に發展して今回動亂の種を蒔くに至るやを明にせんと欲するのであるが、之を了解するの前提として、吾人は先づ此兩族の各地方に於ける分布の狀態を知らなければならぬ。次の表は兩三年前の各種の統計を集め彼此對照した上で予の作成したものであるが、大體に於ては誤りなかるべきを信ずる。

セルビア民族	クロアシア民族	回教徒	合計

塞比亞國	二・九二〇・〇〇〇			二・九二〇・〇〇〇
黑山國	二八〇・〇〇〇	一〇・〇〇〇		二九〇・〇〇〇
ボスニア・ヘルツエコヴイーナ	八五〇・〇〇〇	四五〇・〇〇〇	六二〇・〇〇〇	一・九二〇・〇〇〇
クロアシア・スラヴオニア	六五〇・〇〇〇	一・七五〇・〇〇〇		二・四〇〇・〇〇〇
澳太利南部諸州	一〇〇・〇〇〇	七〇〇・〇〇〇		八〇〇・〇〇〇
洪牙利本部	五〇〇・〇〇〇	三〇〇・〇〇〇		八〇〇・〇〇〇
土耳其	三〇〇・〇〇〇	一〇〇・〇〇〇	一〇〇・〇〇〇	五〇〇・〇〇〇
合計	五・六〇〇・〇〇〇	三・三一〇・〇〇〇	七二〇・〇〇〇	九・六三〇・〇〇〇

右の表につき一言注意すべきは、塞、黑、土の三國の人口は、何れも巴爾幹戰爭前の狀態に係ることである。此戰爭の結果、土耳其は領土の一部を割きて塞、黑の兩國に與へたから、從つて右の人口にも異動を生じたに相違ない。が然し、之を確むべき材料が未だ屆かないから、已むを得ず、戰爭前の儘にして置いた。又回敎徒とあるのは、セルヴォ・クロアシア民族にして而かも回敎信徒たるものを意味する。元來此民族は、大體に於て天主敎を奉ずるクロアシア民族と、正敎を奉

ども、少數ながら回敎を奉ずるものもあるのである。只大勢に關係が無いから、通例之は看却されて居るのである。右の表に示す通り此種の民族は僅〻ボスニア地方と土耳其領內に居るのみである。人口も總數の一割に足らない。

セルビア民族とクロアシア民族との對立

前述の如く、此二民族は昔は單一なる民族であつて、決して二つに分れて居つたのではない。之が紀元七世紀の央頃に、今彼等の占據して居

のである。彼等が今日在住して居る地方、即ち北はクロアシア、スラヴォニアよりボスニア、セルヴイアから、南マセドニア方面までの地方に移住して來たのは、當時コンスタンチノープルを都として居つた東方帝國の招ぎに應じたのである。此前には何處に居つたかと云ふ事は文獻の徵すべきものなく、よくは分らぬ。只學者の想像說によれば今日のカルパシアン山脈に添った地方であつたらうと云ふ事である。併しビザンチン帝國とは、夫れ程遠方でもなかつたので、此民族の勇敢なることは早くから東帝國にも知られて居つたものと見える。そこでビザンチン帝國では、紀元五百六七十年頃から始まつたアヴール民族の侵入に當らしむる爲めに、北方の蠻民族(斯義の)を招いで、當時無住の地であつた巴爾幹北部の方面に居らしめたのである。何云ふ迄もないが、此等の地方がビザンチン帝國の旗下に歸したのは、紀元五三五年より五九〇年に至る間の事である。而して此地方に蠻民族を招いだのは、六三四年より六三八年に至るまでの事として知られて居る。而して此當時は、所謂蠻民族は單一の民族であつて、決して二つに分れて居つたのではない。當時此民族の移つて來た新住の地方を尙精密に區域をすれば、北はダニューブ河及び之に注ぐ所のドレーブ河を堺とし、西はアドリアチック海に接し、東は今日の塞國と羅馬尼亞との境を流れてダニユウブ河に注ぐ所のチモク河を境とし、南は餘り判然とはしないが、黑山國の南方のスクタリ市の南を流るゝドリン河四方に亘つて居ると云ふ事である。

扨此等の地方に據つて初め單一の民族をなして居つたものが、何故に段々分るゝに至つたかと云ふに、其最も主なる原因は、第一は地理的の關係である。今此等の地方を見るに、今日のクロアシア、スラヴォニアの地方は、何れかと云へば地勢が稍々平坦である。地勢の平坦なる事は、人民の交通を容易ならしめる。從つて住民は早くから結束して團體的生活をなすの經驗を積む。其以外の地方殊に東の方の地方は地圖を見ても明かな通り、山脈が連亘して全體の交通が非常に不便である。從つて住民は永く孤立して生活すると云ふ事になつて居る。從つて前者は早くから大きなものに纏つたのに、後者は此點については甚だ遲れたのである。之が東西相分るゝに至る第一の端緒であつた。も一つ最も重要な原因は、全體として此等の地方は恰度東西文明の接觸點であつたといふ事である。即ち羅馬を中心とする西方の文明は、段々東の方に其羽を擴げて、今日の墺太利地方を席卷し、巴爾幹北部の方面に其勢を張らんとして居つた。之に反して今日のコンスタンチノープルを中心とする東方の文明は、是れ亦

北西の方に延びて、巴爾幹は固より、露西亞の方にまで其勢を伸ばしたが、更に今日の巴爾幹西北部の方から今日の洪國の西南方面にも其文明を普及せしめんとして居る。塞民族（廣義の）の據つて居つた地方は、正に此兩文明の接觸點であつた。其結果此等の地方の中、西方はどうしても西方羅馬文明の下に立たざるを得ず、又東方は勢、東方コンスタンチノープル文明の影響を免るゝことは出來なかつた。此區別は恰度前の地理的の區別と略ぼ合するので、今日のクロアシア、スラヴォニア地方の住民、即ち平坦なる地方に早く結束して居つた住民は早く已に第七世紀の頃から羅馬舊教に歸依し、いろ／＼の點に於て西方文明の圏内に入つて仕舞つた。之に反して東方に於て所在に割據して居つた所の各部族は、稍々後れて第八世紀の末から第九世紀の末に至るまでの間に、全部所謂正教に改宗することになつた。是に於て地理的に分れた二部族は、同時に又異つた文明を有する所のものとなり、殊に宗教上截然として二つに分るゝことになつた。其外言語などを見ても、今日でも兩者の言葉は元、同一の言語ではあるけれども、それを書きあらはすのに、西の方即ちクロアシアの方では、羅甸文字を用ひ、東の方即ち塞國方面に於ては、希臘語の變體たるシリック文字を用ひて居る。從つて言語は同一でも、今日では發音が多少異るやうになつて居る。斯くして元々同じ民族であつたものが、其居る所を異にするの結果として、東の方と西の方と、全く別異の民族として發達することゝなつた。更に此等の二部族に付き、此時から今日に至るまでの歴史を見る時は、此二つの民族は、今日では到底之を同一民族と觀る事が出來ない程に、全く異つた二つの部分であると云ふ事が明了になるであらう。

之より予は此關係を明かにする爲めに、西方天主教を奉ずる民族の中堅たるクロアシアと、東方正教を奉ずる民族の中堅たるセルヴィアと此二國民族を中心として其各々の全く異つた歴史的の發達を述べて見よう今私にクロアシア及びセルヴィアを中心とすると云ふ意味は、其外に西にはスラヴォニアと云ふ國があり、東には黑山國あり、其間にボスニア・ヘルツエゴヴイナと云ふ二つの國があるが此等のものは暫らく度外視して其主もなるものについて述ぶると云ふ意味である。

上

先づセルヴイアから初める。今日の塞國をなして居る地方は、塞民族の移住した頃は、初めに申した通り、ビザンチン帝國の一地方であつた。塞民族が移住した後、彼等は其居る所によつて各々部落をなし、所謂群雄割據の有様であつた。其首長はジユウパンと稱せられて居る。初めは各ジユウパン各々割據したのであつたが、十世記頃から段々其中の強大なるジユウパンが、他の弱小なるジユウパンを從へて追々に統一併合すると云ふ傾向を生じた。斯くして初めて稍々國家的組織をなすに至つたものが、恰度今日のノビパザールを首府としたラッシア帝國であつた。ラッシアと云ふのはノビパザールの當時の稱呼である。此國は段々大きくなつて、一時はボスニアをも併せた事がある。而してビザンチン帝國に對しては或は背いたり或は從つたりして居つた。十二世紀の初め頃のウーロッシ王に至つて段々に勢力が盛んになり、それより有名なるステフアン、ネマニヤ王(一一五九—一一九五)に至つて今日の塞國の基礎が漸く堅くなつた。彼はビザンチン帝國と戰つて勝ち、大いに國威を輝がしたのみならず、在位三十六年の間、大いに國の富强を計つた。塞國の歴史で所謂ネマニヤ王朝と云ふのは、此人から始まると云つてもよい。彼は九十五年位を其子のステフアンに讓つて自ら僧院に入つて晩年を送つた。之より一二四一年にはモンゴリア人の侵略を蒙つたとか、一三一九年には洪國人からボスニアを取られたとか云ふ歴史があるが、やがてステフアン、ドウシヤン大王(一三三一—一三五五)に至つて、塞國は其極盛に達した。彼は其權力を握るが爲めに實の父を囚へて幽閉し、やがて之を絞殺したと云はれて居る。傳說によれば軀幹長大、容貌魁偉、獰猛なること獅子の如しとあるから、隨分亂暴な男には違ひなかつたらう。けれども戰爭には非常に強く、附近を平ぐることは勿論、東方帝國と戰ふこと十三度、遂に一三三七年ストルミッアーを取り、更に領土を擴めビザンチン帝國をして遂に和を乞はしむるに至つた。時の臣民は彼を稱するにシヤーレマン大帝の綽名をつけた。斯くて彼は或は戰ひ或は結び巴爾幹の大部分は固より、其西北方に於てもクロアシア、ダルマシア、ボスニアを除くの外はすべてのセルヴ民族地方を統一して、非常に廣大なる地域を其領とした。當時巴爾幹方面に於て勢威彼に並ぶものは一人も無かつた。斯くて一三四六年、彼はユスカップに於て盛んな戴冠式を行つて帝號(ツァール)を稱した。此ドウシヤン大王の事蹟は、恰度我國に於ける大閤秀吉の話のやうに、昔譚となつて今日でも塞國人の間に言ひ傳へられて居るのであつて、我々が大閤秀吉の朝鮮征伐の話などを聞いて子供ながら海外發展の雄圖を起すやうに、塞國の子弟も亦此ドウシヤン王の歴史を聞いては非常に偉勃たる野心を抱かしめらるゝのである。今日大セルヴイア主義の深き根柢を國民の間に有して居るのは、此大王の話が子供の時から其頭腦に吹き込まれて居る結果である。彼は行政的手腕も相當にあつて、全領土を八區に分ち、ビザンチン帝國に倣つてなか／＼立派な政治をした。五十五年、再びビサンチン帝國と事を構へて戰爭をすると云ふ事になり、彼は之を機會として全巴爾幹の主人公たらんと欲し、

兵を進めてコンスタンチノープルに迫つたのであつたが、軍半ばにして十二月十八日遂に陣中に沒した。玆に一寸注意するのは、此ドウシヤン大王の盛時に於てすらクロアシア地方は其支配する所とならなかつたと云ふ事である。況んや其後に於ては無論無關係である。ボスニアの如きは或は塞國に歸し或は塞國を離れて他の國に歸した事はあるけれども、クロアシア丈けは決して塞國と合體したと云ふ歷史はない。從つて全一民族には屬して居りながら、クロアシヤ民族はセルヴィア族と政治的に合體したと云ふ事は、古往今來絕無であるのである。此事は呉々も注意を要する。

扨此東方のシヤーレマン帝國の末路は、西歐のシヤーレマン大帝の末路と同じく、其子不肖にして遂に四分五裂することを免れなかつた。彼の子のステフアン・ウーロッシは、時に歲十九才であつたが、身も心も非常に弱い。部下の將軍で叛を謀るものがあつたけれども、之に抵抗する力がない。遂に一三六七年父帝の部下たりしヴカシンの殺す所となつた。之を以てネマニヤ王朝は絕えた。此頃から段々土耳古人と云ふものが此地方に勃興して來た。而してヴカシンは其土耳古軍の王ムーラット一世と戰ふべき運命となつた。而して一三七一年九月ヴカシンはモリッツアの戰に敗れて死し、其子クラレヴイッチ遂に敵に降るに及び、ドウシヤンの帝國は全く瓦解して了つた。尤もこの際ヴカシンの次子マルコーが父に代つて立つたのであつたが、人望は之に歸せなかつた。一般の人望は却て年少の貴族にして先の王家に關係のあるラザールと云ふもに集り、一三七四年之を擧げて王とした。此人はボスニア人やアルバニア人や勃牙利人の扶けを藉りて一旦土耳其人を追ひ拂つたが(一三八六年)土王ムーラッド一世が再び軍旅を整ひ、先づ勃牙利を滅ぼし、次で塞國に迫るに及び、一三八九年六月十五日今日のコッソヴオ附近に一大決戰を試みて大敗し、斯くて塞國は全く獨立を失つて土國の附屬國となつた。ラザールは此戰で戰死したとも云ひ、又一旦囚へられてムーラッドの目前で殺されたとも云ふ。之より塞國は約七十年の間、多少の自治を認められつゝ、土國の屬領地として辛うじて其存在を保つて居つた。處が一四九九年に至つて、其之まで認められた多少の自治權さへも取り上げられて、全くの土國の一州(プロヴィンス)となつて了つた。之はどう云ふ譯かと云ふに、初めの間は、塞國に對する宗主權を握つて、內政上には自治を與へ其總督としてはラザールの子のステフアンと云ふものを擧げ、且つ其總督の地位はステフアンの子孫をして世襲せしむると云ふ事にしてあつた。即ち塞國は土國の附屬國とはなつたけれども、一つの君主國の如き體面を保つことを許され居つたのである。然るに一四五七年十二月に立つたラザール侯が間もなく死んで、其王妃のヘレーナと云ふものが一時政を見たが、彼女は窃かに款を羅馬法王廳に通じ、其力を藉りて土國の勢力を追ひ除けんとする陰謀を企てた。そこで土帝のモハメット二世は大いに怒つて世襲君主制を廢し、或は貴族富豪の邸宅を燒いたり、或は不穩の擧動ありと認めらるゝものを殺したり、其揚句塞國を純然たる州として了つたのである。此當時獄に投ぜられ後奴隷とせられたものが、廿萬八

に及んだと傳說には稱へられて居る。難を避けて洪國方面に逃れたものは頗る多かつた、今日洪國に塞民族の百萬以上も居るのは、其後多少の新移住もあらうけれども、主としては此時の大移入に起源する。又一部の貴族や金持などが、土國に媚びて其保護を求めんが爲めに、回々教に歸依したものも少くなかつた。今日巴爾幹方面に、土耳其人にあらざる回々教徒が居るのは專ら此時に起因する。之より塞國は、其間多少の變遷はあるけれども、大體に於て十九世紀の初め迄、土國の專制の下に支配されて居つたのである。

土耳其の壓制は、今日でも其領内の異民族に對して頗る激烈を極めて居るが、昔は固より云ふを俟たない。彼等は土國人のみが立派な人間だと考へ、基督教徒に對しては普通の人間と云ふ取扱を與へなかつた。恰度日本で昔穢多非人を取扱つたと同樣の待遇をして居つた。のみならず基督教徒からは、いろ〳〵複雜にして多額の稅金を取つた。基督教徒は大體に於て都會に住居することを許されず、大抵百姓となつて居つた。そして其收穫の中からいろ〳〵の名義で澤山の租稅を取つたのである。其外一般に壓迫が激しくて、馬に乘ることが出來ぬとか、武器を携ふることが出來ぬとか云ふ制限を受けて居つた。基督教徒に對して回教徒は事實上切捨御免の特權をも得て居つた。是れ程虐待されて數百年を經たのであるから、當り前ならば塞民族と云ふものは、最早や民族的個性を失ひ、獨立の精神などは丸で亡くなつた筈である。然るに幸にして彼等は土國人の一種特別の信仰からして、一方には斯くの如き壓迫を受けつゝ、他方に於ては其民族性と云ふものを殆んど無疵に保存することを得たのは、實に不幸中の幸福と云はねばならぬ。其譯は、土國人は其經典にして同時に其法律たる例のコーランを以て極めて神聖なるものとするの餘り、之は回々教徒のみに適用すべきものであつて、回々教徒以外のものに適用するのはコーランの神聖を瀆がすものと考へて居る。そこで土國人の間の生活關係は、コーランで支配するけれども基督教徒に對しては、彼等特有の法律、彼等特有の慣行に其儘據ることを許した。否、據らねばならないと云ふ事にした。且つ基督教徒をば土國人よりも一段劣つた下等な人民と認めたから、其宗教、其歷史も亦全

然本來の其儘のものを維持することを得せしめた。言語の如きも神聖なる土國語は他民族の唇頭に上ぼすべからずとして之を強いなかつた。そこで塞民族は、自分の言語で、自分の宗教、自分の歷史を學ぶことが出來た。斯くして塞民族は其國家的獨立は之を失つたけれども、其民族的精神は永く之を維持することが出來たのである。故に彼等は其後常に塞民族と云ふ意識は之を喪はないで、絶えず獨立して壓制の政治より逃けんことを希望して止まなかつた。それで十九世紀までの歷史の中には、塞國が其苦痛を脫せんが爲め、或時は墺國に附き或時は土國に附いたと云ふ事實があるのである。

前號にも述べた通り、墺國は一七一八年七月廿一日、ポシヤレワツチの平和條約に於て塞國を得たのであるが、此時塞國人は、土國の羈絆を離れ得た事を非常に喜んだ。然るに墺國人の政治は、塞國人の期待する所に合しなかつた。それでカール六世の對土戰爭（一七三八年—三九年）に於ては、塞國人は土國を援けた。ベルグラードの平和條約では、塞國人は再び土國の領土に戾つた。然るに土國は此塞國の功勞に酬いなかつた。そこで塞國人は今度は土國に對して不平を發し、其結果一七八八年より九〇年に亘る墺露對土の戰爭に於ては、墺國人を援けて土國人より離れんとしたのである。只不幸にして此時佛國大革命が勃發し、墺國は東方を顧みることが出來ないと云ふ事になつて、九一年八月四日シシトヴアの條約で土國と妥協したから、塞國は土國より離るゝと云ふ目的を達しなかつた。此事は前號に於ても已に述べた。斯くて十九世紀の幕は開かれたのである。

十九世紀の初めは、歐洲各國が佛蘭西革命並びに那翁の跋扈に影響されて、大紛亂を極めて居つたが、其跡の始末が一段落着いてからは、各國に自由主義の運動と民族の獨立若くは統一の運動と云ふものが相交錯して起つた。此民族主義の勃興には、塞國も亦全く無關係で居ることは出來ない。斯くして多年土國の壓迫を蒙つて居つた塞國人は、其無疵に保存し來つた民族精神の覺醒を喚び起し、遂に土國に對する獨立運動の發生を見るに至つた。尤も是は大體の觀察である。細かく云へば、塞國人は實は始めは民族獨立と云ふ程の考はなかつた、先づ第一に總督の壓制に憤慨し、次には土國兵の亂暴に憤り、夫等の欝憤を洩らす爲めに運動をしたのが、後段々に民族獨立の運動となつたので

ある。併し大勢から云へば之も亦十九世紀初頭に起れる民族主義勃興の一例に外ならぬと云つて差支はない。今其來歴を簡單に述べよう。

先きに述べたシシトヴアの條約で塞國は土國の主權の下に殘ることゝなつた事が明かになると、折角墺國を援けて土國の暴政を免れんとした塞民族は大いに憤慨して、其處此地に暴動を起した。そこで土國の政府も幾分か目が覺めた。不平の原因は土國の政治の遣り方にある。ベルグラードに在留して居つた土國人自身も亦改革の必要を叫ぶやうになつて居つたので、土國政府はこゝに其當時の軍政を撤し、改めて文官の總督(Dahis)を派遣して寛大の政治を行はしめると云ふ事にした。處が總督として任官したものが恰度甚だ清廉潔白でない人間であつたので、大變私利を計つて人民を苦しめた。於是塞國人は却つて益々憤慨した。斯くては土國兵が駐屯して其壓迫を受けて居つた時よりも苦痛が多いと云ふので、一部の間には寄り〱總督排斥の陰謀を企てたものがある。處が其密謀を書いた所の手紙が、偶然に總督の手に入つた。之れ一八〇三年の年末の事である。總督は之を見て大いに驚き且つ憤り、其密謀の計に與みした者を皆捉まへて殺さうと云ふ事になつた。此死刑は一八〇四年二月四日から始まつて、僅か數日の間に七十二人の首が役所の前に梟されたと云ふ事である。そこで塞國人の憤激が其極に達し、遂に公然兵器を執つて亂を起すと云ふことになつた。而して其當初の目的は、實は單に總督の排斥にあつたけれども、總督が直ちに土國兵を亂徒鎭定に向はしむるに及び、總督排斥の運動は一轉して塞國民と土國兵との衝突となつた。

斯くても此運動は此時まだ土耳其帝若くは土國の主權其物に對する反抗ではなかつた。此運動の首領となつたのは同國の牧者にして元、墺國で軍役を勤めた事のあるジヨルヂ・ペトロヴイツチと云ふ男である。普通にカラ・ジヨルヂと呼ばれて居るのが即ち之れである。カラと云ふのは黑と云ふ事を意味する。彼の運動は、初めは大變運好く運んで、僅か數ケ月で以て土國駐屯兵を掃蕩することが出來た。けれども土國の本國では之を見て默つては居ない。斯くて彼はやがては土國本國の兵を敵として戰はねばならぬ事になつた。是に於て此運動はいよ〱土國に對し塞國の獨立を回復すると云ふ一つの意味のある運動と變ることゝなつた。此際カラ・ジヨルヂは獨力で以ては成功しないと氣が附いて、墺國に救ひを求めたのである。之は予が屢々引用した通り、塞國と墺國とは、昔から仲のわるい國でなかつた事を證明する例となるものである。而して當時墺國は、佛蘭西革命の騷動に忙殺されて此要求に應ずることが出來なかつた事は、已に述べた通りである。そこで塞國は一轉して露國に救ひを求むることになつた。塞國の歷史の上に露西亞と云ふ名前の出て來るのは、抑々此事が初めてある。露國は勃牙利民族に對しては、もつと早くから關係があつた。けれども塞國民族に對しては、此時以前には全然何等の交渉がなかつたのである。同じスラヴ民族に屬するの故を以て此兩國が歷史的の古い關係に立つて居ると想像するのは斷じて誤りであ

る。

扨此時に露國は援けを與へると云ふ事を約束したのであるが、其援けは實際はなか〳〵來なかつた。之も佛蘭西革命の騷動の影響である。其うちに塞國の方がどうか斯うか戰に勝つて、一八〇六年十二月十二日には、一旦取られたベルグラードを回復し、九年より十年に亙る頃には殆んど土國兵を國外に驅逐した。然し土國は限りなき武力の蓄があるので、復た塞國の回復に兵を送らんとした。此頃から露國は初めて此爭に干渉し始め、遂に一八一二年五月廿八日ブカレストの條約で以て塞國の地位を決めることにした。此條約に於て、實は塞國の面目は餘り立てられて居ない。何となれば、塞國は多少の自由を得たが再び土國の主權に服することゝせられたからである。のみならず、土國は賞金納附、要塞武器、軍備の引渡を要求し、且つ土國排斥運動に加擔したものの赦免はするが、同時に之は海外に放逐せなければならぬと云ふやうな條件を附して居つたので、そこで塞國は之には同意することが出來ないと言ひ張つた。そこで土國は再び兵を送つて塞國を壓迫することになり、一八一三年、クルシット・パシャに大軍を附して塞國に向はしめた。是に於てカラ・ジョルヂは力及ばずして十月十五日に墺國に逃れた。斯くて一八〇四年に始まつた獨立の運動は一旦全く屏息することゝなつた。此際に土國は、再び騷動の起ることを恐れて、總ての貴族階級は勿論、多少目星しい人物は皆之を殺したり放逐せんとした。只百姓丈けは、土地を耕したり、或は同國特有の産物たる豚を飼ふ必要があるとして殘された。處が此豚飼ひの中から一人のエライ人物が起つた。之をミロシ・オブレノヴイッチと云ふ。彼は一八一五年に再び死灰を煽つて國民の愛國心を鼓舞作興し、復た新たに獨立運動を始めた。其間に一勝一敗があるが、遂に一八一七年に、土國のアリー・パシャの軍を破つて、遂に全く塞國の獨立を恢復した。今日の塞國の基は先づ此時から始まつたといはなければならぬ。十一月六日には、彼は人民からセルヴイア公と立てられた。土國も亦遂に之を承認し、宗主權を維持しつゝ、塞國に自治的の地位を認むることになつた。之を以て塞國は土國に對しても立派な半獨立國の體面を得るに至つた。之より先き年の七月廿五日、國內の稍々鎭定したと云ふのを聞いて、カラ・ジョルヂは墺國から歸つて來た。然るにミロシ・オブレノヴイッチは一旦得たる權力の地位を彼に奪はれんことを恐れて、人を放つて彼を暗殺した。之より其後多年塞國の內政を惱ましたオブレノヴイッチ家とカラジョルヂ家との反目暗鬪が始まる。扨て此年に得た自治權は固より完全なものではなかつた。一八二〇年に至つて、更に內政上の自治權を擴張し、二六年の條約、二九年の條約に於ては明白に首長を選ぶの自由、獨立の裁判權、獨立の課税權等を得たが、一八三〇年には巧妙なる外交手段と多額の賄賂を使つた結果とに依つて、初めて完全なる自治權を得、且つ土國をしてミロシ・オブレノヴイッチ及び其子孫が永く塞國の君位を世襲すべき事を認めしむるに至つた。是に於て塞國の獨立國としての體面は、殆んど完全に備つたのである。只土國の宗主權を從前通り認めると云ふ事は云ふ迄もない。

此頃政界では、憲法制定の要求と云ふ事が一般の流行であつた。此流行は塞國にも擴がり、人民の間に自由主義者が段々勃興して來た。ミロシ・オブレノヴイッチは、例の如く民間の要求に反抗して、時としては兵を擁して之に壓迫を加へた。所謂官民の衝突と云ふ現象をあらはした。斯くて民間の要求に押されて三五年の二月八日には、憲法を與ふると云ふ約束を公表し、三八年には一種の憲法とも云ふべき基本法（ウスタヴ）を發布したが、然し人民は之に滿足しなかつた。獨り內部の紛亂ばかりではなく、此頃から段々露國が手を出して來て政府を困らして居つた。一説には、ミロシは露國の干涉から免れんが爲めに、英國や墺國やの助けを求めんとしたといはるゝが、之は明かでない。要するに外交上の困難もあり民間の輿論との折合も附かず、彼は遂に三九年六月十三日位を長子ミランに讓つて外國に放浪することゝなつた。然るにミランは非常な弱身で、翌七月八日に死んで了つた。そこで弟のミカエルが立つた。年が若いので攝政を附した。此攝政政治も亦民間との折合が旨く附かず、加之先きに暗殺されたカラ・ジョルヂの一派が密かに款を露國に通じて、いろ〳〵陰謀を計つて居つたので、遂に此等の事情より、ミカエルは四二年九月七日の騷動の結果墺國に逃げて行て了つた。玆で暫らく君位に欠缺を生じたが、九月十四日になつて、ベルグラードの人民はカラ・ジョルヂの子アレキサンダー・カラジョルヂェヴィッチを戴いて公位に仰ぐことになつた。之れでオブレノヴイッチ家は倒れて、カラジョルヂェヴイッチ家が君臨すると云ふ事になつた。彼は位に任ること十七年の久しきに及んだが、內訌が常に絕えなかつた。國內の政黨も新公家に左袒するものと舊公家に左袒するものと出來て、新舊二朝の衝突はまた黨爭の形を取つて政界に戰はるゝ事になつた。對外關係に於ても、アレキサンダーは先には露と親み、後には墺と親み、又或時は土の保護を求めた事もあつて、方針が定まらなかつた。斯くて段々民望を失して、五八年十二月廿一日には公然議會の決議を以て退位を迫らるゝに至つた。而して議會は翌々廿三日先きに三九年位を退いて國外に去り、當時ブカレストに居つた七十八才のミロシ・オブレノヴイッチを再び呼び戻すことに決めた。斯くて塞國最初の君公は是に於て再び五代目の公として君臨することになつた。彼は六〇年九月二十六日に死んだ。次いで立つたものは、彼の子にして一度公位につき後追はれて墺國に行つて居つた所のミカエルである。此ミカエルは塞國の近世史中では最も有力なる人物であつて、彼の時代には內外共に多事であつたに拘らず、なか〳〵よく國を治めた。いはゞ彼は當時の新知識にして時に歲四十、非常の働らき盛りであつた。先に追放されて墺國に逃げて居つた間に、遍く西歐地方を漫遊して親しく新文明の空氣を呼吸した。歸つて之を塞國々運の進步に利用したるが故に、兎も角も彼の時代に於ては、塞國は一大發展を見たのである。然し彼の時代は決して無事ではなかつた。民間には追々土國から全く獨立せんとするの考が盛んになり、此希望は軈て一つの民衆的の運動となり、六二年にはいよ〳〵土國と戰爭をすると云ふ事になつた。各國の仲裁があり、九月四日の條約で大部分の土國兵の撤退を見たが、其後更に土國

兵の撤兵の爲めに苦心し、六七年三月より五月にかけて初めて塞國の國土を全然土國から自由にすることを得たのである。されば後日塞國が完全なる獨立を得るの基礎は、此ミカエルの時代に略ぼ出來て居つたと云つてよい。ミカエルも亦始めは露國と親善の關係を取つたけれども、間もなく其壓迫の甚しきに苦しみ、後には暗に露國に反抗する工夫をして居つたらしい。現に彼の妃は、六三年から六四年にかけて、密かに倫敦に赴いて露國の壓迫を訴へたと云はれて居る。併しながらまだ十分に露國の勢力から自由になることを得ずして、六八年六月十日トプチデルの公園に於て不幸凶手に罹つて暗殺された。之は後に至つて明かになつたのであるが、此暗殺はカラジョルヂェヴィッチ家側の計畫に出で、現王ピーターの如きも之に深い關係があると云はれて居る。

ミカエルに次いで立つたつは從弟のミランである、時に年漸く十四であつたから、內務大臣、司法大臣等が主として後見し、別に攝政を置いて大政を統べしめた。此頃又民間の憲法改正の要求が激しく、六九年六月二十九日に一つの新憲法を作つたが、之は表面自由主義であつて實際は頗る保守的のものであつたから、民間の不平が收まらず、內閣が常に動搖した。やがて七二年八月廿二日に至り、ミランは靑年に達し、萬機を親政することになつた。彼も亦なか〳〵の人物であつた。初めは矢張り露國の勢力の下にあつた。此間にもカラジョルヂェヴイッチ家の陰謀が常に絶えないので、國內は決して安全平和とは云へなかつたが、兎も角約十數年の間無事で、此間に大いに塞國の發達を來たしたのである。

此間に注意すべき出來事が二つある。一つは露土戰爭の結末を告げた一八七八年七月の伯林會議で、塞國は初めて全く土國の宗主權を離れて完全なる獨立を得王國となつた事である。も一つは、塞國は從來或は露に附いたり或は背いたり、一定の方針がなかつたやうであるが、併し大體に於ては露の勢力と云ふものが盛んなるものがあつたのに、此頃から塞國の政治方針が一變して斷然露國反對の主義を執るに至つた事である其譯は一八七八年三月のサン・ステファノの條約に於て、露國は大勃牙利帝國を作るの目的を以て、從來塞國人の勢力範圍と考へられて居つた地方を勃牙利に與へんとした。之を塞國は非常に憤慨したのである。尤も伯林會議に於て、露國の希望は大部分排斥された。けれども塞國の露國を怨むの念は之を以て消えない。斯くて王及び政府は寧ろ露國に背いて墺洪國に接近すると云ふ方針を執るに至つた。然るに一方に於ては露國に味方するものも全く無いではない。而して王及び政府に對して、政治上反對の地位に在るものは、自ら政府方の反對だと云ふ點からして親露主義を執ると云ふ事に傾いた。斯くして王及び政府の味方たる所謂進步黨は、同時に墺洪國接近策を執り、政府反對黨たる所謂急進黨は、親露政策を執り、兩々相對して相爭ふと云ふ事になつた。墺洪國及び露國夫自身が此機會に於て塞國に各々其勢力を樹てんことを競爭した事は、申す迄もない。尙序に申して置くが、七八年の伯林會議で、ボ・ヘ二州が墺洪國の奪ひ去る所となつたと云ふ事は、先にも述べた通り、直接に塞國の政治には影響はなかつたのである。故に七八年のボ・ヘ二州の占領

が、塊塞兩民族の反目の直接の原因であると説くのは、一個の想像説に過ぎない。

以上述ぶるやうな事情で、ミランは外に向つては露西亞及び急進黨と爭はねばならなかつたが、他方に於て又財政上いろ〳〵の困難なる問題に遭遇して居つた。それは伯林條約締結の際、塞國は其獨立承認の條件として、一定の期間内に必ず或鐵道を完成すると云ふ義務を負うた。之には莫大の金が要る。尙其外に新領地に於ける、もとの土國人の土地所有者に賠償金を拂はねばならず、それが爲めにも金が要る。此等の目的の爲めに入用な金は公債を募つて辨じたが、段々其利子を拂ふのにも窮して來た。そこで財政上大改革をやらねばならぬと云ふので、增税を行ひ、鹽・烟草・マッチ・石油等の專賣をも行つた。之が偶々反對黨の乘ずる所となり、且つ又民望を失するの原因となつた。民心日に〳〵去り、反對黨の勢日に〳〵加はる。從つて露國の勢力がます〳〵增大した。八二年には王の暗殺を計つたものがあり、八三年には東南の地方に百姓一揆が起つた。只幸にして軍隊が王に忠誠であつたから、辛うじて事なきを得たのである。斯くて八五年となつた。此年の十一月に有名なる勃塞の戰爭が起つた。之は塞國から仕掛けた戰爭である。其原因は勃牙利と東ルーメリアとの合併に存する。塞國は此合併を以て巴爾幹半島上の權力の均衡を破るものとなし、極力之を妨害せんと欲し、止むを得ずんば何等かの報償を得て滿足せんとした。之が戰爭の原因であるが、塞國側は忽ち負け、塊洪國の周旋で辛うじて勃軍の侵略を免れた。此失敗は益ゝ彼の人望を落すの原因となり、此機會に乘じて彼を倒さんと計つたものもあつたが、好運なる彼は斯くても位を退かねばならぬ程に窮迫はしなかつた。斯くの如く彼は内外の政治上の失敗によつては夫れ程には困らなかつたが、王妃ナタリーとの離婚問題起るに及び、端なく彼の私行上の缺點が暴露し爲めにまた著しく民望を失し、其結果到底民間の非難に對抗することが出來ないやうな境遇に陷つた。八八年十二月には、從來の憲法をやめて、本當に自由主義的なる憲法を發布したけれども、人民の不平は之れでも收まらない。そこで八九年三月三日に至つて、彼は突然位を退いて、王位を彼の獨り子のアレキサンダーに讓つた。之は人々の豫期せざる所ではなかつたが、餘りに突然であつた爲めに、内外の人一時は悉く吃驚した。

アレキサンダーは、まだ年が若かつたから、攝政を置いて實際の政治に當らしめた。此時攝政を組織したものゝ中で最も有力なるものは、先にミランの未成年時代にも攝政であつたヨヴァン・リスティッチである。彼は自由黨の首領であつたけれども、攝政としては極端な保守主義を取つた。當時憲法は自由主義である、議會に於ける最大黨は急進派であつた。從て政府も亦急進主義の人々を以て作られて居つた。是に於て政府と攝政府との衝突は常に絶えなかつた。政府が保守的な攝政府の壓迫に對し其地位を擁護せんが爲めに、一法律を作り、王父ミランの再び故國に歸ることを禁じ、又王母ナタリーをベルグラートから放逐することゝしたのは、恰度此時の事である。斯くして政界は常に紛擾を極め、財政も年

々不足して、中央・地方共に不安を感ずるのみであつた。此紛亂に乘じて段々頭を擡げて來たのは、現王のピーターである。彼はカラジョルチェヴィッチ家の正統として政府反對黨たる急進黨を操縱し、現黑山國王の長女を娶つて當時セッチンエに居り、密かに露國の援けを藉りて現王朝顚覆の計畫を回らして居つた。故に當時の政爭は、いはゞオブレノヴィッチ家とカラジョルヂエヴヰッチ家との爭と云つてもよろしい。暫くにして攝政府の一人コスタ・プロティッチ將軍が死んだ。そこで急進黨政府は、其黨の領袖パシッチ(現總理大臣)を其後任者たらしめんとした。攝政府は固より之に反對である。遂に九二年八月に及び、攝政府は政府を免じ、新に自由黨の連中を後任者に据へた。新政府は乃ち議會に解散を命じ。自由派の多數を得んとして大いに干渉をやつた。處が結果は依然として急進派の多數に歸した。そこで議會は攝政府の意の儘にならず、政界は益々紛亂を極めた。然るに國王のアレキサンダーは、政治の事は姑く攝政に任かせて、自らは專心學問の勉强でもして居ればよいのに、九三年四月十三日、年漸く十七歳になつた許りなのに、突然成年に達せりと宣言して、攝政と政府とを免し、急進黨中の穩和分子を招致して內閣を組織した。此事は又非常に物議を釀もす種となつた。且つ此內閣は急進派中の過激分子よりは不滿足の意を以て迎へられ、又多少保守的の考を有つて居る所謂自由派からも歡ばれない。斯くて政界は益々紛亂し王と王家とを攻撃するもの頗る多く、現王朝顚覆黨と云ふやうなものさへ發生した。新聞などにも、現王朝を倒してカラジヨルヂエヴイッチ家のピーターを迎ふべしなどいふ說が散見するやうになつた。此時塞國內に風說あり、曰く露國は急進黨中の過激分子の首領と相談して、露國皇族の一人を迎えて塞國の王位に即けしめんとたくみつゝありと。之は風說に過ぎないので大した根據もなかつたやうであるが、何分年少の國王は心配で堪らず、旁々當時巴里に居つた所の自分の父ミランを本國に迎へて相談相手にすることにした。九四年一月早々ミランはベルグラードに歸つて來た。

ミランが實權を握るに及び、塞國政府の方針はまた急激に一變した。當時彼は非常に保守的の考を持つて居つたので、歸來匆々現內閣を悉く罷め、全然政黨に關係なき者を集めて、所謂超然內閣を作つた。六月には八八年の自由主義の憲法を停止し、六九年の保守的憲法を回復した而して此新憲法の結果、保守派新に多數を議會に占め、之より暫らくは保守派の天下となつた。當時人民の間から、保守的政治に對して大した反抗もなかつたのは、一つには近年の政爭に疲れて、反動的傾向がいくらか出つて來た爲めである。隨分言論の自由なども蹂躙され、例へば新聞を發行するには二千圓の保障金が要るとか、記者は悉く大學を卒業したものでなければならぬとか、いろ／＼重い制限があつたけれども、民間には大した不平はなかつたやうである。而して此間に稍々農業商業などの開發も行はれた。先に一寸引合ひに出したジョルヂェヴイッチ博士が宰相となつて(九七年十月より)財政・經濟方面の發達を計つたのも此際である。九七年十二月には王父ミラン陸軍總司令官に任せられた。之

より國民の注意は大に軍備の整頓に向けられた。斯くて表面は一時穩やかなやらであつたが、然し急進派の陰謀、殊に現王朝覆顛の陰謀は、秘密の間に益〻周密に企てられて居つた。而して此等の急進派は露國、黑山國と連絡があつたから、王及び政府側は自ら頻りに墺洪國に親しまんとして骨を折つて居つた。墺塞兩國の反目が、深い歷史的の根柢のないと云ふ事は、此事實に於ても證明が出來る。

扨、急進派の陰謀計畫は、九九年七月六日に至つて、王父ミランの暗殺計畫の發覺によりて世間に暴露せられ、有力なる數名の者が捕縛などありて、大いに人心を動搖せしめた。然るに之よりも尙塞國上下の人心を激動したのは、一九〇〇年七月の出來事である。此月アレキサンダー王は突然母ナターリの侍女であつたドラガ・マシンと云ふ者と結婚すると云ふ事を發表した。ドラガ・マシンは身分の賤しき侍女であつたと云ふ事許りでなく、王に比しては遙に年上の、且つ素性卑しき、いはゞ渡り者であつた。もとは巴里邊の醜業婦であつたと云ふ評判さへ立つたのである。そこで此結婚に對しては、上下內外共に非常に批難した。父ミランも亦最も激しく之に反對した一人である。然るにアレキサンダーは此等の反對に斷乎として反抗し、飽くまで自分の希望を達せんとした。其爲めに彼は昨日まで其味方として周圍に集めて居つた者共を振りすてゝ、今迄敵にして居つた露國の庇護の下に投じた。且最も恐るべき反對者たる父をば外國に放逐し、再び塞國に歸ることを禁ずる旨を申渡した。之より露國の勢力に兎も角も一時は獨り政府反對黨許りでなく、アレキサンダー王の上にも及んだのである。一九〇一年四月新憲法が發布された。之は現行憲法である。本問題に直接の關係はないけれども序に云つて置く。斯くてアレキサンダー王は殆んど國民全體の不平の的となつた是れ豈にカラジョルヂェヴィッチ家の現王朝顚覆陰謀に乘ずべきの好機會を與ふるものではないか。果然一九〇三年六月十一日の大革命は現れた。此日深更兼々敵方と通じて居つた近衞兵の一隊は、突然王宮に闖入して、アレキサンダー王と王妃ドラガとを殺し、其他國王方の有力なるものを殺し或は斥けて、かねがね彼等の擁立せんとする所たりしピーターを黑山國より迎へて王位に立てた。之は即ち現在の塞國々王である。序に云つて置くが、此革命的陰謀計劃に最も深い關係のあるのは、現王は勿論だが。現宰相のパシッチも亦少からぬ功勞があるとの事である。現王は之等の人々の助を藉り、多年陰謀の實行に腐心して居つたので、夫の六八年のミカエルの暗殺にも一種の關係を有つて居つたのである。而してピーターの成功には、露國の助力は少くなかつた。今日塞國と露國と相接近して居る一つの原因はこゝにあると云つてよい。

以上予は長々と塞國の歷史を述べだが、要するに我々は之によつて、塞國と云ふものは、クアロシア方面とは全く關係なく獨立の變遷發達をなし。而して單に元、人種關係を同じうしたとは云ひながら、今日では最早やクロアシアとは同一に取扱ふことが出來ないと云ふ

點を明白にせんと欲するのである。而して此點は本問題を解釋する上に最も大切な點である。

下

次にクロアシアの事を述ぶる。塞比亞民族（廣義の）中、西方に居つたものは、早くから團結したと云ふ事は前にも之を述べた。從つて此の方は東の方よりも早く國家組織をなしたのである。此等の地方は、シャーレマン大帝の時に一時其支配に歸し、其時に天主教に歸依したのであるが、紀元八七七年ビザンチン帝國の支配に歸し、間もなく獨立運動が始まつた。獨立運動の始まつた頃は、まだ十一のジユーパンがあつて各々割據して居つたが、此中のトミスラフと云ふものが、他のジユウパンを從へ一統一を全うした。之が抑々クロアシア國の成立の初めである。之は紀元九一〇年（九二四年と云ふ說もある）で、塞國の成立よりは二百年も早い。其後クロアシア國は段々に東西南の三方に伸び、クレッスミール大王（一〇〇九―一三五年）の時には、匈牙利人を破り、且つ南方ダルマシア方面にまで擴がつた。次代のクレッスミール・ピーターの代になると、一〇五九年ダルマシア王を兼ね、更にボスニアを附庸國とした歷史上所謂トリウニタス即ち三一王國と云ふのは此時から始まつたのである。三一王國とは、クロアシア王國とスラヴオニア王國とダルマシア王國と、此獨立の三王國に加ふるにボスニアと云ふ一附庸國を以てし、之が一つの王位の下に纏つて居ると云ふ意味である。此考は今日でも多數のクロアシア人を支配し後に說く三國鼎立運動の精神的根柢をなして居る。現今はクロアシアとスラヴオニアとは一所になつて居るけれどもダルマシア丈けは分れて墺國内の一獨立州になつて居る。クロアシア人は今日でも之れ歷史上の沿革に悖れる不當の現象であると主張し、ダルマシアのクロアシア王位に復歸すべきことを要求して居る。此事亦後に述ぶる三國鼎立運動に關係がある。も一つこゝに注意すべき事は、ボスニアがクロアシアと歷史的に深い關係があると云ふ點である。ボスニアは嘗て塞國と合體した事もあることは已に述べた所によつて明かであるが、今述ぶる通りクロアシアとは一層深い關係に在る。從つてボスニアは、クロアシアと塞國との兩方から奪ひ合ひになつて居る關係になつて居る。此等の地方全體が、東西兩文明の接觸點であつたと同じやうにボスニアはまた兩國勢力の接觸點である。此關係は今日に於ても猶ほ續いて居るのである。

扨、トミスラフ王朝は十二人の王を代へて一〇九二年に絶えた。そこで何人を王位に迎ふべきかと云ふ問題で爭が起つた。其爭の一方の相手たる最後の王ステフアン・クレッスミール二世の寡妃ヘレナと其一派は反對派を壓迫する爲めに、洪國王のラヂスラウスの援けを求めた。ラヂスラウスはヘレナの兄である。斯くて洪國はクロアシアの內政に干涉することになつた。否、內政に干涉した許りではない。其爭の結果として遂に同年クロアシア人民はラヂスラウスを選んで自國の王位に就けることゝした。之がクロアシアの王位が洪國の王位に合體した抑々の初めで

而して今日洪國からクロアシアが獨立せんとする運動の起因である。最初はクロアシア丈けがラヂスラウスを戴いたのであるが、後にはスラヴオニアも亦同王を戴くこととなり、更にダルマシアの王位も亦彼に歸して、彼は遂に一一〇二年に此等三國の王として戴冠式を行ふ事になつた。斯くて此等の國は、洪國王の君臨する所となり、從つて自ら洪國の法律の支配を受くる所となつたが、但た其法律上の關係は之を合併と見るべきや、人的連合乃至物的連合と見るべきやは當時甚だ明瞭でなかつた。今日に於て之を解する者、一方のクロアシア側は單純な人的連合であると說き、洪國側は固より此說を容れない。尤も洪國の學者の中でも、サイウスの如きは人的連合であつたと說くけれども、大多數の人は、洪國の利益に此關係を解釋せんとして居るやうである。尤も當時は法律思想なども固より精密でないから、當時の文書によつて此關係を定めると云ふ事は困難である。今クロアシア側の主張する所によるに、「ラヂスラウス一世が、クロアシア人より迎へられて此土地に君臨するについては、人民との間に次の如き約束をしたと云ふことである。

(一)三一王國は完全なる獨立國にして、政治・行政・財政・軍事皆他國の制を仰がざる事。

(二)王は自己の代表者として總督(バーヌス)を派遣して統治の任に當らしむる事(因に云ふ、初めはバーヌスに任ぜらるゝものは皇族たる事を常とした)。

尙此と同じ様な約束はスラヴォニアとの間にも亦結ばれた。只ボスニア人は之を承認する事を拒んで獨立した。之よりボスニアはクロアシアを離れたのである。扨、此約束は、洪國とクロアシアとの關係の性質を定むべき唯一の根據であるとせられて居るが、然らば之によつて兩國の關係は如何なるものと解すべきやと云ふ事については、クロアシアと洪國との間には昔から常に爭があつた。洪國側は曰く、「クロアシアの王位は洪國の王位に併合されて了つたものである。洪國の王は當然にクロアシアの王である。クロアシアは洪國を差置いて勝手に王を決める事が出來ない。」と之に對してクロアシア側は曰く、「洪國とクロアシアとは單純なる人的結合である。洪國の王位が存續して居る間は、クロアシアは其制を受ける。けれども若し假りに洪國の王統が絕ゆると云ふやうな場合があつたら、クロアシアは勝手に自分の王を極める事が出來る。」と此爭は餘程昔から兩國に爭はれたので、現に一三〇一年には實際問題としてあらはれた。此年洪國のラヂスラウスの王統が絕えた。其時洪國では別に何人かを王に選んで、其選ばれた王が當然にクロアシア王を兼ぬべきものと考へて居つた。處がクロアシアでは、已に人的連合の基礎たるラヂスラウス王統が絕えたる以上、最早や我國は獨立して王を選ぶことが出來ると主張して、洪國に關係なくアンジュウ侯カールを王に選んだ。そこで洪國とクロアシアとの間に、之を認めるとか認めぬとかの困難な問題を生じたが、偶然にも後六年を經て即ち一三〇七年に、洪國も亦カール侯を王に選んだので、此問題は有耶無耶の間に落着した。けれども之よりクロアシアは、カール侯が偶然に兩方の王に選ばれて居るので、彼は

洪國王たるが故にクロアシア王たるのではないと尙一層强く主張するに至つた。之と同じ問題は一五二六年にも起つた。此年八月ルードウヰッヒ二世モハッチの戰に陣歿して王統が絕えた。此時もクロアシアは洪國を差置いて、ハップスブルグ家のフエルチナンドを選んで王に戴いた。そこで復た洪國との間に困難なる問題を生じたが、此時も亦クロアシアに後れて洪國は同じフエルデナンドを王に選んだので、問題は兎も角も解決した。併し此解決は事實上の解決で、理論上兩國の關係は依然として疑問となつて居る。尙序に注意して置くのは、墺國のハップスブルグ家か洪國にもクロアシアにも君臨すると云ふ現時の狀態の始まつたのは此時からである。

斯くしてクロアシアと洪國との關係は今日まで繼續して居る。クロアシアは絕えず洪國の羈絆を脫せんと企てたけれども、未だ成功しない。クロアシアは徹頭徹尾洪國王位との關係は偶然の關係であると主張する。洪國の方では洪國の王位が當然の權利としてクロアシアの王位を兼ぬるのだと主張する。併し君臨して居るものは、孰れもハップルスブルグ家であるが、ハップスブルグ家其のものに兩者の關係をどう云ふ風に見て居るかと云ふと、之も前後一貫した主義は立てゝ居ないやうだ。墺國の皇位繼承の原則を定めたプラグーチッシエ・サンクチオン＝カール六世が一七二一年娘マリア・テレーザを相續せしめんが爲めに作れるもの＝は、クロアシアと洪國とを離して、クロアシアをば寧ろハップスブルグ家の支配する獨立の王國で、墺國內の諸々の獨立州と同格のものと取扱つて居る。現に此プラグマチッシエ・サンクチオンの承認を求めた時も、洪國人よりも先きにクロアシアの方に提出して居る。然るに後一七七九年には、マリア・テレーザはクロアシアを以て洪國の附屬となし、否之を洪國の一州となす旨の法律を出した事がある。洪國は非常な滿足であつたけれども、クロアシアは非常な不平で一時動亂した事がある。十九世紀になつて普墺戰爭の前頃までは、墺國はクロアシアの肩を持つて之に獨立國の取扱を與へたと云ふ事は、尙後に述ぶるであらう。要するにハップスブルグ家其者に在ては、主義一貫しなかつた。只一八六七年の墺洪妥協餘約によつて、初めてクロアシアの洪國に附屬すると云ふ關係を明かに認めたのである。

右に述べたる沿革によつて、所謂セルヴィア人と所謂クロアシア人と云ふものは、廣義のセルブ族蟠據の地方の東西に分れて各々獨立の發達をなし、千餘年の間殆んど沒交涉で進んで來たと云ふ事は明かである。只其中間にあるボスニアは、或は東に附き、或は西に附いたと云ふ關係があるが、セ、ク兩國其物に至つては未だ曾て一回も相連繫したと云ふ歷史はない。故に其起源に於て同種族ではあるといひながら、決して之を同一に觀ることは出來ない。少くとも政治上の關係

に於ては、全く違つた人種と見なければならぬのである。尤も言語は同一である。從つて最近に至ては、後にも述ぶるが如く、兩者の連合を計るものもあるけれども、併し肝心の宗教が違ふので、兩者の連合は實際殆んど不可能である。人も知る如く、此兩者の信奉する宗教は、同じ耶蘇教の中でも最も排他的のものである。西方の天主教は其最も主もなる信條の一つとして「我が教會のみが人類を救ふ眞の教會」と云ふ一條を立て、他の教會は總て之を虛僞のものと視て居る。決して他宗門協同一致する事はない。東方の正教も亦他宗を嫌ふ事は天主教に讓らない。のみならず西方の天主教が、昔極盛の時代に、其勢力を傾倒して東方教民の改宗を多少腕力的に迫つた事もあるので、正教々民は歷史的に天主教に對して好感情を持つてゐない。現に今日塞國に於ては、憲法上宗教の自由を認めて居るけれども、實際に於ては正教以外の宗派は、手も足も出ないやうにして居ると云ふ事は、人の知る所である。

但し玆に序に斷つて置くのは、去年(一九一四年)六月二十四日、塞國政府は羅馬法皇廳と條約(コンコルダート)を訂結して新に天主教會の權利を認めたけれども之は專ら政治上の理由に基くので、何も兩宗親和の結果ではないと云ふ事である。塞國には元來一萬五六千人の天主教徒があつた。之が十分に保護せられないので、先々代の法皇レオ十三世の如きは、頻りに條約を塞國と訂結せんと欲し、現に一八九五年、双方の全權アリアルヂ僧正とスミッチとは各命を受けて維納府に會見談判した事がある。此時は、混合婚より生れたる兒童の宗教上の所屬の問題に關する意見が一致せずして、談判は纏らなかつた。其後この事は久しく立消になつて居つたが今度巴爾幹戰爭の結果として、塞國は新に土國より土地の割讓を得、其中に天主教を奉する多數のアルバニア人あり、而かも此アルバニア人は宗教上墺國僧正の管轄に屬して居るので、塞國は去年四月當時巴里駐剳の公使であつたヴェスニッチを羅馬に派遣し、交涉を重ね、前記の如く六月二十四日條約の調印を見たのである。其結果、(一)法皇は宗教上の事項に關しては、塞

國内の僧官を直接に且つ獨占的に支配し監督するの權を得、(二)首府ベルグラードに大僧正を置き、僧院を設くるを得ることゝし、(三)天主教僧侶は、塞國内に於ては、正教の僧侶と全く同一の取扱を受くることになつた。斯くの如く今日となりては、天主教は全く正教と平等に取扱はるゝことゝなつたが、是は新附領地に於ける天主教會に對し、墺國が從來有つて居た支配權を排斥せんとする目的に出でた、云はゞ政治上の理由から起つたので、之を以て正教徒一般の天主教嫌忌の念は一掃されたと觀ることは出來ぬのである。之を要するに、天主教徒と正教徒との結合と云ふものは、近き將來に於ては容易に之を期することの出來るものではない。故に廣義のセルブ族を全體統一すると云ふ考は、一部の人の理想として、精々極めて微弱なる運動としては存在して居るけれども、政治上から觀て多少注目の値ある運動としては決して存在してゐないのである。政治上注目に値する運動としては、クロアシア人にはクロアシア丈けの運動があり、塞國人には塞國人丈けの運動がある。而してクロアシア人の間の運動は西洋に於て一般にトリアリズム即ち予の所謂三國鼎立運動としてあらはれ、塞國人の間の運動は所謂大塞比亞主義としてあらはれて居る。全體に通ずる運動と云ふものはない。クロアシア人も塞國人も、人種上は均しく廣義のセルブ族に屬するから、西洋の學者の中には、大塞比亞主義と云ふものはあるけれども、汎塞比亞主義と云ふものはないと云ふ事を特に說くものが多い。此等の區別は之を明白に了解して置くことが必要である。殊に此東西兩方に發達した二種の運動が、單に別々の根據を有すると云ふ事に止らず、此二つの運動の相交錯する所に、今度の戰爭の導火線となつた皇儲殿下の暗殺事件が深い關係を持つて居ると云ふ事を思ふ時に、此兩者の關係は最も明白に研究するの必要があるのである。

三國鼎立運動

大塞比亞主義の事は前號に已に一通り之を述べた。

玆にはクロアシア人を中心として起つた三國鼎立運動の事を說明する。

クロアシア人の間に起つた運動の最初の形態は、云ふ迄もなく獨立運動であつた。即ち洪國の羈絆を脫してクロアシアの獨立を謀るといふのである。然るに彼等の間には洪國を憎むの餘り、之を捨てゝ他に便ると云ふ感情が起り、而して丁度洪國と墺國とは當時相對抗して爭つて居つたと云ふ關係からして、獨立運動は更に排洪親墺と云ふ考をも加味することゝなつた。更に又之と時を同じうして、クロアシアを始め、今現に墺國の領內に屬して居る南部諸邦の間には、之等諸邦を統一して南スラヴ人の大同團結を作らうと云ふ考が起つて居つた。之がクロアシアの獨立運動と合體して、其獨立を切つ掛けに南スラヴ連合の獨立の國家を建てやう、否な南スラヴの大獨立國を建設するの準備としてもクロアシアの獨立は急要であるといふ考が起つて來た。扨て若し此希望が實現したとすれば、兎も角も之は一つの大國である。面積から云へば約十二萬平方キロメートル、人口から云へば一千萬乃至一千二百萬に達して居る。然らば此國は最早や墺洪國の下風について居るべきではなくして、此等と對抗し得べき丈けの實力あるものと云つてよい。是に於て乎彼等は南スラヴ統一の一獨立國を作ることによつて、玆に墺國と洪國と對等の獨立の一新國は現出し、爲めに從來の二重國關係は自ら變じて墺・洪並び南スラヴの三重關係にならねばなるまいと云ふ事を考ふるに至つた。斯くてクロアシアの獨立と云ふ事に芽を生やした運動は、遂に墺洪國の國家組織を變更して、三國鼎立の關係にしようと云ふ運動にまで發展した。之れ即ち予の所謂三國鼎立運動と名づくるものである。佛國の政論家ゴンナールは、曾て「政治及び議會評論」(一九一二年十一月號)に於て、三國鼎立運動を論じ、其中に次の如き定義を下した。トリアリズムとは、現今墺帝國と洪王國とより成るハップスブルク王國の內部に於て此等二國の南スラヴ諸州を連結し、上記の二國と同格なる第三國を創設せんとする政治上の主義である…

此主義は、斯くて先づ南スラヴに統一と獨立とを與へ其民族發展の希望に滿足を與へんとするものである」と。是れ頗る簡にして要を得たる解釋であると思ふ。

今之より此運動の起りを少しく歴史的に研究して見よう。此事を明かにするには、第一にクロアシアの獨立運動の事を說かねばならぬ。クロアシアが、其王位の觀念について、昔から洪國と見解を異にして居つたと云ふ事は、已に述べた所である。併しクロアシアは當初唯王位の獨立によつてクロアシアの獨立國たる體面を得れば滿足するのであつて、實際上洪國の支配をも斥けんとしたのではない。詰り空名を爭つて居つたのである。故に、十九世紀以前に於ては口舌の爭議はあつたが、實は未だ現實の獨立運動と云ふものはなかつた。此本當の意味の獨立運動の起つたのは、矢張り西歐地方に民族主義が段々に起つたと云ふ事の影響である。併し尚よく細かく研究して見ると、無論クロアシア人の間にも、當時民族的自覺は段々起つて居つたが、併しクロアシア人の民族獨立の精神を直接に刺戟したものは、寧ろ洪國人其ものである。今其故を繹ぬるに、第十九世紀の初め、東歐地方に於て先づ民族的精神勃興の風潮に襲はれたのは洪國人である。彼等は其結果として墺國に楯を衝き、十九世紀前半に於ては絕えず之と抗爭を續け、遂に四八年のコッスウトを首領とする大戰となつた事は、歴史上有名な事實である。斯く、洪國人は民族的精神勃興の氣運に動かされて自分が盛に墺國に反抗して居りながら、一方にはクロアシア人の間にも段々民族的精神の勃興しつゝあるを見て、自分が墺國に加ふると同じ手段を彼等も亦執つて自分に向ふのであるまいかと云ふ事を心配して漸く不安の念を抱くに至つた。當時洪國ではクロアシアを自分のプロヴインス(州)の如くに考へて居つた。そこでクロアシアに對して洪國は、今日の言葉で云へば同化政策とでも云ふべき手段を施した。之が偶ゝ却てクロアシア人の民族的精神を刺戟して却つて「其獨立運動發生の時期を早めた氣味があるのである。尤も洪國がクロアシアに同化政策を以て臨んだについては、當時南スラヴ連合運動が勃興して、「其餘波がクロアシアにも及んで居つたと云ふ事實に促されて、其風潮を壓迫するの必要があつたと云ふ點もある。尙此事は南スラヴ聯合運動の事を述ぶる時に明かにする。斯くて洪國とクロアシアとは段々に反撥するやうになつて居つたが、此反撥は一八四〇年に至つて爆發した。此年洪國は、從來の約束を破つて、洪國語をクロアシアに於ける公用語となさんとした。クロアシア人は大いに之を憤りドラスコヴイッチ伯爵を戴いて遂に叛旗を飜したのである。之れ獨立運動の初めである。此運動は一旦は收まりが附いた。然るに一八四七年に至つて、洪國政府は再び洪國語をクロアシアに强制するの法律案を提出した。洪國の議會は異議なく之を通過したけれども、クロアシアの州會は非常に之に激昂して、一歩進めて洪國との關係に關する根本問題をも論議するものあるに至り、爲めに洪國政府と大いに軋轢をすることになつた。かくて翌一八四八年又再び騷動が持ち上つた。此時恰かも洪國は墺國に對し

て獨立の戰爭を起した。クロアシアに於ては排洪熱非常に高まり、此戰爭では無論墺國に味方をした。此戰爭は初め洪國に有利に運んだが、後に露國が、隣邦に於ける自由主義の勝利は自國は勿論歐洲諸國一般の平和を紊すものなりとの理由で、來りて墺國を援くるに及び、洪國は遂に墺國に屈することになつた。そこでクロアシアも亦墺國のお蔭で洪國に對しては少からず鼻息が荒くなり洪國との軋轢も亦自ら益ゝ甚しくなつたのである。此際に若しも、墺國の側のクロアシアに對する政策が其宜しきを得たりしならば、或はクロアシアと云ふものは永久に洪國から離ることになつたかも知れない。然るに墺國の政策は餘りに中央集權的であつて、クロアシアに對しても多少高壓手段を加へた氣味があるので、クロアシアは墺國に對しては從來程好い感情を持つことは出來ないと云ふ事になつた。

斯かる程に一八六六年の普墺戰爭が始まつた。此戰爭は云ふまでもなく洪國に與ふるに再び頭を擡ぐるの機會を以てした。洪國は墺國の困憊に乘じ、更に再び墺國に對する獨立の地歩を進むると共に、クロアシアに對しても遠慮なくドン〳〵高壓手段を執ることを憚らなかつた。出來る丈け獨立黨を抑へつけて、出來る丈け其權力を減削し、官吏などにはどん〳〵洪國人若くは洪國黨を任用した。當時總督となつたものは有名なラウフ男であつた。彼は洪國政府の命を受けて、機會を利用して何とかして洪國とクロアシアとの關係を洪國の有利に解決しようとした。其の前に洪國と墺國とは、墺國の困憊に乘じて一八六七年の所謂妥協條約（アウスグライヒ）で先づ以て其相互間の關係を決めた。此時にも實はクロアシアが問題になつたのであつた。即ち此時クロアシアは、自分は洪國にも屬しない、又墺國にも屬しない獨立國であるが、今度の會議で若し自分の所屬が問題となる事あらば、自分も其談判に參加したいと申し出したが、洪國は斷じて之を許さず、墺國も此洪國の說を容れたのであつた。そこで事實上クロアシアは、獨立國ではない、洪國に附屬するものであると云ふ事に決まつて了つたのである。然らば洪國とクロアシアとの關係は今や之をどう決すべきかと云ふ問題になると、それには恰度墺洪兩國　妥　條約がよい手本を示して居る。墺洪兩國の妥協條約と同じやうな關係に、洪國とクロアシアとの關係をも決定せんとするのが、洪國中央政府の希望、從つてまた總督ラウフの方針であつた。けれどもクロアシアは全然獨立を希望してやまない、現に六十六年十二月には、クロアシア州會は斷然ブダペストに代議員を送ることを拒み、云はゞ國交斷絕の態度を示した去ればラウフの計劃は容易に達せらるべくも見えなかつた。そこでラウフは、先づ洪國黨を多數議員に作るの策を決し、六十七年五月二十五日州會に解散を命じ、同時に從來の選擧法を停止し、六七年の特別に假選擧法を發布し、脅迫、賄收等盛んな干涉の下に總選擧を行つた。そこで選出されたもの丶大多數は總督の希望通り洪國黨であつた。新議員は翌六八年一月九日、首府アグラムに開かれた。總督は少數の國民黨（獨立主義）の反對を押し潰して、二十九日に至り、遂にクロアシア州會をして洪國との所謂「從來の關係」（洪國側の主張する）の恢復を承認し兼ねて

又墺洪王國の二重的性質をも承認する旨を決議せしむるに成功した。二重的性質を承認すると云ふのは、取りも直さず、クロアシアは洪國の附庸國として墺洪二國以外に獨立の存在を有するものでないと云ふ事を承認した譯になる。斯くて此原則に基いて洪國とクロアシアとの關係を改めて決定すると云ふ談判に入つた。其結果として遂に七月廿五日、ブダペストに於て一つの妥協條約が成立した。所謂一八六八年のナゴーダ（條約）と云ふのが之れである。次いで九月下旬に至り双方の批准も了り、從來久しく絕交の姿であつた兩國の關係は、十一月二十四日二十年振りでクロアシアから代議員をブダペストの議會に送ることによりて恢復された。

扨て此次の條約の大體の主義は六七年の墺洪國間のアウスグライヒと略ぼ同一である。此條約に於て、クロアシアは「獨立の領土を有する政治團體」と認められ、獨立の議會と獨立の政府とを有することを許容された。併しながら他方にはクロアシアは依然洪國の王位に附屬するものとせられたから、全體としては洪國の中央政府の監督を受くることになるのである。尤もクロアシアは、內務行政及び敎育宗敎並びに司法の事は、全然自治を許され、其爲めに「內務及び大藏省」、「敎育及び宗敎省」、「司法省」の三省を設くることになつて居る。軍事と財政と貨幣、商工業、銀行、交通、海事商業并に鑛業裁判所、國籍の事等は共通事項として洪國の中央政府の支配を受ける。斯く事務を分けて、先づ大體內政の事は自治となつて居るが、然し其大臣は、中央政府の奏薦によつて國王が之を任命することゝなつて居り、且つ此大臣は、勅命によつて任ぜられ洪國の總理大臣の訓令の下に行動する總督の監督を受くるのであるから、假令總督は州會に對して責任を有すると云ふ制を設けたとはいへ、實際の政治の運用は、實は洪國政府に於て握つて居ると云つても差支ない。尤もクロアシアは洪國の中央政府に全然何等の勢力をも及ぼす事が出來ないかと云ふに、然うではない。何となれば、クロアシアの方から洪國に向つて、上院議員としては七人、下院議員としては五十六人を送ることが出來るからである。併し之だけでは無論大勢を動かすには足らない。又洪國の中央政府にはクロアシア、スラヴオニアの事を監督する爲めにクロアシア＝スラヴオニア事務大臣と云ふものを置くことになつて居る。けれども之は多くの場合に於て總理大臣が兼任したり、否らざるも伴食であるから、之によつて何等クロアシアの利益が計らるゝと云ふ譯にも行かぬ。それで此妥協條約と云ふものは、表面上は相當にクロアシアの獨立の體面を維持しては居るけれども、運用の手心によつては隨分中央政府では壓迫を加ふることも出來るやうになつて居る。現に財政問題に關しては、タロアシアの方では常に不平を云て居る。妥協條約によるとクロアシアに於ける總歲入の中で、五割六分は中央政府に收め、四割四分だけを純然たる內政の用に供する（但し洪國政府は三百五十萬グルデンまでは保障する）と云ふ事になつて居るが、政府の從來の遣り口では※此內政の用に供すべき費目をば、實際はクロアシアの爲めにも洪國の爲めにもなるやうな方面に多く支出して居るといつて、タロアシアでは不

平を云ふのである。そこで妥協條約は兎も角も成立はしたが、併し之は前に至つた通り、脅迫買收の結果として出來たものであり、且つ其運用宜しきを得ぬ爲めに、クロアシアでは決して之に滿足はして居ない。さればクロアシアの州會に於ても、後には段々に洪國反對黨が盛んになつて來た。州會は百十二人の民選議員と、民選議員の半數を超えざる貴族及び僧侶其他職務上の議員と二種類より成つて居るが、此等の民選議員の多數は、後には殆んど全部獨立黨になつて了つた。之より洪國とクロアシアとは盛んに反目することになつた。即ち一方洪國ではクロアシアの如き能く武力を以て之を壓迫し得べしとなし、妥協條約の約束を無視して盛んに高壓手段を執り又他方クロアシア人は益之に激して極端ないろ〳〵の手段に訴へて反抗を試みると云ふことになつたのである。而して洪國の高壓手段の先鋒となつたものは先にも述べた所の總督ラウフ男爵である。

以上の如き次第であつたからしてクロアシアの州會では洪國黨は段々に減少した。大多數の議員は、主としてピシヨップ・ストロッスマイエル并びに先きに一八四〇年の獨立運動の首動者となつたドラスコヴイッチの率ゐる國民黨と、スタルツエヴイッチの率ゐる正義黨との占むる所となつた。前者は六八年の妥協條約に不滿足ではないが、只其確實正直なる實行を迫るものであつた。後者は更に數歩を進め、全然洪國と分離することが正義の要求する所であると主張するものである。共に洪國政府の現在の政策に反對するの點は同一である。然るに洪國政府では、比較的穩和なる國民黨に聽くことをすら怠り、無暗にクロアシア人の民族的要求を抑へつけたから、穩和なる獨立主義者も亦遂には段々に洪國に背くやうになつた。斯くて兩者の反目は益々強くなるばかりである。一八八三年八月にアグラムに於て大騷動のあつた事は今日尙歷史に殘つて居る。八五年には正義黨の領袖スタルツエヴイッチが、當時の總督クエン・ヘダルワリー伯に暴行を加へた故を以て投獄せられ、一時大いに人心を騷がした。ヘダルワリーは元と一方に於て出來る丈け州會と妥協し、洪國の面目を保ちつゝクロアシアの開發を計らうと欲したが、他方に於て或は選擧に干渉したり、或は言論に抑壓を加へたりなどしたが爲めに、國民の不平を免ることが出來なかつたのである。一九〇三年、一九〇四年の頃、また各地に於て洪國排斥の暴動が起つて、捕縛せらるゝもの少くなかつた。一九〇四年六月の末に、ヘダルワリーは洪國の總理大臣に轉じ、總督の任をばペジヤセヴイッチに讓つた。彼の時代に於ては、言論の束縛、集會結社の禁、幾らか緩せられたので、人民も多少穩やかになつたが、次いでラウフが再び總督の任に就くに及んで、復た官民の衝突が激しくなつた。而して此軋轢は一九〇七年から八年にかけて最も激しかつた。一九一〇年二月、ラウフは退いて其任をトマシッチに讓つた。彼は或は言論の自由を進め、或は選擧法の改正を行ひ（其結果有權者の數が四萬二千から二十七萬六千に上つた）て民望を釣り、更に又セルビア・クロアシア連合黨（此事後に說く）を味方にして獨立派に對抗し、之によつて漸次議會内に親洪分子の多數を作らんとしたが、

之も結局成功しなかつた。八月に至り遂に州會を解散せねばならぬ事になつたが、選擧の結果は政府黨は僅かに十七人で、他は悉く反對黨の占むる所となり、洪國排斥の熱は益々强烈を加ふる事になつた。爲めに彼は一一年の三月四日一ト先づ議會に停會を命じ、其間に大いに盡力して窮通の途を講じたけれども、先に彼の味方としたセルビア・クロアシア連合黨も亦今は總督に背いたので、遂に十一月七日再び議會に解散を命じた。十二月十九日總選擧を行つたが、其の結果は政府黨二十一、聯合黨二十三、正義黨二十七、其他十七と云ふ形勢であつた。此時政府は憲兵巡査を使用して非常な干涉を行ひ、到る所人民との衝突があつたのであるが、其結果は矢張り政府黨の大敗北に歸したのである。其爲めに翌一二年一月十九日には總督は辭職をして其任をチュバイに讓つた。彼は先きに副總督として非常な壓迫を行つた人であるから、初めから人望がなかつた。彼は就任早々、二月七日を期して召集せらるゝ筈であつた州會に、未だ一回も開會せざるに、一月二十七日を以て解散を命じた。尤も此時議員の多數間には、開會劈頭第一に前議長のパルチッチをして洪國との分離獨立案を院に提出させると云ふ計畫があると云ふ風說があつたので、そこで開會に先つて解散するの必要があつたのだと云ふ。併し未だ一回も開會せざる議會に解散を命じたのだから、政界の紛糾が更に劇る險惡になつたことは怪むに足らぬ。新選擧は三月卅一日に行はるゝ筈であつたが、總督は早くから戒嚴令を布いて、集會結社法を停止し反對派の言論を極端に束縛し、有力者中で捕縛せられたものも少くなかつた。一方の旗頭ステファン・ラヴィッチの如きは、未だ解散の命令を知らない中に捕縛せられたといはれて居る。斯かる手段を取つた事けまた非常に政府反抗熱を高め、新總督は到る處非難攻擊を浴せられた。ブタペストに於て、クロアシア出身の大學生が、百五十人ばかり示威運動を行つて警察官と衝突し、多數の捕縛者を見たのは此頃の事であつた。又アグラムの大學に於ても、學生が總督の勸めによつて政府黨の議員たらんとした敎授に暴行を加へ、之を機として學生間に大騷擾が起り、爲めに二月一日大學の閉鎖命令が下つたと云ふ騷ぎもあつた。而して此時の選擧の結果も、依然として分離獨立主義者が多く、政府黨は極めて少數であつた。是に於て總督は、斷然憲法の中止を命じ、直ちに議會を解散して嚴しく言論集會の自由を制限した。總督チュバイが法律學生の爲めに拳銃の狙擊を受けたのは此頃の事である（六月八日）。幸にして彼は命中を免れたけれども、隨員一名は傷き、巡査一名は不幸にして其職に殉した。チュバイは間もなく其職を退き、スケルレッチ男が代つた。此人も亦盛んに高壓手段を執り、爲めに一二年九月卅日及び一三年八月十八日、兩度學生並びに勞働者の狙擊の的となつた。斯くの如き狀態でクロアシアと洪國との關係は今日に續いて居る。

然らばクロアシアの方では一體何を要求して居るかと云ふに、無論之には極端なものと穩和なものとあつて極端なものは全然獨立しようと云ふ事を主張して居

るが、併し兩方に通じての最小限度の要求は、要するに妥協條約の實行と云ふ事に歸する。クロアシア側では兩國の關係は對等だと云ふ。從つてブタペストの中央政府並びに議會は、共同の政府、共同の議會であると主張する。然るに洪國側では洪國語を原文として條約の文字を解釋すれば、必ずしも共同と云ふ意味ではないと主張するが、併しクロアシア語を原文とすれば、立派に共同即ち英語のコムモンに當る字を使つてゐると主張するのである。斯くてクロアシア側では、ブタペストの議會は則ち「共同の議會」であるからして、若し「兩國共同の事務」が問題となつた場合には、議會の屋根の上に洪國の國旗と共にクロアシアの國旗をも揭用すべきだあるのに、未だ嘗て一回も之を行つた事がないと不平を云ふ。又ブタペストの政府は「共同の政府」であるのに、其共同の事務を扱ふ省の大臣局長の中に未だ嘗て一人もクロアシア人を採用した事はない。又「共同政府」の中にクロアシア＝スラヴオニア事務大臣と云ふものを設いてあるが、若し之がヴェケルレやクエン・ヘダルヴァリーのやうに首相之を兼任すると云ふ例を開くならば、此地位はクロアシア人の爲めには奪はれたるものと同一である。又洪國政府は、クロアシアに對していろ／＼の義務を課して居り乍ら、權利は總て之を奪はんとして居る。即ちクロアシアの內務行政上の費用として殘されたる金も、成る丈け學校や裁判所の事には使はせないて、道路とか憲兵とか鐵道とか、詰り洪國の爲めにもなるやうな、いはゞ共同の性質を有する目的にのみ使はせる。何か特別の要求をすると、中央政府は何時も內務行政の費目の中から支辨せよといつて應じない。且つクロアシア丈けの事等についても、出來る丈け本部をブタペストに置かせるから、それ丈け餘計に洪國の方に金を落す譯になる。且つ又政府では、クロアシアが產業開發の爲に公債を募集する事を妨げる。今日クロアシアが甚だ振はないのは、畢竟中央政府の待遇が洪國內の地方團體よりも薄いからである。若し夫れ言語の問題に至つては、クロアシア民族の名譽存立に關する重大なる問題であるに拘

らず、且つ妥協條約中に明白にクロアシア語を公用語と定めて居るに拘らず、出來る丈けクロアシア語を使ふことを妨げて居る。現にクロアシア政府と中央政府との交通には、クロアシア語を用ひさせない。クロアシア內の地名や停車場の名稱、諸々の掲示や切符、郵便の切手等も實はみなクロアシア語で書いて貰ひたいとクロアシア人は主張するのである。併し此等の希望は決して洪國から容れられない。而かも多年要求して居るに拘らず中央政府は斷乎として之を容れない。之は甚だ不都合だと云ふのがクロアシア側の最小限度の要求で、更に一歩を進めると、或は獨立といひ或は分離と云ふのである。

洪國もクロアシアに對しては實は餘りに神經過敏であつた。今日では最早やのつぴきならぬ關係に立ち、今更ら讓步する譯にも行かない有様である。そこでクロアシアは益々洪國に反抗する。併しながら、クロアシアは到底獨力では其獨立の希望を全うすることは出來ぬ。そこで一部の人の間には、墺國に倚つて其希望を達せんと計畫するものあるに至つた。尤も中には洪國が憎いから墺國に附くと云ふ考を抱いて居るものもある。又墺國から見ると、洪國を牽制するには、クロアシアを利用するのは至極便利な方法である。近年墺國と洪國とは互に烈しく反撥するやうになり、爲めに墺國の中央政府では非常に困つて居る。此場合クロシアを利用すると云ふ事は、墺國の政治家の喜んで採る所の方法であるに違ない。斯くてアグラムと維納との間には何となく一道の脈絡相通ずるものがあるやうになつて來た。尤もクロアシアが墺國に親しむと云ふ關係は先にも述べた通り、一八四八年洪國の獨立戰爭の際クロアシアが墺國を援けたと云ふ頃から始まつて居る墺國は此際の援助に酬ゆるの意味を以て、四九年にはクロアシア、スラヴォニアと洪國との分離を宣言し、之等二州の地を獨立の王領地に定めた事がある。此頃からクロアシアには、全然獨立しようと云ふ說の外に洪國を離れて墺國に附かうと云ふ說があらはるるやうになつた。尤も此說は餘り大した勢力は得なかつた。

けれども墺國の政府とクロアシアの策士との間には絕えず交通があつて、墺國が兎も角もクロアシアの獨立運動に同情を寄せて居つた事丈けは疑がない。後に果してわが墺國に附いて來るが否かは姑く敢て問ふ所ではない。只斯くして洪國を制し得れば墺國は滿足するのであつたらしい。されば此頃洪國側では、大いに猜疑の眼を以て兩者の關係を視て居つた。現にクエン・ヘダルヴリーの時代のクロアシア＝スラヴォニア事務大臣コヴチエヴイッチの如きは、「クロアシア人の外國（維納を意味す）とふざけるのは、刑法上の制裁に値する叛逆罪なり」といひ、又先きの總督トマシッチは之を「賣國的行爲」と稱へた事がある。（『オイストライヒッシエ・ルンドシャウ』一九一四年三月號に據る）。尤もクロアシア人が一般に自國と墺國との合併を希望するやどうかは問題である。けれども一部の人士の間には、必ずしも維納の治を歡迎するまでゝはなくとも、少くとも、「洪國人の下に奴隸たるよりは、墺帝國の一部たる方は寧ろ幸福である」と云ふ位に考へたもののあつたことは疑はあるまい。彼等の多數は洪國との妥協條約其物には別に不滿はない。けれども今日までの經驗では、洪國は決して之を守つて呉れるとは信ぜられぬ。從つてクロアシアの自治權も決して安全なるを得ない。是に於て一變革が必要である。而して波蘭人や、ボヘミア人や、スロヴエーネン人などが、我々の如き自治的地位を有せざるに拘らず、尚我々よりもより幸福なる狀態にあり、且つ墺國の文化經濟の發達の指導となりつゝある事を思ひ合はして見れば、墺國の支配に服する事は强ち厭ふべきことでもない。と彼等の中には考へたものもあつたのである。要するに、クロアシア人の運動は、洪國と極端に反撥すると共に、多少墺國と脈絡相通ずると云ふ關係のあつた事は、玆に記憶することを要する。

此獨立の運動は、一方に於ては盛んに民族的要求を主張して洪國に抵抗し、他方に於ては、南スラヴ一體に亘つて勃興しつゝあつた一種の機運と、早くから相感應する所があつた。南スラヴ一體と云つても、南ス

ラヴ種族の全部ではない。主として墺帝國内の南部諸州即ちイストリア、ダルマシア、カルニオラ、カリンスアの一部、クロアシア等の方面に起つたのである。其人種から云ふと、大體に於てクロアシア民族とスロヴエーネン民族との裡に起つたのである。スロヴエーネンは、所謂セルブ族以外のスウヴ人種であるが、然し初めからクロアシア民族とは關係が近い。殊に宗教が同一であるので、一致協同し易いのである。而して此等の民族の間に第九世紀の初め諸國に民族主義の勃興した際に、一種の統一的の思想が起つたのである。元來此等の地方は、一八〇九年から一三年に亘る間に於て、那翁の支配に歸したのであるが、那翁は之等の地方全體を一つに纏めて、イリリア州と云ふ名の下に佛蘭西の一州とした。そこで此等の地方は、初めて一つの纏つた團體となり、之等の地方民の間にも自ら一種の共同意識が發生したのである。且つ此等の地方には所謂佛國流の政治的支配、即ち中央集權的な統一的の政治が行はれたので、爲めに此地方の住民は、短期ではあつたが強烈な團體的生活の訓練を受け、其結果として、那翁の沒落と共に直ちに彼等の團體的生活は終了を見たに拘らず、一旦出來上つた團體意識は其後永く決して彼等の心を去らなかつたのである。佛領時代に此等の地方を相繼いで支配し居つたマルモン將軍とベルトラン將軍とは、最も此等の地方の開發統一的思想の養成に骨を折つたのであるが、此等の地方の人民は深く彼等二將軍と共主那翁とも德とし、且つ之を敬慕して居つた。詩人などの那翁の德を頌するの歌を作るものも頗る多く、其中には後世遍ねく人口に膾炙するやうになつたものもある。而して那翁追慕の情は實に其儘之等地方統一の回想に外ならぬ。さて斯う云ふ思想は那翁沒落後の反動時代には一時屏息して居つたのであつたが、段々諸國に民族主義が勃興するにつれて、此考は再び起つて來た。即ちイリサアの回顧と云ふ聲が非常に盛んに起つて來た。而して此考の勃興は、軈て洪國をしてクロアシアに警戒するに至らしめた一つの重要なる原因たりしことは先きにも述べた通

りである。その故は一八三四年、アグラムに於て、ルードウヰッヒ・ガイと云ふ者、イリリア新聞なるものを發行し、其附錄に「イリリアの曙光」と云ふものを附けて盛んにイリリア國再興の思想を鼓吹したのである、此新聞は非常に成功して飛ぶが如く諸所方々に愛讀された然るに若し此理想が段々に具體的の運動になつて來ると、洪國からクロアシアが獨立すると云ふ事になる。故に政府は之を危險思想として取締つたのである。後にはイリリアと云ふ文字を冠する事は、總て禁ずることにした。さて此イリリア思想は、勿論アグラムを中心として起つたのであるけれども、然し同族の存住する限り、クロアシア以外の各地方に於ても亦盛んに稱へられて、之には洪國政府ばかりでなしに、墺國の政府でも非常に恐慌を來たしたのであつた。現に一八四三年には墺國政府でも勅令を以て、新聞や其他書籍にイリリアと云ふ文字を書くことを禁じ、學校、公けの集會に於ても亦此文字を使用することは相成らぬと發令した。そこで一旦は具體的の運動とならずして濟んだやうではあつたが、然しながら文學的方面に於ては尙ほ盛んに此思想の民間に普及するのを見た。當時最も民間に普及して居つた俗謠は「イリリア眼覺めよと那翁云ふ」云々と云ふ冒頭で初まつて居る有名な歌である。斯くて此思想は、暗々に大いに流布して居つたが、それが遂に具體的の形を取ることになつたのは一八四八年である。

此年三月三日、ヨセフ・エラシッチなるものが皇帝の任命によつて總督となつた。此人は豫々洪國反對の急先鋒として知られて居つたので、洪國政府は固より此任命を喜ばない。此年は恰度墺洪兩國間の關係の最も危殆に瀕した時であつたから、墺國側では皇帝の任命權を利用し、故さらに此人を總督に推したものであらう。されば洪國政府は、皇帝の任命とはいへ此仕打に憤慨し、直ちに其監督權を口實として彼を免職した。然るにエラシッチは洪國政府の命を奉ぜずして依然として其職務を執つて居つた。加之彼は豫ねての希望を達するは此機にありとなし、アグラムを中心として南スラ

ヴ諸州を統一し、茲に一大獨立國を建てんとするの計畫を廻らした。洪國政府は固より斯くあるべしと豫期してあつた事だから激しく彼を制壓した。然し總督は一向之に頓着しない。年の六月五日には遂にクロアシアの州會に更に隣邦諸州からの代表者をもアグラムに招いで花々しく開會の式を擧ぐるに至つた。尤も此時ダルマシア丈けは代表者を送らなかつたが、其他の諸州からは各々若干の有志者が來た。されば此のアグラムの會合は取りも直さず南スラヴ諸州代表者聯合總會と云ふ形を取つた。是が即ちイリリア思想の具體的に發現しかけた最初の企てゞある。洪國は兵力を以て之を壓迫せんとした。總督も亦九月九日兵を率ゐてドレーブ河を渡り、却て遙かにブタペストに迫るの氣勢を示した。時正に墺洪兩國干戈を交へて居つた際で、之が爲めに洪國は少からず困却したのである。併し此運動も墺洪兩國の平和の克復と共に止んだ。之よりまた洪國の壓迫は段々クロアシアに加はる事となつた。やがて普墺戰爭となり、クロアシアは再び洪國の支配に歸した事は先きにも述べた所である。其後南スラボ統一の希望は洪國の壓迫の爲めに再び具體的の形を取ることが出來なかつたが、然し國民の間には段々に深き根柢を得るやうになつて居つた。彼のクロアシアに於ける國民黨の創立者ストロッスマイエル僧正の如きも、根本的の理想としては、天主教を中軸として全南スラヴを統一せんとするに有つたので、只其爲めには新たに造るべき團體の中心を堅める必要があると云ふ所から、第一着歩としてクロアシアの獨立と云ふ事を唱道したのである。之れの獨立にして完うせられん乎、彼は乃ち其周圍に隣邦の諸州を喚び集めんと欲したのである。彼は非常にエライ人物であつて、同胞種族の間に偉大なる感化を殘して一九〇五年に死んだ。斯くの如くにしてイリリア思想とクロアシアの獨立運動とは相接觸し、更に隣邦の南スラヴ民族も此思想に贊成して最近に至つてはクロアシアを中心とする三國鼎立運動と云ふものが盛んになるとなつたのである。

尙此三國鼎立運動が、クロアシア以外に於ては如何なる態度を以て迎

へられて居るかと云ふに、大體に於て贊成である。先づクロアシア民族以外のクロアシア民族在住地方に於ては如何。殊にクロアシア民族の最も多數居るダルマシア方面に於ては如何と云ふに、ダルマシアは先に一八四八年エラシツチの招待した會議には代表者を送らなかつたけれども、近年に至つて段々三國鼎立の思想が盛んになつて來て、現に一九〇五年の末には、スパラト市に於てクロアシア、ダルマシア二州の代議士の聯合會を開き、此二洲は宜しく合併せざるべからずと決議したことがある。更に一九〇九年には同じくスパラトに於て、南スラヴ國民協會なるもの創立せられ、其後毎年集會して居る。同年ハインリツヒ、ハナウなるものが、新たに創設せらるべき王國の地圖を作成發賣したが、そが之等の地方で最も盛んに賣れたと云ふ事である。之に依て我々は三國鼎立運動はダルマシア方面に於て必ずしも不人望でないと云ふ事を想像することが出來る。然らばスロヴェーネン民族間に於ては如何といふに、是れ亦此運動は決して不人望ではない。此事は一昨年ライプチツヒ戰爭百年祭に際して、カルニオラ洲の首府ライバツヘに於て陸軍側の紀念祭があつた時に、人民が盛んに之に反對の示威運動をなしたと云ふ事によつても分る、此時人民側は曰く、イリリア國を作つたものは那翁である。而して那翁を滅ぼしたものはライプチツヒの戰爭である。然らば何の爲めに我々はライプチツヒ戰爭を祝するの理由があるかと。斯くて彼等は少數の獨逸人が萬歳々々連呼するのを打消して彼の「イリリア眼覺めよ」の歌を謠つて大に反對の氣勢を擧げた。新聞雜誌も多くは此紀念祭には反對であつた。就中スロヴェンスキー・ナロード紙は其社説に於て次のやうな事を云つて居る。曰く「ライプチツヒ戰爭の問題、、スラヴ民族の心裡に獨逸人とは別種の感じを起さしむる……此戰爭によつて那翁の創設したるイリリア國、並びに佛蘭西がスラヴ民族の幸福の爲めに計畫した一切の事業は亡んで了つた……墺國の政治は佛人の樹立した農民階級の自由を亡ぼし、スラヴ民族の學校と大學とを亡ぼし、佛國の二總督マルモン、ベルトランの創設したる一切のものを我々から奪つた……ライプチツヒの戰爭はスラヴ民族の發達を少くとも半世紀後れしめた。是れ我々が此戰爭を祝する何等の理由を有せざる所以である……」(ルネ・ゴンナール一九一三年三月の佛國「政治及び議會評論」所載「墺洪國の膨脹とクロアシア・ダルマシア新同盟」之によつてスロヴェーネンの方でも三國鼎立運動は先づ大體に於て贊成であると云ふ事が分る。元來此地方に於けるイリリア思想は實は餘程古い淵源が在るものである。天主教の牧師ヴォドニツクの作れる有名なる歌は一層此機運を促したものと云はれて居る。此等の地方は維納會議に於て再び墺國に歸し、メツテルニツヒの激しき壓迫に逢ひ、ヴォドニツクも其迫害を受けて慘憺たる終りを遂げたのであるが、併し民間に隱密の中に段々發達して來る統一的思想は到底之を滅し盡すことは出來なかつた。

扨て一つこゝに問題となるのは、三國鼎立運動に天主教徒たるクロアシア民族を主として連絡することを目的とするものなりや、或は更に進んで正教を奉ずるセルビア民族をも包含せんとする者なりやといふ事であ

る。當初の三國鼎立運動は疑もなく天主教を中心とするものであつた。彼のストロッス・マイヤーの如きも、天主教を中心として諸民族の統一を計らんとしたのであつた。處が此考に一轉進を與へたものはボスニア・ヘルツエゴヴイナ二洲の合併である。一九〇八年此二洲はいよ〳〵合併せられた。すると南スラヴ地方に於て、新たに、正教を奉ずる民族の少からず棲息して居る部分を加ふることになつた。宗教が異ふからと云つて、此等の地方をば、折角新たに造らるべき新大國の範圍外に打捨てゝ置くと云ふ事は得策であるまい。是に於て三國鼎立運動は、宗教中心主義を捨てゝ、改めて純然たる民族統一主義としてあらはるゝやうになつた。塞民族もクロアシア民族も打つて之を一丸とすると云ふ考が發生するに至つたのである。斯うなると、三國鼎立運動は自ら大セルビア主義と衝突せざるを得ない。之からいよ〳〵問題が發展するのである。

大塞比亞主義は豫々ボスニアと云ふものに眼を着けて居つた。ボスニアに塞國の勢力を及ぼし、之を包含して正教中心の一大帝國を建てんとするのが彼等の理想である。ボスニアは即ち大塞比亞主義の、他に許す事の出來ない勢力範圍である。尚一歩進めて大塞比亞主義は、ボスニアの併合を手初めとして、更に自分の勢力の下に墺洪國南岸の南スラヴ地方をも統一せんとするの空望をすら抱いて居つた。之は具體的の問題としては餘りに空想的であるけれども、一部のセルビア人の間には相當に信奉せられて居る。然るに今や三國鼎立運動は、自分の勢力範圍たるボスニアに侵入して來た。是に於て大塞比亞主義は大いに警戒をせねばならぬと云ふ事になつた。斯くの如くにして初めは各々別個の活動範圍を有して相侵すことなく相併立して發達して來た所の三國鼎立運動と大塞比亞主義とは、ボスニアの爭奪に於て初めて相競爭する敵味方の關係に立つことになつた。而して此爭は更に其の範圍を擴めて、塞國の方からは全南スラヴを統一してやらうと云ふ意氣込を元すに至り、クロアシアの方からは己れが塞國をも一統してやらうと云ふ意氣込となつた。換言すれば南スラヴの統一はアグラムを中心として成功すべきや、ベルグラードを中心として成功すべきやの問題となつた。併し實際の形勢に依りて判斷するに、少くとも戰爭前に在ては、ベルグラードを中心として南スラヴを統一すると云ふ事は（假令露國の後援があると假定しても、到底實現せらるべき問題ではなかつた。

やうに思はるゝ。成程塞國を盟主として總てのクロアシア民族セルビア民族を統一すると云ふ思想は、塞國民の間には流行した。けれどもクロアシア人の間に於ては斯くの如き考に贊成するものは殆んど一人もない。クロアシア民族は勿論、セルビア民族中に在ても其墺洪國内に住するものは、一般に塞國と云ふものは自分達よりは遙かに文明の程度の低いものと思つて居る。故にセルビア國を盟主として戴くと云ふことに彼等を同意せしめることは頗る困難である。且つ又塞國は尋常の手段では到底ボスニアを奪取することは出來ない。況んやクロアシア、ダルマシアをや。されば今度の戰爭に於て倖にして塞國が勝ち、其結果ボスニアダルマシア地方の割讓を受くることになるならば格別、さうでもなければベルグラードを中心とする南スラヴ統一策は畢竟空想に終るの外はないと思ふ。併しながら塞國人自身から見れば之は決して空想ではなかつた。寧ろ彼等の活きた要求といふべきものであつた。故に彼等は其實現の期あるべきを疑はず、又其實現の爲めにはあらゆる犧牲を拂ふことを辭せなかつたのである。而して今や三國鼎立運動と云ふ大敵が現れた。若し之が成功すればボスニアは永久に塞國から失はることになる。故に塞國は極力之に反抗せざるを得なかつたのである。されば塞國は此頃から頻りに暗中飛躍を試みて三國鼎立運動の妨害に取りかゝつた。一九〇九年のアグラムに於ける有名な國事犯事件の如きは其事實其物の上に大いなる疑問はあるとしても、兎も角も塞國が三國鼎立運動を妨げんが爲めの一種の運動であつたらうと思はるゝ。此事件は一九〇八年から始まつて、一九〇九年に及び大に歐洲諸國を騷した。事件の大要はアグラムに於て一部のセルビア民族に屬する人々の間に、セ、ク兩民族を調和し、塞國の援けを藉りて同地方獨立の陰謀を企てたものがある、と云ふ嫌疑で、多數の名士が總督ラウフの捕縛する所となつたと云ふ事にある。同年秋廿四人の捕縛あつたを初めとし、翌年一月までの間に五十八人のセルビア人が捕まつた。中には大僧正など云ふ立派な身分のある人も

あつた。而して其牢獄に於ける取扱は頗る殘酷を極めたと云ふ風評、數月間未決のまゝて牢獄に入れつ放しであつたと云ふ事、いよ〳〵尋問を始めても被告の側の證人は薩張り喚ばないと云ふやうな評判、之等の風評は著しく裁判の公明を疑はしむる種となり、世間では非常に政府の處置を批難した。人道問題と云ふ立場から外國に於ても此事は頗る八釜しく論ぜられた。之に對して政府側では此事件を以て、ハップスブルグ家の支配を斥け、同地方を塞國に合併するといふ由々しき陰謀に基くと稱し、また此陰謀の根原はベルグラードにあり、塞國王及び王太子亦之に厚き保護を授けて居ると云ふやうな理由を擧げて、切りに有罪の證跡明白なる所以を辯明したけれども、世間ではなか〳〵承知しなかつた。扨て此問題でクロアシア總督は敢て三國鼎立運動を助長せんが爲めに大塞比亞主義を撲滅せんとしたのではない、彼の期する所は只クロアシア、セルビア兩民族親和の潮流の打破にある。若し此潮流が盛んになれば、クロアシアは則ち洪國から獨立をするからである。此點に於て總督は亦三國鼎立運動にも反對なのである。而して塞國が此運動の糸を操つて居つた譯は（假りに總督側の主張を眞實なりとして）、只塞國の膨脹と相容れざる三國鼎立運動の成功を妨げるに在つたので、必ずしも洪國の不利益を計るが直接の目的ではなかつた。けれども結果に於ては洪國の不利益になるので、總督は之を默視することが出來ず、扨てこそ刑罰を以て之に臨んだのである。之に由つて我々は一方に於て如何に洪國がクロアシアの獨立を妨げるに熱中して居つたかと云ふ事を解すると共に、他方に於て又塞國が如何に三國鼎立運動、實現を妨害するに熱心であつたかと云ふ事をも知る事が出來る。

然らば次にアグラムを中心とする三國鼎立運動は實現の見込ありやと云ふに、實は之も餘程六つかしいのである。第一に此運動がセルビアをも含めると云ふ事であれば、塞國より來る有力なる反抗を豫期せねばならぬのみならず、ボスニアに於けるセルビア民族及び回々教徒の反對をも勘定に入れなければならぬ。ボス

ニアが正教徒たるセルビア民族と、天主教徒たるクロアシア民族と、回々教を奉ずるものと、大體三つの部族より成つて居ることは、先きにも述べた。其中クロアシア民族は、固より三國鼎立運動に反對ではない。他の二族に至つては、本來宗教上の考から、クロアシア族とは仲が惡かつたと云ふ點から考へても、クロアシア人から起つた此運動には、同情を寄せやう筈はない。抑も此地方に於ける宗教的反感の如何に强烈であるかといふことは、同州議會の選擧法が、宗教的代表を根本原則の一とするの事實に視ても明白である。一九一〇年二月二十日發布せる同州憲法に依れば、議會は九十二名の議員より成り、中二十名は職務上當然議員たるもので、四名の官吏を除いては、他は皆三教團體の代表者である。他の七十二名は民選議員であるが、之が頗る復雜なる方法によりて選出せらるゝ。即ち一方に於ては、財産の多少により之を三級に分ち、一級に屬する大地主及多額納税者は十八名を、二級に屬する都市の住民は二十名を、三級に屬する田舍の農民は三十四名を選出することに定め、他方に於ては之等選出せらるべき議員の數は、嚴密に之を各宗教團體に振り當て、正教は三十一席、回々教は二十四席、天主教は十六席、猶太教は一席を占めることに定められてある。毎年開議の始めに當つて君主から勅任せらるゝ議長副議長の地位も、實際上は各派の人毎年輪番に交代して任に就くの例になつて居るのも、畢竟宗派的反目を緩和せんとするの用意に出でたものである。斯の如き關係になつて居るから、天主教徒たるクロアシア人を中心とする運動は、特別の理由なければ、先づ他民族からは反對を受ける運命になつて居ると考へても間違はないのである。今實際の事實について觀るに、正教徒の連中は本來は云ふ迄もなく塞國と合體せんことを希望して居る。併し近頃では墺洪國に附いて居ることも必ずしも反對ではない。此事は先にも述べた。が若し自分達の屬して居る民族がいよ／＼獨立をすると云ふ事になるなら、固より其獨立運動に參加することを必しも厭ふものではない。けれども大體から云ふと、今日

倘塞國に心を寄せて居ると見なければならぬ。就中下層一般の民衆は無智にして世界を知らず、ベルグラードを以て文明の中心と心得て居るものもあるから、其中にはカライ男爵の運動と相呼應して今倘塞國に合併せんことを希望して居るものもある。只今日では段々時勢の進歩と共に塞國に好意を表して居る程度は漸を以て減却して居ると云ふてよい。殊に近頃ではクロアシア民族を通じて西歐文明の感化が段々強くなつて來て居るから、クロアシア民族との接近、從つて之と結んで獨立しようと云ふ考が一歩一歩進んで居るやうである。若し彼等の心を未だ十分に打解けしめざるものありとすれば、そは恐らく天主教の勢力の加はるを懸念することであらう。斯の心配は正教徒の間に存外深い根底を有して居る事は爭はれない。若し夫れ回々教徒に至つては他の理由から、クロアシア人等と事を共にするを欲せざるものが多い。其故は回々教徒中には貴族的な地主が多く、從つて平民的な一般クロアシア並びにセルビア民族と趣味を異にして居るからである。而して彼等は亦塞國に心を寄するといふでもない。去れば彼等は併合以前に於ては土國に心を寄せ、現に土國が愈立憲政治を布くと云ふ事になつた際には、自分達からも土國の新議會に議員を送らんとを企て、其結果墺洪國をして急いで合併の事を決行せしめたのであつたが、今日合併後に於ても墺洪國の治に慊焉たらざるものがある。併しながら之は極めて少數である。それで大體に於てはボスニアは今日クロアシアと合體して三國鼎立運動を實現せしむると云ふに傾いて居ると見てもよい、併し彼等の本來の希望は只獨立をしさへすればよいので、其塞國に附くとクロアシアに附くとは重大な問題ではない。而して塞國に附いて居つては、獨立を得るの希望は極めて薄弱なるが故に、クロアシアの方に甘じて附くのである。彼等が獨立を希望するのは、ボスニアはたとへ墺國の治下に立つてから非常に開發したとは云へ、今倘ゼルマン民族の壓迫は頗る強いので、之を免れんとて獨立をしやうと云ふのである。彼等は曰ふ「ボスニアに於ける行政は、ボス

ニア人によらずして寧ろゼルマン人によつて居る。總ての行政上殊に鐵道、郵便、電信（後の二者は軍隊の管理にあり）の方面では獨逸語を公用語として居る、又法律は獨逸語を正文とし、公の掲示は兩方の語で出すけれども、獨逸語は大きい字で書いて、セルゼア語は小さい字で書く。學校は獨逸語の學校とセルビア語の學校と兩方あるけれども、歴史科としてはボスニアの歴史を教ふることは禁ぜられて居ると」。斯う云ふ風にゼルマン化せらるゝ事は彼等の甚だ不平とする所なのである。彼等は又官吏として採用せられて居るゼルマン人とボスニア土人との割合を擧げて居る。中央政廳の役人はゼルマン人三百二十二人に對して、土人は僅に三十一人。知事郡長は百八十四人に對して十八人。中學校の教師はゼルマン人百二十五人に土人十二人。裁判官は二百三十七人に三十一人、税務官吏は八十七人に七人。烟草專賣局の役人は五十三人に七人である。醫者の如きも百三十人のゼルマン人に對して土人は僅かに十二人しか許されてゐない。商工業も一般に獨逸人の手に歸し、二十人以上の使用人を使役する事業百七十の中百五十までは獨逸人の經營である。（一九一四年七月七日ル・タン新聞に據る）。斯くて彼等はゼルマン人の跋扈を憤るの餘り、ボスニアの獨立と云ふ事を希望するのである。彼等が三國鼎立運動に大體反對しないのは畢竟之が獨立を得るの捷徑であるからである。併しながら此運動は墺國に到ると決して大多數の贊成は得てゐない。此運動と墺國との關係について我々の注意しなければならぬ點は少くとも三つある。

（一）ボ・ヘ二洲を新たに創設せらるべき國に割讓すべき事

（二）イストリア、カルニオラ、カリンシア、シチリア等の南岸諸洲を墺帝國から割いて新國に之を加ふる事

（三）ダルマシアを墺國から割いて之をクロアシアに返却する事

（因に云ふ此第三の點は、先きにも述べた通り、ダルマシアは昔の三一王國の一部として、クロアシアの王位とは離るべからざる關係に在つたといふ歴史に關係がある。今日でクロアシアの王位は、スラヴォニアの王位を兼ぬるに止つて、ダルマシアの王位は分れて墺國の方に歸したのである。之が恢復は、實に三國鼎立運動と關係なく、クロアシアが洪國と共に平生から主張して居

である。洪國の之を主張するのは、之によつて自國の勢力範圍の擴張するが爲めであつて、決してクロアシアの主張に同情するが故ではない。)

斯くの如く三國鼎立運動は、墺國に對しては若干の領土の割讓を迫るのである。尤も斯くして出來た第三國は、矢張りハッパスブルグ家を戴くのであるから、墺帝國が傷いてもハップスブルグ家には更に傷がつかない。けれども墺帝國はハップスブルグ家の據つて以て立つ處の本據である。故に其衰弱分裂は決してハップスブルグ家の好む所ではない。三國鼎立運動者は「此運動たるや決して帝國の勢力を弱むるものではない。却て之によつてハップスブルグ家の支配の下に在る諸民族に各々其所を得せしめ、斯くて中央政府の權威と王室の尊嚴とを强め、墺國の對巴爾幹發展の機運を促進し、恐るべき反抗的勢力（暗に塞國を指すならん）を屛息せしめる所以である」と説いて居る。(ゴンナール「トリアリズム」一九一一年十一月）併しながら三國鼎立運動の言ひ分を通ぜば、實は墺國にに海岸線が全く無くなるのである。如何に新國が同じくハップスブルグ家の支配を受くるものであるとはいへ、全然海岸線を之に提供すると云ふ事は墺國政府の到底承認し得ざる所たるは言を待たぬ。最小限度の讓歩として墺國の提供し得るものはボ・ヘ二州とダルマシア位のものであらう。それ以上は到底墺國で割讓することは出來まい。されば此運動は墺國の中央政府に於て決して人望はない。大多數のものは斷じて之に反對である。老帝陛下の如きも全然此運動には同情が無い云はれて居る。但し墺國側にも全く贊成者の無いと云ふ譯ではない。彼の同國議會に於ける有力なる政黨たる基督教社會黨は此運動に贊成であると云はれて居る。傳ふる所によれば墺國議會に於てボ・ヘ二州合併法案の討議の際に、リーヒテンスタイン伯は、此運動に關する一つの提議をなし、一九一〇年にもシュワルツェンベルグ公亦之を述べた事がある。先の維納市長の有名なるドクトル・ルイガーの如きも此運動に贊成であつたと云ふ事である。之等は孰れも基督教社會黨中の錚々たる

名士である。而して彼等の之を賛成する所以については或は之によつて洪國を牽制するを得べしと考へたと云ものもあり、又或は之によつて往々紛擾の種となるスラヴ元素を議會から減ずるを得べしと考へた爲めなりと說くものもある。又ゼルマン民族以外ではボヘミア人などは此運動を歡迎した。ボヘミア人は西スラヴ族に屬するもので、南スラヴとは交涉はない。けれども彼は三國鼎立運動はやがて四國鼎立の前驅となり、更に進んで彼等の平素希望して居る所の聯邦組織に移るの第一步たるを得べしと考へて之を歡迎したのである。斯く墺國内にポツ／＼之に賛同を與ふるものはあつたが、併し一般には反對の聲の方が强い。殊に宮廷に於ては最も反對の勢が强かつたのである。故に此運動が實現するだらうとは、墺國側の立場からは到底之を想像することが出來ない。若し夫れ洪國に於ける反對に至つては極めて激烈なものがある。何となれば此運動の實現によつて最も大いなる損害を受くるものは洪國であるからである。即ち此運動が成功すれば、洪國はクロアシアとスラヴオニアとを失ふ。洪國がクロアシアを失へば彼には最早全然海岸に達する出口が無い。されば洪國は到底此運動に快く同意する筈はないのである。一體洪國ではクロアシアを自國勢力の下より斷じて離さないと云ふことを不動の原則として居る。此原則を危くするの惧あるよりして、彼は本來主義として南スラヴの發展を喜ばない。寧ろ南スラヴの間に出來るだけ自分の勢力を張らんと希望して居つた位である。ボスニアの如きも實に洪國が昔から注目して居つた所であつた。一八七八年の伯林會議に於て、アンドラーシー伯がボスニアを墺洪國に取つたのも、一つの考は洪國の利益の爲めに塞國の膨脹を妨げんとするにあつた。然るに此事は端なくクロシアの膨脹的野心を挑發したのである。そこで洪國は、墺洪國の名に於てボスニアを合併した後に於ても、出來る丈けボスニアと墺國との關係を密接ならしめんと勉めて居つた。一九一二年エーレンタールの隱退に次いで、新たにベルヒトールドが外相の洪に就くや、

共同政府の三大臣中二人以上洪人を以て占むべからざるの內規に從ひ、ベルヒトールドが洪國人であつたから、時の大藏大臣ブーリアンが辭職をしてビリンスキーが之に代たのであつた。此ブーリアンは先頃ベルヒトールドに代つて外務大臣となつた人であるが、此時洪國では彼の大藏大臣辭職を甚だ遺憾とした。何となれば彼は洪國人なるが故に、彼の在職は洪國とボスニアとの關係を開拓するに好都合であると考へて居たからである。否な洪人中の或者は、更に一歩を進めて、ボ・ヘ二州は法理上墺洪兩國に歸すべきものでなくして、洪國のみに屬するを正當とすると說くものすらある。例へば有名なる地理學者のレッツオ・ハヴァスの如きは是である。彼は老帝が曾てなせる宣誓の文句、即ち「洪國の各部及び各州並びに神恩の下に已に占領し又は將來占領することあるべき屬領地は――王冠を戴くに當つて朕がなせる宣誓に從ひ――洪國及び其附屬地に加へらるべし。……朕は洪國及び其附屬地の境界並びに國家の一部をなす總てのものを、如何なる名義を以てするも讓與し減縮することなく、却て之を增大し擴張すべし」(一八六七年法律第二號にあり)とあるのを引用し、且つ合併宣言をなせる際に、王が「朕が光榮ある祖先が曾て洪國の王位に在りて此等の地方を支配せし歷史的關係に鑑み、朕は此地に朕の權力を擴張す」と云つたと云ふ事を引き、王は墺國の皇帝と云ふ資格では無く、洪國の王と云ふ資格に於て此二州の上に主權を擴張したのであると理窟を捏ねて居る。斯の如き說の行はるゝのも畢竟一つには國民膨脹の希望に出づるとはいへ、又一つには斯くして南スラヴ民族の勝手な膨脹を抑へんと欲するのである。故に之と反對に自分の勢力範圍をも南方スラヴ民族の發展の爲めに割くと云ふが如きは、洪國の斷じて之を承認せざる所である。されば三國鼎立運動は洪國では無論非常に人望がない。却つて一部の人の間には之を冷評する者がある。曰く墺洪國の南スラヴ人の間には本來統一的の連鎖が無い。之を器械的に人爲的に連結をするのは決して彼等の利益ではないと、又曰く、假令統一が出

來てもそれは國も小さく、人口も少なく、金も十分でなくて、何も出來まいと。要するに三國鼎立運動の成功はスラヴ人に取つて何等の利益する所もあるまいなどと冷評して居るのである。此批評の當否は今別に深く問ふを必要としない。只洪國が其唯一の海岸線を失ふことを苦痛として、斷じてクロアシアを手離さないと云ふ決心を有つて居る事丈けは、明白に了解せられんことを希望する。最も三國鼎立運動の或主張者は、クロアシアの割讓の報酬として墺國からガリシアとブコヴィナとを洪國に割かしめやうと説く。併し之とて洪國の賛成を得るとは極めて困難である。ブコヴィナの事は姑くおく。ガリシヤに就て云へば洪國人はさらでだに波蘭人と仲が好く、波蘭の獨立を稼々希望して居るから、波蘭人の勢力範圍たるガリシアを取ると云ふ事は、徳義上好まないのである。況んや海岸線を失ふの損失は、到底ガリシアの獲得によつて之を償ふことを得ざるに於てをや。是に於て洪國は此三國鼎立運動に對しては、早くから其取るべき態度を決めて居る。其態度の何たるやは前記のハヴァスの著書「地理學上より見たる三國鼎立運動」に於て最も簡明に喝破して居る。

(一)洪國民は南スラヴ國の建設の爲めには、掌大の土地と雖も之を割くを肯ぜざる旨を宣言すべし。

(二)洪國は其の南スラヴ諸州の土地人民に對する關係を一層密接ならしむる方法を講ぜざるべからず。

斯くして三國鼎立運動は、腕づくでも洪國の勢力範圍を奪はなければ、到底成功する見込はない。何となればクロアシアには此運動は畢竟無意義であるからである。而して此點が此運動の成功に對して最も大いなる難關である。

斯く論じ來ると云ふと、三國鼎立運動は殆んど成功の見込ないものの如くである。若し斯くの如く到底近く成功の見込のないものならば、塞國の方では何も之が爲めにヤキモキする必要はない。處が茲に意外にも一つの有力なる人物があらはれて、三國鼎立運動をして急轉直下の勢を以て發展せしむることゝなつた。是

に於て大塞比亞主義は愕然として驚き、猛然として之が成功を妨げるに全力を盡すと云ふ事に立ち至つた。

三國鼎立運動と故皇儲殿下

三國鼎立運動の實現の希望に一大光明を與へたるものは故皇儲殿下である。滿廷の君臣悉く此運動に反對して居つた時に、皇儲殿下は何時の間にやら此運動の同情者となつた。尤も先きにも述べた通りに、基督教社會黨が此運動に同情があつたと云ふ事が、大公殿下を動かした一つの原因となつたかも知れぬ。墺國の基督教社會黨は獨逸帝國の同名の政黨とは異り、天主教を中心とし、保守的政客を糾合する政黨であつて、獨逸の中央黨の如く一面に於て天主教の擁護を以て任じて居るものである。此點に於て此政黨は皇儲殿下と接近したのである。されば皇儲殿下は此政黨を通じて三國鼎立運動の事を聞いたに違ひない。併し何れにしても皇儲殿下が斯くの如きいはゞ一種の革命的運動に同情したと云ふ事は非常な出來事でなければならぬ。先にエーレンタールが政界の中心であつた頃は、三國鼎立運動の如きは初めから問題とならなかつた。彼は本來保守的の人で、改革と名の附くものは總て之に反對した人であつた。其影響を受けてか老帝陛下なども亦一般に革新的の運動には反對である。政府に在ては先きにイリリア思想の勃興を壓迫するの政策を取つた事によつても明白の通り、此運動には決して同情がない能く考へて見ると同情のないのも實は無理はないのである。折角南スラヴ民族に獨立を與へても、其れが果して維納の中央政府と歩調を一にするか否か分らない。洪國のやうに絶えず反撥すると云ふ風になつては、新たに又一敵國を増すのであるから、先づ萬全の策としては現狀維持に若くものはない。であるから大抵の政治家は皆此運動には贊成しなかつたのである。然るに皇儲殿下は獨り多數の意見と離れて之に同情を表するに至つたと云ふのであるから、實に之は一つの大いなる出來事と云はなければならないのである。尤も人によつては皇儲殿下の三國鼎立運動に同情して居つたと

云ふことを否認するものもある。之は道途の風說に過ぎないので、眞實彼は此運動に同情して居たのではないと云ふ。少くとも、表面はどうであらうが、內心實際に南スラヴ國の獨立を希望し且つ援けやうとして居つたのではないと云ふのである。此說も相當に强く唱へられた事があるが、然し前にも引用した大公殿下夫妻の親友であつた佛國の伯ルブランの記する所によると、「殿下は南スラヴのカトリック民族に一つの愛好の情を持つて居つた。殿下が世間の傳ふる如く、果して二重國主義の代りに三國鼎立主義を執つて居つたかどうかは、自分は之を與り知らぬ。けれども彼他日君位に即かば洪國の壓制から彼等を開放すべく全力を盡したであらうと云ふ事は疑を容れない」とある。之を最も殿下に親近して居つた人の言として信用し得べしとすれば、殿下が三國鼎立運動に眞實同情が無かつたと云ふ事は出來ない。只世間の希望する三國鼎立と殿下の援けんとした三國鼎立とは其意義、程度、範圍に於て全然同一であつたかどうかは一つの疑問である。ルブランの書いた所によると、洪國の壓制から開放すると云ふ事を主にして居るから、之は主としてクロアシア、スラヴォニアを眼中に置いた話である。更に進んで殿下は墺帝國內の南海岸諸州の獨立をも眼中に置かれてあつたかどうかは、兎も角も疑問とするの餘地はある併し何れにしても、殿下は南スラヴ人の同情者援助者として立つを辭せないと云ふ態度を示された事丈けは明白である。大に割引して考へた所で、假りに殿下の同情と云ふものは眞實でない、風說である、若くは爲めにする所のある政略上の手段であるとしても、スラヴ人の方からは我が同情者、我が有力なる援助者であると云ふ風に見られて居つた事は、一點の疑を容れざる所である。スラヴ人の方で斯う考へて居つたと云ふ事丈けで、予の後に說くが如き事件の發展には十分である。其以上の事は暫らく問はなくてもよい。

何故に皇儲殿下は三國鼎立運動に同情したかと云ふ事については、いろ／＼の說がある。エリス・ベーカーは「隔週評論」に揭げた先にも引用した論文に於て、

彼は之に依つて洪國を制するを得べしと考へたと說いて居る。一體墺國の政治家は洪國をば從前の如き弱き從屬的地位に落さんことを一日として考へない事はない。然るに洪國は屢々墺國に反抗して對等の關係を要求した。而して近年は大いに經濟上に於ても發展し其實力も加はつて來た。墺國は洪國を何時までも農業國たらしめ、經濟上墺國に從屬せしめんとして居るが、洪國では段々工業も盛んになり、經濟的に墺國から獨立せんことを心掛けて居る。一九〇七年の關稅協約ももう二年の後で期限が切れるが、此の兩國はやがて關稅關係に於て各々獨立すると云ふ事にならぬとも限らない。殊に近年は軍備の問題について洪國は頗る墺國を苦しめ、以て墺國中央政府の帝國的發展に對して最も激しき妨害を試みて居つたのである。蓋し所謂墺洪國の國力發展によつて實際の利益を占むるものは墺國丈けであつて、それ丈け洪國は不利益の地位に陷ると洪國は常々考へて居たから、洪國は墺洪國全體の强くなることを目的とする政策には、絕えず反對して居つたのである。斯の洪國を抑へなければ、到底墺國は、今日の國際競爭の激甚なる世の中に於て、大國の面目を維持することが出來ない。何とかして洪國を苦しめてやらうと云ふのが維納政客の苦心する所であつた。而して三國鼎立運動は此目的の爲めに恰度都合が好いのである。是れ皇儲殿下が三國鼎立運動を援けた所以であると說くのである。予の考では之も恐らく一つの原因であらう。併し實際上三國鼎立運動は容易に實現するものでない。之が實現しなければ洪國を抑ふることにはならぬ。而して强て之を實現せんとすれば萬一の場合には洪國と戰爭をするだけの覺悟がなければならぬ。故に之れ丈けの理由で以て皇儲殿下が此運動を援けたとはどうも考へられない。モット重大な理由が外にあると觀なければならぬ。セートン・ワトソンは同じく去年八月の「現代評論」に於て、皇儲殿下の三國鼎立運動贊成の理由を塞國牽制と云ふ目的に歸して居る。南スラヴ地方を現在のまゝにして置けばこそ、塞國がいろ〳〵のいたづらをする。此狀態を一變して新たに獨立國を作り、之にボスニアもダルマシアも合併して了ふと云ふ事になれば、塞國は最早や一縷の希望もないと云ふ事になるから、初めて墺洪國の南方は安穩になるだらうと。斯う云ふ見地から大公殿下は南スラヴ人の希望を達してやらうとした。此考は餘程有力な說であると云つてよい。予は之と同時に尙も一つ

大公殿下にに墺の南方發展を圓滿に成功するには、どうしても南スラヴと云ふもの丶反抗を除かなければならない。而して其反抗を除くの方法は、之を全く撲滅するか又は懷柔するかの二方法あるのみである。而して其中此目的を達するに一番近い道は同じく墺國と宗教を共にするクロアシア民族の中心たる運動を援けて斯くして塞國民を撲滅すると云ふ事にある。即ち近きを懷柔して遠きを伐むるの策に出づるのが最良の策である。南スラヴ人の態度を曖昧なものにして放任しては、到底墺國は巴爾幹方面に發展することは出來ない斯う云ふ考もあつて旁々皇儲殿下は南スラヴ人の同情者と名乘を上ぐる事になつたのであらう。一體南スラヴ人全體としては、必ずしも墺國の援けを求めなければならぬと云ふのではない。獨立さへすればどつちでもよいのである。されば彼等は巴爾幹戰爭に於て塞國等が豫想外に強く、瞬く間に土國を打ち破つた際には恰度日露戰爭の時に、日本の成功を見て印度人や安南人などが振ひ起つたと同じやうに、南ステヴ人も亦我亦獨力で獨立し得べしと自惚れて、一時大いに墺國から離れんとするの運動が盛んになつた事がある。例のルネ・ゴンナールが佛國「政治及議會評論」の一九一三年五月十日號に出した「澳國內の南スラヴ及び其思想」と題する論文中に列記して居る所に依ると、ダルマシヤに於ては一九一二年十一月より翌年四五月にかけて獨立的反墺熱俄に頭を擡げ、一月頃のスパラト市の形勢の如きは最も不穩を極め、爲めに墺國軍艦は今にも海上より同市を砲擊せんと擬した事がある。ボスニアヘルツエゴヴィーナよりも當時不穩の警報は頻々として傳はつた。クロアシアに在つても獨立的氣勢は、四月二十三日多數の市民アグラムに於てスラヴ萬歲を連呼して大々的示威運動を行つた時に、其絕頂に達した。スロヴエーヌ民族は比較的にハップスブルク家に忠實なるものなれども、當時矢張り諸方より動搖の警報來り、市街表示の立札や、店舗の看板など、俄に獨逸語なりしを取り去つて土語に書き換へるなどの風が大に流行し、中にもカルニオラに於て最も烈しかつたとの事である。是れ皆塞國戰勝の報に動かされた結果である。それであるから若し段々塞國が勃興して來て塞國と事を共にする方が民族獨立の目的を達する一番の近道だとなれば、彼等は或は墺洪國を離れて皆塞國に附かぬとも限らない。少くとも塞國と相提携して獨立の成功を計るといふことはありさうだ。要するに孰れで

も早く成功の見込のある方に附くと云ふ傾向がある。無論大體に於て南スラヴ人は塞國を輕蔑して居るから同じ程度の力の作用なら、此の方に附くと云ふ事は明かである。そこで墺國側に取つては、塞國々威の發揚に對しては何等か適當の方法を取るといふことが必要になつて來る。少くとも南部諸州の動搖を鎭める爲めにも必要である。是れが皇儲殿下が急いで南スラヴ人を懷柔するの必要ありと認められたる所以ではあるまいか。此等の點は何れにしても吾人の忖度である。只其動機が何れにあるにしても、兎に角も殿下が南スラヴ人の味方として起つことになつたことは明である。屢々援用するルネ・ゴンナールは「三國鼎立運動論」に於て次のやうなことを云つて居る。曰く殿下は從來の二重國主義は今や王國の基礎たるに適せず、此主義に代るに他の組織を以てすることは絶對に必要なりと考へられた。墺帝國と洪王國との外に第三國を建つるを避くべからざる必至の勢と觀られた。而してこの第三國の南スラヴ王國を意味するや論を竢たない。斯くて彼はトリアリズムの信者となつたと。

皇儲殿下が三國鼎立運動の同情者となつたと云ふ事は、南スラヴ人、幷びに塞國國民間に如何樣に響いたか。三國鼎立運動は前に述べたやうにいろ／＼の難關があつて、到底實現の見込の無かつたものである。然るに今や皇儲殿下が其味方となつた。皇儲殿下は如何なる人物であるかと云へば、牢固なる意思を以て百事己れの一旦極めた事を決行せずんば已まざる底の人である。少くとも多くの人の眼には斯の如く映じて居つた。從來の例に於ても、彼は一度決心をすると、萬難を排しても之が實行に盡力したことは稀でない。且つ夫れ三國鼎立運動は當分の間こそ宮廷の反對等の爲めに實行困難だとしても、老帝の餘命幾何もない事は明白であるし、早晩皇儲殿下が帝位に即けば、宮廷の反抗などは最早や意とするに足らぬ。之に加ふるに民間に於ても基督敎社會黨の此運動を援くるものがある。然らば現皇帝百年の後、此三國鼎立の理想は必らず具體的の政治問題となるであらう。斯くて三國鼎立運動は皇儲殿下なければ一片の空想に止るべきも、皇儲殿下があれば一轉して現實の政治問題となる。即ち皇儲殿下の一向一背が此運動の運命を極端から極端に轉化するの力を有つて居るものである。されば皇儲殿下一度吾黨に同情あると云ふ事になるや、南スラヴ人間の運動は俄かに熱烈と爲つた。其運動の元氣は急激に潑

鮮なる生色を呈した。そこで塞國人は慨然として驚いたのである。今までは厄介な問題だとは思うて居たが然し大して重きを置かなかつたのである。然るに今や澎湃たる元氣を以て、動かすべからざる確信の下に熱心に運動し其鋒先當るべからざるものがある。塞國が俄に不安を感じたのも尤もである。而かも其結果は果然ボスニアに於てあらはれた。即ちボスニアは恰度兩運動の接觸爭奪の地點に當り、從來或は彼に附くものあり、或は此に附くものがあり、大體に於ては云はば形勢觀望の地位にあつたものであるが、今や三國鼎立運動が非常な元氣を以て發展し來るに逢ひ、其實現が近き將來に於て疑ふべからざる事實となると云ふ事を考ふるに及んで、彼等は翕然として心を西方の同志に寄せんとしたのである、其結果として從來多少の勢力を占めて居つた大塞比亞主義は、段々ボスニアに於て其立脚地を失はざるを得ない。是に於て塞國は決然之に應ずるの策を講ずると云ふ事になる。而して策は頗る簡單である。即ち三國鼎立運動ハ運命は、從つて大塞比亞主義の運命は、只一に繫つて大公殿下の存否にある。故に鼎立運動の起るや頗る簡單であつたが如く之を沮止するも亦極めて簡單な手段を以て足る。手段が簡單なだけに彼等は機會を見て必らず之を實行しようと考へた。斯くして大塞比亞主義者の間には、皇儲殿下暗殺の計畫は實に夙くから計畫せられて居つたものと想像せらるゝ、されば皇儲殿下の暗殺は、單に墺塞兩國の外交關係が近年危急切迫を告げ、又兩國民の反感が極度に達したと云ふ事のみの結果ではなかつたのである。

終りに一言附加すべきは、皇儲殿下の死が如何に三國鼎立運動者ヶ失望せしめたかと云ふ事である。殿下無くんば此運動は當分實現の見込は無い。殿下の死は墺國內の帝國主義者をして帝國的希望の消滅なりと歎ぜしめた如くに、南スラヴ人殊にクロアシア民族をしてまた痛哭痛歎措く所を知らざらしめた。或る有力なる新聞は曰く、暗殺者は能く之を刑するを得ん。然れども全民族の希望と期待とを滅斷し去りしの罪に至つては、何の刑法か能く之に適當する刑罰を加ふるを得んやと。(一九一四年八月英國「現代評論」所載セートン・ワトソンの論文「フランシス・フエルヂナンド大公」による)暗殺事件の起つた當時、最も著しく之に憤激して反塞的暴動を起したのは、維納に次いではアグラムであつたといふのも怪むに足らぬのである。

日本人の新發展地としての南米及南洋の研究

△日本人の新發展地としての南米及び南洋の研究

嶺八郎

今回の問題は最も趣味ある問題であつて然かも現下の我等日本人に取りては極めて重要なる問題であるが唯徒らに輕佻の念に驅られ何等の準備もなく又何等の計畫もなく一時の風潮に乘りて飛び出すが如きは深く戒しめざる可からずと思ふ然に我等日本人の多くはラテン民族の短所即輕佻の氣風ありてアングロサクソン民族の長所即重厚の根性に乏しきを以て往々輕擧失敗に陷り倘人の一身を誤るのみならず延いて國家の煩累を來たし民族の不名譽を釀すことも少なくない特に我輩の如きは南洋又は南米の事情は多少研究しあるも實地を踏まざるを以て十分責任ある意見は述べられないから此等は責任あり信用ある南米通又は南洋通の人に聞かれたく我輩は大體の點に於て少しく述ぶることにしようと思ふ

第一、熟々目下の世界を達觀するに何れの國に於ても年々歳々人口の増加は滔々として止むことなく從つて列國何れも一面には領域の狹きを訴へ他面には生活難の度は益々甚しきを加へ「我れにパンを與へよ否らざれば死を與へよ」の喚聲は社會の各方面に起り之れが爲め社會黨や共産黨や種々の結社も紛起する始末にて何れの國も之を救はん爲め競ふて新領土の獲得に國力を注ぎ最早や南天北地殆ど無主の地なき有樣である特に近來は領土獲得の愚なるを悟り所謂名を捨て實を採るの政策を執り未開の地又は貧小國に向つて或は資本を投じ或は人民を移し以て經濟的に新天地を開拓する事となつた其の結果は此等の人々が利福を得るのみに止まらない母國の爲めに其の富强を進め國力を増すことゝなり即ち内に起れる禍と轉じて福と化し更に未開の人民にも幸福を與へ其の文明を進むる次第である

我國の如きも臺灣朝鮮を除きても人口已に五千四百萬人餘に上ぼり其の密度は世界の第三位を占め然かも其の六割五分は殆と農民なるに其の耕作反別は僅々五百數十萬町歩に過ぎずして農民一戸の反別僅かに壹町歩に足らざる次第であるから如何に勤勉すればとて壹町歩足らずの土地より得べき生産物を以て租税を拂ひ、子女の敎育を爲し、社會

上の咬物を盗し、一家數人の衣、食、住を支へんことは可能はざる所である故に年々彼々公憲處分に遭ふもの、監獄に入るもの、養老養育院等に入るもの、私生兒の產出等年と共に多きを加ふる有樣で此の方面よりのみ見るときは我國は常さに亡國的現象に富み居るのである然かも一方を顧みれば毫も剛健にして遠大の計なく唯一日の安を是れ偸むの風潮殆と一世に漲ぎり上下滔々として虛飾に流れ奢侈に傾き狡猾小智以て目前の利を爭ひ奮鬪努力汗を以て新生面を開拓せんとの意氣の如きは甚だ乏しき現狀である然かも教育あり思慮ある青年を以てするも職業を得ること頗る困難にて各專門學校の卒業生中就職し得るものは實に二割内外に過ぎずと思ふ英國の通商局報告によれば無職者の數壹千九百〇壹年には二分四厘なりしに壹千九百〇貳年には四分四厘となり翌三年には五分壹厘となり翌々六年には六分五厘となり其の翌々八年には八分參厘に增加したる有樣である我國の如きも精確なる統計なきも恩給や年金を支給せられて樂隱居を爲し居る古軍人や古役人の無職業者を除きても實際職に就く能はずして氣息奄々僅かに不安と不快の間に其の生命だけを保ち居る青年等に於て恐らく佛國の五十萬人には下らずと思ふ

此の如き有樣にては如何にして列强と相併立して國家の獨立を保ち國力の增進を計ることが出來ようか想ふて玆に至れば此の國民的大覺醒を以て開國進取の大方針に向つて全力を傾注し内に增加する人口を外に發展せしめ以て海外に於て新乾坤を開くの外なき事と思ふ唯遺憾なるに現時の政治家動もすれば植務の爭奪に腐心し此等國家の大問題——將來の運命を賭すべき——に對して冷淡なるは勿論外務當局者も海外の發展に向つて十分の保護を加へざるのみならず或る場合には却て發展を妨害するが如き行爲さへあるは痛嘆に堪へざる所である

過去百年間に於ける各國民の增加概表

國名	一八〇〇年ノ人口	一九〇〇年ノ人口	增加割合	最近(千九百十三年)
露國	三八、百萬人	一一二、百萬人	三倍弱	四倍半弱
米國	六、	七六、	十二倍半强	十六倍半强
獨逸	二一、	五六、	二倍半强	三倍强
墺匈	二三、	四三、	二倍弱	二倍强
英國	一六、	二七、	一倍半强	三倍强
佛國	二六、	三五、	一倍强	一倍强
伊太利	一八、	二三、	一倍强	二倍强
日本	二五、	四四、	一倍半强	二倍强

即ち知る世界の人口は百年を出でずして二倍以上に上ぼるべきを從つて此等の人口に對し如何にして衣食を與へ如何にして生活せしむべきやは今後に亘る國民間の重要問題にして寧ろ人類共存の大問題たるべく戰爭も平和も國政も皆之れより起るものたるや明なり

第二、果して然らば我國民は將來如何なる方面に向つて移住し如何なる地域に發展すべき乎是れ極めて重要なる問題にして深く研究すべきものである、然に北米の如き布哇の如き濠洲又はニユージーランドの如

きは我等日本人の發展すべき適當の地方なるも目下は殆ど禁止の狀態であるから餘す所は南米と南洋との外には開拓の天地がない元來新天地を開くに第一重要なるは自然的要素にして先づ地理の便否、氣候の良否、地味の如何を究むることとなり第二に重要なるは人爲的要素にして即ち其の地域に於ける政治、住民の性質、風習は勿論其の密度特に經濟上の狀態等を審にせねばならぬことと是なり何となれば南米の或る地方の如く黄熱病流行する所又はボルネオの如く猛獸毒蛇の滿つる所又我邦人を見ること仇敵の如き所にては到底有終の美を收むることが出來ぬ是を以て其の地理的關係に於て又は其の人種的關係に於て更に其の貿易關係に於て最も滿順なる所に先づ開拓を始むるを得策なりと思ふ既に此等の關係を審にしたる以上は更に進んで如何なる計畫により如何なる事業を計畫し以て其の新運命を開き以て一身一家の樹立を計るべきは極めて緊切なる問題にして又最も重要なる案件である勿論新開拓の當初に在りては事業の中堅は農業であつて漁業や工業や鑛業や又は貿易は從たるものであらう

第三．何事も成功の眞諦は堅忍持久に在りて奮鬪努力を要するものであるから唯一時の流行熱に浮かされ南洋の天地は坐して富山を爲すが如き夢を畫きつゝある薄志弱行の輩は決して有終の成功を遂げ得るものにあらず必ずや「初志を遂せずんば死すとも已まず」の大決心と大覺悟とを持して之れが斷行を期せざる可からず一たび定めたる目的は必成を期すべく乃木將軍の所謂熟慮斷行は日夕服膺すべき坐右銘なりと思ふ

　踏まるとも根強く忍べ済芝の
　　やがて花咲く春をこそ待て

悲しきこと、辛らきこと、を耐へ忍びてこそ成功の花も咲き實をも結ぶ次第であるから身の續く限り働くことと極めて肝要と思ふ又既に仕事に付きし以上は充分趣味を持つて愉快に其の進行しつゝ成功の域に入るを樂しみて働くを肝要とす自分の仕事を自ら賤しむ樣にては成功は遂げられざるなり特に新開地に於て自己の精神と自己の勤勞とを頼む外他に頼みなき場合には極めて肝要なり

　ぐる〳〵と凍る暇なし水車

明治陛下の御歌に

　雨たれにくぼみし軒の石みても
　　かたき業とて思ひすてめや

抑海外に在りて最も必要とすることは精神の糧を十分にすることとなり蓋し何事も眞面目に誠實に働くことを心掛けなければ成功せず特に海外に於ける人には此の自覺（即ち心掛け）一日も缺く可からず之を換言すれば心の糧なくしては南洋又たは南米の寶庫も決して其手に開かれずドクトル、ヘール氏の訓言に

一、上を見よ下を見る勿れ
二、前を見よ後を見る勿れ
三、外を見よ内を見る勿れ

四、手を貸せ

とありて我國民の如く向上心に乏しく事業の經營に彈力なきもの特に公利公益の經營に向つて手腕を要し且つ海外發展には大に味ふべき所と思ふ

第四、終りに我輩は先づ以て左の要望を提供するものである

(一)本邦人が既に移住し又は發展し若くは將に將來發展を望み得べき所には特に我領事館を設け此等の邦人を保護すること(然かも其の領事たるものは單に言語儀禮の末節に堪能なるものでなく眞に國民を指導し保護し以て此等の成功を助け國家民族の發展を期し得べき人を特派すること徒らに宴會に出入し又は形式上の報告を以て能とするが如きものは斷じて不可なり)

(二)南米又は南洋の中福地には宗敎家又は敎育家を派して移住者の精神上に慰安を與へ且つ國民的精神を培養し向上せしむること必要である彼の外國宣敎師が身危險を冒して深く蠻地に入り學校を立て敎會を起し病院を建て土着民を敎化し自國民を保護するの點は誠に羨まし我國の僧侶などは夢にも及ばぬ所である布哇を除く太平洋諸島には已に壹萬人以上の邦人居るに日本の宗敎家なるもの一人有りや如何

(三)婦女なき移住者又は新開者は成功乏しきを以て女性の多くを男子と共に移らしむるか又は移住地に婦女を送ること極めて肝要なり寧ろ夫婦の關係を持たしめ所謂苦も樂も相共にして働かしむることを要する辛苦多き此の世然かも海外萬里の地に在りて家族の慰藉ほど精神を鼓舞するものはない彼の南米サンパウロの如き特に南洋ニユーカレドニヤの如き我邦人既に數萬又た數千なるに比較的我婦女の渡航するもの甚だ少なし當局者も相當の便法を講し婦女を送り夫婦の關係を持たしむること必要なるが世の慈善家は眼を大にして恆久永遠の根底を立て以て開拓の成功を期せしむる爲め英佛獨に於けるが如く婦女海外移住奬勵の事業を起されんことを望む

(四)已に移住者の多きを加ふるときは醫師、產婆、藥店、大工、鍛冶、理髮、裁縫等順を逐ふて送るを必要とす又勤儉貯蓄の實を擧げしむる爲め銀行の新設も要する此の如くにして始めて堅實なる成功と發展とを望むことが出來る

(五)次に此等の新天地には命令航路を開始し其の運賃に付きては特に割引の制を斷行し且つ定期航路の數を多くして此等移住者の日常使用する本邦品を送り又新開地よりも輸入を受け貿易上の關係を付くることは慰安の助にもなり國產發展の一ともなり更に國民的精神の涵養ともなる又事情許す得べくんば時々我軍艦杯も時々見舞ひ吳れ又時としては軍用船抔が是等新開拓者の爲め特殊の便宜を計り吳れる事とならば彼等の心强きは勿論新開地の土民に對しても威を示す事にもなり大に發展の實を擧ぐることと思ふ

結論

ライシユ氏は其の殖民政策に於て論ずらく「數百年の歷史を有する國

家は今や殖民と商業とを以て世界の大帝國として新發展の中心力たらんとするに至れり寧ろ之を以て國家興亡の試金石とし或る歐洲の邦國は殖民事業を以て國家死活の問題とせり」云々と我國の將來を達觀するときは大に鑑みる所なくんはあらずと思ふ左に英國が富强なる所以のものは其の關係殖民地に英國品を需要せしむることの大なるを見ば以て其の原因を明にし得べし（壹千九百年度の英國製品需要統計）

地名	毎一人の消費額
ヴヰクトリア	弗 二八、五九
ニユーサウスウエールス	三五、七五
西部濠洲	五八、九八
濠洲全部	三二、八七
喜望峰殖民地	二二、五二
ニユージーランド	三八、八一
北米合衆國	一、四六
獨逸	二、四〇
智利	五、六〇
加奈陀	八、三九
ナタル	一七、九七
印度	〇、五〇
佛國	二、五二
[illegible]	[illegible]
アルゼンチン	七、二六
メキシコ	〇、七二

英國品の英領殖民地全體に對する需要額は一人平均十五弗八十一仙にして諸外國の需要は一人僅か三弗六十四仙に過ぎず即ち加奈陀の如きは米國民の五倍强を需要し印度の貧弱國に於ても獨逸國民の上に在るを知るべし

海外國に向つて發展せんとする青年に對し特に言ふべきものあり世は混亂にして溷濁せるも此間に確立して國家を其の双肩に荷ふべきものは實に青年の外なし玆に於て乎青年は

（一）其の心事を高尚にし
（二）其の思想を宏大にし
（三）其の氣象を剛毅にし
（四）其の感情を純潔にし
（五）其の目的を遠大にし

以て祖國の爲め自己の爲め父母の爲め將た同胞の爲め奮鬪せんことを

△南進論

文學博士　原勝郎

居らぬから、今之を論ずることを見合はせるが、南洋の方は研究は淺いけれど、其一部分をば一昨年の末から昨年の春にかけて旅行したことがある。そこで予の實見した所を基として、極く簡單に心付きを述べて見やうと思ふ。

戰爭の始まる以前には、南進北進孰れが可なると云ふ議論が我國で喧しく鬪はされた。朝鮮の經營にも改善の餘地尙多く、臺灣の拓殖とても評判程には成功を收めてをらぬらしいのに拘はらず、只管前きへのみ進まうとするのは、國家百年の計として、果して最上のものであるや否やは疑はしい。けれども予は臺灣朝鮮をば今のまゝにして置いて北進又は南進するのが、甚しく國家の不利益になると云ふのではない。加之國家經營の下にてではなく、又は如何なる形式に於ても國庫の迷惑となることなしに、個々の國民が海外發展を企つる場合には、要するに國家の利益と矛盾しなければ、それで結構な譯であつて、必ず國家の利益を主眼としなければならぬといふことはない。而して假令最初の動機が國家の利益を計るに存じなかつたとしても、其事業が國家の利益に矛盾せぬ限りは、將來の發展に伴つて、自ら國家の爲めにもなることは明である。故に個人事業としての海外發展はいつでも薦みすべきものであつて、他から彼此說を述べて、企業者の腰を折るべきものではない。

南進北進の優劣は、今玆に主題とする所のものでないから、此議論に深くは立ち入らぬが、今迄の北進論の中には、滿蒙經營の外に、露國の復讐戰に對する準備といふやうな意味がほのめかされて居つたと思ふ。世には憎いものと嫌なものと區別がある。日露戰爭以前の露國は、日本人にとつて憎さげなものであつたけれど、嫌らしいものではなかつた。而して其憎くらしい度も、日露戰爭後大に薄らいで來たのみならず、今度の大戰爭になつてから、兩國民は著るしく相接近し、氣の早い連中は日露同盟論をさへ唱ふるに至つた。橋本左内などは定めし地下で大喜びのことゝ思ふ。されば日露同盟論は別としても、露國が日本に對する復讐戰を企てることは、先づ近き將來にありさうもない。未來永劫露國と戰ふことがないと斷言はせぬが、之を近い危險のやうにほのめかして國民を威嚇し、北進論に歸依させるには當らぬ。して見ると今度の大戰爭の爲めに、北進論よりも南進論の方がいくらか優勢になるだらうと推測される。

然らば個人事業として南洋方面に發展するのは何處が最もよいか。此問に對する答は唯一ではない。其發展を企てる個人の事情によつて大體二つに分かれる。若し夫れ相當な資本を投じやうといふ考へならば、第一に其人が從來積んだ經驗知識を最も多く利用し得る方面と事業とを擇ぶべきであるが、資本さへあれば必しも之れとは限らぬことで、日本人の投資を許さぬ地方は別として、其他は適く所として可からざるなしと云つてよからう。又は表面上日本人に活動の制限を加へて居る地方でも、外國人の名義で經營し得ることもある。鑛業もよからう。漁業もよからう。農業もわるくはあるまい。數年間資本をねかすことを厭はずば、護謨園もよし、椰子の栽培などは手堅い見込のある事業であらう。又直

接生産の任に當らずとも、其有する資本を以て、既に生産されたる品物を買ひ入れて、商賣するのもよからう。南洋に需要のある品を日本から輸出して、彼地の産物と貿易するもよからう。支那人と競爭する根氣のある位なら、西貢や暹羅で精米會社を起こすもよからう。非常に利發であるか、又は特殊の知識經驗に乏しい、而かも勤勉な人は雜貨商となるも可なりである。要するに資本さへあるならば、海外發展について、あまり心配する必要はない。

資力を持て行かずに、藝を賣り、勞力を賣つて發展しやうとなれば、いくら無盡の資庫の南洋でも、いろいろ考へなければならぬ條件が多い、第一に資本のない者は、他人の資本に依賴しなければならぬ。換言すれば既に西洋人が根據を占めて、拓殖に成功して居る所か、或は日本人の先達が、既に相當の立脚地を有して居る所でなければならぬ。日本からして曾てはメキシコ、後には南米に時々試みられた所の、彼の資本家と結んで多數の移民が出掛けて行くことは、これは主として資本家の事業として論ずべきものであつて、海外で成功しやうとする個人に、乾度手輕く資本家が探し當てられるとは限らぬ。而して假令資本家に對しては有望な土地でも、個人として出掛ける勞働移民に、必ず都合のよい土地であると推論することは出來ぬ。されば同じく移民地の名稱の下に被はるゝとしても、此二種の移民地は一概に論ずることの出來ぬもので、個人移民にとりては至極結構な土地でも、資本家の手出しの出來ぬ所もないとは云へぬが、一般に個人移民の方が行く先きを多く制限されて居る。

何故かと云ふに、歐米人の既に根據を占めて著々拓殖に成功して居る場所であるから、日本の勞働者の移住地として適當であるからと云ふので、さて其所へ出掛けて行かうとしても、先方で入國を許さぬといふ場合もある。濠洲の如きは即ちそれだ。斯かる國をして日本移民を拒絕させぬやうにするには、少くも向うで表面上の口實とする所のもの丈けは、除き去らなければならぬ。手短に云へば、日本から高い敎育ある紳士を募集して移民として出してやらぬ以上、先方では何かと苦情をつける。勞働者を移民としやうとすれば、必ず品性云々といふ理屈を持ち出して、尤らしく反對する。而して日本に於て移民となり度い紳士は少く、海外に出掛けやうとする熱望を懷いて居るのは勞働者だ。つまり議論は勞働者を移民として入れる爲めには、第一に移民中に勞働者を加ふべからずと云ふことになる。要するに出來ない相談だ。

移民に限らず總體に日本人の品位が高まれば、從つて日本からの移民が歡迎されるやうになるとも論ぜられるが、抑も日本人の品位とは何であるか。若し日本人の修養が足らないと云ふならば、つまり日本の文明の程度論で日本の文明を西洋人の驚嘆するやうに高めることは、一朝一夕の仕事ではない。我國で年々增加し來る人口の始末をする爲めの移民問題といふやうな、焦眉の急ある要求に應ずる解決法とはならぬ。若し又日本人の品位といふことが、日本の國としての列國間に於ける地位といふ意味であるならば、それが向上する程、移民には不利益になる傾向がある。現に日露戰爭後即ち日本國の國位が高まつてから、日本の移民

は益々排斥されるやうになつて來て居る。日本が輕蔑されて居つた間は、日本の移民は寧ろ今日よりも歡迎されたことは明白な事實だ。

要するに品位論から來る移民排斥は、之を我に有利なやうに解決するのに甚困難であるのみならず、之を解決しやうとすれば、却りて排斥される理由を增すことになる。加之議論が曖昧な議論であるだけに、いくら論じても涯のないものだ。而して此品性論は實はホンの口實に過ぎぬので、排斥の眞の理由は、其奥に潜んで居るから、假りに日本移民の品性が、先方の注文にキツパリ嵌まるとしても、排斥は止まない。濠洲の勞働者は少く働いて樂に暮らさうとして居るから、競爭者の殖ゑるのを喜ばない。從つて勞働者の天下である濠洲に、日本移民を入れることは、濠洲勞働者の品性を改良せぬ限り、甚困難なことゝ云はねばならぬ。此度の戰爭で日本の艦隊が濠洲艦隊と協力したと云ふことから、日本に對する濠洲人の感情が、大によくなつたと云ふ說ではあるが、まだ樂觀は出來まいと思はれる。

濠洲の次は比律賓だ、比律賓でも日本移民を歡迎しては居らぬが、濠洲程手厳しく排斥はしない。そこで日本の勞働者は可なりに入つては居るが、近頃は一通ならぬ手數をして入る者が多い。入つた上は勤勉なものは相當に成功して居る。カリフォルニアに入り難い日本人が何故比律賓に入ることが出來るかと云ふに、比律賓は米人の統治の下に在つても、米國人で比律賓に於て勞働に從事して居るものは極めて少い。日本人のある者が臺灣で車を曳き、臺灣人を載せて、それで生活して居るといふやうなことは比律賓の米人にはない。比律賓の勞働者は土人でなければ混血兒である。而して此等土著の勞働者で間に合はぬ仕事もある。そこで日本の勞働者の入り得る餘地があるので、且つ比律賓に於ける米人の利益とも衝突しないから、從つて比律賓政府は日本移民を排斥せぬのである。されば若し米國が比律賓に獨立を許して、手を引くことになり、比律賓の政府が土人の政府になつてしまうならば、日本移民は、今日よりも一層歡迎されるとは限らない。移民の仕向け先きとしてのみ考ふるときは、比律賓の現狀は決して日本にとりて不利益なものではないと考へる。

蘭領諸島の中瓜哇は、土人の人口丈けですら、既に稠密に過ぎる位であるから、日本の勞働者の入り得る餘地は殆とない。團體移民などの出來ぬことは勿論である。よしまた餘地があつたとしても、猜疑深き和蘭政府は、其入國を許すまい。瓜哇以外の蘭領に遺利の多きことは云ふまでもないが、これは資本の放下地として先づ論ずべきものであつて、勞働者が重なる部分を占めて居る移民の仕向け地としては、最初に考察の目的物となるものではない。眞珠貝採取の爲めに、ドボ島等に雇はれて行く者は例外である。

此度獨逸が太平洋で失つた諸島のうちで、どれだけが日本のものになるかは未定であるけれど、いづれにしても皆小さい島であるから、濠洲や比律賓や瓜哇などゝ同日には論じられない。しかし其うち幾らか日本のものになるならば、日本人が安全に資本を下ろし得て、結構なことで

あらうと思はれる。但し移民の住向け地としては如何であらうか。資本を下ろすにしても恐らくは事業主と監督者と丈けが日本から行つて、下廻はりの勞働者としては、土人を使ふ方がよいと云ふやうな場合が多くはあるまいか。土人で間に合ふことを日本からの移民にやらせて、土人の競爭者たらしむることは餘り香ばしい植民政策ではない。若し幸に原料品のみならず、現地で多少の加工をすると云ふやうな事業が、南洋に於て日本人の手によつて經營さるゝことゝなるならば、移民事業もいくらか好都合になることゝ思はれる。

概して云へば南洋に出掛けて行くのは結構なことで、内地で働くと同じ位勤勉に働けば内地以上の收入のあることは慥かであるけれど、濡手で粟といふやうな、惰けて儲かる仕事は南洋にない。南洋の富源が無盡であると云ふことからして其富源が懶惰者の利益になるといふ結論は出て來ぬ。海外出稼を希望する人々は、果して内地で先づ其全力を揮つて見た人達であらうか、果して勤勉な人ばかりであらうか。

海外出稼の志望者の中には、徴兵忌避の爲めに日本を暫く離れて居りたいといふ連中も少くないやうだ。此等の人々は徴兵令の施行されぬ地方に、一定の年限滯在するのが主要なる目的で、滯在中仕事をするのは、幾年も袖手して居れぬから巳むを得ず働くのである。固より奮發心の起る筈がない。幸に成功する者があれば、それは僥倖と云ふものだ。極端に海外出稼奬勵說を保持する人は、丁度徴兵適齡頃の年輩の者が、身體も元氣も共に旺盛であるから出稼をするのであつて、兵役の忌避が目的ではなく、出稼の結果自然猶豫を願はなければならぬのであるから、强ひて咎むるに足らぬと云ふ。しかし二年兵役をすまして、二十四歲になつてから出稼したとて、遲過ぎることはなからう。二十一歲と二十四歲とで、身體にも元氣にも大した差別はなからうと思はれる。

國民の義務として兵役を忌避することのよくないのみならず、南洋に出稼する爲めにも兵役をすまして行く方が利益がある。南洋と云へばつまり熱帶であつて、氣候に於て日本と大差がある。從つて氣候に馴れる迄に病氣に罹かり易い。所が日本に居つても、兵役に服すれば、一般の人に比して寒暑共に抵抗力を增加することが出來る。寒さは暫く措き、暑氣は日本であまり酷しくはないけれども、それでも軍人生活の夏の暑さと、普通人の暑さとは大に差がある。日本に於て暑氣に對する抵抗力を充分に養つてから南洋に出稼すれば、病氣にかゝる危險は餘程減ずるが、それには日本で兵役をすましてから行くのは何よりもよい方法だ、加之南洋に出稼ぎするのは或意味に於て命賭けである。兵役を忌避する位の臆病者では成功が覺束ない。予は海外出稼者の爲めに種々なる點から切に兵役を勤め了ることを勸める。徴兵檢査の濟まぬ者には、移民としての海外旅行免狀を下附せぬやうに法律を設けるもよからうと思ふ。

終に臨んで述べたいのは、移民たる者須らく移民地の土となる覺悟、換言すれば永住の覺悟を持て出かくべしとの說である。斯かる說は出稼者よりも出稼がぬ者の口から多く出る說で、同胞に對する同情を缺いて居る言である。日露戰爭中には、滿洲の寒氣をも戰の苦しさをも察せず

に、暖衣飽食しつゝ飽くまでも主戰論を唱へた人々もある。予は當時の主戰論者一般を攻擊するのではないが、戰地に在る同胞、及び其同胞の內地に在る家族等の困苦悲哀をも察せずに、唯議論としての主戰論を唱へた人々戰捷に狂喜して其犧牲となつた同胞を顧みぬ人々を憐れと思ふのである。此度の歐洲の戰爭に日本からも出兵せよといふ論者の中にも、これに似た連中があるやうだ。予は日露戰爭の主戰論者よりも、此度の歐洲出兵論者に一層多く僥倖たる感がある。歐洲出兵論は日本人のまだ眞面目にならぬ證據と云つてもよからうと思ふ。しかしこれは枝葉に涉るから議論せぬ。

移住先きで死ぬ覺悟を以て行けと云ふ說も之に似たるものである。出稼者が其覺悟で行くのには異存がない、寧ろ結構なことゝ思ふけれども、此の如きことは出稼がぬ者からして出稼者に强いて要求すべきことではない。出稼期中全力を盡くし、相當な成功を收めた上で、日本に歸へると云ふに何の不都合はない。南洋のやうな氣候のよくない土地に、是非共死ぬ迄居れと云ふのは、殘酷に過ぎると思ふ。居りたいものには居らせ、歸へり度いものをば歸へらすがよいのである。又子孫末代南洋の人にならうと云ふ連中があつても、其子供の敎育丈けは日本で敎育したい。風土氣候の感化は恐ろしいもので、西洋人でも長く南洋に居住すると次第に土人化して下等になる。予は南洋に出稼する健康な人々の子孫を、南洋土人のやうに退步させたくない。或は死ぬ位の決心がなくては志操が堅實でない、從て成功せぬと云ふだらうけれど、必しも生死を云云しないでも堅實な志操を持ち得ると思ふ。死ぬ死ぬと云ふ者に死んだ例は少いではないか。若し覺悟だけ死ぬ覺悟にして置けば、實際は歸へつてもよいことにすると云ならば、滑稽と云ふ外評する辭がない。

永住の意氣込がなければ、大事業も出來ぬのみならず、折角の事業も中途で廢絕し、日本人の爲めに牢固なる勢力を扶植することも出來ぬと云ふ論は、道理ある言である。しかしながら此點に關しては、予は個々の出稼者よりも寧ろ日本の大資本家の反省を得たいと思ふ。大資本家が南洋に於て永續し得べき大事業を計畫し、それに日本からの出稼者を使用し、事業そのものは恆久に亘り、出稼者は働き盛りを彼地に過こした上で、新しい血氣の壯な出稼者と交替して內地に歸へり休養することが出來れば、同胞の人種としての退步を免れ、同時に日本人の手によりて南洋の富源を開拓することも出來て、一擧兩全の策であると考へる。南洋移民に關して卑見を需めらるゝに當つて、尤も望ましいのは我國資本家の奮發であると信ずる。南洋とは如何なる所かといふ問に對しては、予が昨年著はした「南海一見」の一讀を願ひたい。それには儲かるとも儲からぬとも書いてはないが、讀者にボンヤリした南洋の印象位をば與へ得ることゝ信ずる。但し斷はつて置くが、拙著「南海一見」は、實際予の見た南洋よりは、少々許美しく彩どつてあるから、讀者若し一割引位の積で讀まるゝならば、實地に臨まれても大なる失望もあるまいと思ふ。

以上は個人事業として南洋へ發展することに就てのみ論じたもので、國家事業としてではない。國是として南進が第一の急務と云ふのではな

い。若し國家當面の急務としての論ならば、予は南洋よりも南米よりも、第一に我國既得の領土なる朝鮮と臺灣とに、今のうちに早く日本人の勢力を固め、日本人を充實させ度いと切望するのである。

△南米の開發と世界人類の幸福

神谷忠雄

移民の必要は今更言ふまでもないこととして、將來我國民の發展すべき移民地としての南米を論ずるに當つて、前以て斷つておかねばならぬのは私の謂ふところの南米とは、メキシコ以南所謂ラテンアメリカ諸國の全部を指して言ふのである。先づ第一に、

世界に於ける南米の地位如何

といふ問題である。惟ふに世界人類の活動の歴史は、かの亞米利加發見以來非常なる變化影響を受けてをる。舊世界即歐羅巴大陸に於て、これまで政治上並に宗教上の壓迫を蒙つてをつた人民は、新たに發見せられた新世界即亞米利加に向つて驚くべき勢を以て移住し初めたのである。それが專ら北米の太西洋沿岸に行はれて遂に今日の北米の大を形作るに至つたのである。然るに其一面に於て、イスパニア、ポルトガルからは盛に遠征隊を組織して南米の探險に向ひ、遂にイスパニアはペルーのリマに總督を置き覇を南米に稱するに至つた。而して北米合衆國の獨立以來、南米に於ける舊スペインの領土は殆ど全部獨立の擧を擧げて其の羈絆を脱し、今より約百年程以前、南米の諸國は大抵獨立するに至つたのである。唯僅にブラジルは未だポルトガルの領地として他國人と別種の關係を保つてをつたのであるが、これも程なく獨立して、約二十五年前現在の合衆共和政體となつたのである。實に北米合衆國に於ては歐羅巴人移住の當初巳に獨立の機運が隨所に充ち滿ちてをつた。無論幾多の困難は之に伴つたけれど、移住民其者が已にさういふ氣分の者であつたのと、先驅者の努力並に後進者の熱心とに依つて國運益々隆昌の運に向ひ今日にては最早比肩する者無き國の强大を示すに至つたのである。然るに一方他のラテンアメリカの諸國に就いて觀るに、スペイン若くはポルトガル等の執り來つた方針は、もと〳〵殖民地其物を隆盛ならしめる爲めではなく、それに依つて本國を利せんとする、謂はゞ本國利益主義に外ならなかつたのみならず、從來棲息の土人は勿論之に對抗するの資格は無かつたし、地理上の關係から歐羅巴の移民を吸集すること少かつたがために其進歩發達は北米合衆國に比して遲々として殆ど言ふに足らぬものであつた。然るに近年に至つて、歐羅巴に於ける資本の充實、航海術の發達、人口の增加及び一般文明の進歩は、歐羅巴人を促して此等南米の諸國を開拓するの必要であり興味あることを知らしむるに至り、南米諸國中特にブラジル、アルゼンチンの如きは今や第二の北米合衆國ともならんとする形勢を示してをる。今日世界の政治上外交上に於て

は或は巴爾幹半島に或は極東に、歐洲列强が競爭の中心となつて葛藤軋轢の絕間とてはないが、經濟的並に開發的に競爭の自由を與へつゝある此南米に於ける今後の活動はいかにしても二十世紀の大問題でなくてはならない。然らば。

南米と日本との關係如何

日本は開國以來未だ半世紀にも滿たねのであるが、我邦人の奮勵努力は常に漂泊排斥の不利を蒙りながらも有色人種中能く異數の活動を爲して、或は北米に或は東洋方面に移住し發展し、今日では其數決して鮮少ではない。最近の調査に依つて見れば在外日本人は其數三十六萬人に垂々とせる有樣で、政府として嘗て移民を奬勵することなく、寧ろ抑壓的方針に出でた我國としては驚くべき發展と謂はねばならね。是れ實に我邦人自然の發達であつて、我移民の前途決して悲觀すべきではない。

唯玆に我邦人の最も深思考慮を要するは、かの排日的運動に對してゞある。北米又は濠州に於ける排日的機運に醒まれて、我邦人は堅固着實なる方針の下に海外發展を畫策しつゝあるのであるが、南米に對しても深き考慮を此點に費さねばならぬ。現在の我國と南米との關係は、貿易に就いて殆ど言ふに足らね成績である。僅に少數の絹物類並に各種の雜貨を多少、而も不定期に、メシキコ、ペルー、チリー、アルゼンチン、ブラジル等へ輸出さるゝに過ぎない。而して南米より受くる物貨の供給もチリーの硝石を除いては殆ど數ふるに足るものがない。是れ一には航海の不便と金融に關する便宜無きに因るのであるが、其最も大なる原因は我邦人の注意が未だ廣く南米に向つて拂はれないが爲めである。又移民の關係に就いて觀ると、各種の狀態の下に現住せる我邦人の移民はペルーに於いては約十五年前より、メキシコに於ては約十年前より、ブラジルに於ては約七年前より徐々として行はれ、現在に於てはペルーに六千人、メキシコに三千人、ブラジルに一萬五千人、其他ボリビア、チリー、アルゼンチン等に各數百の邦人が移住してをつて、兎に角一の階梯を作りつゝある次第である。であるから此等の移民を適當なる方法で善導するならば、今後來るべき我移民大發展の基礎をなすべく、今日に於て彼等を充分に保護し、益々彼等の發展を促すのが肝要であらうと思ふ。由來南米は土地廣大にして天然の恩惠に富み、人口稀薄にして其開發を勸勉なる外國人の手に俟てること久しいのである。今や世界の大戰亂勃發して、歐洲列强の手が多少南米方面に緩める場合を利して經濟的並に平和的見地から國家百年の大計を樹つべきである。人動もすれば移民と貿易とを區別して論ずるけれども、南米の如き國に在つてはそは適用せられぬ議論であつて、我國の對南米策としては、如何にしても移民貿易併進主義といふよりも寧ろ貿易をして移民に作はしめなくてはならぬ。即ち其結果航海の隆盛を來すといふ順序でなければならぬと思ふのである。

南米の兩面

親しく南米を觀た者の何人も感ずるところの著しい現象は、メキシコを別として、南米大陸の諸國中太西太平沿岸諸國の文化發達の程度に非常なる懸隔があるといふことである。即ち太西洋に面せるブラジル、ア

ルゼンチンに比して太平洋に面せるペルー、チリー等の開發の晩かりしことは何人の眼にも映ずる顯著な事實である。是れ舊世界即歐羅巴との交通の便不便に依つて分たれる結果であつて、即ブラジル、アルゼンチンの兩國は歐羅巴大陸と近距離の關係上資本並に移民を仰ぐに便利であり、マゼラン海峽を通過せなければ其供給を仰ぐ能はざりしペルー、チリーの前者に比して其文化に浴すること遙に少かりしは蓋し當然と謂はなければならぬ。然るに今や巴奈馬運河の開通するありて、南米交通史に大革命を來したから、今後太平洋沿岸諸國の活躍は期して俟つべしであつて、特にペルー、ボリビア、エクワペル及コロンビア等の恩惠を受くること蓋し測るべからざるものがあらうと思ふ。而して此等の諸國が最後に於ける歐洲列强の注意を集めて、巴奈馬運河の利用により發展し來る場合には、我國民の自覺すべき最も適當なる時機と謂はねばならぬ。而して之に對する準備は今日よりして一日も怠るべからざるものにして、即我國の立場から觀て、萬事緒に就かんとせる太西洋方面には益々其關係を强め、今や將に勃興の機運に向はんとせる太平洋方面には更に活躍の手を延ばさんことこそ必要である。然らばその南米に對する

積極策奈何

といふに我國民は須らく相手國の事情を深く研究し、先づ其國を利し然る後彼我共に恩惠を受くるといふ完全な相互主義を以て進み、我政府亦能く其間に處して政治上外交上何等の誤解をも醸すことなきやう間斷なき注意を拂ひ、我國民の企業的に或は移住的に此方面に向ふ者に對して出來るだけ自由主義を採つて然るべしであらうと思ふ。從來の保護制限主義は比較的少數の又小規模の關係を統一し保護する上には便利であるが、今後大いに伸びんとする積極的方針を立つる上には一層簡なる自由主義を主とすべきである。一策として我に南米經營の一大會社を設立し、其會社の經營に殆ど萬事を委するのも亦一の適當なる方法ではあるまいか。

東西文明の融和

二十世紀の大問題の一は、東西に獨立したる文明を如何にして調和し、異人種間の融和を圖るべきであるかといふことである。而して是れが解決の實際方法としては、南米の如き新天地に於て東西兩様の人種が相融和しつゝ天然の富源を開發し人類共存の目的に努力するを以て最力なことと信ずる。現に南米諸國に於て、歐羅巴人は土着の人間を渾然として融和し、其間何等人種的僻見の介在するを見ない。然しながらこは强者たる歐羅巴人が弱者たる土着人を征服したる結果であつて、征服に依らざる抱擁の結果は未だ見ることが出來ないけれど、結果斯くの如しとすれば、此等の總てに融和したる人種と更に我民俗とを結付くることに困難な事ではなからうと思ふ。即ち南米諸國を以て異人種異文明調和の一大試驗塲たらしむることは、單に物質的理由より之を見る以外に、所謂人類の幸福增進の爲めにする理想の實現と考へることが出來るであらうと思ふのである。

△實際的に觀たる南洋移民の過去現在及將來

井上雅二

將來我邦人の發展すべき移民地として、南洋が果して適當なりや否やは今更之れを問題としない、直ちに之れを適當なるものとして論じて見やうと思ふ。

そこで問題は、何らいふ方面に、何らいふ階級の人が行くべきであるか。又之れに對して準備事項は如何といふことである。

先年來外務省に於ても移民調査費なる項目を設けて我移民を調査した結果は、現在外務省に達した報告だけでも十數冊に上つてゐる。南洋の部門に屬するものにはフイリピン、バタビヤ、シンガポールの各領事館に於てもそれ〴〵調査を行つてゐる、中にもシンガポールの領事館の如きは護謨の栽培事業に漸次我邦人が多大の資本を投ずるに及んで、痛切に移民の必要を感ぜしめたから、今では詳密な調査報告さへ作らるゝに到つた有樣である。

が、それはそれとして從來私の經驗した範圍から考へて見ても、恰度今より四年前、移民會社の手に依つて八十名の護謨園勞働者を馬來半島の北部にあるヒッドゥン、スッリィームの外人の護謨園に試みに之れを採用して見た。彼等の執る作業は極めて荒い例へば伐木とか、材木の運搬とか、或る細かい仕事では栽培の收穫とかいふやうなものゝ農園作業であつた。然しながらその成績は可くなかつた。衞生上の缺陷から患者が多く出た。そこで最初に百五十名の約束であつたから殘りの七十名の移民を送つたのであるが、何分創業の際であつて炎天に曝露されたり瘴癘の氣の散ぜざる時期であつたがためにうまく行かなかつた。が、此不結果の原因は衞生に關する設備が不完全であつたが爲めと、作業の種類が不適當であつたが爲めである、然しながらそれ以上に最も有力な根本原因とも觀るべきは移民そのものが、幼少の時から勞働力役に從事したものでは無くて、渡航者の殆ど全部は南洋の富源を慕ふて集つた所謂學校出とか、或は電車の車掌とか、或は巡査とかいふ階級のものであつて、彼地の勞作に從事すべく身體の訓練が出來てなかつたといふ事である。

現に鹿兒島とか熊本とかから來た農夫の話によると内地の田植などよりは餘程樂な仕事であると云つて居る。勿論開墾の當初は瘴癘の氣があり、マラリヤがあつて健康に適しないけれども、僅かに四年間の私共の實驗によつて見ても、衞生に注意さへすれば病人の數は著しく減じ得る事が解つた。最近の統計の示す所に依ると支那人の勞働者の入院患者は百名について三名の割合であり、少い時は一名に止まるさうである。今では日本人の勞働者は居ないが、監督としての日本人は數十名居る。その内の作業率即ち出勤率は六に對する五である。稍智識ある階級の日本人が九時間の外屋作業にも一箇月の平均缺勤率は百分の二分五厘から三分に過ぎない。それが日曜日とてはなく、僅か一ヶ月二日の休日を與へらるゝ

けてあるとすれば百分の三分五厘やそこらの率は日本の内地に於てもある事と思ふ。かのマラリヤ熱も今ではまだ根絶する譯には行かないが、もはや悪性のものは無いらしい。それは昨年二月から五月に亘つて宮島博士の一行を招聘して親しく各國に就て精査して貰つた結果の報告に見ても明かな事であつて、かの地の衛生狀態は決して悲觀すべきものでなく、歳月を經るに從つて吾々日本人の身體にも適するやうにならうと思ふ。是れは馬來半島の例であるが、シンガポールやバタビヤは古くから開けた土地だけにこれよりも勿論生活し易い。和蘭が過去三百年來國力の源泉として愛寵措く能はざりしヂヤワは和蘭の七十五萬平方哩に較べて五萬平方哩に過ぎないが、その中に三千二百萬の人間を收容して居る。實にヂヤワの人口の密度は白耳義和蘭を除いて世界の第三に位して居る。一平方哩約六百人の密度であつて日本よりも遙に多く、佛蘭西の二倍に當つて居る。

要するに航渡者は時と準備と仕事の種類とを選ぶ事とが肝要であるが、今尚多少の歳月を經なければ氣候に馴れないが爲めに初渡航者は不注意から身體を壞すやうになるのである。場所も護謨園等の新開地に入れば犯される廉があるが、氣候の良い所を選んでさへ行けばその心配も少い。次に仕事の種類であるが、日本での勞働者でないものが彼の地に移住してもそれは無理である。南洋が日本の將來發展すべき移民地である事は論を俟たないけれど、何んな移民をも容れる餘地があるか否やは問題である。私は思ふに南洋は南米とか北米とかと違つて、資本家の行くべき所であらうと思ふ。何故なれば南洋は天然の農産物が豐かである。その農産物を開發して行く爲めには何うしても多大の資本を要する。例へば馬來半島だけに就て見ても護謨の栽培に五億圓、錫の採收に三億圓の資本を要する。馬來半島だけで約五十萬の勞働者が要るとして、印度、支那の七億の人口を控えて居るからして、我日本人が印度人支那人と競爭する事の困難なるは明かな事である。印度といふ國は飢饉があれば餓死するもの三萬や五萬に止らない。であるから英國でも印度人を附近の地に出して勞働させる事を奬勵してゐる。毎年印度から馬來半島に移住する人間は十數萬に上つて居る。英國は之れに對して船賃を低減し、出來るだけの便宜を與へて居る。支那人は契約勞働であつたが今日は餘り之れを見ない。只福建省並に廣東は苦力の出場所であつて毎船千人、年々十數萬の移民を出だして居るから、支那人の勢力といふものも中々侮る事が出來ない。斯くの如く兩隣兩大陸から殆ど無限に輸出せらるゝのであるから我國がこれと競爭する事は非常に困難な事である。殊に賃金の點に到つては從來支那人は一日一圓であつたけれど、歐洲戰亂の餘波を受けて近頃では支那人四十五錢、印度人三十錢の低廉な賃金で甘んじて居る。

事態斯ういふ有樣であるから　日本の移民を圖るにも　細心な注意を拂はねばならぬ。元より南洋の開拓事業はその地に人を入るゝ目的であり、日本人を使ふ目的である事は申す迄もない。さればといつて遽かに支那人印度人を除外する事は今の場合到底出來ない事である。別けて

し出[illegible]きたいのは手に職も技能をも有せない人々[illegible]事に國家の體面から言つても、又我同胞として考へて見ても、何れの點から見ても不得策である。手藝のある勞働者例へば大工とか左官とかを制限して出だすのが最も可いと[illegible]ふ。それ〻勞働者であるが、それならば智識ある階級は何うかといふに、是れは必ず資本に伴はねばならぬと思ふ。大體開墾事業や拓植事業は農務の人を要する事が少い。中學程度の農學校の出身やら工場で働いてゐるやうな人は將來益〻需要が多く、護謨事業にしても技數年もしたら二三千人の中學校程度並に專門學校程度の農科卒業者を要する事と思ふのであるけれど、机の上で事務を執るといふ向の人は從來志望者が多くつて而も用途が少い。是れ等の人が熱心の餘り行つても或は病氣をしたり、或は思ふやうにならなかつたりして歸つて來たものが隨分多いのである。

そこで從來は眞に此の南洋を紹介する團體といふものは無かつたのであつて、吾々の聞いた事さへ無い名前のものは多く詐欺的種類のもので、現に彼地の領事に暴顯して日本に歸る事を待ち侘びてゐる同胞も少くないさうである。で、私共は彼の地の眞相を紹介し、將來移民の發展を圖る爲めに南洋協會を組織し、微力ながら今日吾々も出來るだけの盡力をし又朝鮮の有力者の贊同をも得て居る。願はくは我國の移民課報局のやうなものにしたいと思つてゐるのである。

△南洋と南米に對する私見

外務書記官　田　中　都　吉

將來日本人の發展地として南米と南洋が最も有望である事は殆んど世上の定論と見て差支ない樣であるが南米と南洋とは地理國情大に懸隔し、一併に論述する事困難であるから先づ南洋の事から一言したい。

一體南洋と云ふ語は近來の流行語であるが其範圍は必しも一定して居ない樣である、私は假りに此範圍を次の如く立てゝ說きたい、即ち日本の南方で、西は印度洋、南は濠洲、東は布哇迄を境界としたる一切の土地即ち大陸としては馬來半島、暹羅、印度、支那、島嶼としては蘭領東印度諸島比律賓群島及び東方にある一帶の諸群島を含むものを總稱して南洋と看做したい、此地方が何國と何國に領有されつゝあるかは玆に說明を俟たざる處であるが此地方に最も近接せる日本と支那が此地方に領土を有せざるは注目すべき現象であら（戰時占領地は暫く除外す）而して支那人は此地方に何百萬と數ふる多數に居住又は出稼し居るも日本人は高々一萬五千位（南方ニユーカレドニア及タヒチ等に在る四千内外を除外す）に過ぎざるは亦注意すべき處である、是とても近來急に此く增加したのであつて、明治四十二年頃には六千内外即ち過去五六年間に約二倍半になつたのである、殊に其頃迄は在留者の大部は婦人若くは婦人

に寄食する男子であつて、如何はしい職業のものが多かつたが、近來は他の健全なる方面に益々在留者の增加を見るに至つたは喜ばしい現象である、殊に農業又は林業が續々日本人によりて經營せらるゝに至りたるは實に過去數年間の出來事であつて、今日では馬來半島丈けにも日本人所有の護謨園は十萬噸に達して居る、十萬噸と一口に言へば何でもない樣であるが世界何れの處へ行つても日本人が如此土地を所有して居る處はない、一昨年來殊に八ケ間敷なつた米國加州でも、日本人の所有地面積は二萬數千噸である、殊に注意すべきは馬來半島の土地に投下したる日本の資本は決して先方で儲けたのでなく、多くは內資輸出である事である、日本の資本を持出して外國で商業以外の事をやつて居るのは支那及西比利亞（漁業の關係）を除いては他に餘り例がない、馬來半島に於ける護謨栽培事業は實に我海外發展史上特筆大書すべき空前（絕後ではないであろうが）の事柄である。

併し是は普通の者に望む事を得ない、普通の日本人としては如何なる方面に發展するを適當とするかは大に研究を要する處で、此點に付ては尙一般の研究が甚不充分であると考へるが、之に付て第一に念頭に置かねばならぬのは南洋地方には前述の通り多數の支那人が居り、又之よりも尙多數の土人が居る事である、支那人は大體に於て氣候に慣れ又勤勉である、土人にも種類があるが、是亦勞働者として相當の價値がある、故に日本人として赤手勞働を以て彼等と競爭するは其報酬が不滿足なるのみならず氣候風土の關係上餘程困難である、從てどうしても他に適當の事業を見出ねばならない、是には商業の如きは勿論面白に違ひない、漁業も亦然り、特に農業林業の如きは最も有望であろうと考へらるゝ其他小仕掛の工業も亦適當であろうと考へらるゝ併し何れにしても大か小か資本の伴はざる發展は南洋に於ては勞多くして効少ないと思ふ、此點は南洋に出掛ける人が第一に注意しなければならない。

南洋は政治的にも人種的にも地理的にも日本人に取りては有利な點が多いのであるから、之に渡航せんとするものに對しては政府に於て成るべく自由に其驥足を伸ばさしむる樣にするのが至當であろうと思ふ、唯南洋の事情に通ぜず猥りに濁手に粟的の空想を抱て飛出し、先方で困難するが如き無謀の擧を戒むる爲め適當の方法を執る事が必要であつて、是が爲めに特に渡航を制限するが如きは所謂角を矯めて牛を殺すものであるが、さりとて絕對に放任する譯には行かぬと思ふ、併し此る事は政府の力のみでは行屆き兼ぬる傾があるから民間に於て適當の指導機關を設くる必要があると思ふ、加之私は一步を進めて南洋へ行かんとする人に特別の敎養を授くる機關を作る必要があると思ふ、

一體何處へ出す移民にても多少先方の須要に適合する樣本邦出發前に適當の敎養を授くる事が望ましいのであるが、殊に南洋へ出すものには最も其必要があると思ふ、其理由に就ては少しく詳述して見たい、元來日本人が海外に多數に渡航し始めたのは往時支那朝鮮等との關係は別とし、明治十八年約千名の移民を布哇へ送つたのが最初であつて、其後或は米國或は加奈陀、或は濠洲、進んでは秘露、ブラジル等へ送り、其始

是今日では是等の地方の日本人在留者數が二十萬に達して居つて種々の方面に發展するの盛況を見るに至つたが、元々純粹の勞働者として先方の需要に應じたのであつて、從て身體强壯勞働に堪へ得るものであらば何等の技能學殖なくとも優に先方の好評を博し、相當の報酬に有付いたのである、然るに南洋は南米北米地方とは大に趣を異にする、前述の通り南洋には既に多數の人間が居つて爪哇の如きは人口の密度日本よりも高い位である、從て南北米方面へ向つたものゝ如く、勞働一點張では、糊口も立て難い位である故に、是非共彼等多數の支那人土人の企て及ぶべからざる長所を發揮するの必要がある、さりとて徒に敎育の高いものを送つた處で報酬は必しも敎育の程度に比例しないのみならず敎育あるものは容易に南洋方面に出づるを好まない、故に南洋に適當した一藝一能を有するものを成るべく出す事とし是も其儘出さずして敎養を授けた上で出す事が極めて必要であつて、且其効果は著大なるものであるであろうと思ふ、其敎養の方法は未だ具體的の成案もないが、假令ば馬來語、英語（若くは蘭語）熱帶生物熱帶衞生、南洋地理歷史等の大體の觀念を授くる必要がある、是は何も六ケ敷い事を敎ゆる必要はない、極大體で澤山で從て修業期も半年か一年で充分である、此方法は南洋の事情に照し最も必要であつて諸處に試驗的に此種の機關を設けて見ては如何であろうと思ふ、是が相當の成績を擧げ、漸次他の方面にも及すに於ては日本人の海外發展は面目を改むるであろう、而して是れは政府としては經費其他の關係上實行に困難があるかも知れぬが（臺灣では比較的容易でなかろうか）民間に於て他の南洋關係事業に附屬してやつて見る事は實に一考の價値があると思ふ。

私は今日の樣に徒に南洋熱を煽つて格別の技能も素養もなき人が無暗に出掛る樣では數年ならずして恐るべき結果を生ずる事は必然の趨向であると思ふ、將來南洋に於て日本人の事業が益々發達したる際は日本の移民地として益々有望であろうが、是とても程度問題で、如何に南洋に日本人の事業が發展しても單に勞働者として日本人を吸收し得る程度は高の知れたものであつて、今日は比較的在留者が少數であるから之を二三倍する事は困難でもないかも知れぬが、他國の領土である以上は一定の限度があつて其上は唯一定率の增加を見るの外急速の發展は六ケ敷と思ふ、日本人の事業家自身と雖も普通の仕事には支那人又は土人を使役する方が便利と考へるであろうし、是が健全なる發達を遂ぐる所以であろう、故に南洋は何處迄も事業地として見るべきものであつて、單に移民地出稼地ではない、從て假令一時は勞働するも將來事業家たり得る素質の人を送り出す事が肝要であろうと思ふ。

南米の事は大に趣が違ふ、南米と日本との關係は極めて新しい、日本人が移民として南米に行つたのは明治三十二年約八百名を秘露に送つたのに始まり、今日迄僅に十五六年を經たに過ぎない、秘露は南米の西海岸であるが、東海岸へは伯剌西爾へ明治四十一年に約八百名を送つたのが始まりで、今日迄僅に七年である、如此關係は甚新しいが今日に於ては南米に在留する日本人の數は既に二萬を超へて居る即ち南洋在留者以

上に達して居る、就中伯國には一萬五千も在留して居る、併し如斯急劇な增加を來した原因は決して日本人の事業が起つた譯でもなく、又日本との貿易が增した譯でもなく、全く先方の資本家、事業家が日本人を雇入るゝ事を欲し、旅費迄拂つて之を呼寄せた結果である、即ち始めより被雇者たる資格、勞働者たる資格で行つたもので、夫れが所謂好評を博し、益々呼寄せられたのである、從て今後と雖も此需要が減少する様な事はなく、寧ろ增加する傾向であろうと思はれる、併し急劇な增加は到底困難であろうと思ふ、尤も何等か一時的の原因で急劇に增加する事ないとも云へないが、夫れには常に反動が伴ふ事は從來異人種國へ送つた我移民の經驗によつて推察する事が出來る故、結局急劇な增加が利益である哉否やは大に考へ物で、寧ろ漸次に送り出した方が適當であると思ふ、從て南米に對しては渡航上全然自由に放任し置くよりも多少之を調節し、實際先方で確實なる就働口を有するものか、左なくとも相當の資本又は技能を有するもののみを送る事が利益と思はれる、尤も日本人の事業が發達すれば之に要する勞働者は南洋の場合と異なり、必しも先方の者を使用するが利益でないと思はれるから、此原因により需用が起れば多數の日本人を吸收し得べきも、是は前途遼遠であろうと思はれる、要するに南米に對しては我事業家の發展を望むは二三の例外の場合はあろうが、大體に尚其時機でないので、從來の様に勞働者を送るの外はない、夫れも常に適當に調節して行く事が至極必要かと思はれる。

故に一言したいのは、南洋にしても南米にしても年々五六十萬も增加する日本の人口の捌け口としては其微弱であつて、假令今後調子よく行くとするも一年五六萬以上を此方面に吸收せしむる事は決して容易でないと思はれる、勿論無理に押出せば或は其以上を送り得るであろうが、其結果は渡航者自身の不幸と日本全體の不利を招く恐れがあつて輕々に斷行し難い、南米南洋已に然りとせば他は推して知るべしである。從て私は一派の論者の唱道するが如く、我增加人口の大半を海外へ振向ける事は實際空想であろうと思ふ、彼の伊太利等の例を直に日本に行はんとするは彼我の事情の相違を度外に置くもので、日本は伊太利と同様な事を行はんとしても第一時機が伊太利に比し後れたるのみならず人種的、政治的、其他種々の理由により伊太利等よりも一層苦き經驗を踏むの覺悟を要するは從來我移民史上に明白なる事實であつて之を蔑視する譯に行かぬ、是等の困難を無理に押破らんとする爲には他に重大なる利益を犧牲に供し、結局損益相償はざる結果を見ると思ふ、假令多大の困難を排して無理に移民を出した爲に、彼等の送金等にも多少母國を潤はすとするも、從來の經驗によるに一年一人平均百五十圓の送金が先づ絕頂であつて、此上は望み難い、從て假りに此際十萬の海外在留者を增加したとしても、送金による利益は最大に見積つて千五百萬圓である、尚此他に有形無形の利益はあらんも之と共に有形無形の損害もある若し十萬の人々を新に送り出す爲めに要する努力と費用とを貿易擴張の方に向けたならば其利益は單に千萬や二千萬に止まらないであろう。

移民を獎勵し特に之を南洋南米方面に發展せしむるは頗る贊成であ

て今後は大に奮發努力を要するが、併し移民の範圍には自ら相當の限度があつて、其限度を超ゆるを顧みず無理に海外へ押出して快哉を呼ばんとするが如きは甚不得策であらうと思ふ、海外に於ける移民發展の途を研究する事は勿論大切であるが、更に貿易の開拓に對して努力の必要がある、南洋や南米に移民の餘地があると同じく露國や、支那內地や印度等に貿易の餘地が多々あること丶思ふ、故に私は日本の海外發展に對する方針はどうしても第一貿易、第二移民と云ふ順序であると信ずる。

以上は凡て私見である。

△腕一本で南洋に渡らうとする移民勞働者の爲めに

仲省吾

南洋は我が貿易地として又殖民地として大に有望であるのは言ふまでもないが、それにはそれ相當な設備といふものが必要である。現在のやうな狀態では到底も我國將來の發展を期することは出來ない。今私は一旅行者としての私が感じた二三を述べて、南洋への渡航を志す人への參考ともし、併せて當局者の注意をも促さうと思ふ。極めて平凡な一旅行者の觀察であることは更めて斷るまでもないことである。その第一の問[illegible]

交通の便

をよくするといふ事である。

今日日本から南洋への航路は南洋郵船會社の一汽船が、臺灣から香港、シンガポールを經てジャバへ通つて居るのであるが、この船といふのが二十五六年も過ぎたぼろ船で、狹くて穢くて、その上船員が揃ひも揃つて下品で劣等と來てゐるから、大抵の者は我慢が仕切れない。それでもこれ以外の船は無いので、仕方無さに皆が泣く〳〵此船に押込められて行くのであるが、私共は馴れてゐるから、一先づシンガポールに上陸してオランダ船で向ふへ渡るのである。ところが、その場合にはシンガポールの旅館がお客の足を永く引き留める爲めに、態と出帆の時間を欺へなかつたり、無闇に高い宿錢を拂はせられたりする。私共慣れた者は、それをちやんと知つて居るから、荷物などは自分で勝手に船から船へと移して置くからよいが、始めての慣れない人は何時でも酷い目に遭はされる。こんな不完全な、こんな不愉快な交通では南洋への發展は到底覺束ないと思ふ。もつと新しい船を求めて、船員をも精選してかゝらねばならない。見る影も無い穢い船に乘つて、禮儀も何も知らぬ無頼漢みたやうな船員に取扱はれた乘客が、縱令船中の苦悶は忍ぶとしても、これが彼地に渡つてからが、侮辱をまで蒙らねばならぬとすれば、さし當り此交通の便を圖るといふことが最緊急な問題であらうと思ふ。

こんな風にして渡つて行つた日本人は從來彼地で何んな

事業

を遣つてをつたかといふに、南洋の富源を耳にして、一攫千金を夢見た商人が、賣藥や雜貨の行商に、物品を柳行李に入れて、それを土人に擔がしては山越え野越え村から里へと賣り歩いたものである。此等の行商人は素より南洋に永住して土地の富源を開拓せうなどゝいふ殊勝らしい考を有つたものではなく、一時に僥倖的な金儲けを企てた所謂山師の類であつて、日露戰爭以來日本人は強いといふので、彼地の土人が怖つたり尊敬したりしてゐるのをいゝ事にして、軍人のやうな服を着けてゲートルを穿き、勳章をまでぶら下げた所謂開盛藥舗の連中が、戰爭話しの駄法螺で土人を嚇かして、眼の玉の拔き出るやうな値で品物を賣附けたものだ。ところが今日ではこの行商人の數が餘りに多くなつて、それに土人だつて、さう何時までも騙されてはゐないので、最早や此種の商賈は發達の望がない。今後尙このやうな愚にも附かぬ望みを抱いて渡航するならば、飛んでもない目に遭ふことを覺悟せねばならぬ。啻に自分自身が困難な眼に遭ふに止まらず、此種の人間は我國の體面を汚すやうなことをさへしてゐる。總て殖民地といふものは何處でも風俗のよくないものに決つてゐるのだが、南洋は特に熱帶地方の事ではあり、異境の淋しさに掬てゝ加へて、餘りに大きい夢を夢みた結果は事志と違ひ、捨鉢の自暴自棄さへ手傳つて、彼等が儲けた金は一夜にして醜業婦の爲に失つて了ふ。氣候のよくない上に酒と女で體を持ち崩し、野から山へと漂泊く、唯僅かに病み疲れた體軀を提げて故國に歸るのも亦已むを得ない。かういふ有樣であるから日本人の體格では熱い國の生活には適しないといふ議論も起つて來るのであるが、これが爲めに南洋の氣候が日本人の生活に不適當とするのは早計であらうと思ふ。行商人が殖えれば殖えるほどお互に利害が衝突するので、彼等の間には競爭と軋轢の結果喧嘩が絕えない。玆に面白い話がある。名付けて『煎餅の裁判』とでも言ふべきだが、賣藥の行商がうまく行かなくなつて、みんなが困つて居つた時に、ある男が煎餅屋を開業した處が、案外評判が好くて盛に賣れ出した。これを見た連中は我れも／＼と悉く煎餅屋になつて了つたものだから商賣敵喧嘩が始つて大騷ぎとなつた。其結果は到頭領事館へ持ち出だすといふ騷ぎで、これには領事も困つたが、遂に一案を思ひつき煎餅屋を悉く領事館へ集め、先づ領事の裁判に不服は言はぬといふ誓文を書せて後、領事は自分で各煎餅屋の煎餅を一つづゝ食べてみて、然る後一番甘い煎餅屋即本職の煎餅屋にだけ開業を許したといふ話である。とんだ南洋の大岡裁判ともいふべきであらう。

扨て南洋の土地に於て最早此種の行商が望みがないとしたならば、金を有つて居る資本家又は企業家は別として、腕一本で働かうといふ所謂移民勞働者が、將來大に發展の餘地あるものは何であるかといふと、理髪人、大工、左官、家具製造人等の手藝を持つた者である。これ等の職人に對する需要は到るところ見らるゝのであるが、特に今後の最も有望

てゐる。私は將來南洋の發展は農業開發に在ると思つてゐる。それは與へられたる天然の富源が到るところに未だ手が着けられずに殘つてゐるのと、特に日本人が農業的移民に適當して居るからである。元來この土地は氣候の關係から衣食住が極めて簡單である。着物は一年中を通じて單衣物一枚で澤山だし、雨露さへ凌げば障子も疊もいらないし、其上日本よりはずつと甘い米が喰へるといふのだから、生活は甚だ樂である。然らば農産物では何が一番望みがあるかといへばパピオカである。これは一種の芋であつて、製粉法を施して澱粉にして賣るのである。次に茶で、これは近頃非常に發展して居る。香料も亦近來盛に歐米へ輸出される。これには香に用ゐるものと食料にするのと、二つあるが、孰れも大に有望である。次で石鹼の原料にするコプラ（椰子の實）、コ、ア、コーヒー、燕巣等澤山ある。其他蜥蜴類の捕獲がある。日本で今日蝦蟇口等を拵へて居る皮を、鰐魚の皮だといふて居るが、『あれは大抵この蜥蜴の皮である。向ふの蜥蜴は一間もある程大きくて、素人が見れば鰐魚と違はない。其他精米所が碌にないから、この事業の經營も大に面白からうと思ふ。又この地に多く産するチークは船を造る木材であつて、海運業に缺くべからざる貴重なものである。これは百年も經ねば大きくならぬから、この殖林も又我移民の農業に俟つ所が多い。

私が特に今後南洋に於ける農業的發展の大に意を用ゐねばならぬと感じたのは、今まで彼の地へ渡つた者が、かゝる天然の恩惠をよそにして、

民ノ、藥を賣らうとしたかといふ實例に屬

日蘭問題

を起したのでもよく解る。日露戰爭以來日本人は大敵露西亞に勝つた强い國民であるといふので、大に南洋の土人間にもてるので、前言つたやうに彼等行商人は軍服擬ひの洋服を着てゲートルを穿き、勳章や金モールをまで見せびらかして『我輩は日露戰役に於ける勇者だ』と、嘘八百の戰爭談を吐いて、多くの土人を集めて藥を賣りつけた結果は、これを見た和蘭政府は日本の軍人が多數行商人に化けて來て居ると誤解するに至つたのである。さらでだに日本は好戰國民であつて、南洋に對して恐るべき野心を持つて居るといふ不安に脅かされて居る矢先であるから、一層神經質になつて、遂に賣藥商人に對して密に探偵をつけた。恰も好し一人の行商人が誤つて要塞内へ這入つたので、問題は喧しくなつて來た。この時和蘭政府の某移民官が、本國で發行の某新聞へ投書した一論文は、最もよく這間の消息を表はして居る。その要領はかうである。

『日本人の行商は軍事的目的を有つものである。日本政府は日露戰爭前浦港及旅順へ多くの行商人に變裝せる間諜を放つた。今南洋へ來て居る澤山の行商人は、是れ悉くかゝる意味に於ける陸海軍の軍人である。その證據には彼等は自ら軍人と稱して居るのみならず、戰役に於て得たる勳章を持つて居る。又彼等の一人は商業に從事せる如く裝うて、土人に混じて城内の要塞にまで忍び入つた。これ恐るべき事である。元來日本

人は死に對する觀念が歐米人とは根本的に違つて居る。彼等は國家の爲めなら何時でも喜んで死ぬる。これ大に注意すべき事である。近來日本人は東洋人の東洋といふ言葉を用ゐるが、これ全く彼等が西洋人に對する敵愾を意味する。これ亦重大な問題である。東洋における西洋殖民地の侵略政策に於て、最も激烈なる者は、日本衆議院議員竹越某の著『南國記』である。その中には最も危險な思想が含まれて居る。これ全く日本の眞意を代表して居るものである』といふのである。

私はこの南洋問題の

救濟策

として、前述べた様に、行商上の移民を改めて、農業的移民にして可成永住的に彼の地の富源を開拓するのを以て、最も根本的の解決方法と信ずるのである。それについても、日本の當局者に希望したい事は、先づ第一に南洋の領事館內にでも、一つの商務課又は調査課とも謂ふべき移民の爲めを圖る機關を設けて貰ひ度いと思ふ。それに何時でも內務省の調査と外務省のそれがぶつかつて、餘計な事をして居るのは注意すべき事である。その實例の一つとして外務省は『爪哇事情』といふ報告書を著し、農商務省は『南洋の產業及富源』といふ本で報告をして居るが、名こそ違へその中味は同一である。これは稿本も同じであるからである。かくの如く區々な調査報告をする事は誠に無駄な努力で、國家の不經濟であるから、よろしく專門の調査局を置いて統一的にもつと根本的

國民一般に知らしめて、南洋の智識を與へる制度を設ける事である。その爲めに常設の南洋館を設置し、南洋の農產物、商工業品を陳列して、一々具體的に、渡南をせうといふ農民の爲めに說明するやうにしたい。又この館內にはそれ〲專門の南洋學者を置いて、求めに應じて全國各地へ行つて、その講演をする事も亦必要であらうと思ふ。今日日本內地の人々が南洋を知らない事は甚だしいものである。その實例として一つ面白い事がある。それは南洋で或る博覽會が開催された時、日本から材木を送るに、ある官吏は日本の材木を向ふへ送ると、氣候の相違からその木が曲つて役にたゝなくなるだらうと心配した事である。ところが實際は決してかゝる事はないのであつた。斯樣な滑稽な間違は澤山ある。これ全く日本人が南洋に對する智識の不足に因るのである。

要するに、南洋は將來日本の最も適當なる移民地である。然らば、第一に新しい船を求めて渡航の便利を安全にし、第二に今まで誤れる行商的移民を改めて農業的移民にし、可成永住的の移民を奬勵し、第三に彼の地に專門の調査局を設けて、綿密なる研究報告をなさしめ、內地に於ては南洋參考館を設け、又は南洋講演會を催して、國民一般にその智識を與へて、統一的に而して根本的に南洋發展の基礎を作るべきであらうと思ふ。是れが私の南洋開拓策とも謂ふべきものゝ一班であつて、世の識者諸君には兎も角、南洋に渡つて腕一本で働かうとする人に幾らかでも參考になる點があつたならば幸甚である。

冊廣告に依り御申込の方は**中央公論**に依る旨御記附を乞ふ

◉蘆花 德富健次郎著 （[illegible]）

訂正 縮刷 みゝずのたはこと

五十六版

武藏野の孤村に鍬をとれる著者が折に觸れ興に乘じて筆を走らせし即興のスケッチ、短篇小說、瞑想、書翰、紀行等を集む。淸新なる田園の小景、詩化せられたる敎訓、涙を含む笑に充てる物語、有象より無象に通ふ神秘の啓示、平淡の中戰慄すべき恐ろしき說話卷中に充滿す。

□發行所 東京銀座大通新橋際（振替東京二〇〇） 新橋堂
同日本橋區吳服町八（同 二〇七七六） 服部書店

◉蘆花 德富健次郎著

小說 黑い眼と茶色の目

（定價壹圓廿錢 郵稅拾貳錢）

十五版

是れ『不如歸』の著者『思ひ出の記』の著者、『みゝずのたはこと』の著者が、其二十七年以前同志社學生時代に於ける戀物語也、破れたる初戀の慘澹たる告白也、聽說、著者此告白を江湖に公にするに當り遲疑逡巡、稿を燬くこと實に再度に及べりと、其如何に眞摯にして謹嚴なる發表なるかを知るべきなり、此書によつて著者は其年來祕め了ける著者の生面最奥の心事を語り世間は未だ曾て窺ひ知らざる著者の生面に接見せん。

村井弦齋著

縮刷 食道樂

定價壹圓五十錢（郵稅十二錢）

村井先生の『食道樂』並に『食道樂續篇』は面白い小說であつて同時に實際的の料理書であります。小說として此の如く愛讀され、料理書として此の如く珍重された著書は明治、大正の出版界他に多く其類を見ません。學校にも家庭にも都會にも地方にも料理〳〵と料理趣味が勃興し普及したのは事實弦齋先生の此『食道樂』と『食道樂續篇』が鼓吹した結果であります。今や菜禽獸魚何れも季節に入つて食膳を賑はすの候江湖に向つて是非此の二書を推薦致します

縮刷 食道樂 續篇

定價壹圓五十錢（郵稅十二錢）

發賣元 東京市銀座通新橋際 電話新橋一九九一番（振替東京二〇〇番） 新橋堂
□大賣捌所 東京市神田區表神保町（振替東京二七〇番） 東京堂

（中付一の二）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

影の巻

小杉天外作



月光が晝のやうに明るい、十八九日頃の缺けた月である。海の鳴る音が更に判然聞える、何だか小學校の唱歌でも聞くやうな音だ。晝の中は目馴れて氣にも留めない梅の花が、咲崩れて雪のやうに寒い。何處からとも無く湯の匂が、露多き夜氣を傳はつて來る。その時、多美子は、その磯から搬上げたらしい凹凸の石を見た、石の側に變な形の物が佇んで居る。眼を据えて見ると、五分刈頭の若い男……。

以上は『婦人世界』に連載して大喝采を博しつゝある小杉天外の長篇小說**銀笛**の影の巻の一節なり

婦人世界

定價一冊十五錢
半年七冊一圓五錢
郵稅一錢五厘
一年十四冊二圓五錢

發行所
東京市京橋區南紺屋町
實業之日本社
振替口座三三六番

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

◎黑頭巾 横山健堂著

四六版・特製金文字入
總クロース函入美本

定價壹圓拾錢 郵税八錢 五百五十頁

(中付一の四)

彼は殘れる脚を以つて剛健なる意氣を表現す。壇上の拳骨は即ち其の意氣を象徴するものたらずんばあらず。

伯大隈

黑頭巾

の名を以て文壇に雄飛する著者が一種奇勁にして人を魅せざれば已まざる其獨特の麗筆を揮ひ裏より表より縱横無盡伯の性行功罪を抉剔解剖せるもの

伯の罪禍も爰に在り功績も亦爰に在り、

字々風霜を帶び活氣、紙上に躍動し、興味津々波瀾起伏に富む。伯の生涯は宛ら一篇の小説を讀むの感あり。是れ伯の一代史たると共に明治憲政史たり。政黨史たり。暗黑史たり。

大隈黨も在野黨も實業家も學生も

東京京橋南紺屋町 振替東京三二
實業之日本社出版部

賣捌 全國各地 書店

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は[illegible]



舞臺に立つたり身を賣つたりした前後

——自叙傳の中から——

村田榮子

一

小さい時分のことは申上ますまい。云つたつて何にもなりはしません。生立ちの記など、鹿爪らしく改まるほどの人間ではございませんもの。

考へて見るともう三年になります。私が女優にならうなど、茶氣を起しましたのは。どうしてそんな考を起したものか、今になつて見れば眞面目に戀で〻もしてゐたらよかつたにと思ひます。けれどもグチは申しますまい。

その頃の私は暗いじめ〳〵した人間でした。その上強いヒステリーで、よくピー〳〵泣いたものです。で兩親のすゝめで目黑や江ノ島へ轉地してのんきらしく暮したり、好きな三味線を弄つて氣を紛らしたりしてゐました。その中女優になつて見たくなりました。のろ〳〵と蛇蜂とらずで墓に入るより、少しでも生甲斐のある勇ましいことがして見たくなつたからです。たゞそれだけの「やつて見たい」位の了見から、早速俳優學校出の成田といふ人の手で舞臺へ出ることにしました。考へて見ると私も全くどうかしてゐたのでしやう。

どうかしてゐなかつたら何も仙臺下り迄よち〳〵出掛ける所ではなかつたのです。そこが己惚の悲しいところです。一月ばかり稽古の眞似みたいなことをして、番附面へ麗々しく自分の名前を出されると、もうすッかり出來て了つて――いい氣になつて皆の煽動に乘つたものなんです。

大正元年の九月十六日、糠雨のけぶる陰氣な日ぐれでした。一行が仙臺へ着いたのは。でその翌日いよいよ初日を出しましたが、散々な不結果で、三日目に座主の方から「もう止してくれ」と斷られて了ひました。こゝらでへたばつて了へば先づ無事だつたのです。それをイヤに年若な姉ごを氣取つて、意地づくでも一座と別れて一人で歸ることが出來なくなりました。

意地ほど恐しいものはありません。その時私は世間へ對してよりも、父や弟の手前初めの意地を通さなければならなかつたのです。よせといふのを無理に女優になつて、いけないと云ふのを一徹に田舍へ行つて、この儘どうして歸れませう――で又候盛岡へ連れて行かれました。

二

どうやらかうやら盛岡では十日餘り打ちました。がたゞ小屋を開けたと云ふだけで、十人でも二十人でもお客の來るのが寧ろ不思議な位でした。

打上げにはなりましたが、さて次の乘場がない。どこでも私共の下手い事を知つて相手にしないんです。歸ればいいのは判つてゐても、その旅費がありません。グズ〳〵しながら、十日ばかりトヤしました。

する中に變なことが持上りました。

變なことゝ云つて、有勝の話なんですけれど――かうなのです。座頭の成田と木村といふ女優との仲がバレて來たんです。情人といふだけならまだいいとして、二人のやり方があんまり白々しいんです。さうでしやう――座員には錢一文もお鳥目をやらないで、木村にだけ手付の五十圓もくれたりしてゐるんですもの。全く馬鹿〳〵しくなつて了ひました。

考へて見て下さい。もう秋ですよ。うすら寒い北國

の客で單衣一枚で慄へてゐる者さへあるぢやございませんか。情人にやるお金があつたら座員にくれるのがほんとうでしやう。ですから「グルになつてゐる」等と不平を云はれても、二の句が出ないんです。ほんとに呆れて了ひますよ。

　呆れると云へば私にも大抵呆れて了ひますよ。どうせケチのついた團體ですから、それをキツカケに歸ればよかつたのです。姉からも「チヽキトクカヘレ」等と電報を寄越した位なんですから。でもさうなつて見れば座員の者が可愛さうでした。

　不平は云つても、無邪氣にしてゐる所を見ると、何だかいぢらしくなつて——出來ない中から煙草錢をくれたり、お酒をふるまつたりしました。成田の仕打が憎いにつけ、座員の者が可愛相でならなかつたんです。お蔭で身のまわりの物も殘り少なになつて、初めて旅らしい氣持になりました。

　十日あまり經つて、三四里離れた志和といふ田舍へ話が纒りました。話に聞いたことのあゐ鎭守さまの掛小屋芝居なんです。私なんかとても女優にならなければ二度と來られない山家なんです。戶數が百ばかりもありましたらうか。各自に汚ない百姓家へ泊らせられました。その百姓家の裏には大きな川があつて、恐さうな山がニヨキ〳〵並んで——もう云ひますまい。

　三日打つて、四日目の朝いよ〳〵解散といふことになりました。

「もうどうにも仕方がないから、各自に自由行動をとつてくれ。金は一文もない。」

　成田の挨拶はかうなんです。一言も云ふものはありませんでした。一同おとなしく押默つて——。

三

どうする意なのでしやう。

旅の空で、一食のお金とてもやらないで「もうどうも仕方がない。」等とつッ放して。明日からどうして食べるのか、どうして東京へ歸るのか——でも仕方がないと云ふやうな顏をして、的もなく別れて行きました。

十月の十八日です。

よく晴れた日でした。

さうと來ると、私はすぐ衣裳屋の爺と岩崎といふ座員を連れて、こつそりと村を逃出しました。これはかねて打合せをしてゐた事で、皆を歸すために、金ごしらへをしやうと思つたからです。

けれどもさうお目出度くは參りませんでした。百や二百の事ならどうにかならうと思つてゐましたのに、頼にした知己からは體よく斷られました。さうでしやう、此方のいふ事が少し氣狂じみてゐましたもの。

ゲツソリしてその夜は停車場前の宿へ三人で泊りました。かうなつて見ると、今更歸れないぢやありませんか。女だてらに「私がついてゐる。」と口幅ッたいことを云つたからには。どうしやう。ドコと云ふ的もない――。

夜半の二時頃でした。ふいに目が覺めて私は床の上へテクリと坐りました。電氣があかあかとついてゐます。じつとしてゐると、涙がじと〳〵浮んで來ました。二人を起して、突然に、

「仕方がないから、藝者になる。」

と云ひ出したんです。衣裳屋の爺はくりからもんもんのすね物です。

「ようがす。俺が引受けました。丁度知己が福島で置屋をしてますから、二百や三百のことならどうにかなりましやう。」

とかうなんです。その夜私は名殘の手紙を認めて先へかへる岩崎にことづけました。志和に殘した和木、佐藤の二人に宛てゝ。

奥州福島――たしか本町通りでした。「花ときわ」と書いたご神燈の軒をくぐるとき、私は今考へるとウツのやうな、捨鉢な氣持でゐたことを覺えてゐます。

何を話したのか、女將とだいぶやりとりがあつて、さて、

「さうさね。まア四五日ゐる中に、何とかしましやう。」

とこんな暢氣なことを云つてるんですもの、何だかイヤな氣がし出しました。

一人になつてから、しみ〳〵と儚さがこみ上げまし

た。灯がつくとよけいに淋しくなりました。何處かで三味の音がします。赤い腰巻一ッの妓がゲタ〳〵白粉をぬつてゐます。すると凸チンのおかねといふ抱が、青ぶくれた顔をして、

「逃げてお了ひなさいよ。こんなところにゐると、どんな目に逢ふか知れませんよ。」

としみ〴〵云つてくれました。そして私の手にお紙幣を三枚そつと握らせました。

まるでお芝居をしてるやうな氣持でした。何となくもの凄いやうな――ステーションへ駈け付けますと、けたゝましく鈴が鳴つてゐます。

あくる日の朝、ゲンナリして志和へ歸りました。三人共突然な私の姿を見て目を圓くしてゐました。

四

がさて明日から先の的がありません。どうして此場を切抜けるか――街道筋の、カッと日のさす百姓家の下座敷で、男三人に、女一人何くれと先々のことを語り合ひました。そして、一時凌ぎに新派の芝居へでも入らうといふことになりました。食へなくなつても藝術家だ等と新しがつてはゐられません。

丁度その時盛岡に新派がかゝつてゐました。ですぐ和木と二人で行つて頼みますと「よろしい、是非お願しやう。」と二ッ返事で、あくる朝、龜の子のやうな、卑しいケバ〳〵しい身裝の太夫元が、手金にと五十五圓置いて行きました。

夕方から雨がザン〳〵降つて來ました。一晩泊つて、古着屋から間に合せものを三四枚とゝのへ、ホッとして、一先づ志和へ引上げました。でも明日から田舎廻りのお仲間入をするのかと思ふと、云ひやうのない淋しい氣持がします。

十月二十三日。夜の八時すぎ、新派劇「大成團」一行を岩手縣花巻町にたづねていよ〳〵一座に加はりました。その夜から、私共四人は三階の樂屋へ泊らせられました。うすべりを敷いた冷たい六疊の部屋で、薄ッぺらなイヤな臭のする蒲團をかぶつて寢ました。二階の大部屋には、夫婦ものが二組ばかりごろ〳〵して

ゐます。亭主は役者で、かみさんは衣裳付やら、お囃。子供を連れてノンキに旅してる者さへあります。

何を見ても不思議で、おどろくことばかりでした。そして何だかもの凄い氣が一杯に漲つてゐます。

初日は忘れもせぬ日本もの丶ハムレツトでした。町廻りの口上に「作者は有名なるイギリスのセークスピア」だとか「フランスのセークスピア」だとか。今思ひ出しても噴飯したくなります。

五

十月の二十三日から十二月十五日迄、「大成園」に交つて東北の田舎を廻りました。

その時の思出をボツ／＼拾つて書きます。

ドコへ行つても淋しい冬枯の景色でした。樂屋の窓から見る山も、畑も、零落れはてた旅役者の身には、白秋さんの「裏の畑にノーエ、ひとりからしの花がちるションガイナ」と唄ひたいやうな、やるせない、小さな悲しみにとざされてゐました。花卷から黒澤尻、一ノ關とだん／＼山へ入つて行つて、若柳へ來た時にはチラ／＼雪が降つて來ました。どこでも樂屋住ひでした。そして四人共袷一枚のみじめな姿でガチ／＼ふるへてゐました。

星のないまッ暗な夜、ぬかるみの川沿を三里も歩かせられて、二三日頭の上らなかつたこともあります。太夫元に中將湯を買つて貰つて、辛と舞臺へ出たこともあります。石の森といふ山の中では、小さな掛小屋にかゝりました。雪のちらつく中を、後の畑で火を焚いて顔をしました。お湯に入つてゐますと、すぐ頭が雪でまッ白になります。登米から石の卷へ——北上川を下りました。うすら寒い小蒸氣のケビンで役者どもはバクチをやつてゐます。黎明で、むせるやうに霜が下りてゐました。

田舍廻りにバクチは付物です。暇さへあればどこかでこそ／＼やつてゐます。そしていけなくなれば何時の間にか逃げて行く。二ケ月あまりの間に幾人役者が出入りしましたことか。そんなのは大抵着のみ着のまゝで、扮裝道具一ッ持つてはゐません。役者といふよ

りもバクチが本職なのです。

こんな事がありました。

若柳にゐました時は道具方の一人がみじめな敗方をして、絆纏ぐるみ剝ぎとられました。それを遺恨に思つたんでしやう。相手の役者にケンカを吹きかけました。

若柳から石の森へ行く途中の出來事です。小雨の降る底暗い夜でした。道具方とその役者とも一人、三人共濁酒に醉つて、小唄なんかを唄つてゐました。

後から聞いた話ですが――道具方が先の尖つた鐵槌で、だしぬけにグサとやつたんです。そして起上らうとするのを蹴倒して、も一人が長い刀で背中を切付けました。役者は泥のなかにへたばつて、ドク〳〵血を流してゐたさうです。その爲に役者は十日あまり寢てゐました。

道具方はその足で姿を隱したんです。

バクチをやれば喧嘩をする。喧嘩をすればすぐドロンをやる。私どもはその度毎にぞく〳〵しました。ケンカに次いでよくあるのは役者のいろ事でしやう。

澤田といふ役者がゐました。五十四五のやうお爺さんなんですが、いつもつぎの當つた赤い裏の女ものを着て白粉をうすく塗つてゐるんです。

その男はよく卑しい女とかゝりあつて、それを自慢にしてゐました。石の森でも、飯炊の四十五六になるおばさんといい仲になつたりなんか――そのおばさんは齒を黑く染めて、汚ない手足をしてゐました。あれでも色氣があるのか知らと思ふ位しなびてゐました。でも役者に思はれてうれしかつたのでしやう。登米までついて來て樂屋中の弄られものになつてゐました。そして一週間ばかりゐて石の卷へ發つ時も、離れがたながつて泣き出したさうです。

舞臺は遊んでるやうなものでした。幕の開く前にちよいと口立をして演るんですもの。十八番の出し物を五ッ六ッ――「ハムレット」「女一代」「不如歸」「吉丁字」「金色夜叉」「武士的教育」「影法師」。

一ノ關で佐藤さんと別れました。よぎない事情で歸

らねばならなかつたんです。とうとう三人になつて了ひました。

六

二月ばかりの間私らはどんなイヤな思をしましたか。バサ〳〵した、卑しい人達と、心にもない芝居をさせられて――ランプの暗い樂屋に一人ゐて、幾度涙を啜りましたやら。三人一ッ部屋で、よく豚鍋をつゝいて東京の噂などをしました。皆の手前、はづまない唄なんか唄つたりして。

一座のものは私らを別なものにしてゐました。樂屋も別なら、することも別、話したつてはづまらないんですもの。たゞ東京が戀しうございました。が、何をするにも借金の五十五圓がついてゐます。

それもどうにか崩した矢先、また新しい悲みがわいて來ました。和木が病氣になつたのです。辛と具面して醫者を招ぶと肋膜だとのこと。石の巻の岡田座の樂屋で――北上川に面した薄明るい――幕間に氷嚢をとり替えに行くと「歸らう〳〵、こんなトコで死にたうない。」とホロ〳〵涙を零してゐるんですの。

で十二月の十五日に大成幽とも永の別れをすることになりました。別れるとなれば、でも淋しい氣持がします。昨夜まで持馴れた刷毛や、小鏡を金に替へて、病人の手をとりながら、吹雪の中を仙臺に向けました。そして岩崎だけ東京へ歸して、二人きりの暗い日を裏町のボロ下宿で淋しく送りました。東京から爲替のくる日を待ちながら。

一ッ毛布を二人で着て病院へ通ふ途すがら、ふと、二タ月ぶりで闘といふ役者に逢ひました。成田の許にゐた男でうき〳〵した、氣さくな若ものです。筒袖に紺の前垂を締めて、空車を曳いてゐるんです。「私もとう〳〵酒屋の小僧さんになりました。」その男の口から、寛といふ役者も仙臺の廓で仲どんをしてゐると聞きました。

役者から女郎屋の仲どんに――その男がよく波布の上を歩いたり、仕切りの塀を跨いだりしたことが哀れに思ひ出されました。

五日目に東京からカハセが屆きました。「年の暮でこれだけしか出來ぬ。」と情ない文句で、宿の拂にどうかかうかの金しか送つて參りません。がつかりして自分ながらも愛想がつきる位、どう具面しても金目のものはもう一つも手許にありません。「あゝ歸りたいな。」病人の言葉が身に泌みるやうでした。

七

私ももう諦めてゐました。この上は自分の身を殺すより他に道がない。ドコを見てもかゝり合ひのない人ばかりです。藥代もとつくに盡きてゐました。この雪に、羽織さへ着てゐないぢやありませんか。

東京を出てから四月足らずの間に私も變りました。そしてだん／＼どん底へ落ちて行くばかり、これから先は冷たい墓穴たゞ一ツといふところまで、

和木もだいぶ快くなりました。そして一日炬燵にはまつて、二人で歸り行く日をのみ夢みてゐました。病のよしを細々と認めて國元へ送金を賴んでも、何の音沙汰もありません。

「ようござんす。お金は私が拵へます。無慈悲な親御さんにかゝり合つてゐたつてつまりませんもの。」

いろんな事を考へると逆上せずにはゐられませんでした。

で和木には態と內證で、宿のかみさんにドコか勤め口をとこつそり賴み込みました。

「いいトコがありますよ。少し離れてゐますがね、こゝから十里ばかり山の中の溫泉場なんですが、そこでよかつたら、すぐに世話しましやう。」

「えゝ成るべく人目立たない所がいいんですよ。お金もさういらないんですから。」

そのあくる朝でした。「二七ヒムカヘユク」といふ溫泉場からの電報を手にしましたのは。これですつかり定りました、でもその紙片を帶の間に入れてホッとした時、私は初めて深い／＼悲しみに襲はれました。そして泣きながら、和木の前に突伏して「すみませんが、私を勤めにやつて下さい。」

と初めてわけを話しました。

イヤだと云はうにも話はもう出來てゐます。「その代りすぐ迎ひに行く。」和木も泣いてゐました。ガラス戸越しに綿のやうな雪が降つてゐます。

二十七日になりました。おこそ頭巾に、縞の毛布を着た温泉場の娘が、日暮れになつてやつて來ました。ぽかんとした二十五六の娘さんです。話はすぐに出來て、百圓だけ借りることになりました。その娘は太い指先で袂から皺くちやの十圓札を出して並べてゐました。

その夜のことは今でもまざ／＼と覺えてをります。冷たい床のなかで、夜どほし泣き明しました。明日から自分の身ではない――と思ふと、やるせない悲しさが込みあげて、頭はわれるやうに痛む。襦袢の袖はじとじとする。一言云つては泣き、二言云つては袖口を口にあてゝました。一番鷄の啼く頃に起きて、和木と二人先々のことをしみ／＼話しました。その娘も同じ宿に泊つてをります。泣顔を見せてはと思つて、今思ふとゾッとするやうなアバズレの眞似をして、荒んだことを云つたりしました。

いよ／＼別れねばならぬ時が來ました。一人かへり、二人かへり、三人歸り、後には私一人です。その時こそ全くどうかしてゐました。笑つてよいのか、泣いてよいのかあゝとう／＼一人ぼつちにされたんです。

その夜、娘に勸められて生れて初めてつぶしに結つてもらひました。冷たい鏡に向つて。南へ／＼と遠ざかる和木のことを思ひ詰めながら。

八

十里の道はたゞ一面の雪でした。

古川といふ田舍町からガタ馬車で、しだいに山深く入つて行きました。溫泉場まで八里の道は、果しもない深山幽谷です。途中で日が暮れました。月はなくとも雪明で邊はぼつと仄明るい。咽せるやうな粉雪のなかを馬車はガタビシ走つてゐます。灯りもつけず、火の氣もくれず。谷川の冷たい音が、ヂキ／＼と腸の底に沁みるやうな。

考へまいと思つてもおそろしい身の上、遣瀨なく思

はれる。私はかうして賣られて行くのです。山の中の溫泉場へ――

翌朝見ると、昨夜思つたよりもつとひどい山奥でした。そこは奥州の山ざかひにある鳴子といふ小さな溫泉里なんです。私のゐる湯泉樓といふのは田舍に似ぬ三階建でした。その三階へ上るともの凄く吹雪が吹きつけてゐます。遠くに深い谷が見える。百ばかりの家がとび〱にあつて、道ばたの川から湯氣が上つてゐます。どの宿でもその湯を筧で引いてゐるんです。こゝから三里、あの山を越えると新庄に出る、と娘が敎へてくれました。

「とう〱こんな處へ來ちやつた。」とつい口に出しました。ほんとによくこんな處へ來たものです。いつそ一ト思ひに死んで了ひたいやうな。――と夕方でした。「お座敷だよ。」と主が私を呼ぶんです。その一言がどんなにあさましく響きましたか――でも娘のくれた三味線をとつてヤヶ半分に彈いてやりました。音なんかてんで出やしません。

よく客のある家でした。雪の中を鈴音を聞いて客がヨチ〱やつて來ます。それが濁酒を呷つてまるで[illegible]噪のやうな騷ぎなんです。一日ゐて、つく〱イヤになりました。夜の二時頃迄三味を抱いて坐らせられる丈でも一苦勞です。

夜更けて部屋に下ると引入れられるやうに寂しくなつて、怺え性もなくシク〱泣きました。薄暗いランプの下で、湯の流れをきゝながら、和木に宛てゝ長々と手紙を認めました。床に入つてからも、思ひ出しては泣いてばかり。思へば東京の空がうらめしい。

その日イヤな男の座敷へ出ました。その男は翌日もやつて來てまづい酒に浸つてゐます。主がそつと私を呼んで、

「どうだ、いい旦那でもとらねば、いつ迄經つても借金が拔けないぞ。」とこんな事を云ふんです。水を浴びたやうにゾッとしました。

こんな所にゐるといつどんな目に逢ふことか。なんの〱。山猿の牙にかゝる程のいくぢなしではござい

ません。

九

大晦日の夜の二時頃でした。

何とも云へぬ悲しさに襲はれて、ふと、この恐しさから遁れるだけ遁れて見やうと思ひました。部屋のガラス戸から透して見ると、掃除口が開いてゐます。

外は寸先も見えぬ大吹雪でした。灰を掴んで投げるやうな雪が、荒凉じく吹きまくつてゐます。今思つてもその時の氣持は判りません。いきなり手拭で頭をつゝんで、息づむやうな吹雪のなかを、辷るやうに駈け出しました。雪は二三寸も積つてゐましたらう。どの位來たものか、夢中で下り道をつる／＼と走りました。

ドコを見てもまッ白で、人影一ッありませんでした。手も足も紫色になつてゐましたが、人並に寒いなど丶思ふ暇もないんです。しばらく行くとだいぶ吹雪が鎮まつて來ました。

空がほんのり明るくなつて「月でも出るのか知らん」と思ひながら歩いてゐますと、やがて、三日月がのぼりました。晦日に月の出る里と云ひますが、その晦日の月なんです。見ると雪の上に蹄のあとがついてゐます。それを頼りに何處迄もと走りつゞけました。

三里走つて、岩手山へ來たとき、山越しに赤い日影のさすのを見ました。大正二年の初日です。さう思ふと絞り出すやうに涙がホロ／＼零れました。元日だといふのにこの態は——あゝもう何にも思ふまい。思つたつて判らない。わからない。

コートも着物も搾るやうに濡れてゐます。この先どうにも歩けなくなりました。で道ばたの百姓家に頼んで、しばらく休ませてもらひました。眞黒な神棚に、お供ばかりが白くくッきりと見えてゐます。榾火に暖まりながら、夫婦で私のことをしみ／＼訊ねて、大福を焼いてくれたり、女房の盲目縞を着替にと貸してくれたりしました。そして、

と五里の雪道を送つてくれました。ゆかりもない私のやうな、路傍の女を——

吹雪はすッかり霽れてゐました。雪路の五里は長うございます。しぢう何かに追はれるやうに、ビク〳〵しながら歩いてるんですもの。顔も手も氣のせいかガサ〳〵に荒れて、吾乍ら淺間しいと思ひました。亭主とは古川の町はづれで別れました。

馬鐵の待合所で、一人小さくなつてゐますと、正服の巡査がだしぬけに、

「一寸來てくれ。」と云ひます。とう〳〵捕まつたんです。四時間ばかりして湯泉樓の主がケイサツへやつて來ました。鼻先を眞赤にして、二人曳かなんかで。

十

考へて見るとウソのやうです。どうしてあんな氣になつたのか。たゞ恐しさと、東京戀しさの心から——それにしても吾ながらはしたない。あんまり姦しい。

正月の三日でした。「ケチのついた女はいらぬ。」と云つて、古川の枕流亭といふ家へ住み替へられましたのは。主もおかみもやさしい人でした。妓も皆でよくしてくれました。が私は一人ぽつちの方がいゝ。一人でしんみり悲しい事を考へてゐたい。

白粉の香のたち迷ふ妓四人の部屋で、私はいつも離れて、セカ〳〵と和木へあてた手紙をつゞりました。その時ばかりが私のいのちです。東京からもよく便がありました。覺られないやうに表書だけを女文字で。

何時までゐたら借金が返せることか。三十圓のお金で二年餘もくくられてゐる妓さへあります。その家にきみといふ九ッになる養女がゐました。ここで勤めてゐた妓の私生子で、お母さんはとつくに亡くなつたんださうです。髮のちゞれた、目の大きい兒で、みじめに追ひ使はれてゐました。皆の癇癪の的にされて、悲しさうにオイ〳〵泣いてゐます。よく菓子なんかやりますと、

「姉さん〳〵。」と慕つて、幾度泣かされましたことか。

四組、五組と客のたて込む晩がありました。三味線をかゝへてお座なりを唄つてゐても、ふと氣が沈んで

ふさいだり、はしやいだり――東京と聞く〳〵懷しくて、お客が東京の話でもすると、わけもなくうれしうございました。で四五日たつてから、和木の妹さんに宛てゝ、こんどの事を長々と書いて送りました。

「私の心を察して、早く歸して下さい。」と。

すると四日目に、手紙ではなく電報で、「ツゴウヨクスルシバラクマテ」と云つて來ました。冬枯の中に木の芽が靑く萠え出たやうなうれしいお便りです。兄さん思ひの優しいお心がしみ〴〵思はれました。

十一

粉雪のチラ〳〵する十六日の朝でした。床の中にゐますと、小女が見馴れた筆の折封を枕元において、「返事を下さいつて」と云ひます。

――さつき着きました。待つてゐますからすぐ來て下さい。

清水屋にて　和木――

和木が迎へに來てくれたんです。すぐに、

――籠の鳥ですからなか〳〵出られません、すみませんがあなた出掛けて下さいまし。

さかえ――

筆を持つた手がガタ〳〵慄ひました。妓達はまだ寢てゐます。

別れてから二十日あまりになります。それが何だか幾年ぶりかで逢つた人のやうに、後から後から新しい涙がつゝかけました。今迄の苦しさと、うれしさとがごつたになつて、何から話していいのやら――寢くたれ髮のまゝで、顏もつくろはず、羽織たけ引掛けただらしない姿で向ひ合つて、別れてからのことを懷しく話しました。おかみが挨拶にくる。代る〳〵妓がやつてくる。二三杯の酒に和木はもう赤くなつてゐました。

身受の金が百三十圓――妹が送つてくれたんだと云つて、祝儀までキレイにして思出の多い枕流亭とも別れました。七八人の者が廊下にたち並んで送つてくれるのを、いそ〳〵とふり返りながら。

それからもう二年餘りになります。その二年の間私どもはいつも隅ッこに縮まつて、うか〳〵と空な日ばかり送つてゐます。私には皆さんのやうに美しい着物もございません。キレイな家もありません。ご覧下さい、この手を。指先が太くなつて、こんなにザラザラしてゐます。

この手で刷毛も持ちます。紅も塗ります。好きでなつたのにグチは云へませんが、女優ほど辛いものはないと思ひます。ご飯を炊いて、水仕事をして、夜は舞臺にたつて――でもあの時のことを思ふと、どんなにか幸福でしやう。

東京では二回あまり舞臺にたちました。去年の三月の藝術座のおすまさんなんかと一緒に、九月には新時代劇の方々と。

そして和木と二人でのどかに暮してゐます。（終）

戰慄すべき 選擧運動の内幕

江湖歌容

一、投票の取引市場

十二年目の解散―總選擧―大隈内閣と政友會との對戰―國民が熱狂的に選擧運動に出頭沒頭して居るのは寧ろ止むを得ぬことであらう、然しながら選擧は何れの時に於ても投票の取引に過ぎぬ、閉鎖されて居つた投票の取引市場が、選擧と云ふ黒い手に依りて開かるゝに過ぎぬのである、グラットストンは『先づ與へよ、而して數へよ。』と叫びながら、選擧權擴張を說き廻つたそうであるが、之れは憲政思想に富むで居る英國民にのみ云ふべきことで、遺憾ながら日本國民には不向

である、憲法を公布し帝國議會を開設した政治上の先覺者は、與へて而して後に敎ゆる積りであつたかも知れぬが、爾來二十五年間、國民は自ら學ばず進まず、敎へられずして却つて惑はされつゝ今日に至つたのである、斯くて所謂尊き一票も、單に商品、贈答品として、一定時に開かるゝ總選擧市場に取引せられて居るに過ぎぬ、特に此の投票賣買が、近時團體の力に依りて保有せられ、トラストの形式に基きて競賣せらるゝに至りて、益々戰慄すべき結果を來したと共に、投票其のものゝ性質が全然商品化せられ、市場、仲買人、注文主、糶上げと云ふやうな法則の下に取引せらるゝことになつたのである、隨つて選擧場裡は恰かも蠣殼町、兜町附近の如く、不信、不德、詐欺、脅迫等、あらゆる俗惡の言葉を以て彩られ、喜劇、悲劇交々起ると云ふやうな實況である、私の如き政治に趣味を有し、且つ選擧道樂であつて、十七八歲より二十年間も選擧運動をやつて居るものでさへ、時には唖然、茫然、慨然たることが多いのである、以下は最近數年間に接觸したる私の實歷譚の一部である。

二、大都市の選擧

東京市、大阪市の如き大都市に於ては、流石に投票は商品として取引せられて居らぬ、若しあつたとするもホンの一部分で、最大多數は全く贈答品として分配せられて居るのである、之れは東京市の選擧人が立憲思想に豊富であるが爲めでなく、一般に生活が高度なるが爲め、一圓二圓の賣價を取るよりも、寧ろ之を贈物として相手に交附し、後日の利益を求むるが得策とするからである、候補者の方から云ふても、大都市は地方と異り、選擧と云ふ取引市場に店飾をするが爲めには、多大の金力と勞力とを要するので、其上別に投票を買入るゝことは、非常の苦痛である、寧ろ不可能である、東京市に於て投票の現金賣買の行はれざる理由は、全く此關係から出來て居るものとして差支がない、試みに東京市候補者の運動費を調べて見ると。

立候補宣言書　金二千五百圓

前後二回五萬部宛　印刷費五百圓　郵送料貳錢宛

金千參百五拾圓　事務所費

本部事務所六十日間一日拾圓宛六百圓其他五事務所三十日間一日五圓宛七百五拾圓

金二千圓　演說會費

六十日間に大演說會五回小演說會十回開催大一回貳百圓小一回百圓

金二千圓　車馬賃

自働車、馬車、人力車、電車賃

金千圓　廣告料

新聞雜誌記者招待費をも含む

計金八千八百五拾圓

と云ふ勘定で、東京市の候補者は、所謂理想選擧で行くとしても、先づ一萬圓を要するのである、片桐酉次郎の獨占選擧でさへ尙ほ六千圓を費してあつた、投票を買上げずとするも、少しく花々しく運動を試みて、一位二位の當選を爭ふとすれば、忽ちに二三萬圓を要する次第であるから、市民生活力の高度と云ふことと、候補者の運動實費多額と云ふことと、互に原因結果をなして、大都市には投票賣買が多く行はれぬのである、私の知るところを以てするも、四十一年の總選擧に東京市の優等當選者たりし某氏の如きは、新參候補者として約二萬五千圓を費したに拘はらず、投票費用としては、單に或る町內の全票を得べく、其鎭守の稻荷樣に金貳拾圓を寄附したに過ぎなかつた、大都市に於て投票買收に代るものは、戶別訪問と云ふ厄介物である、二萬、三萬、四萬の投票中、地盤と目すべきもの、略取の見込あるもの約一萬位に對して、少くとも一回、多きは二三回の訪問を試みねばならぬ、大頭株の有權者には候補者自身が出掛る、自働車、馬車、綱曳人力車を驅り、絹帽、フロックコート、羽織袴の堂々たる候補者が、或は勝手口より或は店先より、叩頭百拜する有樣は全く悲慘至極なものである、中以下の有權者には幹部以下の運動員を差向くるが、此等の運動員は田舍と違つて仲々贅澤なもので、自働車とか綱曳人力車でなければ動かず、酒もウヰスキーとかシヤンペンとか騷いで、其費用が並大抵ではない、此等

の車馬賃、飲食代を總計して一票當り幾干と勘定すれば、結局は地方の投票買收費よりも遙かに高價となる次第で、頭を下る丈けが却つて地方候補者よりも損失である苦痛である、言論文章に依る都市の理想選擧も、内幕に這入つて見れば、案外情けない事柄が多いものであると思ふ。

三、東京市候補者の運動振り

四十五年の總選擧には高木益太郎か五千四百票で第一位、藤原惟郎が三千五百票で第二位を占めてあつた、而して此兩人は異れる意味に於て選擧の名人と云はれて居る、成程兩人共年中選擧と云ふことに頭を忙き、平常より抜目なく運動を試みて居るところは同一であるが、其内面の遣り方は全く違ふ、有權者より投票承諾書を取ることは、總ての東京市候補者がする事であるが、ソレたけでは有權者が運動者の襲擊を避る手段として、事務員、番頭、書生の誰れなりに命じて、ドシ〳〵誰にでも捺印する虞れがあるので、其効力が至つて薄弱である、ソコで四十五年の總選擧に高木は芳名錄と云ふものを造つた、皮表紙、金緣のブック數十册を運動員に分布し、一々有權者を訪問せしめて、子孫代々紀念の爲めに、一筆願ひたいと遣つた、日本橋で生れ日本橋で育つた高木である、辯護士、代議士、法律新聞社長として、多年東京市に緣故ある高木である、有權者も之を拒む譯には行かぬ、承諾書と共に芳名錄に記名したものは、悉く高木に投票せざるを得ざることになつた、鈴木梅四郎が三井を代表して日本橋より立ち、星野錫が東京市十五實業團體の推薦に依りて日本橋に突入したにも拘はらず、五千票中高木の二千八百票に對して、各々四百票を得るに過ぎなかつたのは、全く子孫代々紀念芳名錄の賜と云はねばならぬ、演說會を開くにしても高木は全く他の候補者と違つた行方を取つて居る、演說會の傍聽券は有權者に限つて之を配布する、而して當日會場には傍聽券所有者にあらざれば入場を許さぬ、隨つて有權者たる主人が傍聽する場合は勿論、主人が差支ありて小供、番頭、事務員等が其傍聽券を利用して入場することゝなつても、必ず演說會の模樣を有權者たる主人に傳へることになるから、其効果は甚大である、學生勞働者が寄合つて景氣を付ける演說會に比して、頗る有利なる點があるのである、地位を有し資産を有する高木が、更に運動上手とあつては鬼に金棒である、本年も恐らく第一位當選者であらう、藤原に至りては全く貧乏が幸ひをして居る、藤原の住宅、人相、服裝を見れば、貧乏たることを知り得るに充分であるが、彼は更に貧乏を標榜すべく、色々の手段を講じて居る、藤原は熊本縣では細川家に次ぐ名門たる阿蘇神社宮司の一門で、其親戚には隨分金持があるから、多少の運動費には困らぬのであるが、藤原は決して之を外に現はさぬのである、總選擧毎に藤原の爲めに義金を支出したと云ふ數百のものが新聞紙に傳へらるるのであるが、其中には醫者なども多くあつて人氣を引立つることが夥しい、然し其多

くは藏原の義兄弟たる北里博士其他の匿名であると噂されて居る、唯た有權者をチャームするの妙に至りては眞に天下一品である、彼れは日常間斷なく有權者を訪問する、主人不在のときは細君、家族、書生、女中夫れ相應の贊辭を呈して置く、而して有權者の種類に依りて、其言葉遣ひや態度やを自由に巧みに變化せしむる技能(?)は、何人も及ぶことの出來ぬものである、車上より降りて有權者の子供に一錢二錢の菓子代を與へて去るところなどは、到底高木の爲す能はざる藝當と云はねばならぬ、四尺八寸の黑須龍太郎は勇氣を以て、浪人組の古島一雄は人格を以て、其他悉く色々の看板を有して居るに相違ないが、ソレは强ひて語る程の事でない。

四、婦人の選擧運動

和夫未亡人鳩山春子が其長男一郎の爲めに選擧運動を試みてから、婦人の運動者が續々出て來たやうである、一郎夫人薫子を始めとして、藏原夫人、其令孃、荻野萬之助夫人、仙臺市の村松山壽夫人、京都の與謝野鐵幹夫人、其他數へ切れぬ程である、然し婦人の選擧運動は決して効果あるものでない、婦人が戸別訪問をやつたとしても、有權者側では其細君が應接に出るのでなく、多くは其主人であるから、婦人を卑下する日本の現代社會に於ては、其有權者は先づ訪問婦人に對して一種の反感を抱く、次には自分の子供がコンナ風になつては困ると云ふ考へから、成るべく面會を避るのであるから、婦人運動は寧ろ勞して益なき場合が多いのである、唯候補者の姓名を有權者に印象せしむることに於て、多少の効果あるのみである、然しながら婦人の選擧運動が單に事務的に限らるる場合に於ては、非常の利益を齎すものである、假令へば古島一雄の選擧事務所は、常に新聞雜誌記者、浪人組、學生を以て滿されて居るが、此等の人々は憲政を論じ選擧狀態を說きて舌端火を吐くと云ふ有樣であつて、本尊の事務は全く御留守となつて仕舞ふ、選擧其ものが少しも統計的になつて居らぬ、選擧人名簿、投票の承諾有無、各區の形勢、會計の收支、運動員の住所氏名、ソレ等の事柄が一向要領を得て居らぬ、婦人の運動者は斯云ふ場合には神經質になる程、微密であり周到である、此意味に於て外的なる鳩山未亡人よりは、内的なる藏原夫人の方が、餘程實功を收むることが出來やう、

地方に於ては往々女侠客に類するものがあつて、無智なる有權者を操縱し、確實に數票若くは數十票を獲得するものであるが、文明都市に於ては全く駄目である、有權者の地方味、職業、性格に依りて運動することが、選擧の秘訣なりとせば、大都市に於ける婦人の戸別運動は、却つて有害であると云はねばならぬ。斯く云ふ私などゝ鳩山薫子の繪葉書を貰つて、少からず恐縮して居る。

五、黑暗々の地方選擧界

大都市の選擧にも滑稽、怪聞、悲劇と云ふやうな色々の出來事は勿論あるが、流石に忌憚すべき罪惡と云ふものが少ない、之れが地方となると驚くべき事實ばかりである、詐欺、脅迫、姦淫は今日と雖も依然として行はれて居る、父子、親族、友人、師弟の間柄も、選擧期間だけは全く仇敵の如くになつて仕舞ふ、四十四年秋の縣會議員選擧が黃金買收の一大威力を示した爲めに、四十五年春の衆議院議員總選擧は、偏へに金錢の多少に依りて勝敗を決せらるることになつたから溜らない、内務省の調査には一人平均一萬八千圓とある、郡部に於て一票最高拾圓、市部に於ては貳百圓と云ふ相場もあつた、選擧人の方では成るべく高く賣らむが爲めに、種々なる手段方法を取り、候補者の方では之を買ふべく種々なる手段方法を取りて金策をするのである、地方の實情を知るものは、選擧人に五拾錢乃至一圓を提供することを吝むものでない、何となれば選擧人が投票する爲めに町村役場に行くには、遠いところは四五里を歩まねばならぬ、隨つて投票は一日仕事である、ソレに役場附近で濁酒の一盃もやるものとすれば、兎に角五拾錢乃至一圓の損害である、今日の田舍有權者に立憲國民の義務であるとして、此犧牲を強ゆることは實際に於て酷である、投票賣買の行はるる理由は主として此處にあるのである、然るに選擧界には常に投票仲買人なるものがあつて、或る一町一村一區の團體投票を纏めて、之を候補者に糶賣した上に、其大部分を着服して仕舞ふ、甚しきは輸入候補者などに空地盤の賣買を試みて、數千金を懷ろにしなが

ら暫時行衛不明となるものがある、候補者の方でも之を表沙汰にすれば自己も犯罪者とならねばならぬ爲めに、止むを得ず泣寢入となるのである、私が東北の某縣で先輩の運動を助けたときに、某郡某村に親戚を尋ねて行つた、其郡にては金持の二候補者が全力を盡して爭ふて居つたが、其村は郡内第一等の大村で、百九十五票あるから、せめては四五の純潔なる投票を得たいと賴むだところが、其村の村長は甲候補者の集會に行つて、全村の投票を三千圓に賣ることを約して歸つたが、其後更に乙候補者の招きに應じて、再び糶賣を試み、遂に三千五百圓に再賣買したと云ふことを聞き、匆惶として逃げ歸つたことがある、投票が團體の共有として授受せらるるやうになつてからは、公々然として賣買を試むるものが多い、基本金とか衛生費とか學校建築用金とか云ふ名目の下に、候補者に渡りを付けて多額の金錢を受取り、重立者に於て之を着服したところが、有權者も候補者も之を制裁することが出來ぬのである、郡々から選擧事務所に出掛けて來る運動員なども、候補者よりは一票當り三圓位の相場にて金を取り、其半分位を懷ろにして、更に之を町村の仲買人に交附し、其仲買人は有權者一人に付き五拾錢内外を交附するに過ぎぬ、故に選擧界の腐敗と云ふものも、多くは投票仲買人に依りて促成せらるゝもので、有權者の罪は至つて輕いものである、而して候補者及び其幹部は、此等不正の金錢と投票とを得べく、自ら罪惡を犯さゞるを得ざることになる、以下少しく選擧界の裏面を書いて見よう。

六、選擧罪惡の二三實例

其一は手形僞造事件である、四十五年の總選擧に東北有數の市から、Aと云ふ候補者が出た、Aは二十年頃の慶應義塾出身で、其當時迄は縣會議長、新聞社長の肩書を有して居つた、卒業後間もなく其新聞の記者となり理事となり社長となり、市會議員、市參事會員、縣會議員、縣會議長となり、清節二十年國民黨の爲めに盡した男で、謙讓溫厚の人だけに、五十歲に至りて初めて立候補をしたのである、新聞社長の手當數年分を前借し、幾千かの公債、田地を賣りて、兎に角五六千圓の運動費の下に、理想選擧を遣ると云ふのであつたから、東京理想團の推薦候補者となり、黑岩周六、茅原廉太郎二氏の如きも遙かに應援した位であつ

た、然るにAの相手方は既に二三回當選したことのある政友會の成金候補者であるから、盛むに黄白を散布して勢ひ當るべからざるものがある、ソコで同じ國民黨から出た前銀行頭取のBと縣會議員である多額納税者のCに金錢の援助を求め、結局今後如何なることがあつても、之れ限り出金せぬと云ふ堅い約束の下に、五千圓宛一萬圓の出金を得て、出來得る限り應戰したが、投票の買收價格は益々昂騰し、一票六七拾圓より二百圓と云ふ相場を呼び、棄權料さへ三四拾圓を支拂はねばならぬ勢となり、二度目の一萬圓さへ瞬く間に無くなつて仕舞つた、Aは更に宅地家屋を擔保として金を造つて見たが、固より千圓にも滿ざる小額で、何の役にも立なかつた、最後の一週間は決勝戰である、而してAは全く軍資缺乏の窮境に陷つた、Aは參謀と相談して遂に又々Bに應援を求めたが、Bは前約を守りて出金を承知しない、Aは再三再四叩頭懇願したので、Cも出金するならば自分も其相當額を出金すべしと言ひ出した、然るにCは候補者に立つて居らず、且つ多年縣國民黨の黨費を負擔せしめて居るので、Aとしては到底Cに再度の出金を求むる勇氣がなかつた、左りとてBの出金はCの出金を條件として居る、溫厚篤實を以て一縣に知られて居つたAも、勢ひの爲めには制せられざるを得なかつた、Aは參謀と共にC署名の振出約束手形を僞造し、之を某商店に裏書して三千圓を得た、之をCの出金と稱してBの面前に提供し、Bより特に五千金を得たのである、AはBより出金を得ると共に、手形僞造の三千金は直ちに債務者に償却して、手形を燒棄する積りであつたが、愈々握つて見ればソンナ呑氣な事は出來ず、僞造手形は斯くて二週日間債權者の手に置かれてあつた、選擧は幸ひにAの勝利に歸してあつたが、A及び其參謀は此手形を取戻す爲めに、非常の苦心を重ね、殆むど間一髮と云ふ境地を辿つてあつた、其二は合議賣淫事件である、之れは私の親戚に關係ある事柄である、西南の或る市に市長をして居るイ氏がある、此人は政界の老武者として一時は天下に聲名を傳へた人であるが、議員運が惡く、二十三年の初期には當選後、訴訟の爲めに失格し、其後一回當選したのみで、遂に志を議員生活に得ず、故鄕に歸りて市長となつて居るが、四十五年には六十一歲となつたので、最後の一擲を試みむが爲めに、郡部より出陣したのである、然るにイ氏にはロ氏と云ふ金持の門下生あるが、十數年來數萬圓と云ふ迷惑を掛けてあるので、イ氏の立候補發表と共に、ロ氏の家族は忽ち警戒してロ氏の實印を隱匿し、且つ四方に金融杜塞を策したのである、ロ氏は禁錮同樣となり、先輩イ氏が十數里の山道を突破して訪問した時にも、遂に面會することが出來なかつた、イ氏にハ嬢がある、基督敎に歸依して、大阪某感化院の保姆となり、三十歲尙ほ未婚者として、靈は肉の上にありと叫びつゝあつたが、父イ氏の立候補と共に故鄕に歸り、母と共に運動して居つた、ハ嬢は一日ロ氏の家を訪ねた、ロ氏の家族が婦人と云ふので油斷をして居る間に、ロ氏の姿は忽然ハ嬢と共に見へなくなつた、家族は人を四方に走らしてロ氏を搜索したが行衞不明なること六日、其間にロ氏署名振出三千圓の手形が、市の金貸に依りてイ氏に割引せられ、ロ氏とハ嬢とは二十里先きの

海岸の一旅館から發見せられてあつた、ヘ據今は南洋洲の一角に傳道事業をやつて居る、其三は先生弟子を欺くとでも云ふべき事件で、私の身の上に關係したことである、關東の某縣は私の故鄕である、其縣の縣會は政友、國民の差が一二名であつて、私の先輩たる甲氏の率ゆる某郡中立議員三人の同盟に依ッて、漸く國民黨が勝利を占めて居つた、然るに四十五年の總選擧には、國民黨が其郡から有力なる候補者を立る爲めに、郡の有志家に問合せをしたところが、有志家共は大法螺を吹き立てゝ、千五百票の見込ありと報告した、國民黨は自派の候補者を立てて甲氏を排斥すべく、赤阪三河屋に自派の前代議士と甲氏と私とを呼むだのであつた、此際國民黨の總參謀たる乙氏は、私の小學、中學時代の先生で、且つ幼にして父を失へる私の爲めには、第二の父たる地位にあつた人である、乙氏は甲氏及び私に對して次の如く宣言した、吾々は縣會に於ては君等の同情を得て居るが、代議士總選擧には必ずしも友人たることが出來ぬ、味方らしく見せて内部で反對するよりは、當初より男らしく別れた方がよい、君等は君等として自ら覺悟して貰ひたいとのことであつた、私は乙氏及び其黨派が自黨の利害に依りて、十年の交情を破ることを心惡く思ふてあつたが、言ふても詮なきことと諦めて其場を退いた、然るに其後乙氏が自ら其郡の形勢を踏査した結果、其郡を根據として一人の候補者を立ることの不能なることを確め、其候補者を他郡に廻すことにした、乙氏は更に私に傳言して來た、吾黨は都合に依り他郡より候補者を立ることにした、故に甲氏にして戰備充分であれば、吾黨は甲氏の郡に入らぬ積りである、然し甲氏にして其郡を政友會の蹂躪に委するが如きことあらば、吾黨は寧ろ甲氏に代りて之を取らねばならぬ、故に歸縣と共に甲氏の戰備を内報せよと、私は師父たる乙氏の言に信賴し、歸縣匆々乙氏を訪問して、運動費が甲氏に恩惠ある某町の電氣會社より出ること、某町は國民黨に對する全郡一致の除外例を内定して、甲氏に投票すること、尙電氣會社の勢力範圍を甲氏に提供する筈故、甲氏の當選は充分見込ある旨を告げ、國民黨が甲氏の郡を襲擊せざらむことを求め、乙氏は直ちに承諾した、然るに私が歸るや否や、乙氏は直ちに某町の國民黨員に發電して、甲氏の糧道と得點とを制肘したる結果、甲氏は某町の得點百二十票を失ひ、且つ二千圓の軍資金融通を絶れて仕舞つた、甲氏は六點の差で落選したので、私は今日に至る迄、甲氏より怨れて居る、私が師父たる乙氏の言を信じたことが、此重大なる結果を來したのである、以上は單に一例に過ぎぬが、其他父子相背き親戚互ひに擊ち、婚嫁を離別し取引を絶止するなどの實例は枚擧に遑あらざるのである、選擧の内面は戰爭以上に悲慘なものだ、其滑稽、俗惡、非道、不德なることに於ては、天下の事態中、之れに比すべきものがないと思ふ。

七、恐るべき投票立會人

最後に述べて置かねばならぬのは、投票立會人のことである、世間では政府黨の强味と云ふものは警官取締の手加減が緩かなること、知事、郡長の思ひ遣りが

あることであると信じて居るらしいが、此等は間接の利益、稀有の利益であつて、眞の政府黨の强味と云ふものは、投票立會人を自派から選出し得る點にあるのである、町村投票所の投票立會人は、知事、郡長を通じて任命せらるるのであるが、此等の人々は町村の永住者である爲め、町村の某々は無筆なること、某々は誰人を選擧すると云ふこと位は、大抵知つて居るのである、然るに東北、北海道、山陰道、其他四國、九州、北陸道の一角には、漁夫、船頭、農夫、成金等のもので、町村に依りては一二割の無筆者がある、政府黨の候補者は立會人が自派の者なるを利用して、此等無筆の有權者を續々投票場に送る、而して或はボール厚紙に候補者の姓名を片假名にて切り拔きたるものを與へ置きて、其下に投票用紙を當て篏め、凹所より筆を入れしめて書き上げしむるか、又は一定の用紙に濃厚なるインキを以て候補者の姓名を書きたるものを與へ置き、投票用紙を其上にして模寫せしむるかの手段を取るのである、立會人が反對黨である場合は、無筆有權者の入場は不可能であるが、自派の立會人である以上、之を默認せしむることが出來る、また投票立會人が自派のものなるときは、立會人をして態度不明の選擧人が誰を投票したかを窃かに瞥見せしめ、反對候補者を投票したときは、直ちに之を場外に報告せしめて、自黨の壯士等をして鐵拳を加へしめ、以て未投票者中の反對黨側の有權者をして、畏怖して自派の候補者に投票せしむるか、或は棄權せしむるかの方法を取るのである、四十五年の總選擧に於て東京府下西多摩郡の某村に於て、非政友熱の甚しきとき、高木正年を投票した一有權者は、此方法の犧牲となりて毆打せられ、夫れが爲めに其村の高木派は悉く棄權したことがある、投票立會人は事實に於て選擧の大勢を支配するものと云ふても差支ない、四十五年の總選擧に於ける各政黨候補者の落選率が、政友會二割五分、國民黨三割四分、中央俱樂部四割五分、無所屬五割であつたことは、即ち之を事實に示したものである。

時局の人・裏面の人

鐵拳禪

▼夏目漱石君は來客に『もう御病氣はすつかり御癒りですか』と問はれた時、『えゝまあ何うか斯ぅか生きてゐます』と云ふ挨拶をして居たが、何だか不穩當な心持がするので、近來は『病氣はまだ繼續中です』と云ふ事に改めたさうだ。夫れと話は違ふが、後藤新平男は、『相變らず御盛んですか』と問はれると、『いやなに吾輩は修養中だ、』と云ふ様な挨拶をしたが、此頃は『吾輩が活動すると政府が怖がるから當分靜養する積りだ』と云つて、梅の咲く熱海に去つたさうだ。

▼夏目君の挨拶には、俳味があり、皮肉があるが、態と考へて云つてるやうな所がある。後藤男の夫れには、稚氣があり、誇張があるが、無造作に吐き出されたものとより思はれない。そこが胃弱の漱石君と、野心の後藤男との、生活の違ふ所だ。

▼後藤男の活動振も古いものだが、今回の總選擧には十でも二十でも後藤黨を作らうとしてゐる。併し夫れは世間體だけの話で、實は政友會と接近し、同志會を叩き潰さうと試みてゐる。是れは政友會の官僚策士で小原敬と呼ばれる、山形出身の森正隆君が東北黨を作らうではないかと云ふ名義の下に、彼れを誘致し、高橋是清男等と握手させたのである。

で、近來は頻りに高橋男と往復し、政友會の東北出身者と高談放論して居たものだ。

▼斯うなると、氣が氣でないのは、同志會の荒井泰治君だ。宮城縣の地盤は、先年後藤男と遊說して折角築き上げたのだが、今後藤男が高橋男と提携して選擧應援に出掛ける事になれば、同志會の地盤に影響するばかりでなく、荒井の勢力が失墜して了ふのである。何となれば、後藤あつての荒井で、荒井あつての後藤でないのだから。そこで荒井君は後藤男を尋ねて、『宮城縣にだけは遊說に來て吳れるな』と談じ込んだ。如何に野心の爲めとは云へ、[illegible]以來の乾兒を袖にする譯にも行かず、少からず弱つてるさうだ。

▼乾兒關係は何うであらうと、後藤男の政友會應援は動かすべからざる事實だ。彼れは既に菅原傳の爲めに、推薦狀を發してゐる。何誰か代作か知らぬが、其の文句は先づ斯うだ。『……先年貴地周遊後匆々既に三星霜を過ぎ、内外の形勢驚くべき變遷を見るに至りたるに、但だ同志會の紛擾のみは依然絕ゆる日なく、小生脫會後政權に接近したるも同様の次第、遺憾千萬に御座候。小生脫會當時、所謂黨人一流の嫚語を放ち候

得共、一切辯解不致、單に將來の事實に徵して明瞭なるべしと存じ居り候處、大石君等も漸く相覺りたるものと相見え、昨今隱退の事は、各地方識者をして小生結黨式前の處決に對する不審も氷解し、釋然たらしむる處ありとて、多數の通信に接し居る次第に御座候。……實に同志會も形骸のみにて、故桂公創立の精神は既に滅却致し居り候。小生も桂公と圖りたる事水泡に歸し、地方自治體の健全なる發達を遂げしむること、並に黨弊一掃のことは到底望むべからざることを認め、徒らに地方人士の迷惑をのみ起し、罪惡を重ね候事慚愧の至りに候。……當年の遊說は大局の效果を收めず、却て暴を以て暴に代ゆるの外何等益なく、遺憾無限に候。天下は危急存亡の秋と相成り、大限伯等の手腕に委しては挽回覺束無く、同志會も內訌に苦み、我が國家を負ふこと如何と案じられ候。黨派としては未だ〳〵政友會の多數結束は聊か力を致すに足るべきか。其齊制の整々見るべきは解散當時の態度に徵して明白に候……。』

▼是れで觀ると、後藤男は『同志會は內訌に苦んで居るから駄目だが、政友會は多數結束するから賴母しい。又力を盡しても損がない』と思ふだけで、主義政見が合致するから何ら仕ようと云ふのではないのだ。多數の結束は人足でも出來る事だ、苟も一國の代議士が雇人足同樣に結束して、現內閣を破壞せん杯と敎闔くのは、餘り褒めた事ではない。若し解散當時の態度を云ふなら、あの內訌の絕えない同志會が桂公の〻嫡長島隆二君を除くの外、皆一致の行動を採つた。然るに政友會は、解散を怖れて脫黨する者や、味方を裏切つて除名された者は、十數名に上つた

ではないか。後藤男の所謂天下危急存亡の際に、此の始末では根つから賴母しくないのだ。政治家の態度は、さうした利害に囚はれずして、主義政見の爲めに勇往邁進するを以て壯とすべきである。多數の結束力のみを當込んで、政友會を援けんとする後藤男の考は、ちと間違つて居りはせぬか。

▼解散當時は長島隆二君のみ獨り惡者になつたが、其の背後には秋山定輔君が居て操つて居たのだ。秋山君は所謂非幹部派の策士で、法螺は吹くがお人善しの早川鐵冶君や、後藤系の誰彼やを煽り立てゝは、反加藤の氣焰を揚げさせて居た。さうして彼れは、現內閣の一角を切崩さうとする異圖を抱いてゐる。長島や早川も裏面から觀れば、秋山君の傀儡のやうなものだ。併し秋山君とて然う大した惡人でもなく、大陰謀家でもないのだが、ちよい〳〵仕事をやるので、幹部派からサタン視されるのだらうだ。

▼早川君は總務に新任された時は大得意で、身長までが嶄然頭角を抽いて居たが、何ら云ふものか加藤男には敬遠されて居た。實業家の澁澤男や、中野武營君等が政局の前途を憂ひて、政府政友兩者間の調停を試みた際、早川君は乃公の腕を揮ふは此の時にありと、早速大限伯を訪問して、限原兩雄會見の芝居を仕組んだが、加藤男の爲に木ツ葉微塵に叩き毀されて了つた。が、加藤男が激怒の末、極端に早川君を叱斥したので、遂に反對に早川君から油を搾られた。夫れからと云ふものは早川君更に一層得意となり、『あの傲慢な加藤の鼻をへし折つたのは俺ばかりだ

らう』と、頻りに痛快がつて居た。誰が何ぞ知らん、今回の總選擧には秋山君と同じく継子扱にされるので『斯う云ふ筈ではなかつたが』と、苦く笑つてるさうだ。

▼政争などを隣の猫の喧嘩ほどにも思つてなかつた純文藝家や、美術家が、時勢の進運に連れて、公式に政治上の發言權を確得せんと、目を覺して來たのは結構な事だ。一體彼等が今日まで政治に關係するのは俗人に墮するかのやうに考へ、努めて夫れに觸れることを避けて居た。時局の問題でも、社會の問題でも、思想上から批評すべき事が多々あるのに、夫れを論ずるさへも外道のやうに思つて居た。だから彼等は藝術の隱家に棲んで、實際問題に觸れず、「生きた問題を捉へず、相變らず前時代の詩人のやうな態度で居た。さう云ふ因襲からして、代議士候補に立つ者を見ると、馬鹿者か何ぞのやうに云つて居た。今日の新聞なども、矢張文藝家や畫家の候補騒ぎを眞劔なものと思つて居ないやうだ。

▼今回の總選擧に名乘を揚げた文士は、馬場孤蝶(東京)、與謝野鐵幹(京都)、小山鼎浦(宮城)、樋口龍峽(長野)、茅原華山(東京)、畫家では尾竹竹坡(東京)と云ふ顔觸だが、其の多數は現内閣の同情者である。獨り異彩を放つて居るのは茅原君だが、彼れは新聞記者で、文藝家ではない。黒岩周六君の歐洲出兵論を非とし、蹶然『萬朝』を去つたのだと云ふから、無論一個の政見を把持してるであらう。

▼尾竹君の發奮の動機は、文展に不平を抱いて居るからだとも云ふが、宣言には憂國の至情から出たやうに書いて居る。さうして書いてある事は半熟、不徹底で、何が何やら分らないが、分る所だけを見れば、其の主張は富國強兵と云ふ事なんだ。産業の發達、工業の振興など云ふ文字が處々にあるが、美術界を何う仕ようなんて云ふ意見は、インキの色にも出て居ないやうだ。是れでは『竹坡は畫筆を捨てゝ天晴政治家になる積りだらう』と云ふ者のあるも無理のない話だが、彼れとて天分を知るもの美術界を隱退するもので無いことは明かである。何でも代議士は政治屋の專業でなければならぬ者のやうに云ふものは、云ふ人夫れ自身の誤解に基くのだ。

▼尾竹君は金屏風の十雙も畫けば、運動費ぐらゐは出來るだらうが、文藝家は其處に多くの困難がある。貧乏だから、厭でも應でも理想選擧を標榜せねばならぬ。が、現行選擧法の下にあつては、何うしても多額の運動費を要する。運動費が乏しければ、到底必勝を期し得ないやうな事情になつてゐる。馬場君や、茅原君は此の情弊を打破し、さうして選擧界を廓清せんが爲めに、候補を爭ふのださうだが、始から必勝の確信がなければ、何うしても其の運動が不眞面目になる。自身は不眞面目でなくとも、選擧民からは不眞面目のやうに思はれる。文士の候補者は、何時もあゝだと云ふ非難を蒙る。すると、後年候補に立つ者に非常な惡影響を及ぼすから、甚深の注意を要するであらう。

▼先年、役者の川上音二郎や、市川團十郎や、力士の常陸山谷右衛門等が代議士候補に立つと云つて、天下の耳目を聳動した事がある。今回の文藝家の選擧騒ぎも、世間を賑はすに過ぎまいと、冷笑の眼を以て見られ

て居る。新聞の政治記者が候補に立つのは別に不思議に思はれないで、文藝家の危まれるのは、其の態度が不謹慎であるのと、平生政界の事に迂遠であるのと、其の地位が社會から餘り重く見られないからであらう。知らず文士候補者諸君の中で、果して月桂冠を戴いて、此の輕侮の念を一掃するものが有らうか。

▼電燈統一問題の失敗で、東京市長の阪谷芳郎男が辭職し、電氣局長の松木幹一郎も亦進退を共にした。助役問題で揉つた揉んだの騒ぎをやり夫れが片付いたと思ふと、今度は市長排斥の火の手が揚ると云ふ有様。是れは市長や助役の適任不適任と云ふ問題よりも、寧ろ市會の横暴――朋黨の爭から斯う云ふ紛擾を來すのだから、先づ市會自身の反省と、刷新とを要求するのが順序であらう。

▼尾崎行雄君の市長時代には、森久保作藏の一派が隨分横暴を逞しうしたが、今日は市會の革新を叫んだ實業家の面々が又森久保等のやつた様なことを繰返して居る。市長を選任する時は、人格手腕共に勝れた立派な人物をと注文するが、さて其の人物を擧げると、其の人格手腕を信任せずに、行政事務に一々に干渉し、飽まで傀儡たらしめねば止まんのである。夫れならば無爲無能の木偶坊を据ゑて、之を得手勝手に撫で廻したら可さ相なものだが、然う極端な事もやれないやうだ。今後市長を推薦するにした所が、彼等が自治體の精神を理解し、從來の態度を改めない限り、何人か其椅子を占めて、矢張無慘なる死を遂げるに極まつてゐる。

▼市長候補者は何時も一人娘に婿八人の格で、多數の人々が噂に上るが今次も豐川良平君、田健次郎男、角田眞平君、大木遠吉伯、後藤新平男が數へられてゐる。併し役人の古手は御免を蒙る方針ださうだから、田健次郎男は勿論、後藤男は問題になるまい。大木伯は行政事務には通曉せず、大した手腕も亦有らうとは思はれないが、据ゑ付けて置くには、餘りに覇氣があるから、縱令推薦されても、自分から御免を蒙るであらう。

▼豐川君は、實業家の一派で比較的政治家風の男で、黒いか白いかは知らぬが、兎に角腹が大きい、大きいからと云つて、市長に適任だとは云へないが、市會を操縦する位の事は出來よう。角田君は代議士、市會議員、市區改正局長など經歷があるから、政治の事も市政の事も能く心得てゐる。曾て私行上の非難で、政界を失脚したが、近來は何程か信望恢復したやうだ。政治的手腕だけは、確かに良平君の上にあるが、市政刷新の點に就ては保證の限に非ずだ。

▼青年政治家を以て任じてゐる鳩山一郎君は、演説會よりも戸別訪問を熱心にやつて居る。夫れに例の未亡人春子、夫人薫子も盛んに叩頭主義の運動をやつて居るので、吉植庄一郎君がぐつと癪に障つたと見えて、此の程政友會本部で鳩山君を捉へて、女の褌で角力を取らずに、立憲的にやれとか何とか、皮肉を云つたさうだ。夫れにつけても、治安警察法を改正して、婦人でも政談演説の傍聽や、手傳が出來る様にしたいものだ。

後援

黑頭巾

其一

●金銀を以て馬桂の先頭を壓迫すれば、直ちに、敵を捕獲するを得可くして、而して桂馬の後に接して、僅に歩の一兵を置くときは、則ち我が金銀の優勢なるを以てして、桂馬に加ふることあるを得ず。此の場合に於て、歩の一兵は、尤も有力に、桂馬の後援を爲すものならずんばあらず。

●此の場合に於て、若し順序を顚倒せしめて、歩を以て、桂馬の前に置くきとは、歩は、敢て桂馬を後援するに足らざるのみならず、桂馬も亦た、嘗て、歩の後援を爲すを得ざるなり。歩は、唯だ、桂馬の後に、直接に置かるゝ時に於てのみ、桂馬の後援を爲すを得べし。

●桂馬は、斜角に伸びて、敵を狙擊するの外、更に、一の攻擊力を有せず。彼は、其の攻擊力の、極めて銳利にして皮肉的なると共に、射界は甚だ狹し。譬へば回轉せざる隱現砲臺の如く、如何なる大敵をも威嚇するを得れども、射界に入らざる小敵に、容易に、肉迫せらるゝの患あり、後援の必要と恩誼とを感ずること極めて深きを致す。一兵の歩と雖も、桂馬に對しては、容易に、有力なる後援者たるを得る。

●盤上、兩軍、陣容を整へて、相對して、始めて砲火を開くの時、桂馬が、遙に、前衞の歩兵を、殊に、飛將の左翼を後援するの妙味言ふ可らず。

其二

●狐、獅子の爲に捕へられ、將に喰ふところならんとす。狐、獅子に謂つて曰く、誤つて余を喰ふこと勿れ、余は、靈獸なり、山中、余に逢ふ者、悉く、余に、敬意を拂はざるものあること無し。若し、余を喰はゞ、恐くは君の德望を害せん。或は余の言を疑はゞ、試に、余の行く處に追隨して、其の眞否を徵せよ。

●獅子、狐をして、縱まゝに行かしめ、自から其の後

に追隨して狐の威力を見んとす。狐、軒昂として山中に往く。百獸、皆、風を望んで驚き且つ奔る。時に、豺狼の群、或は、狐を見て、勢を起すものありと雖も、既にして狐の後に、獸王の顏續いて現はるゝを見るに及んで、忽ちにして尾を垂れて、逡巡し去らざるは無し。

◉獅子は、狐の言、一々、事實あり、悉く信ずるに足るべきを思ひ、また其の微軀、彼の如くにして能く百獸を伏するの靈異なるに感じ、以て、非常の奇才と爲す。啻に、彼を喰ふ事を斷念したるのみならず、これより相結んで伴侶となり、屢、相携へて山中を行く。狐、つねに前行し、獅子は後行す。

◉狐をして獅子の後に追隨して行かしめば、百獸、皆、狐を以て、「獅子の褌を擔ぐもの」として、ともに狐を指して笑はん。狐、昂然として前行するの時、百獸回避するに急にして、未だ狐を笑ふに遑あらざるなり。

◉狐、獅子に追隨すと雖も、必ずしも獅子の勢を添うるに足らず。而して後行するが爲に、狐の聲價は全滅す。狐、若し、獅子に前驅するも、また獅子の勢を增すに非ず。狐は、本來、獅子に對照して勢力に非ず。然れども狐にして獅子に前驅する時は、光彩、其の身邊に煥發せずんばあらず。此の場合に於て獅子は、知らず識らず狐の爲に後援をなしつゝあり。

◉此の場合に於て、狐には、獅子を以て後援と爲すの智謀あり、而して獅子には、則ち、狐の爲に後援をなしつゝあるの自覺を有せず。感興は、此の間に存するなり。假令、獅子自覺して、狐をして前驅せしめしならば、後援たるを失はずといへども、詩味は則ち索然として盡く。

其 三

◉獅子は、獸王たるの威望を有す。ひとり狐に對してのみに非ず。何者をして前驅たらしむるとも、彼は、絕大の後援たるを失はず。狐は、則ち獸中の、殊に非力なる者なり。何者を隨へて行くも、多少の後援を得たるを喜ぶべし。

◉己と同等のものを相携へて行くも、後援といふを妨げず。或は、己以下のものを携ふるも、數字の上に於ては、大者、更に、其の大を加ふるものにして、之を後援といふも、亦た必ずしも不可なりとせず。

◉泰山、一握の土を加ふるも、其の大を加へたるに相違無し、然れども一握の土は泰山の大を加へたりといふを以て誇榮するを得ず。これに反して、泰山の一握

の士を取り來りて、これを泰山の士なりといふ時、其の士に世人に珍重せらるべし。珍重せられずとも、一瞥を與へざる者あらざるべし。一撮の士に對して、泰山は絕大なる後援を與へつゝあればなり。

◉後援せらるゝ者が太だ小にして、後援者が絕大なるとき後援は威興、大に湧く。

其四

◉芝居に、仙臺侯が高尾を携へて、花道より出で來り、「高尾の提灯持とは」と言へる一段あり。提灯持に對する旦那は、釣鐘の如く重々しきものなり。前驅しつゝある提灯持は、旦那を以て後援と爲す。高尾は、宜しく仙臺侯を以て、後援と爲さゞる可らずして、仙臺侯が却つて提灯持を爲すは、後援者が前驅するものならずんばあらず。

◉高尾は、仙臺侯を以て後援と爲すの意思無きが故に、仙臺侯をして提灯持を爲さしめて怪まず。仙臺侯は、其の刹那、一身よりも高尾を重しとしたるが故に、提灯持を爲せるのみ。

◉此の場合に於て、仙臺侯の提灯持をして前驅せしめつゝある高尾は、精彩煥發す。後援の資質を有せる提灯持が前驅すればなり。則ち前驅の中に後援あるなり。形式は前驅にして、內容は後援たるなり。

◉偉大なる後援者は宜しく前驅せしむ可らず。後行する後援者は、後援の威儀を發揮せざる可らず。若し後援者をして前驅せしむる時は、須らく後援の威儀を去つて、提灯持と爲らしめざる可らず。白龍をして魚服せしめざれば、以て前驅せしむ可らざるなり。

◉後援の意義は、主人公を引立たしむるに在るを以て、主人公をして「中心の位地」を去らしむ可らず。其の前驅たると後行たるを問はず、「中心の位地」、主人公を去つて後援者に歸するときは、すべて後援の意義を沒却す。

◉後援は實力に依つて行はる。實力は、後行と前驅とに依つて增減せらるゝの理無し。則ち主人公を引立たしめんとするは、其の形式に俟たざる可らざる所以ならずんばあらず。

◉後援が、後行に依つて行はるゝは順なり。此の場合に於て、後援は、崇嚴の觀を具す。前驅に依つて行はるゝは逆なり。此の場合に於て、後援は滑稽の感を與ふ。而して滑稽の中に充實あり、威力あり。

其五

◉虎尾に附するの蒼蠅は、千里の遠を飛行すべし。蒼

蠅は、此の時、虎の爲に後援せらるゝにも非ず。

◉蒼蠅をして、若し、虎頭に點ぜしめば如何。蠅は、虎より後れて行くにあらずと雖も、猶ほ蠅は、虎を以て後援と爲すを得ざるなり。

◉自から千里を行く能はざるものは、虎尾に附して雄飛すと雖も、虎尾を以て後援となすことを得ず。一切の能力を附與するものは、後援にあらず。所有者にあらずんば、則ち保護者たるなり。

◉搖籃の乳兒は、其の父母を以て後援となすことを得ず。未だ全く獨立することを得ざる者は、後援を有すること無し。後援の事實は、獨立獨行者に對して、始めて行はるゝものならずんばあらず。

其六

◉試みに、マラソン競爭を觀るに、旗を立て、隊を組み、名を呼んで、撰手を喝采しつゝあるものは即ち後援なり。撰手に負はれて奔る者は、假令、健行、第一着を占むるありとも、撰手を以て後援と爲すを得ず。

◉中原に出で、能く、鹿を逐ふを得る者、則ち後援を有するを得る。後援を得んとする者、先づ、自から健行するの氣力能力あるを要す。弱行を助成して、健行たらしむる所以のものは、決して後援に非ず。老人に於ける杖は、其の後援に非ず。伯大隈に於ける義脚は、彼の後援に非るなり。

◉後援は、獨立獨行の勢を後援す。獨立獨行の要素を成す所以のものは後援にあらず。後援を待つて、始めて人物を成すものは、人物にもあらざるなり。

其七

◉後援の趣味は、國技館の土俵に、遺憾無く發揮せらる。力士の名を呼んで拍手喝采するものは後援なり。後援は人氣なり。人氣は、土俵の周圍に磅礴するも妨げず。後援者は、土俵に上ることを得ず。假令、其の人、土俵に上らずとも、また其の力をして、土俵の上に及ぼす可らず。

◉後援は、土俵の外に働くものなり。雜然として、棧敷、到處に、散在するを妨げず。老幼婦女、何者たるを制限すること無し。旦那たるも可なり。旦那たらざるも可なり。大場所の內外を通じて後援を爲すも可。時に、大場所に來りて、忽然として後援を爲すも可。

◉後援者は、自から角力を取り、角力を解する者もあり、解せざる者もあり。恐らくは、深く解せざる者、其の多數に居るべし。後援は角力に非ず。後援者は力士に非るが故に、角力を深く解すると解せざるとは、

必ずしも要件にあらず。譬へば政治家たる伯大隈の政治を後援するといふ後援會が、政治を解すると解せざると、政治家たると、政治家たらざるとは、問題に非るが如くなり。

●後援は、動機に、重を措く可きものに非ず。土俵上の力士を後援するは、角力を後援するものならざる可らず、然れども事實に於ては、角力を後援すると、人物を後援するとを問はず。等しく後援たるを失はず。動機の如何を問はず、後援の形式を具備するものは、皆、後援ならずんばあらず。

●浦ノ濱、士州山、黒瀬川の一勝一敗が、滿場の紅裙をして一喜一憂せしむといふものは、其の角力振ヶ見るに非ず、男振を見る。男振を見るといふとも、勢援たるには相違ある可らず。

其七

●伯板垣は角力の後援を以て知らる。然れども彼は、寧ろ友綱部屋を後援す。更に、一歩を進めて言へば、今に於て、彼は、太刀山を後援するものなり。

●一點に集注したる趣味を、推廣して全斑に及ぼすものあり。全斑に渉れる趣味を凝結して、一點に集注せしむるものあり。蟲の研究より進んで昆蟲學者となるものあり。昆蟲學者が蟲の專門家となる者もあり。伯板垣の角力に於けるは、後者に屬す。彼は、角力を好みたるが、年を積んで、遂に、太刀山を好むに至れる者なるべし。

●彼は、角力に淫すと傳へらる。寧ろ、彼は、角力の後援に淫するものならずんばあらず。彼が、當年、尙ほ、政海に活動せし時と雖も、角力季節となれば、彼は、政治家にはあらず。偶太皷の、隅田川の曉風に響く日、彼は政治を忘る。彼は、自由黨の本部に來らず、回向院の棧敷に來る。

●後援は、淫して狂すること、伯板垣の、角力に於ける如くなるに至らずんば、後援を象徵すといふ可らず。鹿を逐ふ者は、山を見ずといへり。山を見ざるに非ず。山は、鹿の陰に在り。角力季節、伯板垣は、政治を見ざるに非ず。政治は土俵の中に在り。

●伯板垣は、維新の功臣、今日に於て、伯大隈と共に、政壇第一の先輩となす。斯の人、當年、角力季節ばかり、自から政治を忘れたりしが、今、全く政壇より忘れられ、角力季節ばかりに、回憶せられつゝあり。吾輩は、國技館に於ける、彼が、正面棧敷に端坐して、老來、稍、中風を病みて、重厚なる風貌、毿々たる尺

餘の白髯を、斷えず微動せしめつゝ、土俵を凝視する、維新功臣の面影に對して、深甚なる感興を催ふさずんばあらざるなり。

其八

●後援は、未來を後援す。則ち、後より勢援するなり。後援は、過去を後援せず。未來を有する者は勢あり。故に、後援は、勢に附すの觀を具す。未來を失ふ者は、勢を失ひ、併せて後援を失ふ。

●力士の、後援を有する者は、新進に非ざれば、則ち、勢力旺盛、まさに全盛時の絶頂に位して、尙ほ未來に其の勢力を繼續するを得るの望ある者ならざるは無し。

●勢力は熱なり。身心、則ち有形、無形の二方面に、勢力を蘊蓄する者は、熱を生ず。熱は則ち勢力なり。自から熱を有する者にして、始めて後援を有するを得る。勢力、ます／＼發達する者は、熱の昻騰しつゝある者なり、後援は熱なり。自から熱を發揮すること無くして 後援の熱を起すの理ある可らず。

●未來に富む者の、發達の勢は、譬へば火の盛んに燃え、湯の旺に沸騰しつゝあるが如し。これに對する者、快然として其の勢に打たれて、熱を生ず。燃燒、沸騰の勢、衰ふれば、觀者の熱も亦た自然に冷却す。燃燒、沸騰の全く消滅する時、觀者の熱も亦た全く冷盡し畢りて、燃燒、沸騰は一場の舊夢となる。燃燒、沸騰の舊場に臨んで、自から當時、後援の熱を尋ねんとするも能はず。由來、後援は熱の傳波、同化ならずんばあらず。

●後援は、嘆美、崇拜、同化に依つて生ず。哀憐に由つて生ぜず。後援は積極的のものなり。毫も消極的性質を帶びず先天的に消極的事業と相反し、相容れず。これを以て、獎勵會、學資給與會、水難救濟會等は、後援たることを得る。養老院、慈惠院等は後援たるを得るものに非ず。

●人情は積極的の趨勢に向つて傾注す。人情の傾注するところは、實力、金力も亦た傾注す。人情の傾注するところは則ち人氣なり。人氣は則ち後援なり。人氣は勢力なり。後援の名無くとも、人氣の趨くところは、勢力を爲す。人氣のあるところは、後援の實を有するならずんばあらず。

其九

●梅の花は强き角力とも思はれざりしかども、一時、有望の聲、盛なりし時、滿場の紅裙の目を集めしむるに足れりしなり。未だ老ゐざるに、其の蹉跌して幕下

に陷落し來るや、其の登場に當りて、滿場、蕭然として聲無く、喝采も起らず、拍手も響かず。紅裙は、皆、知らざる顔を爲す。彼が沸騰、燃燒の勢は、舊夢となりぬ。

◉角力の男振といふは、角力强ければ引立ちて見へ、角力衰ふれば、間の拔けて見ゆるものなり。梅の花の盛衰は、金力に依りしに非ず。藝者の後援が、雪駄の裏と同じく、金の切れ目に、切れしといふにはあらず、寧ろ炬燵の蒲團の如く、中心の火熱の衰へしが故に、蒲團も亦た冷却したりといふに過ぎざるなり。

◉吾輩の青年時、智惠の矢といへる力士あり、角力振りは大家の態度ありしも、年老薄力、漸次に下りて、二段目より三段目に落ち、給金のみ高かりき。一時、大達に勝ちしほどの角力なりしと聞けど、一人の、其の登場を喝采する者無かりき。昔人の、卒都婆小町に於けるも、此の如くなりしならんと思はれき。

◉雪見酒は、雪消ゆれば熱を失ふ。月見酒は月落つれば、熱を失ふ。夫れ英雄と美人とは、白髪を人に見す可らず、白髪を生ずれば後援を失ふ。後援を失ひて、尚ほ登場するは悲劇なり。後援を失へる力士は、土俵に上る可らず。後援無き政治家は、議政壇上に立つ可らず。

◉此の意味に於て、吾輩は、鳳の横綱たるを、必ずしも不可とする者に非ず。鳳は、横綱たる尚ほ早しといふの理由は否定す可らず。然れども彼は、春秋に富み、未來に富み、沸騰、燃燒の勢を以て、土俵を飾るを得るの見込あり。彼の登場は、必らず滿場の喝采を以て迎へらるべし。吾輩は、鳳が横綱たるの早きに過ぐるを憾まず。梅ヶ谷が横綱を退くの遲きに過ぐるを悲しむ者なり。

其 十

◉國技館の棧敷に見る應援の表現に、形式の趣味を感ぜしむるもの少しとせず。伯板垣は端坐して、花月の女將は、其の小さき嬌態を踴躍せしめつゝ、而して呑兵衞は、棧敷に突立ち、左足を椽に踏み掛けつゝ、紫の小旗を揮つて、綾川を絶叫す。ともに皆、畫趣あり。

◉玉椿は古今の名力士といふべし。彼ほどの短軀を以てして、つねに大敵を惱まし、久しきに渉りて、善く盛名を失はざるは、短軀に不似合の力量に依るといふとも、また實に、彼の意氣に存せずんばあらず。花月の女將は、自から、玉椿の意氣を嘆美する者なりといへり。

◉北米合衆國、在留の一紳士より年始狀を送り來る。東京、新橋、おでこどのと記す。集配人、乃ち之を花月に配達す。花月の女將もおでこなりと見ゆ。公柱もおでこなりき。おでこには多智の人多し。玉椿の意氣を嘆美すといふは、兎も角も、多智なるを失はず。

◉呑兵衛の呼聲は、滿場に徹す。應援聲中の第一聲、呼出し勘太の外、國技館裏、また此の美聲無し。而して彼が綾川を呼ぶは、應援の好時機を捕捉するの甚だ敏なるを見る。呼號の態度の意氣滿盛なるを見れば、彼は、滿腔の精神を援勢に傾注するものなるらし。彼は、尋常の勢援兒に非ず。

◉吾輩、學生時、鳳凰の全盛なりし頃、一少年の、鳳凰ヶ絶叫する聲、極めて清美、回向院の名物たりし事あり。彼は安藤則命の子なりと聞けり。安藤は角力狂を以て知られたり。斯の少年、一たび去つて「鳳凰「鳳凰」の美聲など恍として耳に在り。爾來、應援の美聲、呑兵衛の「綾川」に及ぶもの無し。

◉此の春の大場所に、紫雲龍と小野ケ崎との對場に、計らずも應援の對抗の奇觀を現出せり。東方に陣する慶應學生の一團は紫雲龍を絶叫し、西方、小野ケ崎合の一團は、小野ケ崎を絶叫し、ともにフレー、フレーを連呼す。而して一は學生にして、一は下町、烏合の商人らしく見へ、一は叫聲の一致するに、一は頗る整はず。兩々、相對して、巧拙の對照、滿場の感興を曳く。後援にも亦た訓練ある事を想到せしめずんばあらざりしなり。

其十一

◉國技館裏の後援は、必ずしも發聲するものとは限らず。默して後援する者あり。日々、國技館に來らすと雖ゝ、有力なる後援を爲す者もあり。聲無きは、却つて聲有るに勝さり、無聲者、發聲者に勝さること少からず。實は、後援の熱情と妙味とは無聲に存するなり。

◉狐、獅子を隨へて行く。兩者の距離、甚だ近接して、獅子の爲に前驅すと見ゆるは宜しからず。後援は後衞に非ず。而して此の兩者の關係は、前驅と後衞とに非るか故に、獅子は狐の爲に後衞と見らる可らず。後衞と見らるゝも後援たるを失はず。然れども後衞と見ゆるは、後援の大乘には非ず。

◉後援の妙境は、後援の存在、確實にして、其の存在の形式の露骨ならざるに在り。狐の獅子を隨ふるは、獅子をして見え隱くれに後行せしめたり。本人をして、若し寫眞鏡の前に立たしめば、本人と後援者と、同時

に、レンズに照映せず。或は、一は鮮明に、一は朦朧と映ずるを以て、妙境となすべし。

●露骨は有限を意味す。後援の餘りに明瞭なるは、其の奥行の見え透く心地す。第三者の眼中に映出する後援は、明瞭ならざるを貴ぶ。一代の大力士は、滿場を擧げて後援となす。一世の大政治家は、滿天下を以て後援せしむるなり。ともに、制限されたる、露骨なる後援を特有すること無きなり。

●横町の露次に遊戯する少年は、太だ明らかなる特定の後援を有す。則ち其の父の名は、彼を後援しつゝあるなり。稍、巧慧なる藝人は、皆、旦那を有す。旦那は後援なり。旦那は熱誠ある、有力なる後援にして、同時に、旦那の外に、後援無し。一代の大力士には旦那無し。一代の人、皆、後援なり。大政治家には、限られたる後援無し。滿天下の人、悉く皆、後援ならざる可らず。

●小なる人物は、明瞭なる、特定の後援を有す。大なる人物は、明、不明、漠然として大なる後援を有す。其の中に、明らかなる後援を含むこともあり。

其十二

●國技館裏の後援會は、皆、有望、全盛の力士の爲に設けらる。伯大隈の老齡七十七に及んで、始めて後援會を有するは、力士の想像する能はざるところなるのみならず。彼は既に、白髮すらも人に見する能はず、滿頭禿盡するに及んで、後援會を贏ち得たるは、古今、政治家の、始めて見るを得たる奇現象なりとせずんばあらず。

●今日、彼の全盛時にあらず。彼の自から言ふ如く、壽百二十五歳とすれば、前途尙ほ遠し。人壽、保し難しといへども、百廿五歳を提唱するの意氣は多とすべし。且つ、彼の熱は、尙ほ衰へず。燃燒の火力、人の眼に映ず。彼の人氣ある所以、人氣あるは則ち後援を有する所以。彼が老齡、國事に當るを多とすといふ者あれども、後援は憐愍に由つて起らず。彼が熱力、尙ほ熱波を、人に送るものあるに由る。

●維新の功臣、概ね老衰し盡くすの時に當り、彼は、則ちひとり嶄然として後援會を有す。また以て彼の舊友に誇稱するに足る。然れども特定の露骨なる後援會を有すといふは、必ずしも一世の大政治家を象徴する所以には非ず。即ち後援會は、伯大隈の大を爲す所以には非るを知るべし。

其十三

◉國技館の前には、常陸山會、鳳會、太刀山會、綾川會、其の他、數多の會の總見の看板を掲げざるの日無し。是等の會は、悉く、後援會に非るは無し。而して一も後援會の名を冠するものあらず。木堂會、鏡花會といふも後援會なり。而して伯大隈ひとり後援會の名を特記するは何故ぞや。

◉伯大隈會が、特に、後援會と稱するは、政社に非ることを示さんとするにてもあるべし。吾儕を以て見れば、伯大隈が老年政治家たるは、隱默の間に、後援の二字を標榜するの必要を感得せしむるに至れるものならずんばあらず。老者は、人をして消極、寂寥の感を起さしめ易し。則ち後援を絶叫して、後援の感を、華々しくせしむるに若かざればなり。

◉壯年者がステッキを揮ふは、眞に、これを揮ふなり。故に、必ずしもステッキの堅剛なるを要せず。或意味にては、裝飾とも、趣味とも見るを得べし。老者のステッキは然らず。其の自然の必要より起る。これを以て、老者に、ステッキを贈るは、其の堅剛なるを擇ばざる可らず。大隈會を起すに、特に、後援の二字を標榜するは、發起人の意思は知らず。吾儕を以て見れば、其の事、自から此の理法に合するものならずんばあらず。

大隈伯後援會、近時、新聞を賑はす。吾儕、未だ後援會の事を詳かにせず。然れども之に因つて、後援の興味を聯想し、併せて後援會の側面觀に及ぶ。

陰暦正月、陰寒の日、駒籠にて　黒頭巾記

後援の興味、尚ほ盡きず、頃日、筆硯匆忙、殆んど意を盡くすを得ず。時々、卓に倚り、筆を措いて、茫然として庭上を眺め、梅花三昧に入る。他日、更に、稿を續けて、後援の人を論ずるの日あるべし。

黒頭巾再記

今回新たに我が勢力範圍に入りし青島に、漂然として放浪の旅に上りたる松崎天民氏は

「漂泊の男、流轉の女」

と題し今後三ヶ月に亙つて氏獨得の才筆を揮ふべし。蓋し本欄絶好の讀物たるべきを信ず。

人物評論（五十七）

予の推さんとする新東京市長

△東京市長問題

石川半山

阪谷男爵が東京市長を辭して、其の後任に苦しむと云ふ話だが、實に困まッた事で有る。阪谷男爵も市長として別に惡るい所もなかッた樣だが、それが辭退せねばならぬ樣になッたのは氣の毒な事だ、東京市制が行はれて以來、松田秀雄君も良い市長で有ッたが、就任中は評判が良くなかッた、尾崎行雄君も良い市長で有ッたが、就任中は評判が良くなかッた、甚しきは無能市長などゝ云ふ者も有ッた、ドウして東京市長と云ふ役割は、コンなに六ケしいので有らふか、我輩共の目から見ると、何も大して困難な任務でもない樣に思はれるが、相當の經歷も有り、人格も優秀なる人物が、市長になると評判を落すのは、我等にはサッパリ分らない。

或は曰く後藤新平男を市長に推す可しと、それも良からふ、アノ人も目下無職業で、何かやりたい方だから、市長にでもして市內を推し廻はすも良いかも知れない、但し若し彼れを市長にするならアノ鼻眼鏡だけは改良する條件を附けるが良い、アノ鼻眼鏡の上からギロリと眼を光らせて、市會議員

を睨むことは、人望を失ふ原因となる虞れが有る。

或は曰く、角田眞平君を推す可しと、之れは甚だ結構な話だ、角田君の市政に盡瘁すること三十餘年、通ぜざる所なく知らざる事なしだ、特にアノ猫撫聲と云ふ一種の魔力ある聲を有し、眞綿に觸れる様なフーワりとした調子で、『イヨー如何でゲス』と云ふ愛嬌で、相手に一種の快感を與へながら、總べてを纏めて往く力は、天下一品で有る、而して事務的才能が有て、ドンな難問題も快刀亂麻を斷つが如しだから、之れは市長として適任だと思ふが、餘まり切れ過ぎるから、外から嫉まれて居る氣味が有る、それから人爵が足らないと云ふ者も有る、憲政黨内閣の末路に楠本正隆男を板垣伯の後任として内務大臣に任じ、其下に次官として角田君が任ぜられる事に内定して居たのだから、アノ時に次官になッて居たら、今頃迄には十分の人爵を持て居たで有らふが、大隈伯が十八年間、内閣屋を休業して居た者だがら、人爵のないのも仕方はない、然かし其の市政を料理する腕前は、市區改正局長としてアノ難問題を解決した一事でも能く分ッて居る、我輩は角田君が市長になッたら、屹度良い市長が出來ると信ずる者だ。

或る一派では田健次郎男を推して居る、田君も悧巧な拔け目のない人だ、通信局長や遞信次官を務め、エレキの事は多少知て居る、又或る者は目賀田種太郎男が良からふと云て居る、此人も良いだらふ、財政の事にも通じ、人格も良い、仲小路廉君と云ふ說も有る、之れも亦悧巧な人で、手腕が有る、特に仲小路君は前大臣と云ふ光も附いて居る。

先日汽車で奥田義人君と偶然同車した時、世間では奥田君や床次竹次郎君は東京市長として、好適の人だと言ッて居る由を話すと、奥田君は『市長はシルクハットを着て能く務める人でなくてはイケない、僕などの如きブショウ者は駄目だ、第一シルクハットが嫌ひだからね』と言て笑はれた、成程、徒歩主義の奥田君は、シルクハットを着て自働車で乗り廻はすのは嫌ひで有らふが、然かし市長を受けるとすれば、人物も良し、事務的才能も有り、大臣にもなッた人で有り、申分のない良い市長だ、床次君も人物も良し經歷も立派なり、市長として良い人だが、唯兩君共に政友會に足を入れて居るから、若し市長を受けて與れるとすれば、政友會を脱退せしむる必要がある。

それから島田三郎君は如何と云ふ說も、チラホラ聞いた、舊幕人でも有り、若し受けて與れるなら此上はないが、若しソウなれば常盤會の殘黨などは仇敵の思ひを以て之に反對するかも知れない。

千家尊福男は如何と云ふ者も有ッた、其の說に依ると第一風采は良し、第二門閥は良し、第三久しく東京府知事として市民と交際が有り、第四に前司法大臣と云ふ肩書も有り、第五に美髯も有り、特に目下貧乏で、大に同情すべき點も有ると云ふのだ、一々御尤もだ、我輩に於ても敢て異議はない。

更らに又一派の人は、中野武營君と云ふ德望家を推して居た、之れも結構な話だ、それから豐川良平君へ持ち込んだ者が有る、中野君よりも一層不得要領な所が大に賛成すべき所だ、其の外加藤正義君と云ふ說も

有る、我輩は之に對しても敢て異議を言はない者だ。

或る所で或る人が提議して曰く、寧ろ市の役員を記者團で引受けて、市長に須崎默堂君を推しては如何と、之に至ては尤も贊成だ、須崎君は大學に於ては今の若槻藏相などよりは早く卒業した先輩で、學問も有り識見も高く、人格も立派な者だ、我輩共の目から見ると、前記の總べての候補者よりも一段立ち優さッて見える。

要するに市長の候補者は、多士濟々で之を選まんと欲するなら、イクラでも有ると言て宜しい、唯此等の人物を市長に推薦した後に於て、市會議員共が之を良い市長になし得るや否やが問題だ。

今日迄の情態を以て之を見ると、ドンな良い人物でも、市長になると味噌を附ける、之れは市長になる人の罪よりも、市參事會員、市會議員が彼れを助ける誠意がないからだ、市長を取り卷く所の市の空氣が良くないからだ、アンな空氣の中に入るなら、ドンな良い人物でも、其の長所を發揮することが出來なくて、忽ち失敗して仕舞ふのでは有るまいかと思はれる。

故に東京市民にして良き市長を得んと欲すれば、其の人を選むの前、先づ彼れを助けて良き市長たらしむべき準備を要すると思ふ、今の樣ではドンな人でも御免を蒙むるで有らふし、又進んで來る人が有ても、前途の光明を見ることはなか〳〵困難で有らふと思ふ、若し空氣さへ良ければ誰れ彼れと言はず、不肖ながら我輩と雖も隨分阪谷、尾崎兩君以上の立派な市長となッて見せるが、苟くも市に於て市長となるべき人を助けて、良き市長たらしむべき空氣の作られて居ない間は、大隈伯や伊藤公や山縣公の如き大政治家を市長に戴いても、やはり結局は失敗の外は有るまい。

△手腕よりも人物

安部磯雄

東京市の市長に如何なる人を擧ぐべき乎といふことは、市長といふものは如何なる位置に在るものであるかといふ此問題を解決することが先決問題である。

市長が如何なる位置に在るものであるかといふことは奇妙な問題のやうに聞えるが、市長の職責には、市長といふものに十分の權力を與へてある處もあれば、市長には權力を餘計に與へないで大概の事は市會で行る處と、斯ういふ二つの仕組が實際に行はれてゐるからである。例へば英吉利の組織は市會萬能主義とも謂ふべきで、殆ど總ての事は市會の決議を俟つて行はれるので、其間市長には何等の權力をも附與されてはゐない。唯市會の決議を其儘實行に移して行きさへすれば、それでよいのである。であるから市長は謂はゞ其都會を代表してゐるまでのことで、此場合は無論大した仕事は出來ない。それと同時に失策も無い。一切の責任は市會の負ふところであつて、獨り市長の與るところではないのである。獨逸も大概の事は市會で之を行つて、市長に權力の與へられてゐ

ないところは之と相似てゐる。而して此兩者は市政といふ點に就いて世界に於て模範的と稱せらるゝ所であつて、萬事總ての點に於て都合好く運ばれてゐる。

一方市長といふものに權力の與へられてゐる國は亞米利加であつて、市長の權力が强い時には市會の言ふところを聞かず、勝手にドシ〳〵行つて行くといふ有樣である。共和政治の國柄として、市長の位置が亞米利加に於て斯ういふ風であるのは、私共から觀て矛盾したやうに思はれるのであるが、尤も亞米利加は市政の方からは誇るべきものが無いやうである。中央政府にも自治體の政治にも腐敗したところが尠くない。市長に權力が與へられてある其事も結果から觀て宜くないやうである。

然しながら制度などいふものは、或程度までは有力であるが、或程度を越ゆれば矢張り問題は人物であつて、制度などは何うでもよい譯になる。英吉利は制度としては市長に權力が與へられてないけれど、事實に於て敏腕家の市長さへ出れば隨分思切つた仕事をした例もある。昨年物故した舊の保守黨内閣の植民大臣チエンバーレンは有力なる政治家であつたことは何人も知るところであるが、マンチエスターの市長をしてゐた當時、敏腕を揮つて色々な仕事をした。主な仕事としては電車市有なども決行したのであるが、それらのことは無論市會の決議を經るのであるが、單に市會の決議を實行するのと、市長自ら發議して市會の同意協贊を得るのと、この二つの區別が市長の有能と無能とに因つて分れて來るのであつて、制度も輕んずべきではないが、制度が何うとか斯うとか一概に言ふ譯にいかない。

以上述べたやうに市長の位置に差別があるとしてみれば、其市長を選ぶにも自ら手心が變つて來なければならない。日本の市長は果して何れの部類に屬するかといへば英國程極端では無いけれど、先づ英國の部類に屬するものと觀ることが出來る。市町村制にも定められてある如く、市長にはある事柄を執行する權力が委託されてある。即ち市長の考を以て活動の出來る範圍が定められてあつて、大事な問題にあると之れは市會が決する事になつてゐる。であるから日本の市長は獨英のやうで、市會の決議を執行する人と觀る方が適當であらうと思ふ。勿論その善し惡しに就いては議論もあらうが、理想としては自治體なる市では、市會議員に其權力の在るのは當然である。市會議員が總ての事を行つて市長は單に其命令に從つて行つてゆくべきである。中央政府のやうに行政官其者に權力の有るのは、自治體としては決して望ましいことではない、であるから私の立場としては、日本の市政の制度に贊成するものであるが、殘念な事に市會議員の内に良くない者が多い事である。こんな事ならば寧ろ豪い、敏腕家な市長を置いてドシ〳〵頭から遣つてゆけばよいと思ふこともあるが、それは恰も政黨又は衆議院がよくないからといつて、寧ろ昔の君主政體を望んだり、名君の顯出を欲したりするのと其氣分に於ては同じである。即ち情に於てはさうも思はれるが、理論に於ては、特に自治體である限りは市長が市會の決議に服從して行く現在の制度を最も適當と思ふのである。

私から觀れば、阪谷市長などは市長として最も適當な人であると思ふ。個人としても、また東京市全体としても氏の如きは容易に得可からざる人であつて、私一個としては條件が許す限りに於て氏の復職を希望するところの者である。然しながら氏の遣られた事業に就いて觀ると、今述べた點と撞着する所がある。即ち市長は市會の決議を守つてをりさへすれば可いのて、それ以外の事に手を出すのは越權である。今度の電燈問題に就いても、市會が市長に委託したのは三會社の電燈料協定といふことであつた。然るに市長としての氏が執つた仕事は料金の協定以上に三社の合同統一の運動であつた。私一個人の意見としては三社の統一に賛成するものであるが、此場合市長の遣つた事には賛成出來ないのである。謂はば市會の決議の意味を、無視したと迄はいはないが、閑却した傾のあるのは、市長の遣り過ぎであつて、之れを越權の沙汰として市會から攻撃され、終に辭職するに到つたのも又止むを得ない。あの場合市會の命ずるまゝに遣れば失敗は無かつたのである。若し失敗があつても、其失敗は市會の負ふべきもので、市長の責任では無い。之れに就いては市民も亦誤つた考をもつて觀てゐはしないかと思ふ。市長は、決して自分の責任を免れる意味からではないが、市會の決議に從つて行へば責任は市會に在つて市長には無いのである。此邊を能く了解したならば、市長の更迭も少くなるであらうと思ふ。

然らば私は現在の東京市長に如何なる人物を推すべきかといふ問題であるが、そは今述べた所に依つて私の答は自ら明瞭に定つて居ると思ふ。

私は東京市に敏腕の市長を要求しない。チエスタートンの如き人ならば、たとひ正道を破つても立派な仕事を爲し得るであらうけれど、普通の敏腕家では、根底から組織を更へない限りは腕を振ふ餘地が無い。若し敏腕家を選ぶとすれば、後藤とか角田とかいふ人もその一人に數へらるゝであらうけれど、私は今述べた意味に於て此敏腕といふ事を問題とはしない。市長は東京市を代表する者であつて、即ち日本の首府を代表する者であるから第一に其人物を物色しなければならぬ。市の代表者は一種の飾物であつて、何處におし出しても市を辱しめないだけの人物を選ばなければならぬ。英國の如きは市長は名譽職として、之れを一人の獨占すべきものではなく、一年に一度宛代りばんこに此名譽職に相應はしき人物を選んで居る。日本でも全然考を改めて、市長によつて仕事をするのではなく、良い意味の飾物として名譽職を辱かしめない人物を選ばなければならぬ。

然らば要求する所の資格は何かといへば、先づ第一に世界的の人物といふ事である。世界的といつても、其名が世界に知られて居る事を意味するのでは無い。無論日本の首府を代表する者である以上自然と其名は世界に知らるゝに到るであらうけれど、それよりも常に世界の人を相手にする人であるから汎く世界の事情に通じ、知識も趣味も各方面に亘り、自らも曾ては幾度も世界に遊び、巧に外國語をも繰るやうな人が望ましいのである。今後は一外國語をも話せぬやうな人は市の代表者として甚だ滑稽なものではないかと思ふ。又一つには世界的であるといふ事は外

國人に對する交際振りもはきはきとして萬事開放的に、心おきなく接し得る人を要する。その點からいへば、阪谷男の如きは最もよく條件に適ふ人である。外國語も巧に話せるし、交際も柔和でおとなしく、體軀は大きい方ではないが、容貌もおし出しも立派である。其夫人なども交際的であるといふことは望ましいが、それならば前尾崎市長の如きは其資格を有するといふことが出來る。然しながら交際振りなどいふ事はもと枝葉の事であつて、最も重大なる要件は人物本位といふことである。人品の高い、人格の高潔な、現在は勿論過去に於ても兎角の風評ある者は、たとひ法律上の罪人で無くても道徳上の前科者の如き決して之れを市長として我々の頭に戴くべきでない。八面玲瓏として何處から觀ても純一つない立派な、品の良い飾物でなくてはならない。立派な氣高い人といふ事だけを條件にして之を物色するならば、貴族中にも例へば徳川公の如き立派な人物を求める事も出來るけれど、私は斯ういふ自治體に於ては、願はくば平民中から傑出した人物を選んで推戴したいと思ふのである。以上述べたところによつて、私が現在の我東京市長に如何なる人物を推さんとするかは明かになつたことゝ思ふ。

△高潔な人格と該博な智識と

鎌田榮吉

市長として如何なる人が適當であるか。之を理想的に言へば人格、智識双つながら兼備の人でなければならぬ。智識が該博であると同時に人格も高潔でなければならぬ。而して物の判斷のよく附く人であれば、行政的手腕は必ずしも問ふところではない。

市民を代表して來遊の外國人と應接をせねばならぬから、おし出しが立派で、各方面に智識と趣味とを有つた人でありたい。一方に偏した人は適當な人とは謂へぬ。願はくばグレートマンでありたいけれど、少くともラージ・マンでなくてはならぬ。グレートマンであり、ラージ・マンであればこの上はない。

茲に些細なことではあるが、市長たる者は餘り怒り易い人でないことを必要とする。小さい事に腹を立てるやうなことでは、其處置を誤る虞がある。殊に市會などを對手にして遣るには餘程冷靜に判斷を誤らぬやうに注意せねばならぬ。日本の市では大抵何處でもさうであるが、特に東京市などはこれが必要である。

それならば現在の東京市に、誰が最も市長として適當であるかは私は言はない。唯以上の條件に適するやうな人があらば何人でも可い譯である。市政の經歷などは問ふところでない。寧ろ經歷の無い方が良くはないかとさへ思ふ。さういふ理想的な人物は今のところ探しても見當りさうもないから、先づ最も理想的に近い人を選んだら可からうと思ふ。強いて言へば阪谷市長の再選なども、條件さへ許すならば適當であらうと思ふ。

△候補者に對する短評

茜陵山人

今度阪谷男が東京市長を辭職されたについて、其後任者にはいろ〳〵の人が物色された。私も何人が最も適任者であらうかと隨分頭腦を惱まして考へて見たが、種々考へ廻はした結果、先づ豐川良平氏が適當であらうと信じて氏を起たせようと運動したが、氏は『我々の如き野性の男では東京市長は勤まらぬ。もう此年になつてからあゝ云ふ日勤の劇職は御免を蒙りたい』と云うて辭退するものだから強いてゝ勸むる譯にも行かなかつた。一體氏、不得要領と云はれて居るが然しあれでなか〳〵大體の事は分る方だ。又必要の場合には相當の決斷もやる。細かい事は無論駄目であらうが、それは助役か何かに事務のよく出來る人があればよいのだから、我々は先づ氏を第一に推して見たのであつた。市會から出すとすれば現市會議長の中野武營氏がどうだらうとの說もあつたが、中野氏は矢張り實業家肌で、何事も只圓滿に物事を處理しようとする丈けであつて、自分から意見などを出す人でないから私は餘り贊成が出來なかつた。現に今度阪谷男が罷めたについても、其内心はどうか分らないが、表面上兎に角留任を勸めやらうと中野氏は主張したが、豐川氏はそれは却て阪谷男の本意でもなく、又阪谷男の爲めにもなるまいと云つて、キツパリと辭職を認めると云ふ意見を立てた。中野と豐川との間にはそれ位の差異はある。一體世間に阪谷再選說などを唱ふるものがあるやうだが、之は全くイムポツシブルの事だ。阪谷男は實際を云ふと市會議員改選の時に辭任すべきであつた。只あの人はあゝいふ好い人であるし、又選舉された新議員などと一致してやれさうな事を云つたものだから、あの儘で留まつて居つたのであるが、然し改選後の仕事は大抵男の思ふ通りに行かぬので、いはゞ失敗に失敗を重ねて來たのだ。其失敗が積り〳〵てとう〳〵今度の電氣問題に落ちが來たので、電氣問題は結果であつて、決して原因ではないのだ。だから假りに電氣問題だけが旨く行つた處で阪谷男の命脈は餘り長くなかつたゞらうと私は信じて居る。阪谷男が兎に角あすこまで問題を持つて行つて、電氣問題に一應の意見を出して、多少の面目を立てゝ足を拔くことの出來たのは、實は餘程運がよかつたのだ。私の考では、男がもう一度引つ張り出されて此上味噌を附けることはすまいと思ふ。阪谷男は好い人であるが、どうも弱い。太平無事の時の市長には適任であらうが、今日の如く、電燈とか電車とか築港とか下水とかいろ〳〵ゴタ〳〵した問題があり、而かも其解決には些少からざる英斷を要する時に當つてはどうも弱過ぎる。世間では又添田壽一氏を推すものもあるが、氏も亦阪谷男の如く弱い人で、之は阪谷男よりも劣ると私は思つてゐる。それで市會側から選むとして、所謂五人組の中で已に豐川、中野兩氏が駄目であるとすれば、星野錫、加藤正義などもあるが恐らく二氏共にやるまい。大橋新太郎氏は初め非常な野心を以て出て來て、五人組を操つて自己の思ふ存分にやつて見やうと思つたらしいが、初めから餘り其鋒鋩が露骨に見え透いたので、各方面の反感を買つて、

今日では當人も引込んで居るやうだし、又固より今度の問題にはならない。それで一部の人はそれならば角田眞平氏より外にあるまいと云つて、今日では氏が何だか市長になりさうな風向になりつゝある。

一體角田氏は手腕は相當にあり、事務はよく取れるであらうが、其人物には定評あつて私の如きは餘り之を歡迎する氣になれない。全く市間でも極まりのわるいやうなお世辭を云ふ。それでお世辭をいはれた當人が喜ぶかと云ふに、みんな嫌がるから妙だ。然し市會には古顏であつて、市政の事には通じて居るから、市會を纒めて行く丈けの事はするであらう。只其爲めに市會から助役とか課長とか云ふものを出したり又其他の利權を分け與へたりして、一種の總花主義でもやるやうになつては困つたものだ。

私個人としては豐川氏がやらなければ田健次郎男がよからうと思つてゐた。私は深く此人の人物を知らぬが、其經歷などから見ても、なか〳〵仕事もやるし、又斷行力にも富んだ人のやうに思はるゝから氏がよからうと思つてゐた。然し今日の男には大分反對者もあるやうであるから多分物にはなるまい。矢張り結局は角田氏になるだらうと思ふ。

△腐敗せる市政を革新する勇氣のある人

早川鐵治

東京市長の候補者としてはいろ〳〵の人の名が出た。『時事新報』かで集めた投票には、拙者なども百票以上入つたさうだ。我々の希望する所の新市長は、地位名望の高い人とか、官歷のある人とか、爵位のある人とかよりも、腐敗せる市政を革新する勇氣のある人が欲しいのである。

一體立憲政體とか自治制とか云ふものは、とうも輿論を憚るものであるから思ひ切つた仕事は出來にくい。其點になると東京市なども昔の自治制の實施以前の方が思ひ切つた事が出來たのだ。例へば市區改正の出來たのは芳川顯正の知事時分であつたやうだし、銀座を買ひ潰して、兎に角煉瓦道を作つたりしたのは由利公正の知事時分の斷行だ。輿論を憚つて居ては到底そんな斷行は出來るものでない。之は獨り市政のみではなく、國政も亦然りである。今の立憲政體、輿論政治は實は十八世紀の中頃から學者の唱へたのが、十八世紀末から十九世紀にかけての流行となつたので、今日では皆其弊を受けて困んで居る。近い話が今度の戰爭でも、世界を席卷した那翁の子孫の有樣はどうだ。そして其當時野蠻であつた獨逸の方が遙かに強い抵抗力を持つて居るではないか。之は確かに佛國が極端なる民政の害毒を受けた爲めて、彼の國では軍器彈藥船艦に關する軍事上の秘密にまでも立法部が干渉した結果、一切の軍事の機密が敵に洩れて居る。然るに獨逸では何時四十二珊の大砲を作つたものやら、又どうして之を運ぶものやら、誰も知らない中にドシ〳〵之を利用して敵を困めて居る。今日の日本の風潮も我輩共から見れば、英佛等の弊に苦しんで居る所を却て學ばんとするやうに思はれる。大正天皇登極以來、議會は解散又解散、豫算は一度も通過しないと云ふ有樣である。

政治の局に當るものも、政治全體、國家全體の利害よりも、對議會策のみに腐心し、又反對黨も同様で、只如何にして政府を更迭せしめて己等の天下にしようかと云ふ事に熱中して居る。今日の日本は實に重大な時機に際會して居るので一歩を誤れば最早や取返しのつかぬ破目に陷るのであるのに、眞に國家の前途を顧る政治家に乏しいのは歎はしき次第である。ヤレ黨の摺餌のやうなものを食ふとか、足腰が立たなくて姥車に乘るとか笑はれても元老などの方がどうも國家を念とするの心が深いやうである。斯う棺桶に片足を入れかけて居る老人共に不安の念を抱かせながら死なせるは氣の毒な感じがする。東京市政の如きも亦同様で現在では全く米國のタマニーホール式、而かもそれが東洋流、日本流のタマニーホール式だから一層堪らない。之には死んだ星亨などが大いに責任がある。星君はエライ政治家に違ひなからうが、東京市政の腐敗に對しては責任を負はねばならぬ。今日市に於て何事をするにも市會議員連の力を藉りねばならぬ。そして其市會議員の如何なるものなるかは云ふ丈けが野暮である。市民の負擔が重いに拘らず、市の一切の設備が不完全な事はお話にならぬ。お恥しき事ながら東京市の中央たる日本橋の橋上に立つて一等道路と云はるゝ日本橋、京橋通りを見るがよい。建物の不揃、不完全。歐米の都市などを見たものから見れば赧顔の至りだ。中には村井とか森村とか云ふ立派な建物もないではないが、其他は大抵博覽會の假建築の展覽會のやうぢやないか。若くは日本婦人の洋裝よろしくと云ふ體ではないか、之ならば私は寧ろ昔の日本風の土藏造りの揃つた方がよいと思ふ。又電車などの不完全もどうだ。無暗に均一とか國民平等とかを振り廻はす結果、中流の紳士も、汗みどろ、垢一ぱいの下等の勞働者と肩々相摩して乘る。今まで中流社會に餘りなかつた皮膚病などの蔓延するのも電車の媒介與つて力あると思ふ。今後の市長たるものは市會などの鼻息を窺はず、ドシ〳〵思ひ切つて今日までの病弊を矯めるものでなければならぬと思ふ。電車統一、電氣統一なども、よく思ひ切つてやれば出來る。阪谷男は好箇の紳士で、我輩と同鄕同窗の人で、心易くして居るが、之は太平無事には極くよい人だが、東京市の如き所に足を踏み入れたのが抑もの間違ひで、我輩は御就任當時から、兎ても長持ちはすまいと豫言しておいた。根が學者肌の人だから今後閑地に居られて得意の財政論の著述でもせられた方がよからうと思ふ。

今日候補者と目せられて居るいろ〳〵の人物の中で、我輩は先づ後藤新平男が一番よからうと思ふ。只男は少し智慧があり過ぎる。智慧があり過ぎるから、餘り先きが見えて十分思ひ切つた事が出來ない。もう少し智慧がないと萬事が十分にやれてよいと思ふ。然し先づ今日では男が一番の適任者であらう。

然し今日の狀態では段々角田新平說が有力になつて來て居るし、御當人も亦其積りで運動もされて居るやうだし、又見様によつては角田君の準備は餘程前から取かゝつて居るので、阪谷男が今日の破目になつたのも、其爲めぢやないか知らんと疑はるゝやうな節もある位だから、或は氏の市長說は實現されるかも知れぬ。あの如才のない、何事をも何人をも、

かさぬ、怜悧な角田君の事であるから、事務の方はよく捌いて行くだらうと思ふが、断とか剛とか勇とか云ふ方面は矢張り缺けて居るやうである。私は市に於ても國に於ても其局に當るものには今少し現在の弊害を革新する勇氣のある人の出現を望む者である。

△東京市長は徳川家達公を措いて他になし

茅原華山

山本内閣が倒れた後で、徳川家達公を首相に擬ると言ふことがあつた時、私は家達公の總理大臣になることを切に止めた。これは何にも徳川家には家憲が有つて家達公が政治に關係するのは其家憲に違ふといふ爲めではない。國家は一家より重いのであるから、家憲に違ふとか、違はぬとかいふのは問題ではない。其上徳川家は代々聰明な人を出し、家達公も非常に聰明であつて、總理大臣になれば、自身で總理大臣のことは固より秘書官のことも出來るのであるから、家達公が決して其器でないと言ふのではない。總理大臣としてはむしろ過ぎて居ると言つて善い。

然し私は自分が徳川家の家來筋であるから、徳川家の位置といふ事を考へる。徳川家の位置といふものは、非常に重いものであつて、一黨派の首領といつた如な其らいふ偏つた小さいものになる可きでない。其所で首相となるのは不可であると言ふのである。尤も國家に大難が有つて、各政黨から其主な人物が出て内閣を組織して國難に當るといふ其らいふ場合には、其れは超政黨内閣であつて、而も衆心目に向ふといふ時であるから不可ではない。けれども彼の時は其らいふ場合でないから反對した。

然し家達公が東京市長になるといふのは、總理大臣になるのとは事情が違ふ。總理大臣は政黨の首領であるけれども、東京市長は一政黨の首領でなく市民全體の代表者であつて公平の位置に立つことが出來る。此れは徳川家の爲めに考へても善いことである。其上家達公は英語も非常に達して居られる。曾て私がロンドンに居つた時、家達公を萬國記者大會に伴つて行つて、演説を爲て頂いたことが有る。其時家達公の英語は其所に居た日本人の誰よりも巧妙で流暢で、加藤高明氏などよりは遙に勝ぐれて居つたものであつた。それであるから市長として外賓に接する場合にも非常に好都合なのである。中には家達公が東京市長になるのは、昔の町奉行になるのであると考へる者も有るけれども、今の東京市長は一國社交の代表者であつて、其地位は決して昔の町奉行の如なものでない。若し家達公の如な地位も有り、名望も有り、富も有り、聰明である上に練達な人が市長になつて、其下に善い助役を置くならば、東京市の市長の位が上がり其發言が重しとせられて、甚だ面目を改むることになる。斯ういふ凡ての揃つた立派な市長は家達公の外に求むることは出來ない。

家達公が市長になるのは、尾崎氏や阪谷氏の市長となるのとは違ふ、そして今日の東京市は外國語の一つも出來ぬ何から何まで通辯の助を借りなければならぬ市長を頂く如な時代ではないと思ふ。

正岡子規遺著

子規遺稿

本書は子規先生の遺著にして、先生の俳句、和歌、小品、小説、書簡等を結集す

□先生の俳句につきては今更贅せず。

□先生また和歌に於て革新の第一聲を揚げられ、前人未知の二大歌聖を發見し、「上にして田安宗武下にして平賀元義歌よみ二人」の詠あり。一大見識を持して、高き調を歌はる。

□先生また文章に於て寫生の一派を拓き、小品小說數十篇を遺さる。

□先生の書簡は虛子氏が長き年月を費し廣く江湖にその資料を蒐集したるところのものにして、明治十三年より明治三十五年(歿年)に至るまで總計五百八十三通に上ぼる。先生が日常生活の有樣、先生が文學上の意見、先生が病苦と戰ひながら文學上の事業に邁進せし慘憺たる英氣、先生とその弟子との關係、先生とその先輩友人との交際等皆悉く此の書簡によりて偲ぶことを得。

［四六判天金總布上製］
［總紙數壹千七百餘頁］

●定價金參圓●

新刊

歌集 片戀

吉井勇新歌集

「昨日まで」に次ぐ近業三百三首

袖珍美本
一八〇頁　定價金六拾錢

●藏版時報無代進呈●

(中付二の一)

東京市麴町區有樂町一丁目
(丸の内三菱二十一號館內)

籾山書店

振替東京二四一七番
電話本局二一三二番

東京高等商業學校教授
マスターオブアーツ 山口鍖太先生著

（内容見本往復ハガキで申込めば進呈す）

最新刊

英語會話作文講義

菊判クロース上製箱入一千頁 定價金三圓 特價金貳圓五拾錢 送料金十六錢

◉英語は世界の通用語なり――語學の智識を缺けば忽ち時勢に後る――語學の眞蹄は會話作文に熟達するに依つて始めて得らる

生きたる英語を學ばんとするものは英人の生活を知らざるべからず、英人の生活を知るは英人に就くに若くはなし、本書は先生が多年の經驗に依り新に新機軸を出して編著されたるものにて直接に英人に就く能はざる我國多數の語學研究者の爲めに良師たらん事を努むると同時に英人に就きて其教を聽くが如く自然に會話作文を獨習し知らず〱英語に上達せん事を期せしものなり、實用的英語に通ぜんとする者は勿論學生諸君の自修の良師として最高權威ある名著なり。

（中付二の二）

發行所 東京神田南神保町 振替東京一九二三三番 日進堂

茅原華山先生記念出版 ― 特價金壹圓 小包送料 内地金八錢

新刊

孤獨の悲哀

中判 總クロース 特製函入
紙數四百六十頁餘
■正價金壹圓二十錢■

華山先生の生活に於ける轉機を記念せんが爲めに此書生る、先生が朝報記者としての**秋霜烈日**の**文章**數篇は收めて箇中にあり、**思想問題人生觀**を基調とし**憲政**を**論**じ**自治**を論じたるは蓋し先生を以て始めと爲す、思想に於て徹底し政治に於て徹底するのみならず、字々欄の如く飛び句々濤の如く舞ひ讀むものをして覺えず**扼腕擊節**せしむ、先生自ら序して『**憲法政治**の**要義**は蓋し此に盡く、我れ亦俄かに復び斯かる**文字**ある**能**はず』といへり『**黒岩先生**に**對**する**我**れ』『**我心事**を**明**かにして**知不知**に**告**ぐ』『新なる世界將に生れんとす』『益後的運動と益進的運動』『第三經濟論』皆亦收めて箇中に在り、其間點綴するに『欠伸より笑へ』『象外の神機』『香の哲學』『臥龍か鬨鷗か』『新愛國心』『此教育を見よ』等の**藝術論哲學論教育論**を以てす靜定の工夫を**動裡**に試み、和平の氣象を**熱中**に見る、先生が**千秋一寸**の**心**を以て不斷に自己を建設しては不斷に之を告白し不斷に自己の内に新なる世界を建設しては不斷に之を外に再現せんと努力し燃ゆるが如き勇猛心ありて**孤獨**の**悲哀益々深**きものあるを知らんと欲するものは請ふ此書を讀め、**最初**の一字より最後の一字まで**戰鬪**的快文字なり

■發行所 東京日本橋鐵砲町六 振替東京壹五〇六六 磯部甲陽堂■

稲毛詛風氏著

新刊發賣

生の創造と道德

虚僞の生活に堪へ兼ねて偏へに自己の眞實に徹せんとし冒險と奮闘とに依て徹底せる創造生活の眞義を味はんとする著者の悲痛にして嚴肅なる生活を記錄せるものは本書也。冷索なる倫理學と空虛なる道德說とが全く其の權威を失墜せる時に際してこの自己と生活とに印したる新道德觀の現出せるは恰も盛夏に雲霓を見るの觀あり。これ自己を熱愛して意義ある生活を生きんとする誠實の士の淸鑒を待つ所以也。

四六判上製本 金壹圓 郵税八錢

忽再版

東京高等學校教授 第一 三並良先生譯

オイケン氏 人生の意義と價値

東京朝日新聞曰く……本書の譯者はオイケン通を以て目せらるゝ三並氏なり語學に精通し文學に堪能なる此の譯の不足あらん樣はなかるべし本書の内容は人生を各方面より可成通俗的に論明せんと試みたるものにて其の專門的ならざる所其の特色なりこれ廣く一般讀書社會に勸むる理由あるべし舊生活系新生活系を評論し所謂オイケンの精神生活の意義を闡明せるものオイケン哲學研究者必讀の書なり。

六合雜誌曰く……オイケンが我が國に輸入せられたるや久し而して本書がオイケンの著述中に於て如何なる地位を占むるやの問題も亦贅言を要せず。譯者は我國オイケン學者の白眉、譯文の正確にして原著に對すると何等異なるなきは言ふを須ゐざる所なり。加之、讀過したるところ言文一致の文體極めて流暢にして、難澁なる哲學書の如きに似ず、知らず識らずの間に讀了せしむ。譯文の妙を極むといふべし。且つ原文になき章節の如きものまで仔細に附せられたるは、讀者の便益此上なし。譯者の親切なる勞を謝す。

菊版上製全壹冊 金壹圓五拾錢 郵税金八錢

早稲田大學教授 金子筑水序

稲毛詛風著

改訂増補 オイケンの哲學 全壹冊

正價金七拾錢 郵税金八錢

（中付二の四）

東京市神田區表神保町七 ■ 大同館發行 ■ 振替貯金口座東京八七二番

評論

タゴーレと西歐の個人主義

中澤臨川

私は先月號の本欄に於て、「病的個人主義」なる題下に、十九世紀歐洲の極端な個人主義に論及し、その自然を敵視し自己を孤立せしめる思想が、當然の道程として行き詰った結果、必ず他に一條の活路を求めなければならぬ羽目に立到つたことを述べて置いた。印度の詩人にして思想家なるタゴーレが急に歐洲人の間に持て囃されるやうになり、「今後はタゴーレの時代である」とまで言はれるのは、正しく斯の反動の結果であらう。

タゴーレの説に由れば、西歐人の文明は、その昔希臘の都城の中から生れ出た文明である。彼等の近代文明は總て煉瓦とモルタルの搖藍の中で育て上げられた。かやうな周圍の情況が深く彼等の國民性にも影響して、彼等は『區分しそして支配する』主義を立てた。征服と離隔とが彼等の誇である。彼等は國民から國民を、智識から智識を、自然から人間を截然と分離した。斯樣な文明は自分の建てた障壁外にある總ての物に強い敵愾心と猜疑心を起させ、權力を唯一の目的とするやうな習慣を增成する。從て、西歐人は自然を征服することに非常な驕慢を感ずる。都城生活の結果は彼等をして極端に自然を敵視させ、それと人間との間に越ゆべからざる不自然な人爲的の障壁が打建てられるやうになつた。それは宛うど蕾と花とを二つの相反

的な範疇に區分するやうなものである。かくして近代に於ける西歐諸國民の文明は其總ての力を周圍の征服といふことに置き、自己權力の一方にのみ絶大な努力を擲つて來た。彼等は自然と他國民とを對手として戰ふ爲めにのみ訓練されたかの觀がある。彼等の軍備は日に增し擴張された。彼等の機械は年と與にその力を倍加してゐる。これは實に一面に於ける人間の能力の驚くべき顯現と勝利である。

然し、極端に權力を主とした斯樣な文明は行き詰まらざるを得ない。自己の周圍に城壁を築いて廣くまた親しく他から求めることを知らない者の運命は、譬へば人類と稱ぶ一本の細い繩の上を渡る危い輕業師の渡世に似てゐる。彼は斷えず戰々兢々としてその神經と筋骨とを緊張させながら、一歩々々に平衡を保つて行かなければならない。かやうに無駄な努力の生活が安心に疲勞なしに長く續くであらうか。やがては彼は天を怨まざるを得ない。そして自分以外の自然を敵視しながら竊かに快を覺えるといつたやうな病的個人主義に傷せざるを得ない。いかに努力したからとて、自分の巣の中に立籠つてゐただけでは蜂は蜜を造ることが能きないといふことを彼は氣付かないでゐるのだ。彼の生命の糧の無限の源は彼の城壁の外にあることを彼は知らないのだ。彼は自らを居つて生きやうとしてゐる。この時彼の飢餓は生命發育の手段から外れて、それ自らが目的となる、そして彼の一身を燒熱する。人を驚かすことが彼の生活となる。彼は簡易と平安の德を失つて狂燥性を帶びて來る。これが近代歐洲人の生活である。

然るに、タゴーレに由れば、印度古代の文明は西歐のそれに反して森林に發生した。そして大自然と深い關係に育はれて今日に到つてゐる。彼等は徒らに自己の周圍に狹い障壁を築かうとはせずして、却て自然と溶け親み、自然の中に自我を擴大しようとした。彼等の目的は獲得でなくて實現にあつた。彼等は眞理を全抱擁性と見做し存在の間に絶對孤立的顯象のあることを拒んだ。で、眞理の道は唯だ萬づの事物の中に自我

を滲透せしめることに由て辿りえらるると思つてゐる。かやうに、人間の精神と宇宙精神との間に一大調和を實現することが昔から印度の森に住む諸聖の努力であつたのだ。

西歐人が自然を敵視するに反して、印度人は一つの大きな眞理の中に人間と外界とを抱擁する。彼等は人類と自然との間に存在する破ることの能きない親しい關係を確信してゐる。而もかやうに創造の根本的統一を確信する彼等の態度は決して單純な哲學的思索の上からではない。感情に於ても行爲に於ても、身を以て斯の調和を實現しようとするのが彼等の生涯の願望である。冥想を以て、鍜錬を以て、將た日常生活の調整を以てして、印度人はあらゆる自然が彼等に精神的意義を爲すやうに彼等の意識を馴らして來た。大地も、水も、日の光も、菓物も花も、彼等には唯だ利用すべき單なる物質ではない。それ等の物は彼等にとつては實に完全への到達、大調和の實現の資料として切實なものであつた、宛うどいろ／＼な音が旋律(シンホニイ)の合成に缺くべからざるやうに。彼等は人間に對する自然の生的意義を直覺的に信じてゐる。で、科學的好奇心や物質慾からばかりでなく、眞に內生命の奧から自然を生き、之と心的關係を結ばうとする。同感裡に廣い自然を體現し、喜びと平和を以て之と溶け合ふのが彼等の目的である。彼等は自然に對する同情心から肉食を避けた。また彼等にとつては『水は單にその四肢を潔めるばかりでなく、心をも淨める、なぜならそれは彼の心靈に觸れるから。大地は單に彼の身體(からだ)を載せるばかりでなく、彼の心をも喜ばせる、なぜならその接觸は物體接觸よりより以上のものであるから——それは生きた現實であるから』。自然とのかやうな關係を沁々自覺しない者は一個の牢獄に住ふ者である。自らの生命を自ら食ふ者である。斯の世の中には宇宙を貫通し、時を通ほして働く永劫の意志がある。かやうな『永劫精神を萬物の中に認める時、彼は初めて解放される。その時彼は彼の生れ落ちた宇宙の充全の意義を發見し、彼自身を完全な眞理の中に置くとともに萬物と彼

の自我との破られざる調和が成立つ。彼の目的は『無限の實現』にほかならぬ。

前にも述べた如く、西歐の文明は權力即ち所存の力に達することを目的としたが、東洋の文明は之に反して親和の力を目的とした。前者は生命の活動を外的運動に由て計らうとするが、後者は之を創造界の渾一静寂境に求める。人間は破壞しそして拋り、漁りそして貯め、發明しまた發見しうる。然し乍ら彼の偉大なる所以は彼の心靈が萬物を理解するからである。彼が彼の心靈を枯渇した空殼を以て包み、彼の眼界を事業の盲目的忙殺の風塵を以て覆ひ盡すことは全き自滅であらねばならぬ。我等が自我を擴大して世界の意識に到達する爲めに眞理解の眼を醒ますことが必要である。それは即ち我等の感情と普遍無限の感情とを一致させるにある。事實、人類の進歩とは感情のかやうな擴大にほかならぬ。我等の哲學も科學も藝術も、または宗教も、より高くより廣い世界へ我等の自覺の範圍を擴げる爲めにのみ役立つ。

然し、かやうな意識の自由郷に到達する爲めには、我等は或る代償を拂はねばならぬ。易言すれば、我等は我等の自我を棄てねばならぬ。我等の心靈はそれ自らを拒むことに由てのみ眞にそれ自らを實現することが能きるのである。ウパニシャドが斯う言つた、『汝は與へることに由て得なければならぬ、汝は貪つてはならぬ』と。

タゴーレの稱道するかやうな思想は十九世紀の歐洲に流行した人間神的迷妄とは甚だその趣を異にしてゐる。彼は奇怪にも擴大された人間の影坊子を出して、極端に光を薄らげられた自然を背景に自分好がりの大芝居を打たせるやうな是等の病的思想に反對した。却て彼の思想は『個性の限られた城壁を超え、人間以上になり、'The all と一致すること』を意味する――『各の物及び總ての物の中に彼を實現する』ことに由て。

かやうなタゴーレの思想の第一に誤解される點は、印度哲學の昔から蒙つた批難と一般で、それが單なる絶對抽象論に墮し、人間世界を厭離する消極思想を導

くといふ事にある。で、この點に就て彼は特にいろ〳〵の方面から自己を辯護して居る。彼は極力『生命の實現』を說き、愛と行爲の福音を說き、心靈意識の獨尊と自由を說き、歸する所最も光明的な樂天主義に終つてゐる。されば、彼の思想は印度哲學の復活であると同時に、最も神秘的光明的な進化哲學に足を蹈み入れてゐる。彼はウパニシャドの後繼者であると同時に東洋のベルグソンである。彼は新しく生れ出た東西思想の調和者である。タゴーレは現代及び未來にふさはしき新福音の使徒である。

從て彼は個性の權威の否定者ではない。唯だ彼は自ら傷け自ら燒れる如き病的固陋な個人主義を嫌ふのである。我等の生存は或る意味に於て自然と一體であるが、また他の一極に於てはあらゆる事物と隔離してゐる。我等はそこに儼然たる個人として立つ。『我は絕對に獨存である、我は我である、我は無比較である。宇宙の全重も斯の我が個性を粉碎することは能きない。』そは外貌に於て弱小であつても、事實に於てはあらゆる力に抵抗しうるほど偉きい。個性の神秘は實にその暗き基礎より脫け出て唯我獨尊を誇る所にある。假令、少しの材料も損はれず、一原子だに破壞されないでも、個性の滅却された所には創造の喜は消耗する。そは實に自個の破產であるのみならず、また全世界の損失である。

既に全世界の損失であるからには、それは宇宙と係はるところがなければならない。實にや宇宙は不斷に個性との交通を求めてゐる。この交通がある爲めに、初めて個性に世界的の價値を生ずる。宇宙間により廣く滲透しない個性はそれだけ狹小で且つ貧弱である。我等は自ら得る爲るに、時に與へねばならぬ。かくも尊い個性でさへ之を擴大するには、謙遜と犧牲を要することを忘れてはならない。我等は消極的の自我即ちavidia（蒙昧）から解放されねばならない。我等が我等の個性を、個性それ自らとして完全な意味を持つと思つてゐると間違ふ。個性は生命の道を邁進すべきものである。我等の終局目的が個性にありとする者は、猶

ほ道路の土にしがみ附いて目的地に到らうとする徒輩である。かやうな「蒙昧」は自分の子孫を喰ふ動物のそれと一般である。此處に昔の聖賢が來て斯う敎へる、『蒙昧から汝自らを放て、汝の眞との心靈を知れ、そして汝を幽閉する自我の手から救はれよ』と。avidia 即ち小自我の囚はれから放れて、dharma（本質）に達するのが個性の解放である。dharma は我等の個性に潜在する終局の目的である。種子が腐つて土に歸る所から樹が芽ざし花が咲く。我等が個性の「蒙昧」を棄てゝ、自我を超越する所に最も深い眞理が產れる。そはあらゆる犧牲を求めながら、その犧牲をより淨く活かすのである。これが人間の『本質』である。我等の自我は祭壇に犧牲をはこぶ舟である。油を盛ランプを看よ、それが點火されない間は至て醜い物である。然し一たん火が這入ると初めてそれが意味をなす。そして四邊を照しながら自由に焔に油を供給する。我等はかやうなランプである。心靈のランプも亦光の爲めに其油を消費せねばならぬ。[illegible]

解放せねばならぬ。

以上はほんのタゴールの思想の一部であるが、歐州近代の個人主義が間違つてゐること、之を祖述する我國の一部思想家の態度の横道にそれつゝあることを暗示し、私の日頃の主張を側面から證明する爲めに借りて來たのである。更に題を代へて別の方面から彼を論じて見たいと思つてゐる。

新刊寄贈を受けたる書籍三百餘種の批評及び紹介は、本號頁數超過の爲め、全部組置として之を次號に廻はすの止むなきに至りぬ。切に寄贈書肆、著者及び讀者各位の諒恕を祈る

▲靑柳有美先生著

女の話

定價金壹圓廿錢郵稅八錢 ▲中判上製箱入

▲汝自身を知れ

内容の一班

△男女學生交際論△處世の定義△男の好む女△女の悦ぶ男△女は秘密を守るや△結婚と女性研究△男女の喧嘩△男子操縦術△男の心を動かす法△女子操縦術△戀は行き當りバツタリ△骨肉は何故婚せぬか△戀と虛榮心との關係△新らしい女の正體△挑戰的女子の末路△挑戰的女子の自惚△轢死美人論△初戀の三人△此外卌項

▲靑柳有美著

（新刊）

實驗無痛安産法

▲定價五十錢郵稅四錢

分娩は女の大厄とするに及ばず、無痛にて安産するを得せしむるものは本書也。主要藥劑の調合法及び無痛安産の方法を詳述す。

▲靑柳有美著

（新刊）

最新結婚學

▲定價五拾錢郵稅四錢

結婚せざる男女なし、結婚して後悔せざる男女なし。本書は著者の性慾、人情及び法律の知識を傾注せるものにして結婚を幸福ならしむる秘訣の傳授本也。

縮刷出來

世の中

▲文學博士三宅雄二郎先生著

▲定價金壹圓貳拾錢、郵稅八錢

▲小判上製箱入紙數六百頁

▲萬朝報曰く。一たび其内容を檢するに至つて忽ち人の意表に出でざるもの少し、一種獨特の妙味は味ふに從つて深きものあるを感ず。と

▲時事新報曰く。世界に生起せる有らゆる事實及び事件より人間處世の法に至るまで漏す處なく說き來れる一種の世間觀にして語る所言々肺腑を貫く。と

東京市麴町區有樂町一ノ四

實業之世界社

電話本局四五一一六番

振替貯金三四三三番

（中付三の一）

文學博士 谷本富先生著

道德革新論

大學講義全集 第一輯

豫告 第二輯 教育史の研究 第三輯 宗教教育論 第四輯 教育學概論 (以上逐次刊行)

菊判布製 四七六頁 價壹圓五拾錢 郵稅拾貳錢

▼谷本博士が大學退職の記念

▼博士が多年歐米留學の產物

▼我國著述界破天荒の新學

附錄 歐洲最近思潮一班

少數の學徒の外窺ふ能はざる帝國大學講義の內容今や本書に依りて吾人居ながら之を知るを得るは豈學界の一大慶事にあらずや況んや平明流暢の文眼のあたり博士の講演を聽くの感あるに於てをや況んや其內容普通の道德論と異り吾人に直接緊要なる幾多の重要事項を以て充實せるに於てをや

大日本圖書株式會社

東京銀座・振替二一九番

(中付三の三)

好評嘖々

■外出には必ずアカギ叢書の一本を携出せられよ。電車內。應接室等にて優に古今東西の科學藝文を修得せるむるは本叢書の誇也。■人生は短くて吾人の知るを要するもの甚多し即ち我叢書は文藝、哲學、歷史、經濟、科學、教育等を問はず主として精隨の結晶を提供す。尨大なる書籍は之を簡潔に叙述し難解なる學術は之を平明に解釋す更に又價格を最廉の十錢に奠めて提供するに至る恐らくは爾今世に學問難の聲ならんか。

アカギ叢書

■既刊編數百有餘種 ■目錄進呈 往復葉書にて御申込あるべし

定價 各冊 拾錢 郵稅各冊金二錢

東京麹町區三番町 赤城正藏 發行

■頒布部數九拾餘萬 ■振替口座東京一〇四三二番 電話番町二二八〇番

最近既刊分

■ダヌンチオ作 日野月文學士	犧牲	
■シルレル作 村上静人篇	ウヰルヘルムテル	
■栗原古城篇	エマーソン	
■ピネロ作 村上静人篇	第二タンカレー	
■ドストイエフスキー 京極逸藏篇	罪と罰	
■ウエデキント作 筑紫文學士篇	春の目ざめ	
■アダムスミス作 永雄法學士著	富國論	
■ドストエフスキー 栗原古城篇	痴人(上)	
■ドストエフスキー 栗原古城篇	痴人(下)	
■ダヌンチオ作 日野月文學士篇	フランチエスカ物語	
■金子文學士著	最近獨逸の發展	
■佐藤正編	マルクスとエンゲルス	
■栗田文學士著	膠州灣	
■吉田文學士著	モンテツソ、リーの教育	近刊分
■重松文學士著	印度の古文明	
■大川文學士著	マホメツト	
■ツルゲネーフ作 緒川禎太郎篇	煙	
■佐々木文學士著	パナマ運河	

▽中央公論春期大附錄號△

四月一日に發行せらるべき「春期大附錄號」の附錄小説に執筆せらるべく快諾せられたる大家は

家[illegible]出…………德田秋聲

住吉心中…………近松秋江

題未定…………森鷗外

の十八名家にして、其燦爛陸離たる光彩は恐らく雜誌界空前の美觀を呈せん。

▽中央公論春期大附錄號△

信より玉江へ

岩野泡鳴

大津、明治三十六年十月十一日、月曜日。

玉江さん、――矢ッ張り、僕が子供の時に呼び慣れた通りに斯う呼ばせて貰ひますが、――十三年ぶりでお目にかかり、僕は一昨日からすッかり夢中になつてしまつて、――

僕が江戸堀の病院へお訪ねしました時は、お互ひに突然のことで――僕も直ぐには思つたことは云へませんでしたが、あなたも、あとで氣の少し落ち付いた時の顔とは餘ほど違つた顔つきをしてゐましたが、僕が豫期したほどの感情をあなたは見せませんでした。あなたの方はどうであつたか存じませんが、僕は直ぐにも先づ過ぎし日の薄情をお詫びしようと思つたのです。然し胸にいろんなことが込みあがつて來て、――それに場所が場所で、今のあなたがどう變つてゐるかに

も遠慮して、――一通りの話しか出來ませんでした。それでも、

『今から五年前の夏にもこちらへ來て、あなたを大分探しました』と、僕が申しますと、あなたは指を折つて見せて、

『その夏だッさ、お父さんの亡くならはッたのんは』と、云はれました。僕は今一つ詫びることがふえたのを知りましたが、その情をもその場で云ひ現はし兼ねたのでした。

『直ぐ往にまッさかい、あし先きへ行てておくれやす』と、あなたはあなたの家のありかを敎へて下さいました、ね。

で、あなたにも急いで來いと云ふ意味の車賃としてあれだけを渡し僕は先づ車を飛ばしますと、兄さんだけが留守居をしてゐて、早速に、『夢のやうだ』と云はれ、母の行つてるところは分つてるから呼んで來るが、さぞびッくりして氣絶するかも知れないとありました。が、僕は、あなたの最初の御樣子に照り合はせて見ると、兄さんは自分の年だけに――實際、おぢイさんになりました、ね――ただおほ袈裟な形容的感情を述べてゐるのだと思ひました。

ところが、僕は暫く獨りで留守居をしてゐると、おッ母さんは格子をがらりと明けるが早いか、兄さんよりもさきに飛び込んで來て、『まア、まア』と叫んだ切り、言葉も出し得ずに、僕の前にころがりました。それでも、兄さんのおぢイ臭く、あたまの髮も半白になつたのに比べては、おッ母さんは割合に元氣でした。昔の通り、相變らず巖丈に肥えてゐて、齒も元々通りしッかりしてゐました。髮を茶せんに切つたあたまをもたげてから、『何からお話ししたらええのやら』と、目をしよぼつかせて、初めのうち

はおッ母さんの話にとりとめが無かつたのです。
『玉江さんは直ぐ歸ると云ひましたから、もう着くでしよう』と、僕が云ふと、
『あなたは――もう――奥さんも、お子供さんも――』
『ええ、――子供はひとり死んで、二人目が大津へ來ると直ぐ生れました。』
『そらさうでしよう、なア――』から云つて、おッ母さんは兄さんと顔を見合つて、何だか失望の色が見えました。段々聽いて見ると、あなたの御家族は箸のあげおろしにも僕の事を忘れてゐないで、その上、お父さんは御臨終の床からも『早う信さんにめぐり合へばええのに』と云つて死なれたさうです。僕の詫びるべきことがそこまで行つてゐたとは、一しほ僕の心を打ちました。
『僕が玉江さんを初め、あなたがたに濟まないことをしたのです』と云つて、僕は先づあやまりました。僕の最初の變心は、大阪へ出て、當時の耶蘇教の潔癖と隱遁傾向とに觸れて女ぎらひになつた爲めでしたが、その後東京へ歸つてから、同教を離れ、再び今度は僕の必然の要求から世の婦人が戀しくなるに從つて、思ひ出されたのはあなたのことでした。方々の心當りを手紙で照會して見たこともありましたが、あなたと御家族とが國にゐないことと並に行衞不明のことだけが分つたのでした。それも家計の御不如意の爲めであつたとのことでしたから、僕は一時殘念ながらそれッ切り斷念しました。
ところが、あなたのお父さんが御臨終の床で僕のことを云つて下すつたと云ふ丁度その頃――暑い夏でして、大阪に虎列剌がはやつてましたが、――僕はいよ〳〵あなたを尋ねて、大阪の病院を三四ヶ所驅けまわりました。そして生憎、愚かにも、あなたがいらしつたと云ふ府立病院を尋ねることをしなか

つたのです。僕はただあなたが看護婦になつてゐることだけを聽き知つたので——これは、僕がその夏二ヶ月の豫定で、兄の任地なる播州龍野へ保養に行つてた時、あなたの遠縁に當るとか云ふ裁判官——名は忘れましたが——から聽いたのです。僕は占めたと思つて、豫定を早めて大阪に出たのでした。この時の旅行は僕としてただ保養の目的ではなかつたのですから。

その頃僕は今の妻と關係が付きかけてゐたのですが——今一應あなたを尋ねて見てからと思ひまして夏期休暇をしほにこちらへ旅行したのでした。聽けば、その時丁度あなたのお父さんも類似虎列剌に罹つて亡くなられたのです、ね。夢にもそんなこととは知らず、大阪市中があまり惡病の盛んな樣子なのに恐れて、たッた一日で逃げ出し、東上の汽車に乘つてまでも、ひよッとあなたに會ひはしないかと注意した位です。

『あの美人ぢやと云はれた有名な娘も、面疔がでけた爲めとか云ふて、氣の毒にも、頰の上に大けいくぼみがでけて、人相がまるでちごてた』と、龍野で聽いたのを私かに僕は目じるしと思つて、汽車の乘り下りをする婦人にすべて注意を向けたのです。そしてこのまま、上方的な優しい言葉の聽える範圍内を脱してしまうことが、どうしても、出來にくいやうな氣がして、僕は馬場停車場で下車し、この大津の外れに至り、琵琶湖のほとりをぶら付きました。そしてゆふがたになつて、三井寺の高みへのぼり、段々と消えて行く湖水のおもてをながめながら、あなたの違つたと云ふおもがけを——どう云ふ風にだらうなどと——思ひ忍んでゐました時、突然撞き出された晩鐘の響きに驚いて、僕は再び無常の旅をつづけました。この時の考へでは、もう、昨日の如く、あなたと共にこの三井寺へのぼることはつらくよ

どとは夢更ら思へませんでした。

『それにしても、お互ひに區々になつたその原因は僕が最初の音信不通ですから』と、僕はおッ母さんに幾重にもあやまりました。こんなことは、もう、おッ母さんからお聽き及びにもなつたでしよう。また、石山の休息所で直接に可なり詳しくおしやべり致しました。

『久し振りでお目にかかつてお玉もうれしからうけれど――この御親切なお話を聽いては、さぞがッかりしましよ』と、おッ母さんは斯う云はれました。

『何にやかやあたまへ一緒に出て來て、何から云ふてええか分らん。』兄さんはただ斯う云つて、言葉が少なかつたのですが、このなんにやかやと云ふ國言葉で僕はあなたと一緒に、あなたの廣い御屋敷内の川ぶちで、嫁菜やたんぽぽを摘んで遊すんだことが思ひ出されました。

兄さんはその時から不具者と見做され、勉强もさせられなかつた代りに、あなたがた姉妹は僕等と一緒に、早くから僕等の塾へも、英語の研究會へも、行つてゐました、ね。そして僕はあなたが目あてであつたのに、世間では僕が年うへの姉さんとあやしいと評判してゐました。どうせ僕等はまだ年が行かなかつた時のことです。無邪氣な戀でした。僕がお宅の炬燵に當つて、あふ向けに寢てゐると、あなたが横からその上に乘りかかつて、反對のかはに伏せてあつたナショナル讀本を奪ひ取つたことがあります。

『をなごの癖に人さまの上へなど』と、その時おッ母さんにあなたは叱られました。

僕が大阪に出るまでは直ちに東京へ行くつもりでしたから、

『落ち付きさへすれば、玉江さんだけは呼んであげますから』と、僕はこツそりお母さんへ話しました――その時は僕は、今でも思ひ出されますが、云ひにくいことを思ひ切つて云つたので、のぼせて顔が赤くなつたやうでした。

『どうぞよろしうお願ひ申します』との御返事は、無論、あなたと僕とを夫婦にしてもいいと云ふ意味であつたと僕はその時から解釋して來ました。

『早う信さんにめぐり會へ』との、お父さんの御遺言もその意味からでしたらう。が、あなたが今まで御獨身でお通しになつて來られたのは、必らずしも僕を思つて下すつたからでも御座いますまい。かう申すと、何だか、僕が先づ氣の變つた生活をしてゐるのをこと更らに辯解するやうにも聽えるかも知れません。そしてあなたのお心だけに秘めてゐて、今更ら僕にうち明けたくないとやうに思つて御座る秘密を――若しありとすれば――汚しもし、失望させもするか知れません。そんなことなら、僕ぬ僕の心でまた幾重にも詫びて通しましようが、あなたが石山で僕に語られた極おもて向きの御言葉によつて考へても、どうせあなたは結婚などには斷念していらしつたのです。

『お父さんは病身でおましたし、兄さんは阿房で役に立たんし、姉さんかて――お父さんの遺言に一家の責任はこれからも玉江が引き受けてとあつた云ふのを楯に取つて――何かと云ふ場合を、わたしはかりに押し付けてしまうし、をなごの腕一つで大の男や老人を引き受けて結婚など云ふてそれまへん』と、あなたは最も不平さうに申されました。これには僕もこれから出來るだけ十分の考へをあなたの爲めにめぐらせるつもりです。無論、僕と結婚が出來てゐたのなら、そんな心配も不平もなかつたのでしよう

が、あなたはそこまで突ッ込んで僕に當つたのではなかつたやうです。――そこまで當つて貰つた方が僕がこれからあなたがたの爲めに力を添へることには一層熱心になれたのですが。

話があとさきになりましたが、兎に角、皆で待ち遠しがつてたあなたが病院から歸つて來られた時には、僕の心ばかりの馳走をおッ母さんが大抵料理し終つてゐました。

『お玉か――まるで夢のやうで、なア』と云つて、おッ母さんは臺所から濡れ手のまゝ出て來て、何よりもさきにあなたをあがり口で迎へ、『信さんは、然し、奥さんがでけた。』

『そらさうやろ――立派な男さんになつてやはるのんやさかい。』あなたはかうもり傘を置いて、座敷へあがりながら斯う云はれました。『をなごかて、厄介人を引き受けてをりさへせにや、信さんの歳までも――』

あなたのこの皮肉がてきめんに僕に向つたのかと一たびは思つて、その鋭いのに驚きました。

『まア、そないなことは――』おッ母さんは斯う、廣げてゐた濡れ手であなたを押さへる眞似をしましたが、餘ほど下から出たやうな口調でした。そして僕は、兄さんがそばでいやな顔をしたのを見て、直ぐその意味が分りました。

あなたは思つたよりも肥えてゐます。そして相變らず皮膚の奇麗な顔をしてらッしやいますが、何だッて――豫期してゐたところではありますが、――あんな傷が出來たのでしよう？ 然しあなたのお顔にどことなく、ぴんときついやうなところがあるのは、決してその傷の爲めばかりではないと感じました。僕と同じ年月をあなたが一人前の男子と同様にお家族の爲めに働いて來た經驗の然らしめるところが多

く與かつて力あるのでしよう。

「先刻は失禮いたしました」と、僕に向つて坐わつてお辭儀をなすつた時には、白い服で見た時とは全く違つて、――もつとも、あなたはいい衣物に着かへてゐられました――僕に取つては、昔の戀人とか妹とか云ふ感じを得たよりも寧ろ頼母しい姉か相談相手が出來たやうに思はれました。

「さつきから、みんなで待つてゐたのですよ」と、僕は洋服のあぐらで輕く受けたつもりでしたが、僕の聲はわれながら顫えたやうでした。そして僕の方がうぶなやうに感じました。

「何にせい、朋輩に代りを頼んで來ますのんやさかい、な、さう早うも出られまへんで――詰りまへんこないな商賣は。何ぞええ思ひ付きをしてお呉れやす。」

「どうです、いツそ、あす、――けふはこゝへとめて貰ひますが、――僕と一緒に大津へ來たら？妻にもお引き合はせして置く必要もありますし、――おツ母さんには僕からお頼みしますから――？」

「それもよろしゆおまへん、な。」あなたは斯うお答へ下さいました。

それからみんなで――姉さんは御無事でも、遠いところの病院へ矢張り看護婦に行つてゐられるのが殘念なだけで――四人は久し振りで一緒に晩食に向ひました。兄さんは茶碗と箸とを持つて、昔の通り、疊の上に腹這ひになりました。氣の毒な様子ですが、僕はこれを見て却つて昔通りの親しみをおぼえましたところ、

「珍らしいお客さんが御座るのに」と、おツ母さんが叱つたので、兄さんは素直に起きあがつて、窮屈さうに座わり直しました、ね。あなたは、もう、諦らめてゐて、そんなことはお父さんの時と同様にうツ

ちやらかしてあるやうに見えます。

「なにも用がないので、な」と、おッ母さんは笑ひながらわざと少し惚けた口調で、また兄さんのことを斯う云はれました、「夜になると、時々、新地の藝子さんのとこの格子さきに立つて、こッそり立ち聴きしてをつて、こないな歌をうとうたとか、あないな話をしてをつて役にも立ちやせんのにとか、人のことをせんきにばかり病んで、な。」

「然し、な」と、兄さんはにこ付いてだが、眞面目くさつておつしやいました――世間に出たこともない兄さんには、無論、兄さん自身のお考へがあるのでしようから、「あないな猥褻な歌や話、せんでもええやないか？――けがれる！」

「けがれると思たら」と、あなたはあなたのお父さんを思ひ出させるやうな口調で、叱るやうに申されました、「聴きに行かんでもよろしゆおまつしやろ。」

「ほんまに、な、をかしな人で」と、おッ母さんは笑つてゐられました。

「然し――然し」と、一種の道徳家らしい兄さんは負けない氣になつて、「風儀の――害になるやないか？警察から手をまわして、さしとめてしもたらええのや。」

「警察は警察で」と、おッ母さんはそれとなくあなたの肩を持たれました、「またそれぞれのお考へがおありになるのやさかい――。」

「今の巡査が惡いのや、昔のやうな禮儀も禮節も知らんで！」

「そんなら」と、あなたは突然に、「あんたが巡査におなりやす。」

「巡査などつまらん。」

『それでも、な』と、あなたも意こ地になつて、『お氣の毒さやけんど、巡査や藝子はあんたよりやえろおまッせ――ひとりで働いて、親や子を養のてるものがあります！』

『そやさかい、藝子でも看護婦でも駄目やないか――われから男のねきへ寄つていて？』

『お氣にさわるなら、これから中谷の御主人にたんとかせいで貰ひましよ。』この點でした、ね、あなたが『とても、あきまへん』とその翌日しみ〴〵とおつしやつたのは。たまに、區役所の傭ひに周旋されたり、會社の小使ひになつたりしても、士族と云ふ氣ぐらゐばかり高く、人におだてられては上の人と喧嘩をして追ひ出されるのは、兄さんとしては無理もないことでしよう。お父さんがいらつしやる間はお父さんが諦らめてゐたでしよう――御自分があまり嚴格に子供を叱り、あたまなどを度々ひどくなぐつた結果ですから。今では、また、あなたのしよい込みは仕かたないのです。然し僕は兄さんの機嫌を取つて置かないでは、あなたのお家へ今後も度々伺はれないことだけは分りました。

それであなたの大津行きのことも、僕は先づ兄さんによく承知させました。すると、またおッ母さんが一緒に來たさうであつたので、それほど金の用意がないからと云つて、また他日のことにして貰ひました。僕は正直に申しますが、あなたと二人切りで一晩ゆッくり話して見たかつたのですから――

兄さんは感心に酒を一滴も飲みませんでしたが、あなたは三四杯召しあがつて、多少お醉ひになりました。衣物をお着換へになる時でした、あなたは少し浮き〴〵した御口調で、――

『きのふも、△△先生はおもしろいこと云やはつた、をなごと云ふ物は皆赤い物を好きな動物やッて、

な――然し、うちや何も赤い物などつけへん。」

如何にも、僕がちらと見たあなたの長襦袢の裾は紫地に紅なし友禪の模様のやうでした。

「そりや、そやとも」と、おッ母さんはあなたの手傳ひをしながら、「あんたの歳で赤いお湯もじに赤いべにでもつけたら、人さまにはお化けか何ぞのやうに見えます。」

「でも、まだ」と、あなたはあまへたやうに、そして下あごへ力を入れた聲で、「信さんとおない歳だッせ。」

「さよかいな？わたしはまた一つ下かとおもてたのに。」

「なんぼ云ふても、あんたはあかん――忘れてしもて。」

「信さんはわたしより十したおや」と、兄さんが口を出したので、

「そんなら」と、おッ母さんも分つたやうに「やッぱり丁度三十や。」

「そやさかい、いつでも云ふてるやないか？」あなたはこの時足踏みまでしてお顔をしかめました、ね。僕のことをさういつも云つて下すつてたと承はれば、感謝の至りに堪へませんでしたが、あなたは、御家族同士の間となると、どうも直ぐお氣が荒立つやうにお見受け致しました。そのお心持ちも僕には分らないことはなかつたので、床へ這入つてからも、僕はひとりで暫らくそんなことを考へて同情してゐました。

翌朝、車を二つ走らせて梅田に至り、十時の汽車で大津へお伴致し、湖水のほとりの僕の假寓へ着いた時は、妻はちよッと驚きました。僕が他の婦人をつれて來たことなどはこれまでに無かつたのですか

ら。

「とう／＼中谷玉江さんにめぐり會つて、ね」と、僕がわざとにも優しく説明してやると、然し、かの女もあなたの御らんの通り直ぐ分りました。あなたのことは前々から話してあつたのですから、ね。お引き合はせが濟んでから、かの女は云つたでしよう、

「お噂はわたしがこの伴田家へ來た時から伺つてました、わ――いえ、來た時どころぢやア御坐いませんの、もう、まだわたし共が一緒にならない時からですの。おのろけだか、何だか分りませんでしたが、ね、こッちでも隨分尋ねてゐたんだから、向ふでもきッと尋ねてゐるに相違ないッて、ね。」

「ほんまに、な。」あなたは斯う云つてうち解けて下さいました。「わたしの方でも、父や母は箸の上げおろしに伴田さんのことを思ひ出しまして、な、今頃はどこにゐやはるか、どないしてお出かなどと、はたで聽いててもめんどい時がおました。――それがまた、母の年を取るにつれて、ひどなりまして――」

「そして今何をなすつて――？」

「…………」

「玉江さんは」と、僕があなたの返事を引き受けて、「僕の想像通り、矢ッ張り、看護婦をしてゐらッしやるのだが、老後までの獨立準備にと產婆のことも卒業したので、今、或產科病院につとめてるので、そこへ先づ僕が尋ねて行つたの、さ。」

「よく分りました、ね――？」

「それが、さ、例の、大阪醫學校出の醫者と話してる時、ふいと玉江さんのゐどころが分つたので、直

ぐ訪ねて行つた、さ。」

「へい――長年の御志望がさうわけもなく」と、半ば冷やかし笑ひをしてから、かの女はあなたに向つておせッかひを云ひました、これがかの女のいつも云ふ癖です、「病院などよりやア獨立して產婆を開業した方がいいでしよう――お隣りも產婆ですが、ね、なか〳〵はやつてるやうですよ。」

「わたしの年輩ではまだ世間が信用して吳れまへん。」あなたのこの御返事も尤もですが、お隣りの產婆だッて、妻はこちへ來る早々取りあげて貰つたので信用してゐますものの、こんな地方では實入りは少いと見え、京都から月に何度か出張して來るおぢイさんの或漢方醫のめかけを兼てゐるやうです。これは然し、あなたをも伎倆なしと見て、この見せしめを云ふのではありませんから、惡く取つてはいけません。

「兎も角、お久し振りでしようから、けふはどうか御ゆッくり」と云つて、妻はまた――と云つても、あなたが見るのは初めてでしたが――子供にかまけ初めました。僕はそれを見るのがいやで、いやで溜らないのです。あなたは職業上子供を可愛がる人の方が商賣繁盛の味かたかも知れませんが、僕は子供に目も鼻もない女を見ると、僕の妻の狀態から推測してゞしようが、これほどだらしない物はないと思ひます。この點はあたまも同感の御やうすでした。

で、僕は直ぐあなたを三井寺に御案內して、五年前にこゝで僕がひとり特別な無常を感じたことをお話し致しました。それから一先づ歸宅すると、石山へは妻が一緒に行くつもりで支度をしてゐましたのですが、僕はあなたのおッ母さんを遠ざけて來たやうに、かの女をも遠ざけてしまひました。實は、か

の女はかげでぷり〳〵怒つて、すね初めましたが、相手にしなかつたのです。

僕が『第二の唐崎』と申し上げたところから小船をえらんで、あなたとふたりッ切りで湖上に出ました、ね。もう、ゆふかたで、たゞさへ寒くなつた十月の風は一しほ寒かつたのでしよう。僕は熱してゐて左ほどに感じませんでしたが、あなたは心配して、

『寒おまッしやろ』と注意して呉れました。僕もそれで氣が付いて、蔽ひなしの盛裝をしてゐるあなたの身に風でも引かせたら、わざ〳〵つれて來てゐながら、おッ母さんに濟まないと思つたものですから、一つのござを風かみの方から肩の上に卷いて、あなたと二人でその兩端を持ち合つて一緒に並んで坐わりました。つまり、僕等は逢坂山を脊にして、あなたは僕の右に座わり、正面に叡山を眺めたわけですが、あなたは一度來て唐崎と三井寺とを見たことがあると云つて、湖上からの風景などをも餘り氣にかけなかつた御樣子でした。

　秋の赤とんぼが一つ、僕等の上を寂しさうに飛んで行つたでしよう――あのやうな心持ちでした、僕のあなたに對する心も。胸にはもや〳〵と心がさま〴〵に赤く燃えてゐながら、兎角、よそごとばかりを云つてゐました。

『玉江さん、昔通りのつもりになりませうか』と、僕は初めから、幾度も、たッた二つの袖の隔てを取り去つて出る機會を私かにうかゞつてゐました。

『いよう、めをと觀音！よう似合ひました！』斯う、僕等の前を行き違つた船の船頭が叫んで行きました時、あなたは、然し、別に赤い顔もせずに僕とかほを見合はせました、ね。僕等の船は僕からあなた

の方へと進んでゐたのです。あなたは前日のと同じ大島お召の衣物でしたが、僕は洋服を和服に着かへてゐました。

『縞の羽織はあんたに似合ひまへん、な。』

『さうか知らん――?』

『男はちよッとそないなことに氣イ付かんものやでなア、奥さんがもッと氣をお付けなさつたらえゝのんだッさ。』

『あいつア、どうせ、駄目です――子どもにばかり夢中になつて。』僕はこの時にも斯う申しました、ね。すると、あなたも僕に賛成して、姉さんらしく云ひ添へました、

『ちよッと見ただけでも、あんたの家はむさくるしい。』このお言葉を聴かされても、無論、僕には妻を辯解する考へは出ませんでした。と云ふのは、僕は、もうかの女に斷念して、僕の今の家を中心としての生活狀態を向上させようとは思はなくなつてゐるのですもの。

『旦那、あすこが膳所の城だッせ』と、船頭に注意されて、僕等は肩のござを少しおろして、お互ひにうちがはから背にしてゐた方をふり向きました。

見えたのは、浪が石がきに當つて砕けてゐる城あとの監獄でした。

『あんたの行きなさる中學校は見えまッか』と、おッしやいましたが、それは見えませんでした。

　僕等は船の眞ン中に向き合つて坐わつて、膝と膝とが輕く相接してゐました。僕の身うちに血が燃え立つたのを知つてか、知らないでか、あなたはじッと僕の顏を見ました。僕は眼をあなたから反らして

——實はさうしなければならぬやうになつたので——僕の右手前方の遠い山はなをさし示めして、

「あすこが堅田の落雁のところです」と云つた。

「消えて行くやうだす、な。」あなたはこの時初めて風景に關する感じを述べられました。が、僕は却つてよく僕の眼に映つたあなたの頬の傷あとを、どうかして、今一度もと〳〵通りに直せないものか知らんと考へてゐました。

「なぜあなたは結婚しなかつたのです」と僕が思ひ切つて申し上げたのは、——その眞意をお分りになつたか、どうだか存じませんが、——僕のやうな變心者に對して、あなたも若し結婚してゐたら、多少でも復讐が出來てゐたのにと云ふ意で、つまり、僕自身を責めたのでした。

　この時、船はもう瀨多川へ入り、粟津ゲ原に添つて川を下だつてゐたので、有名な橋も見え出してゐました。そしてあなたと僕とは少し隔てを置いて、お互ひに兩肱を敷さごもの上に突いてお互ひに卷煙草を吹かしてゐました。

「わたしのやうな者をもろて呉れる人がありまツかいな？」あなたは斯う棄てるやうなお答へでした。

「そりやア、相當なところで滿足するつもりなら——」

「でも、そこにそこが有りまして、な。」

　僕は、この時まで張り詰めてゐただけに、あなたのこんな、大阪流の、あひ口見たやうな返事に、半ば張り合ひぬけがした。僕に對しては、もッと正直に云つてもいゝではないかと云ふ恨み氣味が出ました。この恨みは、然し、石山へあがつてから、ひとり手に解けたことは解けましたが——

「瀬多の　唐橋や
からかね　の　擬寶珠、
水に　うつるは
──その名も　何だい？──
頗る　別品、
膳所　の　城！」

こんな、それこそ頗る別品か變挺かの調子の歌を、船頭が急に自慢さうに歌ひました、ね。僕は丁度これに耳を傾むけるだけの餘裕を──あなたに對する熱がさめた間に──得てゐましたから、よくこれをおぼえ込んで、翌日になつて考へて見ますと、──僕は國語の教師ですから、ね、──この歌の組織はなか〳〵馬鹿にならぬところがあります。歌ひ方がぎごちない調子ではありましたが、そのぎごちなさにはわざ〳〵さうなるやうな言葉を選んで來たのです。タ行、カ行の多いこと。ギ、ゼ、ベ等の濁音がうまく組み合はせてあること。ンと云ふ反撥音が數ヶ所に据わつてること、等です。然しこんなことはあなたに對する僕のありの儘の感じを書きつゝ味はつて行くには無關係なことでしよう。

石山の奇石や、本堂や、月見堂や、鐘つき堂を見た時は、もう、薄ぐらかつたです。山門を出てから川へ突き當つての、右の、川ぶちの宿──あの宿で僕はあなたにも、少くとも、おツ母さんに語つただけの告白は──飛び〳〵にですが──繰り返したつもりです。そしてまたあの宿でゞす、あなたが初めて本音らしいことを云はれたのは。僕の豫期から云へば、無論、まだ〳〵物足りなかつたわけですが、

あなたとしては僕に聞かせたい絶頂のことでしたらう。その事とは、あなたの御家族に對する不平でした。兄さんの無能で而も燒き餅的な干渉――お母さんの入らざらんさし出口としての惡口的世間話――こんなことの爲めに、たとへあなたが獨立して産婆なり、看護婦會なりを開業しても――そして一二度は既にやつても見たが苦情やめんどうが起つて、――とても永續の見込みが立たないこと。それに、姉さんが割合に冷淡で――

「御もつともです、僕はそれに對しては、これから――これまでのことのお詫びとして――出來るだけのことは盡します」と、僕はお誓ひしました。

「わたしも、うちに人數は仰山をつても、ひとりとして相談相手になる者がないのんだッさかい――」

「然し、ねえ――玉江さん――相當なところがあつたら、結婚してもいゝぢやアありませんか？」

「あきまへん！わたしが結局食べさせにやならんものが三人もをつては――」

「そりやアさうでしようが、ね、そのもの等をも引き受けて呉れたら、どうです？」

「あきまへん！」

あなたは全くこの點には斷念してゐるやうです。實は、直接に云はうとして申し兼ねたのですが、大阪のまた別な友人が、その知人で二三萬圓はある藥屋の主人の爲めに細君がないかと、僕に云つたことがあります。これも一ヶ月ほど前に僕の家へ尋ねて來た時のことです。女の方の兩親は勿論、子供の一人ぐらゐは一緒に世話してもいゝのだ、と。その代り、向ふにも缺點があつて、當の男がつんぼで且片あしが利かないのです。あなたはいやだと云ふにきまつてましよう――が、厄介もの等の肩がぬける方

を考へて見たらどうでしよう？

許して下さい――この話は僕としても書いた文字の上を幾たびか塗り消さうと思ひ惑つたのです。それに、僕自身の慾情が――この話を石山でしようとした時には――却つて盛んであつて、今にも手をあなたに出しかけてゐたのです。僕は氣が落ち付かないで、室を出たり這入つたりしました、ね。あなたは多分それを感づいてゐられたのでしよう、

「御酒を召しあがるのんはやめにしなアれ」と云つて、お酌をさへ爲し澁つてゐました。

「酒がいけなければ、ビールを取りましよう。」斯う僕が云つて、無理にビールを命じて來ても、あなたは少しも飲みませんでした。その癖、前日には、尤もお母さんもゐるところでしたから、多少お醉ひになつたではありませんか？

「あまり警戒し過ぎます、ね。」

「でも、あんたかてほんまに呑めへん。」

「そりやア無論だけれど、――珍らしい奇遇ぢやアありませんか？」

「…………」あなたはたゞ默つて下を向きました。

「こんな時にやア、無理にでも酒が欲しい――あなただッて」と僕は先づみだらな氣分になつて見ようとして、おづ／＼云ひました、「さうひとりでゐて――男を欲しくなる時がなかつたでしようか？」

「そこにそこがありまして、な」をまたあなたは繰り返して、僕を無感動な樣子で見ました。

「…………」僕は無言でビールのコップを傾むけ、今一遍あなたにお酌をして貰ひました。そ

してそれて僕のどこまでと云ふ切りがなかつた心持ちを切りあげることにしました。

『もう、往にまほ』と、あなたは丁度この時三度目の催促をしました。

あなたの一度目の催促には僕は最後の汽船を後れさせました。そして二度目のには、二人乗りの車を一臺命じて置きました。あなたが立ちあがつて、衣物のつまを揃へたりし初めたので、僕は最後の思ひ切りを付けて、下へ行つて勘定をすませました。それからまたあがつて來て、

『多分、こんな場合は二度とありますまいから、一緒に乗つて貰ひますよ』と、僕は半ば押し付けるやうにあなたに伺ひました。

『…………』あなたはまた坐わつて食卓のはじをさすつてた右の手をそこにとどめ、下を向いておとなしく低い聲で、『二つないのんなら――』

『ないさうです』と斷言したのは、僕のうそでした。せめて一つ車にでも乗つて見たかつたのです。

僕は過分に醉つてもゐましたが、心はあなたに對する情にばかり集つてたので、車が川のふちをさかのぼり、瀬多の橋ぎはを通る時まで、物が云へませんでした。

あなた　亦無言で、下を向いた切りでした。

『あれが唐橋です』と、暗い外を僕が指さしたら、

『…………』あなたはちよッとほろの中から首を下げて、闇の中をおのぞきになつただけが御返事でした。生憎、月のある頃ではなかつたのです。

今度は僕が右手にゐましたので、左の手をあなたの後ろからまわして、僕は胴の長いあなたを堅い帶の

上からしッかりいだき締めました。あなたは大理石のやうで、少しも身動きをしませんでした。
たゞ車の驅けて行つた鐵道線路や道のでこぼこが、おのづから、僕等を一緒に車につれて左右させました。
「惡く思はないで、ね――」
「はい。」
ふたりの聲はいづれも顫えてゐました。
それッ切りまた無言でしたが、突然あなたが身を動かして、
「車やさん――わたし、おろして貰ひまッさ」と云ふので、氣が付くと、馬場の停車場下を通つてゐました。
「どうしてです？」
「歸ります――奥さんに惡い。」
「……………」僕はどうしようかと惑ひましたが、一しほしッかりとあなたを抱いて「このまゝ歸つたらなほ變に思ひますよ――車屋、早く行け！」
「へい――」踏みとまつてゐた車夫はまた驅け出した。
「……………」あなたも別に反對をしませんでした。
「惡く思はないで、ね――」僕はまた、大津市内を進んでる時に、斯う申しました。これ以外のことは何も云へなかつたのです。

「……」あなたに御返事があれば、直ぐお顔にでも接吻させて戴きたかつたのですが、御返事がなかつたので、ただ近い方のお手を僕の遊んでる右の手に取つて僕の口びるへ持つて行きました。

家へ歸ると、妻はもう二階へあがつてました。ふて腐つてゐたのです。

女中に茶を汲ませて下で呑んでから、僕等も二階へあがると、――僕の驚いたことには、――そして又あなたに對して何だか恥かしかつたことには、――同じ坐敷に三つ床が並べて取つてあつて、その端のに妻が子供を抱いて寢てゐたことです。僕が内命でも與へてあつたやうにお思ひなすつちやア困ります。二階にだッて、室は今一つあつたのです。

「寒いので、子供の爲めに早く失禮してゐますが、ね」との挨拶が初めで、妻の言葉つきに劍がありました、「どうかよろしいやうにお休みなすつて下さい――お床は取つて置きましたから。」

「つい、おそうなりまして――」あなたは子供の寢いきがする室内に立つたまま暫らく考へてゐました。

「湖水の風は」と、妻はあなたにはとぼけたやうに思はれることを云ひました、「今からもう、お寒いのですよ。」

「わたし、矢ッ張り、失禮致しまッさ。」

「そんなことを云つたッて――」

「もう、おそいのですから、あなた」と、妻もむッくりと半ばからだを起しました。さうとぼけてもゐられなかつたのでしよう。「どうか――わたしはお先きへ失禮致しましたが、少しからだの加減もよくなかつたものですから。」

「まア、あなた、强情を云つたッて仕かたがない。――お休みなさい。」僕は斯う意外に强くなつてゐました。

「……」あなたは成るやうに成れと云ふやうな決心をお顔に見せました。そして妻に對するお言葉は和らかに、「では、とめて貰ひましよか？」

『さうなさいましよ。』と――妻は子供がぎやア／＼泣き出したので、『おう／＼』と、直ぐその添へ乳にかかりました。

あなたは、出してある寢まき代りを遠慮して着かへないで、長繻袢になりかけながら、妻と反對の端へ行くと主張しました。が、僕はまた何だか氣がすまないので、自分でその場所を先づ占領しました。僕がぐづ／＼してゐると、あなたがきッとそこを取つたに相違ありませんでしたでしようが――？

『では、お休み』と、あなたが眞ン中のに這入つてから、僕は妻の枕もとのランプをからだを延ばして吹き消しました。

すると、くらやみの中に僕はあなたの髮のにほひを嗅ぎました。考へて見ると、あなたはその前日、病院を出るまでに、束髮をいてふ返しに結ひ直して來たのでした。

あなたも息の御樣子ではなか／＼眠り付けなかつたやうですが、僕も神經が昂奮して、國の昔から石山の歸りまでのことを幾度と無く眼の前にお浚ひ致しました。そしてあなたはお氣が付いたかどうだか分りませんが、隱さずに申し上げると、僕は――妻の寢いきが聽え出した頃――手を延ばしてあなたの枕もとをさぐりました。

こわごわでしたから、あなたのお手にもお首にもさわりませんでしたのが、今から思へば、あなたに最後の失禮を重ねないで濟んだわけです。

どうか僕に三度目の「惡く思はないで」を云はせて下さい。そして今後は、あなたと僕とは、全く奇麗な兄弟になりましよう。僕から故意にあなたを試みたわけではありませんが、この結果から見ると、あなたはさすがに、なか〳〵、しッかりしてゐられます。僕の方が寧ろ弟分で、意志も感情もまだぐら〳〵してゐることが分りました。

あなたが獨身で通して來たのは、あながち、おッ母さんの獨り合點してゐるやうなわけではありません。何も昔の戀物語りにあるやうに、僕との結婚を待つてゐられたのではありません。同時に、僕が妻子を持ちながらあなたをどうかしようと思つたのがあま過ぎたのです。

僕はあなたと決して肉體上の關係はしなかつたと云ふことを妻に告げて、――また、實際がさうでしたから、――かの女の昨夜の失禮な態度を叱り付けました。これと同時に、僕も、きのふのけふとなつては、あなたに面じても、今一層奮勵して自分を向上させなければならぬことを悟りました。

あなたを思つてた爲めに、いつも關西の方角が慕はしく、懷かしくあつたのですが、世間的な眼に肥えて御座るあなたにお目にかかつて見ると、――一つには、多少の滿足を得たからでもありましようが、――却つて再び東京へ早く歸りたくなりました。滋賀縣のやうな田舍にゐて、中學の教師や縣廳の通譯――僕は、既にお話した通り、縣廳の英語通譯を兼ねてゐます――などしてゐても、まだたッた三ヶ月しか立ちませんが、どうせ末の見込みは立ちません。

あなたのお話の間で僕が推察したところでは、あなたのよく出入りして知つてる家は、——そして立派な生活の標準と思つて御坐るのは、——醫者でなければ實業家らしい。僕は、然し、そんなのとは違つた別な方面で、今後、一層進んで、あなたの相談相手、あなたの補助者となれる地位を作つて見せます。それにしても、この地にゐる間は、また、かまひませんから、平氣で遊びに來て下さい。

けさ、馬場停車場でお別れした時にお約束した通り、今度の土曜日から日曜にかけて、また大阪へ出て、あなたの病院へ伺ひます。その時までには、これもお話した『英和警察會話』の原稿料が取れますから、そのうちからあなたの指輪代として、御約束通り貳拾圓を持つて行きます。

また、御不快には思はれましようが、この手紙に書き込んだ求婚者の藥屋のことも考へて置いて下さい。

兎に角、僕はお目にかかつてからの方が、お目にかからない時よりも一層痛切に世の中が悲觀されます。そして悲觀が一層痛切に僕の惰弱をむち打つやうになりました。

來たる土曜日までにおうちの人にお會ひでしたら、どうかよろしく云つて置いて下さい。

先は以上まで。

信より。

壓迫

田村俊子

一

山岡屋の女房が來てゐることも知つてゐるけれ共、お照はわざと出て行かなかつた。そうして痛いお腹を片手で押へて、額を炬燵蒲團に押し付けて突つ伏してゐたが、母親と話してゐる女房の聲がだん／＼癇高くなつてくると、お照は顏を上げて窓の方を見た。そこには日が射して竹の聯子が障子に映つてゐた。今朝そこへ引つかけて置いた、キハツで洗つた手柄の布れが二たつ並んで風に動いてゐるのが、端の方に映つてゐる。そこだけ薄赤く暈したやうに色がちら／＼と瞬いてゐるのをお照はぼんやりと眺めた。

「お照さん、お腹が痛いんだつて。」

山岡屋の女房が煙草入れを持つて入つて來た。お照は女房を見ると、不愛嬌

な顔をして默つて會釋したが、女房は和やかに笑つてゐた。

「ほんとに困るねえ。毎日々々彼方が惡いの、こつちが惡いのつて。私の方でも御主人に好い加減なことばかり云つてるやうで申譯がないからね。もうお前さん、話が定まつてから四日も延びてるよ。」

「すみませんけれど、全く身體の工合が惡るいもんですから。」

お照は女房の顔を見ないやうにして、俯向きながら云つた。女房は煙管に煙草を詰めると薄い炬燵蒲團を片手で上げて見たが、

「いやなんだね。炬燵に火がないぢやないか。」

と云つて又蒲團をおろした。—その煙管の雁首で炬燵の上を拍子を取るやうに叩きながら女房はしばらく考へてゐた。

「おつかさん。火を下さいな。」

お照も隣りの座敷に聲をかけておいて、後は默つて自分も考へ込んでゐた。

「お金が不足なの。」

女房が落着いた低い聲で聞いた。

「何か氣に入らないことがあるんだね。主人がいやなのかい。」

「然うでもありませんけれどね。」

お照がはつきりした返事もしない内に、母親のお近が十能に火を入れて持つて來た。肥太つた身體にお照の子の太郎を寐ん寐子で脊負つてゐた。色の白い可愛らしい顔を祖母の縮れた後れ毛の横から出し

て、ぽつちりと開いた眼で其邊を見廻してゐた。お照は太郎の方をぢつと見た。太郎は口の廻りを食べ物の滓で汚く眞つ黑にしてゐた。

「この子が可愛いくつて置いて行かれないんだね。」

女房は待ち兼ねたやうに十能の火から煙草を吸ひつけると、太郎の方を見上げながらお近に云つて笑つた。

「なあにお照が、子供なんど可愛いゝせきゝありやしないのさ。」

お近は火を入れてしまふと息を切りながら直ぐに立つて行つた。

「ほんとうにお照さんも、稼業をしてゐる内は赤ん兒だけは拵へない工夫をおしよ、お前さんのやうに又能く子供を拵へる人も珍らしいからね。何所の土地へ行つてもきつと一人づゝはお土産を拵へてくるんぢやないか。」

お照は默つて苦笑ひした。この二三日顏の手入れもしないので、その皮膚が黄色く濁つてゐる。脂肪の浮いた鼻の先きが丸くなつて、眉毛が荒く立つて、容貌は落ちて見えるけれ共、笑つた時に眼許が美しく冴えた。

「兎に角この話が氣に入らないなら氣に入らないと、はつきりと先方へ斷つてしまふかね。」

女房はふと自烈だして改まつて云ひ出した。鼻の高い緊まつた顏だけれ共、右の瞼に疵があつて、其れが女の顏を時々險相にさせた。女房は煙管も仕舞つて、煙管筒を帶の間に挿すと、お召の前垂の上を兩手でぱた〳〵と拂つた。

「別に氣に入らないつてこともないんですけれどね。」

お照は何うしても明確した口がきけなかつた。自分の氣に入らないのは北海道と云ふ土地なのだが、それも云ひ出せば女房から直ぐ極めつけられることが分つてゐるのでお照は云はずにゐた。この約束を流してしまふなら其れでも好いとお照は高を括りながら、矢つ張り俯向いて考へてゐた。

「ぢや、明日は行つて貰へるかしら。何しろ主人の方ぢや今日出立つつもりで、すつかり仕度がしてあるんだからね。明日は何んなにしても出立つて貰はないと困るよ。」

「えゝ。」

お照は返事をした儘で俯向いてゐた。

「ほんとうに明日は行かれるんだらうね。」

「えゝ。」

とぼんやりと續けて返事をしたが、ふと立ちかゝつた女房の顏を見ると、

「あんまり土地が離れてゐるんでねえ。」

とお照はうつかり靜な愚痴をこぼした。

「私もそんな事だらうと思つたのさ。――土地が離れてゐるつてお前さん、西洋へでも行きやしまいし。北海道ぐらゐが何んなに遠いんだね。まあ自分の年を考へてごらんよ。然う選り好みをしてゐた日にや何時まで經つたつて口なんぞはありやしないよ。いくら若く見えたつてもう九ぢやないか。來年は三十にならうつてんだからね。それに――」

と云ひかけて女房は自身の口をとめた。女房は幾度も子を生んで薄くなつたお照の髮のことを云はうと思つたのだが、つまらない事でお照の氣を惡るくしてもと氣が付いたのでやめた。お照の髮は地が薄くなつた上にひどい縮れ毛であつた。粧つてゐない時は、その髮のために自分の年よりも老けて見えた。

「えゝもう、そりや分つてゐますとも。」

お照は淋しく云つて默つてゐた。

「だからね。お前さんも辛抱おしなさいよ。今までの子供のやうに何時も先方で片を付けてくれゝばいゝけれ共、太郎ちやんのやうに此方で引取つて世話をしなくちやならない子供も出來るんだからね。お前さんだつて好い加減なところで見限りをつけて稼いで來なくつちや追つ付くまいぢやないか。」

お照は何となく涙のこぼれてくる樣な氣がしたが脣を嚙んで堪えてゐた。

「ぢやあ斯うしやうぢやないか。」

女房は中腰のまゝで、其の膝を動かしながら思ひ付いたやうに云つた。

「もう五十圓ばかりお金の方を殖やして貰ふやうに主人に話して見やう。お金が殖えればお前さんだつて張り合がつくだらう。何うだね。」

「借金ばかり殖やしてもね。」

お照は小さい口を緊めたまゝで女房に笑つて見せた。

「だつてお前さん、年を減らすつて譯にや行かないぢやないか。」

「えゝ。」

お照は少し面倒になつて來たので、もう其れぎりで女房とも口をきかないでゐた。不愛嬌に眉に皺を作つてお照は深い溜息をした。その顔を見ると女房もそれで立上つた。

「それぢや私に任せてお置き、兎に角明日は出立てるやうにして置いてくれなくちや困るよ。懐爐でも入れてお腹を溫つためたらいゝだらう。」

「ありがたう。」

女房は出て行つた。

「ほんとにお照の我が儘にも困つたもんだな。いろ／＼お世話さまでございますね。」

お近がわざと大きな聲で云つてるのが聞こえた。

二

一部の刺すやうな痛みが、腹部全體にとろんと染みひろがつて來たやうに思ふ頃は、腹部が倦るく力が拔けたやうになつて、お照はあたゝかい炬燵に凭れながらうと／＼した。太郎が自分の傍に來て肩や胸に取り縋るのを、煩さい／＼と思つてゐたが、其れは夢だつたと見えて、お照がはつきりと目を覺ました時には太郎の姿は自分の傍に見えなかつた。お照は寂しい思ひをしながら、

「太郎坊や。坊や。」

と呼んで見たが、それに應ずる母親の返事もなかつた。誰れも居ないと見えて隣りの座敷はひつそりとしてゐた。お照は急に太郎を戀ひしがりながら、炬燵から出て唐紙を開けて見ると、やはり其所には誰れの姿もなかつた。こわれた木馬や、大きな招ぎ猫がそこに轉がつてゐた。日の陰つたその暗い座敷を

靜いだ心持で見詰めてゐるお照の眼が、太郎が食べ散らした食パンの餡などを見付け出した時に、お照はふつと一時に逆上したやうに太郎の顏が見たくて堪らなくなつた。

「何所へおつかさんは連れて行つたんだらうねえ。」

お照はぢり／＼と獨り言を云ひながら格子をあけて外に出て見た。狹い路次の内には人通りもなかつた。何所の格子先きも暗くひつそりと閉まつて人の話聲も聞こえなかつた。西の出口の共同栓の水道の上に、高い西洋館の家根の方から落ちて來た赤黄いろい日が打つ衝かるやうに流れてゐた。薄着のお照は寒くなつて、直ぐに家内にはいつた。長火鉢の前で粘つた口で一服煙草を吸つてから臺所に立つて行つてお照は顏を洗つた。

其所へ賑やかに齒の下駄を鳴らして、誰れか格子を開けて入つて來た。

「誰れ？」

お照は顏を拭きながら聞いたけれ共、入つて來た人は默つてゐた。お照が急いで上つて來て覗いて見ると、其れは弟の音吉だつたのでお照はまた無言に台所へ引つ返して來て齒磨きの入れ物などを片付けたりした。

音吉は張子の大きな鉞を壁に立てかけてゐた。お照のメリンスの長襦袢の上に黑衣を一枚羽織つてそれをしつかりと黑い紐で結んでゐた。黑衣の下から小豆色の裾廻しがちら／＼とこぼれた。

「なに？　其れは。」

お照は其所に座ると鉞を見て弟に聞いた。

「關兵衛のまさかりよ。これから小屋へ持つて行くんだ。」

音吉は壁に立てかけておいて、鉞の先きに觸つて見たり、その恰好を遠くから眺めて見たりしてゐた。

「今親方んとこで拵へて來たばかりよ。」

「お前はまだそんな物を着てゐるんだね。昨日やつたお金は何うしたの。又取られちまつたんだね。」

「うん。取られちまつた。」

音吉は姉の向ふに廻つて胡座を組みながら火鉢に手を出した。

「寒くつて仕様がないが、今日ね、又少し貸してくれないか。」

「私のところにはもうお金なんかないよ。おつかさんに貰ふと好い。」

音吉は高い鼻の上の方にこまかい皺を寄せて、人善く默つて自分の指の先きを見詰めてゐたが、

「北海道の話はどうしたんだい。定まつたのかい。」

と姉の方は見ずに聞いた。

「どうだつていゝぢやないか。又、ひとから小使でも取らうと思つてゐるんだらう。當てにしてゐたつて駄目だよ。」

「小使つて云へば、おいらは今日思ひがけない人に小使を貰つたぜ。」

「誰れにさ。」

「太郎坊の親父さんによ。」

お照は其れを聞くとふと眞つ赤になつた。

「お前、逢つたの。」

「淺草橋のところで逢つた――何時つから來てるんだい。」

「何時からだつて好いぢやないか。あんまりお饒舌をしないでおくれ。おつかさんにも知らせないであるんだからね。」

音吉は懷中から蟇口を出して一圓紙幣を一枚出してお照に見せて笑つた。

「親父さんも困つてゐると見えら。あんまり好い風もしてゐなかつたぜ。今夜粕谷のお婆さんのところへ來てくれつて、言傳を頼まれたんだ。」

「そんな事をお前に頼んだの。」

「あゝ。」

音吉は何か食べるものはないかと言つて、台所の鼠入らずを探しに行つたが、そこで鰯の目差しを見付けると網と一所に火鉢のところに持つて來て燒き初めた。

お照は一人でぢつと考へこんでゐた。信三郎にはもう今日で五日も逢はなかつた。粕谷の家に行けば、いつでも信三郎を呼んで貰へるのだけれ共、お照はわざと粕谷の家にも行かないでゐた。それは信三郎にはもう逢はずにこれ限りで北海道へ行つてしまはうかとお照は考へてゐたからであつた。

その信三郎に不圖弟が逢つたと聞いてから、お照は無性に男がなつかしくなつた。自分に逢ひたいばかりに二た月も前から東京に出て來て、持つてゐた金も使ひ盡してしまひながら未だに貧しい姿で東京

にうろ〳〵してゐる男の心が、今更のやうにお照は堪らなく悲しく思ひやられてきた。

お照の胸がきり〳〵と痛んだ。お照はぐいと自分の胸を押へながら、さもしく目差しばかりを食べてゐる弟の方をうつとりと眺めてゐたが、やがて立上つて鏡臺を明るい方へ持ち出して來た。弟に湯呑みに湯を汲んで貰つて、お照は鏡臺に向つて顏を剃つた。

「おらが殿様、器用で發明……か。」

この頃こんな事を唄つてくる小供飴屋の歌の文句の眞似をしながら、お近が太郎を負ぶつて歸つて來た。

「お照、お腹はどうした。」

「もう好いよ。」

「そりや、よかつたな。」

お近の脊中から下ろされた太郎が、白いおしめを長く曳き摺りながら、お照の方へ這ひ寄つて行つた。ついその傍へ來て「わをう」と聲を出した時に、お照はふと剃刀の光きを突つかけて頰に疵を殘した。そこから血がにぢみ出て止まらなかつた。

「おつかさん。此所へよこしちや困るよ。」

お照は剃刀を置いて、袂から薄桃色のさくら紙を出して疵に當てながら、自分の脊中に捉つて立つた太郎に自分の身體を任せてゐた。

長い鏡の中に太郎の小さな蒼白い笑つた顏が寫つてゐた。太郎は其方を見ながら、物を叩くやうに左

の手を上げたり下げたりした。お照はその太郎に揺ぶられながら、太郎の顔を眺めて居た。

「さあ、こつちへ來なよ。」

お近が引つ浚ふやうに太郎の身體を抱いて行つてしまふと、鏡の中には頬の疵を紙でおさへてゐるお照の顔ばかりが殘つた。

「おめえは未だそんな姿をしてるのか。」

お近に云はれた音吉は、その言葉に從いて金を呉れと云つてお近に强請つた。

「おいらに金なんぞは一文錢半かけありやしないよ。――お照、少し音に貸してやつてお呉れよ。」

お照は鏡臺の抽斗から紙入れを出して、それを後ざまに音吉の方に投げてやつた。

「いくらでも、好いだけ持つて行きな。」

音吉が嬉しさうに笑つて紙入れからあるたけの紙幣を出して見た。五圓紙幣が一枚と一圓紙幣が四枚出た。音吉はその中から一圓紙幣を三枚拔いて、後を姉に返した。

「今夜こさ、出すから。」

「お前の着物だね。出すとも出さないとも勝手にお爲な。」

お照が鏡を向きながら云つた。音吉は鈙を大切さうに兩手で揩いで出て行つた。

顔を剃つてしまふとお照は湯に行く支度をしてゐた。

「太郎も長くお湯にはいらねえな。」

「まあ、今日は私はうるさいから。晩にでもおつかさんが連れてつてやつてお呉れ。」

お照は單衣と袷を重ねた寢衣の上に羽織を引つかけて外に出た。もう水色の夕暮が路次のうちにひろがつてゐた。六日の月が春の氣勢作つた匂ひに包まれながら、夕空の紅色雲の外れに光りを柔らげてゐた。

三

お照は湯歸りを、この頃にもなく頼りない思ひを抱きながら、灯のけば〲しい軒の低い商店の並んだ町を歩いてゐた。明日は又東京をはなれて、遠いところへ行かなければならないと思ふとお照は心が沈んだ。そうして、自分の歩いて行く一と足一と足にも、なつかしく自分の生れた土地と云ふ執着を心に搦ませながら、お照は思ひを重く下駄の歯に踏んで行つた。自分よりは年の若い丸髷の町の女房たちの姿を見ると、お照はその人たちの安らかな生涯が目に見えて今夜は意氣地なく羨しかつた。お照の眼には、誰れも一所定住の幸福に安心してるやうに思はれた。自分のやうに十五の年から借金から借金へと身體が流れ流れて行つて、とう〲北海道の果てまでもさまよつて行くやうな一生の定めのない不安な境涯にある人は、一人もこの嬉しそうな世間にはないやうな氣がした。お照は町の灯りの影から、世にも仕合せそうなその人々の顏を見守りながら通つて行つた。

何時どの土地へ出て行く時でも、今度のやうにお照の出澁つたことはなかつた。何うかすると、北海道と云ふ土地が自分の身體の土になる因縁を持つた土地のやうな考へが、ふと起つたりして、お照は今度に限つて東京を一人して離れて行くことが心細かつた。信州で稼いでゐた頃、自分よりは年下のおなじ抱妓が肺病になつて、土地の桂庵の家で身慘めな死にやうをしたことなどが、お照の記憶の奥からそ

の心の上に陰鬱な影を落してきたりした。その影の中にもう一とつぼんやりと同じやうな、お照自身の運命の豫示が映つてゐるやうに思はれた。お照は何と云ふこともなく今度の出先きに然うした不吉を身に感じて神經が亂れた。北へ出て行くことがお照は恐しく不安でたまらなかつた。

家ではお近が膳の前に座つて太郎に食べ物を養つてやつてゐた。仕事場から歸つて來た父親も褞袍を着込んで膳の前にゐた。レウマチが起つて左の肩から腕が痛むと云つて、桝吉は澁い顏をしてゐた。

「よく起るレウマチだあな。」

「よく起るつて、病ひなら仕方がねえや。」

「無理をして仕事になんぞ行かない方がいゝよお父つさん。そんな時に怪我でもするといけないよ。」

お照が二人の話を聞きつけて言葉をはさんだ。父親は默つて手盛りで食事をつゞけてゐた。骨ばかりの青白く突つ張つてる左の指先が、皮膚に病氣を起してるやうに自由が利かなく見えた。大きな茶腕が時々この手から滑り落ちそうになつた。

お照は膳の傍に鏡臺を引つ張つて來て、そこで又お化粧を初めた。長い髮に段を描いた毛癖がお照の細おもての顏を意氣に見せてゐた。眉毛を作るとそれでお照の顏ははつきりと艶麗に引き立つた。

今度の話の主人の方から受取つた半金も、元の主人の借金の方に入れてしまつて、まだ一枚の着物も預けたところから持つてくることが出來ないでゐた。お照はいつもの、ところ〲糸の拔けた古るいお召の一張羅に着代へて、その上に縞の米澤の羽織を引つかけてから、鏡臺を隅の方に片付けた。桝吉は膳をはなれて、火鉢の前で煙草を吸つてゐたが、お近はまだ太郎を相手に、こぼれた物を拾ひ〲自分

の食事を止めないでゐた。

「何所かへ出かけるのかい。」とお近が聞いた。

「籾谷のおつかさんのところへ行つてくるよ。」

「お前、あしたの支度は何うするんだい。又、行く端になつて騒いでもおつかさんは知らないぜ。」

「何うだつて好いよ。明日のことなんぞ。着て行くものだつてまだ持つてやしないんぢやないか。」

お照は燻んだコートを引つかけると、太郎の方には目もやらないで急いで外に出た。

電車通りへ出るまで、暗い裏町をお照はずん〳〵と歩いて行つた。お照はまだひどく腹が立つてゐて、心臓の血が沸えるやうに一時に熱くなつてゐた。手も足もぶる〳〵と戦えてゐるやうに、股のあたりの筋肉が痛く緊まつてきて歩き悩かつた。母親を怒鳴りつけた今の言葉の餘韻が、云ひ足りない憤りを含んだまゝでお照の胸の中にもや〳〵とこぐらかつてゐた。お照はぢり〳〵しながら力いつぱい歯を噛みしめた。

今出際に母親の云つた言葉がこんなにお照を怒らせてゐた。そうして自分の癇癪の中心に自分の身體がぶん廻はされるやうに、お照は眼がくらむほど赫々と逆上ていつたけれ共、やがてその怒つた情もお照の胸のなかから消えていつた。薄い月明りに河岸の柳の裸木を眺めた時には、お照は情なさが一ぱいに身に染みて、心がほろ〳〵と脆くなつてゐた。そうして天にも地にもたつた自分一人で、生きるとも死ぬともつかずうろ〳〵と遠い果てから果てをさまよひ歩いてゐる自分の姿を、お照は夢のやうに見詰めてゐた。

四

通りに出て、和泉橋から明るい大きな電車に乘ると、お照は入り口に腰をかけて電車の奥の方には顏を向けずにゐた。東京に生れて東京に育つてゐながら、お照は田舍から久し振りで都會のまんなかに出てくると、自分の十何年も田舍に染まつた服裝や姿が自分にもはつきりと分つて、却つて恥かしかつた。殊に都會仕出の派出やかな稼業人などに出つ會すと、お照は一層自分の風が省みられて身が縮んだ。それで電車に乘つても、お照は然う云ふ女たちに逢ふことを恐しがつて、いつも端の方に腰をかけて入り口にばかり顏を向けてゐた。稀に自分の顏や姿を見守るやうな人があれば、お照は直ぐに顏を赤くした。然う云ふ時お照は鋭い神經で、自分の田舍藝者染みた氣の利かない姿を自分の頭腦にはつきりと浮べてゐるのであつた。都會のまんなかを歩いてゐれば、自分は人々から始終嘲笑はれてゐるやうに思つてお照は氣が退けた。

福井町の柏谷の家では戸が閉まつてゐた。お照がそつと戸を叩くと、やがて寢衣を着たお菅が出て來て戸を開けた。

「こんなに遲く何うしたのだねえ。」

お菅は大きな光る眼をぎろつと廻して、お入りとも云はずに外に立つてゐるお照の姿を見下ろした。

「まだ早いんですよ。おつかさんも相變らず用心がいゝのね。」

お照は構はずに家内に入つて行つた。茶の間にはお菅の絹物の夜着がふく／＼と重なつて敷いてあつた。お照は長火鉢の前に坐つて、枕許に煙草盆などの揃へてあるのを眺めながら、年は老つてもお菅の

氣樂な獨り身の生活を思ひやつて、ふと羨しく思つた。

「ひとが寢ちまつてから、やつて來たりしていやだねこの人は。」

この頃お音が、ひどく不愛相になつた譯もお照は知つてゐるけれども、自分からは機嫌よく信三郎が來なかつたかと聞いて見た。

「さつき一寸來たけれども、お前さんが來るかなんだか分らないから私は斷つてやつたよ。」

お照は其れを聞くとがつかりした。一寸は物が云へなくなつて、力の失くなつた眼を火鉢の端に落して默つた。

「いつたいお前さんと何樣風になつてるんだか知らないけれ共、あんな身姿で出たり入つたりされちや私も迷惑だからね。」

お音は鐵瓶を下して、まだ少し埋けてあつた火をほぢりながら小さい炭を繼ぎ足しながらお照に云つた。

「あの人とはもう別れるつもりなんですからね。」

「どうせ別れるなら、もう逢はなくつても濟みさうなものぢやないか。」

お音は大きな高い鼻の小鼻を動かしながら、その鼻の穴をちつと擴げてお照を馬鹿にしたやうな顏で笑つた。そうして額の廣い大きな顏を火鉢の上に俯向けて、年老りの唇にしては赤過ぎるほど好い色を持つた乾いた唇を窄まして火を吹いた。お照はその小さな丸髷に恰好よく結つてるお音の頭髮を、一寸憎々しい眼で睨んだが、直ぐにその顏の色を直して袂から煙草入れを出した。

何時信三郎と此家で逢ふ時でも、相應なことは心付けてゐるのに、今更男の身姿のことなどを云ひ出したその心持が憎かつたけれども、然うかと云つてこの老婆に怒れもしなかつた。今夜も又、慾で老婆の心を釣つてやるより仕方がなかつた。

「私もね、明日は北海道の方へ行かなくつちやならないんですよ。」

「おや〳〵、大層遠くへ行くことになつたんだね。矢つ張り稼業でかい。」

お萱は顏を上げて、その大きなぎろつく眼をしほ〳〵と萎ませながらお照を見た。お照はうなづいてゐた。

「だから今夜は是非一度逢つて行きたいと思ふんですよ。いろ〳〵話もありますしね。」

「そりや然うだらうとも。」

お萱は何か考へながら、思ひ遣りのあるやうな事を口にした。

「惜しいことをしちやつた。もう少し早く來ればよござんしたね。」

「私だつて、そんな話を聞いてゐれば、さつきだつて待たして置いたんだけれどね。」

火がこまかく熾つて來て、小さな紫の焔をぽつ〳〵と上げてゐた。お萱は立つて其所にある半纏を引つかけた。

「北海道は何所だえ。」

「札幌ですからね。そんなに遠くはないんですよ。」

「まあ、思ひ切つて稼いでくるさ。」

お菅がしみ〲とした聲で云つたので、お照はふとほろりとした。お菅はそんな事に興味があるやうに、年期のことだの前借のことなどを一とつ〲委しくお照に聞いた。

「五年で三百五十圓？　他へ行つちやそんな好い價はないね。今度こさ何うにかして來なくつちや、お前さんもあんまり働きが無さ過ぎるよ。何所へ行つても男にばかり惚れてゐるやうなだらしの無いことぢや、ほんとうに終ひにや首でも縊らなくつちや追つ付かなくなるよ。」

お照は優しく笑つてゐた。笑つたまゝで何も云はなかつた。この伯母が――お菅はお近と腹違ひの姉妹だつた――最初はある宿場の女郎に賣られて行つたが、其の家の主人に取り入つて本妻を追ひ出し、その後に直つて其家の女主人になつてから、金をいたぶつて其家も出てしまひ、其れからも人の妾になつては金を取つたり、桂庵の口入れ婆あからその家を乘り取つて桂庵の女主人になつたりして、散々惡性な生涯を送つて來たことを、お照は胸に浮べてゐた。然う云ふ事をして貯めて來た金が今は二千圓ほどもあつた。この家も小さくともお菅の持つてる家であつた。今でも、この二階を媾曳の宿に貸して、その人たちから算用のない金をお菅は日々にむさぼつてゐた。

お照は一度、この人の養女になるつもりでこの家に來てゐたことがあつた。二百圓ほども殘つてゐた抱主の方の借金を、お菅が拂つてくれる約束で。お照が二十才の時、伯母の方に引取られたけれ共、お照は長くつゞかなかつた。實家の方では二千圓の遺産などを數へて樂しみながら、お照に無理往生をさせやうとしたけれ共、お照はこの吝嗇な口やかましい伯母の傍に居たゝまれなくなつて直きに此家を出てしまつた。朝に晩にお菅とお取膳で物を食べることさへお照にはだん〲癪にさわつていつた。毎日

丹念に格子を拭いて光らせたり、板の間を拭いて光らせたりするやうな仕事がお照には倦き〳〵した。自分をある人の妾にさせやうとして伯母が骨を折つてる頃に、それを好い口實に實家へ歸つてしまつて、お照は當分お菅の方へは顔を出さなかつたことがあつた。

「然う云ふことなら迎ひに行つて來て上げてもいゝがね。」

お菅が云ひながらお照の顔を見た。一度「おつかさん」と呼び習つてから、未だにお照からばかり「おつかさん」と呼ばれつけて見ると、さすがにお菅にも好い愛の感じがあつた。懶けものゝ父親や愚圖な母親や、やくざな弟を引受けて一人して苦勞してゐるお照を時には可哀想に思ふことなどもあつたが、男に甘いこの氣質がお菅にはやつぱり氣に入らなかつた。稼業をしながら赤ん兒ばかり生んでるのなどが、いかにもあのやくざな一家から生れて來ただらしのない女に思はれて、お菅はふつ〳〵お照を毛嫌ひすることもあつた。

今もお菅は、男に逢ひたがつてゐるお照の心持を輕く嘲けりながら、それでも例とは違つた、何か底深い思ひを持ちながらお菅はお照に聞いて見た。お照は直ぐにもその言葉に縋りたかつたが、お菅の心持がはかられないので返事はしないで少時考へてる風をして俯向いてゐた。

「何うするい。」

「ぢや、然うしていたゞきませうか。ほんとに濟みませんけれど。」

お菅は懐切さうに立上つて着物など着込みながら、

「お前さんも後生がわるいよ。老人を夜る夜中使ひになんぞ追ひ使つて。」

「ほんとに濟みません。その代りおつかさんに損はかけませんから。」
「損德の話ぢやないやね。どんな連中が二階に來たつて使ひになんぞ出たことはありやしない。何う云ふ因緣かお前さんには使はれるんだねえ。」
「そんな厭味を云はなくつても――!恩に被ますよ。」
お菅は下唇を突き出した儘微笑んでゐた。黑繻子の帶を締めて、柔らかい半纏を着直した上に、毛の厚いコートを着てお菅は直ぐに出て行つた。
「物騷だからね、戶締りをしておいて下さいよ。」
お菅はもう一度表から聲をかけて行つた。ぱつと開いたやうに、戶を明けた途端にはつきりと聞こえて來た前の家の歌澤の三味線が、戶を閉めると又遠くなつた。

五

すつかり熾した火を炭と一所に臺十能に入れて、其れを持つてお照は二階に上つて行つた。火を火鉢に入れると、炭が火の勢ひに驅られてぱち／＼と響きを立てゝ來た。お照はこの音に聞き入りながら、しばらく茫然と其所に腰を落着けてゐた。電氣が靜に六疊の奇麗な室を照らしてゐた。壁の掛花瓶に二本ばかり菜の花が插してあつた。その花が壁に薄い色を落して寂しい影を曳いてゐた。
お照はふと仇な浮いた心持がいつぱいになつて、その纖細なばら／＼とほつれそうな黃色い菜の花を眺めた。菜の花がそゝるやうな浮氣な色をしてゐた。その時お照の胸に誰れか初めての男に、精一ぱい逆上て惚れ込んで見たい氣が、切ないほど燃えてきて、お照はぢつとしてゐられなくなつた。やゝ長く

自分にも譯のわからないほど、烈しい情熱にお照は發作的に自分の胸を絞られて惱まされてゐた。お照はふらり／＼階下へおりて來ると、何所かに酒の殘つたのでもないかと思つて其方此方と探して見たが、酒の氣はどの瓶にも見付からなかつた。茶の間の茶簞笥をあけると、やつと其所に口のあいた、熨斗の貼つてある奇麗な白酒の瓶があつた。

「このお酒では仕樣がない。」

と思ひながら、お照は茶呑み茶椀に一杯注いで、後を舊の通りにしておいた。さらりとした水分の酒とは違つて、どろりと濁つた麹の口觸りをいや／＼一と口に飲み干すと、やがて何所かに重苦しい内にほんのりとした醉が發してきて、情熱に絞られた苦しい胸のなか〻崩れるやうに解けて來た。お照は火鉢の縁に頬杖を突いて、今しがた氣狂ひのやうに浮氣に躍つた自分の心のあとを眺めてゐたが、誰れにでも惚れて見たい思ひがまだ薄つすらと殘つてゐて、輕い亂れ心地が醉の中に流れてゐた。

お菅は直きに歸つて來た。此所からは三町とも離れてゐないところに、信三郎の知り人があつて、信三郎は其所に寢泊りをしてゐた。お菅は信三郎の事よりも、その家の汚いことや女房の突慳貪なことなどを、堪らなく心持を損なつて來たやうにお照に云ひ立てゝゐた。お菅はこれまでに三度ばかりその家に行つたけれども、行く度にその家の汚いことゝ小供の汚いことゝを、ふる／＼とした顏でお管は譏り散らした。

「今直ぐ來るとさ。」

お菅は斯う云つて、夜風に吹かれて赤くなつた鼻の先きを火の上に出した。お照はそれに散々禮を云

つてから、これから自分だちの食べる物などを誂へに出かけて行つた。表の鳥屋で親子丼を頼んで、正宗の四合入りの瓶を提げて陽氣な心持で歸つて來た時には、信三郎の下駄が土間に脱いであつた。お菅はもう床の中に入つてゐた。

「おつかさん、誂へて來たものがあるんですよ。」

「私はまあ澤山だよ。お前さんたちは何うせお宿りだらう。」

「どうぞ、一と晩御厄介に。」

お照は初心に極り惡るく返事をしながら、盆の上に猪口などを載せて、片手に鐵瓶をさげて二階に上つて行つた。信三郎は火鉢の前に凡帳面に坐つてお照の來るのを待つてゐた。

「何うしたね。」

お照が默つて其所に坐つたのを見ると、信三郎はおとなしく聲をかけた。男は色の白い頰の肉のだら〳〵とした優しい顔をしてゐた。もう直き四十になるやうな年でゐて、お照とはさして年の違ひもないほどに若々しく見えた。手頸にまつはるやうな袖を長く出した襯衣を着て、薄汚れた銘仙の綿入れの上に、糸の入つた薄つぺらな羽織を着てゐる姿は、どこかに大家の主人らしい上品さがその人を作つてゐるだけに一層見窄らしく見えた。信三郎は袂から敷島の袋を出して、其れをお照の方に押しやりながら自分は一本を抜きだして火をつけた。

「煩さく迎ひが來たりするから、私もいつまでも斯うしてもゐられないし、二三日内に歸らうかと思つてゐるよ。」

お照はさつきからたゞ默つて火鉢に手をかざしてゐた。信三郎の顔を見た時から、お照はまるでヒステリツカルに一途に陰欝になつて、物云ふことも憶劫でたまらなかつた。お照は急に欝ぎ切つたその氣分から拔け出すことが出來なかつた。自分の身體の周圍に浮氣な色や華やかなまぼろしがまた飛び散つてゐるやうに、どこか自分の頭上が明るいやうな氣がしてゐながら、自分は奈落にでも引つ張り込まれるやうに、陰欝な暗い心持の底にだん／＼と落ちていつた。お照の欝いだ俯向いた横顔に灯が明るく射してゐた。お照はその灯を避けるやうに顔を背向けると、最前の菜の花に眞つ正面に眼が向いた。お照は唯何の氣もなく欝陶しく壁の方を見据へてゐた。

「身體でも惡るかつたかね。」

と、おつとりした張りのない聲で信三郎が聞いた。

お照が三年前に水戸に行つた時に、そこで馴染んだのが信三郎であつた。その家は町でも古るい大きな葉茶屋であつたが、養子の信三郎が長い間の道樂で、その家產も大方は失くなりかけてゐた。そこへ引つかゝつたのがお照であつた。信三郎にお照の方で注ぎ込むやうになつてから、二人の間には子供まで出來た。その子を母親の手によこしておいてから、お照はまだ一年近くもその土地で稼いでゐたが、男とは何うしても別れなくてはならないとあきらめて、土地を變へるつもりでお照は一旦東京へ歸つて來た。何うしても男と別れなくてはならないと云ふ事は、二人の間に自然と定まつた事情なのであつた。男には妻も子もあつた。男とはどんなにしても別れてしまはなくてはならない悲しい義務がお照にあつた。其れがよく解つてゐてお照は疾うからあきらめてゐた。男の方でもお照との最後の別れは覺悟

してゐた。

あきらめては居ても、斯うして絶えず信三郎に逢つてゐれば、お照にはやつぱり男が忘れられなかつた。自分を思ひ切ることができないで、後からつゞいて追つかけて來た男の情誼にも一層お照は惹かされてゐた。自分が遠くへ行くについても、お照は未練に男のことが心にかゝつてゐた。

お照はそんな事などを思ひ繰りながら、氣を代へて德利に酒をうつして其れを燗したりした。白酒の重い醉が消えないでお照は頭痛がしてきた。

信三郎はお照が默り込んでゐるので、自分も默つて煙草をふかしてゐた。ひどくお照の機嫌が惡るいと信三郎は思つた。自分が下手に口をきくほど女の心を損ねるのではないかと考へて、太郎のことも聞かないでゐた。そうして額に落ちかゝつてくる毛を、片手で撫で上げては俯向いて煙草に火をつけてゐた。

まるで東京の光りを恐れてゐるやうに、何時もおど〳〵と戰えてゐる信三郎の色の白い顏の筋肉を、お照はやつと眼を上げてその時にしみ〴〵と眺めた。できた燗から、飲めない信三郎にも一と口注いでおいて、自分は手酌で二三杯のんだ。其れで幾分か思つたやうな醉が出てくると、お照の身内にも心にも踏み應へのつく力が擴がつてきて、お照は氣分がはつきりとした。

「そんなにちよい〳〵迎ひが來るの。」

お照はまだ一人で飲みつゞけながら、初めて男に物を云つた。さつき男から然う云ふ言葉を聞いた時、お照は靜に聞き流してゐたが、今自分でそれを繰り返さうと思つた時には、いやな嫉妬を感じてゐ

た。

「何時（いつ）歸るの。」

「何時つて、まだ定（き）めてはゐないけれども、歸らない譯にも行かず。」

「ぢやあ歸つたらいゝぢやありませんか。私はもう疾つくにあなたは歸つたんだらうと思つてゐた。」

お照は北海道の話が定まつたら、信三郎の身姿（みなり）も當坐の小使錢（こづかひ）も拵へて歸すつもりでゐた。これ限り自分は逢はないまでも、金だけは信三郎の手に屆けてやるつもりに考へてゐたのだけれ共、お照はそんな事は今更男に云ふ氣もしなくなつた。信三郎は默（だま）つてゐた。

誂へたものが來たと見えて、階下ではお菅の聲がして、戸を開ける音などがかた〳〵と聞こえた。お照はそれを聞き付けると立つて行つた。

六

「お前さんには家もあるし、おかみさんもあるし、可愛いゝ子供もあるし――」

幾度も斯うして同（おな）じことを執拗（しつこ）く云つてゐた時にはお照は大分醉つてゐた。一閑張りの小さい卓子の上に肱を突いて、顳顬を押へたお照の腕に、色の冴えない古るぼけた緋縮緬の袖がまつはつて、着物の袖口の中からだらゝと垂れてゐた。

「家があると云つたつて他人（ひと）の家見たいなのだ。仕様があるもんぢやない。」

「それでも家へ歸れば立派な一軒の御主人さまで、おかみさんには大事にされるし。」

「大事にするも何もない。愛想を盡かしてるんぢやないか。」

「おかみさんがですか。」

信三郎は默つて、猪口に半分ほど殘つてゐた冷めたい酒を飲んだ。舌に染みる苦い味を上顎で押へたので、少し反つ齒の口許に皺が寄つて、おつとりした頬に一層人の好さそうな哀れつぽい陰ができた。

「愛想を盡かしてる人が、煩いほど迎ひなんぞをよこしますか。この間おかみさんが自分で迎ひに出てきたことも私は聞いて知つてますよ。やつぱりお前さんが大事だからさ。」

「それなら其れでいゝぢやないか。」

信三郎は不興らしく云つたが、火鉢に翳した兩手の先きがわな／＼と震へてゐた。

二人は少時默つてゐた。四邊が森閑として階下ではお菅の咳き入つてる聲が手に取るやうに聞こえた。時間が來たと見えて電氣の光りが今までよりはぼつと薄暗くなつてゐた。

と、お照の眼からしどろに涙が流れてきた。きつい悲哀に胸を締められて自然と嗚咽の聲が咽喉から幽に漏れてくるのを、お照は齒を嚙んでこらへてゐた。そうして顳顬を押へてゐた掌をひろげて、それで額をかざしながら涙を男の方に見せないやうにした。

信三郎は今逢つた時から女が自分に不貞てゐるやうに思はれて、その女の心持が憎かつた。家から迎ひは來ても信三郎はその姿では歸れもしなかつたので、お照に逢つたらいくらの事でも賴んで見やうと考へてゐたことも、思ひ返して今夜は云ひ出さずに止した。この上女に馬鹿にされたくはないやうな氣がしたのであつた。

この頃になつてお照が自分に逢ふことを避けてばかりゐたこと、折好く逢つた音吉に言傳てを賴まな

ければ今夜もお照には逢へないに違ひなかつたこと、母親のお近や此家のお菅などに突つ突かれて、お照自身も自分から離れやうとしてゐるに違ひないことなどを、信三郎は女々しく恨みに思ひながら、その癖何も云ひ出し得ずに、その儘自分は歸らうとした。女の方から飽きられたことに、信三郎は淡い憤りと愚かしい耻ぢとを感じながら、それでも、女の冷めたい心持が今更はつきりと解つたので、これで心殘りなく女と別れて了ふことが出來ると思つた。信三郎は人知れず自分の怒りを鎭めながら、

「それぢや私はこれで歸らう。」

と靜に自分の持ち物などを取り上げた。

「これでもう一生、お前さんにゃ逢ふ時はないでせうよ。」

「そんな事もあるまい――お前にもさんざん迷惑をかけたり厄介になつたりしたが、太郎のことだけは決してこの儘に打つ捨つてはおかないつもりだから。」

「子供のことなんぞ、どんな事があつたつてお前さんがたのお世話にはならないつもりでゐますよ。」

卓子の上にお照の涙がぽた〳〵と落ちた。堪らなくなつて、お照は袖で顔をおさへてゐたがやがて共れを放すと、身體を起して敷島を一本吸ひつけた。煙草の煙りといつしよにお照は長い間涙を呑みこみ呑みこみした。

男と別れるのが悲しいのでもなかつた。男との戀の終りが悲しいのでもなかつた。男との昔のおもしろかつた逢瀬の追憶が、今更悲しい目を見せると云ふのでもなかつた。お照は唯漠然と自分の生の悲哀を感じて、それがたまらなく悲しくなつてきたのであつた。この瞬間に身を投げてとも死んでしまひ度

いやうにお照は一途な悲しみに沈んで、嗚咽に咽いでゐた。悲しみは悲しみを誘つて涙の止め度がなかつた。吸ひかけた煙草を又灰の中に抛り込むと、お照は拭ひきれない涙に前垂を當てゝ何時までも卓子に肱を突いてゐた。

信三郎は唯ぼんやりとしてゐた。女の涙の意味は分らなかつたけれども、別れやうとする際に突然女が涙に暮れたのについ心を惹かれた。そうして、この女が自分一人の爲にあらゆる苦勞をするやうな母に返つた哀れな思ひを抱きながら、信三郎はぼんやりと女の嗚咽の音を聞いてゐた。

斯うした儘では、お照はいくら泣いても泣き足りなかつた。自分を精一ぱい悲しんだ思ひが、やがて又、自分の前に見窄らしく坐つてゐる男一人を夢中に戀ひしく思ふ情に移つていつた。お照は涙の胸に苛らいらしく火のやうな戀慕の情で信三郎を思ひ詰めた。いつまでも、何所までも、どんな事があつても信三郎とは離れられるものではないと思つた。お照は又一途に男が戀ひしくなつた。

泣き足りない涙を拭きながら、お照は默つて其所の押入から夜着を引き出した。

七

翌る日は十二時を過ぎても二人はまだ寐てゐた。朝から二月の寒い雨が降つてゐて、雨戸の外にしめ〳〵と雨を吹いてゆく風の音が時々障子にかたりと鳴つた。

一時を過ぎても二時になつても起きずにゐる二階の人を、お菅はやがて起しに來た。

「照ちやん。」

お菅は障子をほと〳〵と爪で叩いてお照を呼んだ。お照は直ぐに返事をして起きてきた。障子をあけ

て長襦袢一枚で正體もなく寒さうに立つたお照の顏は、眞つ蒼で眼のふちがむくんでゐた。袖を口に當てながらお照は極り惡るさうに微笑みながらお菅の顏を見た。

「今日はお前さん。彼方へ旅立ちする日ぢやないのかい。あんまり其れが氣になるから。私の方は構はないけれども。」

「えゝ。一日ぐらゐ遲れたつてねえ。それにお天氣もこんなだし。」

「それなら好いがね。家から誰れも來るやうなことはあるまいね。」

「えゝ、誰れも來ないだらうと思ふんですけれど。」

「ぢやまあ、悠つくりおしなさい。寐てばかりゐてよくお腹が空かないもんだね。」

お菅は嘲笑ひながら下りて行かうとした。お照はそれを呼び止めて、奥から紙入れを持つて來たが、中には紙幣が二枚だけしきや入つてゐなかつた。それを數へてゐる内に昨日弟が幾枚か拔き出したことを思ひ浮べながら、お照は五圓の紙幣をお菅に渡した。それで何か食べるものなどを賴んで、お照は室内に入つてくると、襦袢の上に着物を引つかけて、足の裏の脂肪に粘つく壁の音を殘しながら、又外に出て階下になりて行つた。

台所の傍の便所に入つて、そこの小窓から覗くと、雨は暴れを含んでやゝ烈しく降つてゐるのが見えた。歸りに台所でざつと顏を洗つて茶の間を通つてくると、煙管掃除をしてゐたお菅が、

「まあ此所へお坐り。」

と呼びとめた。

「この降りぢや外へも出られないから、今朝私の分に少し取つておいたお刺しがあるからね。御飯はそれでざつと濟ましてお置き。」

「えゝ。何でも構ひません。」

お照は序に台十に火を貰つた。

「いゝ加減にして、いつたんお歸りよ。」

お菅の斯う云つた言葉にお照は生返事をして二階に戻つてきた。

信三郎は床の中に腹這ひになつて煙草を吸つてゐたが、お照が上つて來ると思ひ切つて自分も階下へ降りて行つた。茶の間を通る時にお菅の顔を見るのが信三郎には氣が咎めて、ぐづぐづと考へてゐたのだけれ共、顔を合はせて見ると、お菅は割りに愛想の好い會釋をした。用を濟ましてから、歸りに二た言三言今日の挨拶をして信三郎は二階に上つてくると、自分は直ぐに床の中に入つた。

二人は今朝夜が明けるまでも眠らなかつた。お照は夜徹し、自分の浴びるやうな涙と、男の滑らかな唇を其頰に感じながら、譫言のやうに情熱の言葉を云ひつゞけてゐた。北海道へ行くやうになつたことも、その時初めて信三郎に話した。お照はしみじみとその話に悲しんだり、男にも悲しまれたりしながら、僅の一寸した男の愛着の言葉にもお照は身體中を戰はして、情熱の狂亂のやうな夜を明かした。男も女も、今起きて見ると病人のやうに身體が氣倦く氣重かつた。

お照は兩方の二の腕ががつかりと痛み疲れてゐた。口の中が荒れてひきつれてゐた。お照は火鉢に火をおこしながら、自分の身體まで鬱陶しく思ふやうな病み疲れた心持で、昨夜の夢を繰り返してゐた。

「お照。」

その時、信三郎が呼んでると思つたが、お照は直ぐに返事をすることが億劫で默つてゐた。信三郎はつゞけてお照を呼んだ。

「なに。」

「いつまで此家にゐる譯にもゆくまいな。何うだらう。」

「構やしませんよ。」

お照は自分の刻みを吸ひつけて、それを信三郎に持つて行つてやつた。

自分の傍へ來たお照を見ると、信三郎は低い聲で切迫詰つた二人の上を相談し初めた。信三郎はお照の決心さへつけば、自分はどんな手段をしても最後に有るだけのものを養家の方からひき出してくる覺悟をしてゐた。さうして一時でもお照と一所になつて、何所かへ隱れて住まうと信三郎は堅く思ひめぐらした。

其れを聞くとお照は昨夜男が、二人ぎりで何所かへ逃げて行かうと云つたことを物憂く思ひ出したが、今はそれを考へ／＼見ることも、お照は面倒で悩ましかつた。重い頭を垂れて何か考へを辿らうとすると、心がぼうとなつて、額の上が暗くなつてくるやうな氣がした。

「そんな話はあとにしませうよ。」

「けれどもお前、今日に押し詰まつてることぢやないか。」

「今日いちんち位、どうにだつてなりまさあね。」

お照はふと家のことを思ひ浮べた。昨夜自分が歸らなかつたので母親のお近が一人してやきもきと氣をもんでるだらうと思ひやつた。

「私にはあゝ云ふ意久地なしの親父やおふくろがあるんですからねえ。自分の身體のやうでゐて、私の身體はまるで親の身體なんだから。」

自分が居なくなれば、あの父親や母親が直ぐにも食べることに困るだらうとお照は思つた。何所の果てへ行つても、自分が稼いでさへゐれば、親たちを困らせるやうな事はなくつて濟むけれ共、自分が男と一所に長く隱れてしまへば、親だちを抛つておかなければならなかつた。お照にはそれが思ひ切り兼ねた。どんな土地に行つてゐても、どんなに一人の男に憂身をやつしてゐる時でも、お照は親の無心を捨てゝおいたことは一度もなかつた。何所へ行つてゐても、その親たちの不憫な影がお照の胸からはなれたことがなかつた。お照はふとその考へに深く落ちた。

「お前さんもお腹が空いたでせう。」

お照はふらつく足を踏んで階下へおりて行つた。お菅に云ひ譯をしながら、膳拵へをしてそれを幾度にも二階に運んで行つた。殘つてゐる酒を少し燗けてお照はそれを飲んで見たが醉ひが出なかつた。食べる物の味が二人ともまづかつた。

お照は箸を取りながら、いつとなく、最前の考へのつゞきを辿つてゐた。信三郎と一時は人にかくれて一所になつても、自分たちが直ぐにその日の生計にも差支へるやうになるのは知れてゐた。意久地のない信三郎の前途は今から見えるやうであつた。いよ〳〵どん詰りになつてから、自分が又稼ぎにでも

出なくてはならないやうになる事もお照にはわかつてゐた。その時になつて二人が身慘めな緣切りをする姿も思ひやられた。

男とは一と口も物も云はずに食事をすますと、お照は一服してから、又汚れたものを片付けに下りて行つた、外はもう日が暮れかゝつて、暴れを含んだ雨がまだ續いでゐた。持つて來たものを奇麗に始末をして茶の間に入つて見ると、柱の大きな時計の針が、五時十分のところを指してゐるのがお照の目に付いた。電氣が明るく點いてゐた。

八

兎に角今夜は一旦別れるつもりで、あの時から又床に入つてとろりとした。階下では男の客があつたやうであつたが、お照がおどろいて目を覺ました時には、階下には人聲もなかつたし、もう何時となく夜が更けて行くやうに近所が森としてゐた。

お照はぼんやりした顏で下に降りて來た。時計を見ると、もう十一時を過ぎてゐた、茶の間には昨夜のやうにお菅の寐蒲團がふく／＼と敷いてあつて、中には炬燵も入つてゐた。昨夜は氣が付かなかつたが、元祿時代の遊女が双六を弄んでゐる美しい繪の二枚折がその枕許を圍つてゐた。お菅は書付けを二三枚膝の上に置いて、計算をやつてゐた。お菅はぽつ／＼と高い金を人に貸し付けてゐるので、人から利息などを持つてこられると、斯うして迂遠な勘定に氣を取られて時間を過ごした。

「十一時過ぎだつて？」

お菅もおどろいて時計を見た。

「すつかり遲くなつちやつて。」

「ほんとに困るねえ。だがもう歸るんだらう。雨もやんだよ。」

「歸るつたつて今からおつかさん。道も惡るいし、御迷惑でももう一と晩御厄介にならせて下さいな。」

お菅は蒼い顏をしてゐるお照を見詰めながら、

「そりやお前さんの身體だから私は構やしないが、ほんとにお前さんにも呆れたもんだね。そんなにあの男に惚れ込んで何うするんだい。つまらない所に引つかゝつてゐないで、さつさと定めた土地へ思ひ切りよく出て行つたら宜さそうなもんだね。あの男だつて然うぢやないか。百のことも出來もしないで何時まで未練らしくお前さんの身體にくつゝいてるんだらう。」

「どうせ別れるんですから。」

「どうせ別れるんならさ。新奇の主人にだつて然う迷惑をかけない算段をして一日も早く彼方へ行つたら好いぢやないか。話は定めておきながら、延ばされてゐちや主人だつて氣を惡るくすらね。今夜宿るもいゝけれど、明日になると又歸れやしないよ。私だつて迷惑だね。」

お菅に何と云はれても、お照は斯うしてる間も男に未練が出てきて今直ぐと云つて別れる氣がしなかつた。

「明日はきつと歸りますよ。私だつてそれほど鈍くなつてる譯ぢやありませんよ。おつかさんが云ふやうにさ。」

「隨分のろくなつてるやうだね。其れがお前さんの病ひなんだから仕樣がない。私は若い時からそんな

事は嫌ひだつたから。」

入れ齒を揃へて、眞つ黑に鐵漿をつけてゐる艶の好い齒をちらと見せてお菅は笑つた。

「だから年を老つてから樂をするんでせう。おつかさんの身支度を見てゐると、ほんとに良いところの御隱居さん見たいぢやありませんか。お金はあるし、家はあるし、おつかさんも氣樂なもんねえ。」

「若い時の心がけ一とつだよ。」

「ほんとにねえ。」

お照は漸くもう一と晩の宿を賴んで、安心して二階に行つた。

「明日はきつと早くお歸りよ。」

お菅は二階へ聞こえるやうな聲で云つた。

「えゝ、起きると直ぐ――」

お照も梯子段の中途から元氣の好い聲で返事した。

お照は今しがたの一と寢入りで、氣が爽やかになつて晴れ〴〵としてゐた。薄いショールを頸に卷いて烟草を買ひに出たが、やがて壽司など持つてお照は歸つて來た。お照はそれをお菅にも分けて、自分も其所で二たつ三つ摘んでから、殘りを信三郎のところへ持つて行つた。

斯うして二人が靜に落着いて、明るい灯りの下で今夜の時間を樂しんでゐると、お照は又ふつつり北海道なぞへ行くことは厭だと思ひこんだ。土地は何うでも、今までの稼業をつゞける事が思つても厭はしくなつた。

「私はいつだつて好きで藝者をしてゐたことがない。」

お照がいつも誰れにでも云ふやうに、この厭な藝者稼業の中に又何年と身體を縛られに行くことを思ふと、お照は辛かつた。

「北海道へは行きたくない。」

お照はつく〴〵と身をふるはす様に獨り言を云つた。

「その話なら、行かないことに極めてしまへと云つてるのに。」

「主人から半金受取つたんですからね、それだけ返せば約束を流したつてかまはないんだけれど。」

「だから私が拵へると云つてるのに。」

信三郎は養家の家を抵當に入れることも考へてゐた。四五日經てばそれで二三百の金は出來るに違ひなかつた。

「何うにかして二三日かくれて辛抱してゐる間には私は拵へてくるつもりだから。」

然う云はれると後は何うなつても、一時その金で今の境遇を逃れて見やうかと云ふ氣にもなつてお照は迷つた。だがその前途は知れてゐた。前途のことを思ふと平氣な心持で男に縋ることもできなかつたが、

「よく考へてはつきりと心を決めてごらん。私には兎に角それだけの成算はあるのだから。」

と信三郎が賴母しく、男らしい様子で云つたのを見て、お照は心から嬉しさを覺えた。

そうしてその金で今度の話を救つて貰ふことにすると、お照は重荷が下りたやうに胸が安らかになつ

た。一度腹を定めた信三郎はおなじやうに心が活き〱としてきてすべてが伸びやかになつた。明日は早くその儘で國へ歸ることや、その間お照は、一度出たことのある小田原の知り人のところに隱れてゐることなどを二人は相談した。夜が明けたらお照も此家から小田原へ眞ッ直ぐに行かうと考へてゐた。金のないことに氣が付いたが、其れは持つてゐる小さい指輪を中途で何うにでもして行かうとお照は思つた。

床へ入つても二人は面白く昔の話をした。お照は時々小さく笑つた。二人が馴染み初めた頃は、信三郎にはまだ關係の絕れない女が居た。その女が他に男を持つたことをお照は探り出すと、信三郎の前にわざ〱その女を呼び出して、お照が素ッ破ぬいて女を泣かした事などがあつた。その時信三郎は、お照が一と目見て惚れ込むやうな好いた姿をして居た。お照はそんな幻を描いてゐた。そうしてお互に一日でも顏を見ないでは濟まされないやうになつた頃は暑い盛りであつた。その翌る年の秋の末に太郎が生れた。狹い町で然う云ふうるさい浮名のひろがつた中を、お照は何うやら腕一とつで稼ぎ通した。

信三郎が寐入つてからも、お照は一人で目が冴えて眠られなかつた。そうして今夜に限つて自分の生んだ子供たちを淋しくお照は思ひ浮べてゐた。一番最初に生んだ子は女の子であつた。自分の年が十九、男は二十才であつた。その子は男の親の方に引取られてから三才で亡くなつた。亡くなるまでまだその土地にゐて、お照はその子の墓參りをしてやつた。それに琴江と云ふ名がついてゐた。

その次ぎの子も女の子であつた。その相手の男にも妻も子もあつて、二人はやがて別れてしまつた。その子は男の方に引取られてその家で育てられてゐた。その男と別れた當座、産後のお照は長い煩ひを

した。お照には何時までもその男が忘れられなかつた。

二十四の時に生んだその子はもう六才になつてゐる。お君とつけた名を取り代へたと聞いたばかりで、何と云ふ名がついてゐるのかお照は知らなかつた。信州の山の中に無事に育つてゐるその子の事などを、お照はそゞろに懐しく思ひ忍んでゐると、ふと太郎の顔が見えた。

九

曉方から眠りついたと思ふ暇もなくお照は信三郎に起された。その時に階下から調子高に物を云つてゐるお近の聲が聞こえた。

「おつかさんが來てるんぢやありませんか。」

信三郎は其所に起上つてお照の顔を見ながら默つてうなづいてゐた。お照は周章て起きた。そうして、母親が此所へ上つて來ない内にと思つて急いで仕度を濟ますと階下へ降りて行つた。

「お照。お前にも呆れたもんだな。」

お近は太郎を脊負つた儘で坐つてゐた。お照を見ると顔を顰めながら低い調子でお近は云つた。

「山岡屋のおかみさんは昨夜一時過ぎまでお前を待つてゐたんだよ。まさか昨夜は歸つてくるだらうと思つてゐるのに。」

お菅は口を出さずに、火鉢の前で應揚らしく長煙管を取り上げてゐた。東の窓に朝日が眩ぶしくいつぱいに射してゐた。お照はその光りに眼を向けてゐられなかつた。

「今朝もおかみさんはもう家に來て待つてゐるんだよ。おかみさんにも氣の毒だあな。」

「直ぐ歸るよ。」と足先きへ行つておくれ。」
お照は立つた儘で考へながら云つた。
「直ぐと云つたつて駄目だよ。おつかさんと一所に歸んな。」と足先きも後もあるもんぢやないさ。」
お近は然う云つて動かなかつた。お照は默つて二階に引つ返して行つた。着物を着代へた信三郎が心配らしい顏をして其所に坐つてゐるのを見ると、
「あの通りおつかさんかやかましいから、一寸家へ行つて來ますがね。もう一度何うかして今日中に逢ひたいものだけれど。」
二人は少時考へてから、夜の六時頃に淺草橋で待ち合せて逢ふ約束をした。お照は信三郎を殘しておいて下に來た。
「あつちに行つたら身體を大切にして能くお稼ぎよ。」
お菅は歸る時一と言お照に云つたぎりだつた。お照は禮を云ふのも間の惡るい氣がしてお近と連れ立つて外に出た。
「太郎の親父さんだつて云ふぢやないか。」
五六間歩いて來てからお近が云つた。お菅が話したのだなとお照は思つたが、お照は返事もしないでゐた。空が眞つ蒼に晴れてゐた。日がちかちかと地上に光りの波を描いてゐた。
「困つた人たちだな。」
お近がのろく歩きながら呟いてゐた。お照は電車に乘つてから、お近の脊中の太郎をあやし詰めにあ

やして歸つて來た。

家の傍へ來ると、山岡屋の女房が門に出て、表の方を眺めてゐた。路次を入つて來た二人を見付けると、女房は笑ひながら先きに家内に入つて行つた。レウマチが一層募つて、仕事を休んで寐てゐた桝吉は、二人が歸つたと聞くと起きて來て火鉢の前に坐つた。

「やつぱり粕谷の家にゐたのよ。」お近が調子高な聲を出すと、

「そりや好かつた。」と桝吉が云つた。

「何しろ髪を結はなくちやいけないね。」とお照の後姿を眺めながら女房は云つただけであつた。女房は怒つた色も見せなかつた。やがてその家を聞いて自分で髪結を迎ひに出て行つた。

お照は誰れにも構はずに日當りの好い奥の坐敷へ入つて蒲團にくるまると、二日の寐不足と疲勞が出てお照はもう身體も動かせなかつた。太郎が何時の間にか室内に這つて來たのを、お照は引寄せてしつかりと抱き締めながら、いつそ斷念めて北海道へ行つて了はうか。それとも隙があつたら小田原へ身を隠さうかと、夢現のやうに思ひ煩つてゐる内に、針で刺されるやうな落着かない眠りにその儘落ちてしまつた。

髪結が來たと云つてお近に呼ばれた時は十二時を過ぎてゐた。お照はくら／＼する頭を押へながら、漸くお近が出して呉れた鏡臺の前に坐つて彼方を見ると、山岡屋の女房が其所に居て笑つてゐた。

「お照さんは大分お疲れだと見えるね。」

女房は袂から、根掛けの入つた袋を抛つてよこした。中から松葉色の細物が出た。女房は髪結に潰しに結ふやうに云ひ付けてゐた。お照はそんな髪にはしたくないと云つて爭つたけれ共女房はきかなかつた。

ず〳〵歩いて來た。お照は信三郎の泊つてゐると云ふ親戚とかの家へも行き兼ねて迷つた。信三郎に堅く禁められてまだ一度もお照は其家へ顏を出したことがなかつた。

其邊にゐる車夫にでも賴んで、信三郎を呼び出して貰ふことに定めて、急いでお照は再び橋を渡り返して來た。暗い廣い道路を突つ切つて、灯のこまかな人道の方に移つて行かうとして横斜に歩みを早くしてくると先方も橋の方へ横斜に道路を突つ切つて來た男とお照は摺れ違つた。男は長く外套を被てゐた。その人は足をとめて振り返りながら、

「おや。小照。」と云つた。

小照、と云つた聲が耳にはいつてお照は立止つたが、お照にはその人が誰れだか思ひ出せなかつた。

「東京に來てゐるの。」男の顏に眼鏡が光つてゐた。能く見ると共れは藤枝と云ふ男であつた。小田原に居た頃、東京から始終遊びに來た人で、お照は能くこの人に呼ばれた。

「まあ。しばらく。」

お照が傍に寄つて、懷かしさうな挨拶をすると、男のきりつと緊まつた美しい顏に笑ひが溢れた。

藤枝は、お照が東京にゐる仔細を尋ねながら、お照と連れ立つて二三歩お照の行く方へ引つ返して來た。お照は身體が惡るくて、養生に親のところへ歸つてゐるのだと男に體よく告げた。小田原にゐた頃からお照の身體の弱いことを知つてゐた藤枝には、それが眞實らしく聞こえて女を氣の毒に思つた。

お照は藤枝に伴いてぶら〳〵と歩いた。藤枝は今でも小田原の親類へ時々出かけて行くと、その度に昔馴染の妓たちを呼んで遊ぶ話などをした。お照のゐた新菊の家には、その頃一所だつた妓たちが誰れ

も變らずに今も其所で稼いでる話を聞いて、お照は他人ばかりは變らない世の中だと思つた。自分が隱れてゐやうと思つた家は其家であつた。その頃十四だつた君子と云ふ半玉がもう一本になつて流行つてると云ふ話もなつかしかつた。自分が信州で生んだ子供と同じ名を戀ひしがつてお照はその君子を可愛がつてゐたのであつた。その時から四年經つた。藤枝は老けては見えたがこの頃まだ二十二三であつた。

何時の間にか厩橋も通り越して、雷門の方へとだん／＼に二人は歩いて來た。ふと明りの工合ではつきりとお照の頭髮を見た藤枝は、

「病人にしちや變な頭に結つてるね。」と笑つた。

「今日、氣紛れにこんな髮にしたんですよ。馬鹿なことをしちやつて。飛んだところをあなたに見られましたね。」

お照は仕樣事なく然う云つて自分も微笑した。自分ながらお照は頭髮の廻りが田舍臭くてたまらない氣がした。

藤枝に連れられてお照は觀音の奧の大きな料理茶屋に入つて行つた。きりゝとした眼の動きの素ばしこい茶屋の女中にもお照は氣をおきながら、背の高い藤枝の後に隨いて狹い坐敷の一と間に通されて了ふと、萎縮んだ身體がほつと樂になつてお照は漸く自分に復つたやうな氣がした。お照はその儘緣側に立つて植え込みの奧の燈籠の灯の色を見詰めてゐた。その灯の色がお照には綸のやうに美しかつた。自分が歩いて來た何所の土地のお茶屋さんでゝ、こんなに奇麗な灯の色をその庭の內に見たことがないと思つた。灯は闇の中にしつとりと桃色に沈んで柔らかな美しい哀傷を含んでゐた。お照はその色にぼん

やりと見恍れてゐた。お照のその時の感情も、灯の色と同じやうに美しい哀傷を含んで沈んでゐた。

藤枝が半巾で鼻を拭きながら傍に來た。その半巾から強い香水の匂ひがお照の方に散つた。お照は唯若々しい憧がれ心地にぼつとしながら、やがて藤枝といつしよに坐敷の内に入つた。二人が向ひ合ふとお照は小田原で呼ばれた頃の藤枝の昔を思ひ返しながら、その時分に比べて同じやうな男の様子などを眺めた。其の頃東京の財産家の息子と聞いて、色と慾から一生懸命になつた女もゐたが、藤枝は何時も奇麗に遊んで歸つて行つた。それを又一層意地にさわらして、東京にはどんなに奇麗なお馴染みがあるのだらうなどゝ云つて、羨しがる妓たちを見ると、お照はいつも馬鹿らしく思つた。お照は田舍藝者を藝者の數にも入れてゐないやうな藤枝の思ひ上つた様子が時々癪にさわつて、お照は藤枝には態とつんとしてゐるやうな時があつた。お照が其様ことを思ひ出してゐると、藤枝は二人ぎりでは淋しいと云つて、知つてる藝者に口をかけさせた。お照はぴりつとする程其れを不快なことに思つたけれ共、止める譯にも行かなかつた。さうして藤枝と云ふ客は、始終心の底で何となく人を調戯つてでもゐるやうに思つた昔の記憶が、お照の胸にまざ〳〵と返つて來て、お照は藤枝をふと恐い男のやうに思つた。つい今の先きの灯の色に惹入れられた物惱ましい情が消えて、お照は好い夢から覺めたやうに心が冷めたくなつた。

口をかけた藝者は直きに來た。十七八の、豐つくりとした藝者だつた。藤枝は女を見ると急に巫山戯だして女を笑はせた。それが、昔の自分たちのお座敷で見た時のお坊ちやんらしい藤枝と少しも變らないと思つてお照は見てゐた。

「ちよいと、惡るふざけはお止しなさいつてば。來る早々。」

藝者はきやつ〳〵と苦しがりながら、膝を崩して轉げ廻つた。大事の鬢を潰して若い藝者は藤枝に苦情を云つてゐた。

お照はこんな中に挾まれてゐるのが苦しかつたけれ共、歸るにも歸れない羽目になつて辛抱してゐた。一人で飲んだ醉ひが出てくると、お照は藝者の三味線を貸して貰つて久し振りで糸の音を彈いて見た。藤枝に望まれて二たつ三つ上品な古るい端ものをやつてゐると、この調子の底の方から淋しい〳〵思ひが湧いてきて、お照は涙がこぼれるやうな氣がしたので止した。藝者は感心して聞いてゐた。

自分も若い時に東京から出てゐたら、もうちつと人並みに世間も渡れて來たらうにと、お照は自分の昔を省みながら若い藝者の擧動を見た。十五の時に田舍に賣られてから自分はもう都の生粋な藝人仲間にも入れなくなつたとお照は思つた。相生と云ふところに行つた時、好い藝を持つた其所の老妓について執拗いほど自分の藝に丹精したけれ共、そんなものは何所の土地に行つても餘り役にも立たなかつたことなどを考へながら、お照はこの若い藝者の仕合せを密かに羨ましく思つた。

「今、東京ぢやどんな物が流行つてるんでせう。」

お照は迂濶り自分の地を出して云つたが、若い藝者は氣が付かずに、拙い自分の三味線の云ひ譯をしながら今の流行唄を彈いて聞かせた。お照には別に珍らしいと思ふものもなかつた。自分が彈いて、藝者に歌はせたりする頃には、お照も少し賑やかに浮いてきた。

「さあお歸り。」やがて藤枝は云つて、藝者の前に纏頭を投げ出してやつた。

「歸つてもいゝよ。」

「私まだ歸りませんわ。」

「お客が歸れつて云ふのに藝者が歸らないと云ふのは妙だね。おい。人の何とかの邪魔をするもんぢやないよ。」

「あゝ然う。氣が付きませんでしたわね。ぢや歸るわ。」

藝者はお照に優しい挨拶を殘して立つて行つた。

「御迷惑さま。」

後で藤枝はお照を見て笑つたが、

「何だか昔より陰氣になつたね。」と昔を思ひ出すやうにして云つた。お照は陰氣になつたと云はれて、急に手酌で酒を飲み初めた。それが藤枝の氣に入つて、藤枝はあとから〳〵と注いでやつた。

「陰氣になつたり――くすぶつたり、もう浮む瀨はありませんねえ。」

お照は笑ひながら云つたが、何となく男の優しい情に動かされて、その胸に最前のやうな柔らかな美しい哀傷が流れてきた。ぴたりと藤枝の顏を見詰めたお照の醉つた眼が、熱い戀を投げるやうに微動してゐた。

十一

お照は目が覺めた。顏を上げると、黑の塗り骨の行燈の中に電氣がぽつと點いてゐて、四邊を籠めるやうに薄暗く光りを漂はしてゐた。枕許の亂れ箱の中に脫ぎ捨てゝある着物が、自分のと藤枝のだとお照は不思議に見守りながら男の方をそつと見た。藤枝の半巾がそこいらに投げ捨てゝあると見えて、昨

夜の香水の匂ひが何所からともなく通つてきた。

お照はそつと起きて室の外に出た。緣側を傳つて行くと、小用場の傍の戶はもう殘らず明いてゐて、曉方の光りが射してゐた。高いアーク燈の灯がまだ夢を帶びながら薄褪めてゐるのが其所から見えた。褞袍を引つかけた藤枝が後から來た。お照は一人で湯殿へ下りて行つた。藤枝はお照を見るとお互の內密を忍び合ふやうな顏をして笑てつ通つて行つた。

昨夜藤枝を引つ張つて、向島の土堤を步いてゐた頃はお照はまだ足がふらつくほど醉つてゐた。川の水の上に月の光りが降りかゝつて、彼方河岸が濃い淺黃に霞んでゐた。灯がその中に染徹んでぽつとしてゐた。月の光りは神經質に二人の行手にも戰えてゐた。

「私は引つ張られて來たんだよ。」

「えゝ、私が引つ張つて來たんですともさ。」二人はこんな事を云ひながら、この家の門を入つた——

お照が座敷に戾つてくると、室內はまだその儘になつてゐた。薄暗い明りの影に、亂れ箱の赤い色などが媚いて、お照は昨夜の夢の情緖の中にその儘又引き入れられさうな氣がした。藤枝は床の上に座つて煙草を吸つてゐた。

「一度限りで逢はないつもりかい。」

少時してから藤枝が彼方を向いた儘で冗談のやうに云つたが、お照は默つてゐた。藤枝の後姿を此方から眺めてゐると、自分の戀ひ情のまゝ、お照はさま〴〵な愛の手管が心の上に浮んでくるけれ共、お照はそれを思ひ捨てるやうにして藤枝の傍にも行かずにゐた。女中が來て、戶を閂けてくれると、自

然とお照の心も白々とした。

それでも朝の酒に微酔つて、お照は晝頃までぐづ〳〵と藤枝と一所にゐた。藤枝が湯に入つた時に、お照は漸く思ひ切つて此家の勘定を濟ましたり、藤枝の歸る車まで云ひ付けておいて、藤枝の氣の付かない間に自分は先きに其家を出た。外は今日も晴れて風立つてゐた。

歸途にお照は信三郎の宿を尋ねて、自分で寄つて見た。殘つてる金をすつかり渡して、奇麗に信三郎と別れて行かうとお照は考へてゐた。薄暗い格子の奥から大きな丸髷に結つた女が出て來て、

「信さんは今朝早く迎ひの人と一所に水戸へ歸りましたよ。」

と云つた。女は子供を抱きながら障子の傍に中腰になつて、外のお照の姿を見た。

「昨晩何所かへ出かけたやうな樣子でしたらうか。」

「昨夜は、なんでも九時頃に歸つて來たやうでしたが。」

お照は狹い土間の下駄箱の上に、石菖の鉢がのつてゐるのを淋しく見詰めて立つてゐたが、やがて其家をはなれた。うか〳〵と歩いて來ると偶然お菅の家の前に出てきた。お菅の家は誰れも居ないやうにひつそりと格子が閉まつてゐた。二階を見上げると、軒に日光を受けながら、白い障子が暗く陰氣に閉めきつてあつた。

お照の家では一同が寄つて騷いでゐた。お近も音吉も手分けして心當りを一軒づゝ探して歩いたりした。音吉は先きから先きを廻つてまだ歸らなかつたが、お近は勞びれ切つて今しがた歸つて來たばかりのところだつた。

「第一おつかさんが愚圖だからさ。」山岡屋の女房は顏色を變へて怒つてゐた。

「聽る足と逃らかつちまつたに定まつてゐるとも。何うも昨日からお照さんの樣子が可笑しいと思つてゐたが、私も長年世話をして手にかけてる子だし、何しろ信用しきつてるんだからね。まさか人を困らせるやうな事もしないだらうと思つてゐたんだのに、お照さんもよく〱魔がさしたと見える。——主人の方へ何う云つていゝか困つちまつたねえ。」

桝吉もぼんやりと火鉢の前に坐つてゐた。顏を仰向けて煙管の吸口を頰に當てゝは考へ込んでゐた。皺んだ咽喉から結喉が高く出てゐた。お近も女房の執り成しやうがなかつた。福井町の家にはあれ限り來なかつたと云ふことが、お照の行方を一層むづかしいものに一同に思はせた。

そこへお照が昨夜の姿のまゝで歸つて來た。お照はみんなを見ると笑ひながら入つて行つた。

「おや、歸つて來たよ。」

女房は小聲で云ひながらお照を睨むやうに眺めたが、お照の傍に立つて來て、

「お前さん、狐でも憑いたんぢやないか。何うしたつて云ふんだい。」と怒罵つた。

「あんまり人を馬鹿にしてるぢやないか。私は主人にも面目がなくつて、取つゝなくつても好い機嫌を取つたりさ、ほんとにもう、何樣に氣を揉んでるか知れやしない。主人だつてお前さん、あんなに人の好い人だけれ共今日は火のやうに怒つてるよ。お前さんの爲に、一週間ゝ無駄な宿賃を拂はせられてるぢやないか。お前さんもいゝ年をして、好い加減男にのろくなつてるもんだねえ。」

「何うも濟みません。昨夜思ひがけない人に逢つて。」

「思ひがけないも何もあるもんかね。」

「ほんとうに氣を揉ませたな。」

お近は溜息をつきながら女房に茶など汲んでやつた。お照は太郎を見付けると、急に抱き上げて、高い〳〵をしながら何時までもその顏を見てゐたが、胸がふさがつて涙が流れて來た。自分の顏に太郎の顏を押付けると、その涙で太郎の小さい顏が滑べつた。お照は太郎をそこに下ろして、半巾を出さうとすると藤枝の名刺と一所に藤枝の半巾が手に觸つたので、お照はその半巾を取り出して涙を拭きながら火鉢の前に來た。昨夜の香水の匂ひがお照の鼻に染みた。

「さあ早く支度をして。この上飛ばないやうに私はお前さんの腰に繩をつけて引張つて行くんだからね。」

お照は女房の言葉を聞きながら、父親に汲んで貰つた茶を飲んだ。

「ぢや行くよ。」お照は立ち際に紙入れにあつた金を殘らず母親にやつて「太郎のお小づかひだよ。」と云つた。お照は女房に連れられて直ぐに家を出た。

「おいら太郎を連れて停車場へ行くかな。」

「來ない方がいゝよ。却つて來ちやいけないよ。」と女房は邪慳に云つた。

「北海道へ行つたら、お照さんは又いろんな男に惚れこんで苦勞をするんだらう。」

とショールを卷きながら又お照に云つて女房は笑つた。

「男にでも惚れてゐなくつちや、とても生きちやゐられないから。」

お照は涙のにぢんでくる眼で明るい外を見ながら云つた。通りすゝ歩いて來てふと振返ると、曲り角の質屋の梅の木の下に、太郎を負ぶつたお近が見送つてゐた。

（終り）

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町　東京堂
仝　神田區裏神保町　上田屋
仝　京橋區尾張町　東海堂
仝　京橋區元數寄屋町　北隆館
仝　京橋區西紺屋町　良明堂
仝　日本橋區本石町　至誠堂
大阪市北區梅田町　盛文館
仝　東區京町堀　太華堂
仝　東區瓦町　東枝支店
京都市七條停車場前　三共社

○定價　金貳拾五錢郵税金貳錢（海外郵税拾貳錢但支那を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓五拾錢	金貳圓拾錢
十二冊	金參圓	金四圓貳拾錢
以上郵税共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十七册分の割合なれば一ヶ年分御註文の方は內國は金四圓二拾五錢外國は金五圓九拾五錢の割となる

送金注意

一誌代郵税は一切前金とす、金切の場合は發送を止むべし
一郵便爲替にて御送金の場合は指定を本郷西片町十番地中央公論社とし拂渡局を東片町局と指定あれば途中盗取さるゝ虞なし
一振替貯金口座は東京三十四番なり
一郵券代用一割增の事
一集金郵便の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
　一金一圓迄　金六錢（集金委託料及送達料共）
　一金五圓迄　金七錢
一受領證請求は必ず返信料を要す

大正四年二月廿七日印刷納本
大正四年三月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　高木酉三

發行所　東京市本郷區駒込西片町十番地　中央公論社
電話長下谷九一九
振替東京三十四番
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場

「お照。」

その時、信三郎が呼んでると思つたが、お照は直ぐに返事をすることが億劫で默つてゐた。信三郎はつゞけてお照を呼んだ。

「なに。」

「いつまで此家にゐる譯にもゆくまいな。何うだらう。」

「構やしませんよ。」

お照は自分の刻みを吸ひつけて、それを信三郎に持つて行つてやつた。

自分の傍へ來たお照を見ると、信三郎は低い聲で切迫詰つた二人の上を相談し初めた。信三郎はお照の決心さへつけば、自分はどんな手段をしても最後に有るだけのものを養家の方からひき出してくる覺悟をしてゐた。さうして一時でもお照と一所になつて、何所かへ隱れて住まうと信三郎は堅く思ひめぐらした。

其れを聞くとお照は昨夜男が、二人ぎりで何所かへ逃げて行かうと云つたことを物憂く思ひ出したが、今はそれを考へ〱見ることも、お照は面倒で惱ましかつた。重い頭を垂れて何か考へを辿らうとすると、心がぼうとなつて、額の上が暗くなつてくるやうな氣がした。

「そんな話はあとにしませうよ。」

「けれどもお前、今日に押し詰まつてることぢやないか。」

「今日いちんち位、どうにだつてなりまさあね。」

お照はふと家のことを思ひ浮べた。昨夜自分が歸らなかつたので母親のお近が一人してやきもきと氣をもんでるだらうと思ひやつた。

「私にはあゝ云ふ意久地なしの親父やおふくろがあるんですからねえ。自分の身體のやうでゐて、私の身體はまるで親の身體なんだから。」

自分が居なくなれば、あの父親や母親が直ぐにも食べることに困るだらうとお照は思つた。何所の果てへ行つても、自分が稼いでさへゐれば、親たちを困らせるやうな事はなくつて濟むけれ共、自分が男と一所に長く隱れてしまへば、親だちを抛つておかなければならなかつた。お照にはそれが思ひ切り兼ねた。どんな土地に行つてゐても、どんなに一人の男に憂身をやつしてゐる時でも、お照は親の無心を捨てゝおいたことは一度もなかつた。何所へ行つてゐても、その親たちの不憫な影がお照の胸からはなれたことがなかつた。お照はふとその考へに深く落ちた。

「お前さんもお腹が空いたでせう。」

お照はふらつく足を踏んで階下へおりて行つた。お菅に云ひ譯をしながら、膳拵へをしてそれを幾度にも二階に運んで行つた。殘つてゐる酒を少し燗けてお照はそれを飲んで見たが醉ひが出なかつた。食べる物の味が二人ともまづかつた。

お照は箸を取りながら、いつとなく、最前の考へのつゞきを辿つてゐた。信三郎と一時は人にかくれて一所になつても、自分たちが直ぐにその日の生計にも差支へるやうになるのは知れてゐた。意久地のない信三郎の前途は今から見えるやうであつた。いよ〳〵どん詰りになつてから、自分が又稼ぎにでも

出なくてはならないやうになる事もお照にはわかつてゐた。その時になつて二人が身慘めな緣切りをする姿も思ひやられた。

男とは一と口も物も云はずに食事をすますと、お照は一服してから、又汚れたものを片付けに下りて行つた、外はもう日が暮れかゝつて、暴れを含んだ雨がまだ續いでゐた。持つて來たものを奇麗に始末をして茶の間に入つて見ると、柱の大きな時計の針が、五時十分のところを指してゐるのがお照の目に付いた。電氣が明るく點いてゐた。

八

兎に角今夜は一旦別れるつもりで、あの時から又床に入つてとろりとした。階下では男の客があつたやうであつたが、お照がおどろいて目を覺ました時には、階下には人聲もなかつたし、もう何時となく夜が更けて行くやうに近所が森としてゐた。

お照はぼんやりした顏で下に降りて來た。時計を見ると、もう十一時を過ぎてゐた、茶の間には昨夜のやうにお菅の寐蒲團がふく／＼と敷いてあつて、中には炬燵も入つてゐた。昨夜は氣が付かなかつたが、元祿時代の遊女が双六を弄んでゐる美しい繪の二枚折がその枕許を圍つてゐた。お菅は書付けを二三枚膝の上に置いて、計算をやつてゐた。お菅はぼつ／＼と高い金を人に貸し付けてゐるので、人から利息などを持つてこられると、斯うして迂遠な勘定に氣を取られて時間を過ごした。

「十一時過ぎだつて？」

お菅もおどろいて時計を見た。

「すつかり遲くなつちやつて。」
「ほんとに困るねえ。だがもう歸るんだらう。雨もやんだよ。」
「歸るつたつて今からおつかさん。道も惡るいし、御迷惑でももう一と晩御厄介にならせて下さいな。」
　お菅は蒼い顏をしてゐるお照を見詰めながら、
「そりやお前さんの身體だから私は構やしないが、ほんとにお前さんにも呆れたもんだね。そんなにあの男に惚れ込んで何うするんだい。つまらない所に引つかゝつてゐないで、さつさと定めた土地へ思ひ切りよく出て行つたら宜さそうなもんだね。あの男だつて然うぢやないか。百のことも出來もしないで何時まで未練らしくお前さんの身體にくつゝいてるんだらう。」
「どうせ別れるんですから。」
「どうせ別れるんならさ。新奇の主人にだつて然う迷惑をかけない算段をして一日も早く彼方へ行つたら好いぢやないか。話は定めておきながら、延ばされてゐちや主人だつて氣を惡るくするらね。今夜宿るもいゝけれど、明日になると又歸れやしないよ。私だつて迷惑だね。」
　お菅に何と云はれても、お照は斯うしてる間も男に未練が出てきて今直ぐと云つて別れる氣がしなかつた。
「明日はきつと歸りますよ。私だつてそれほど鈍くなつてる譯ぢやありませんよ。おつかさんが云ふやうにさ。」
「隨分のろくなつてるやうだね。其れがお前さんの病ひなんだから仕樣がない。私は若い時からそんな

事は嫌ひだつたから。」

入れ歯を揃へて、眞つ黒に鐵漿をつけてゐる艶の好い歯をちらと見せてお菅は笑つた。

「だから年を老つてから樂をするんでせう。おつかさんの寐支度を見てゐると、ほんとに良いところの御隱居さん見たいぢやありませんか。お金はあるし、家はあるし、おつかさんも氣樂なもんねえ。」

「若い時の心がけ一とつだよ。」

「ほんとにねえ。」

お照は漸くもう一と晩の宿を頼んで、安心して二階に行つた。

「明日はきつと早くお歸りよ。」

お菅は二階へ聞こえるやうな聲で云つた。

「えゝ、起きると直ぐ――」

お照も梯子段の中途から元氣の好い聲で返事した。

お照は今しがたの一と寢入りで、氣が爽やかになつて晴れ／＼としてゐた。薄いショールを頭に卷いて烟草を買ひに出たが、やがて壽司など持つてお照は歸つて來た。お照はそれをお菅にも分けて、自分も其所で二たつ三つ摘んでから、殘りを信三郎のところへ持つて行つた。

斯うして二人が靜に落着いて、明るい灯りの下で今夜の時間を樂しんでゐると、お照は又ふつつり北海道なぞへ行くことは厭だと思ひこんだ。土地は何うても、今までの稼業をつゞける事が思つても厭はしくなつた。

「私はいつだつて好きで藝者をしてゐたことがない。」

お照がいつも誰れにでも云ふやうに、この厭な藝者稼業の中に又何年と身體を縛られに行くことを思ふと、お照は辛かつた。

「北海道へは行きたくない。」

お照はつく〴〵と身をふるはす様に獨り言を云つた。

「その話なら、行かないことに極めてしまへと云つてるのに。」

「主人から半金受取つたんですからね、それだけ返せば約束を流したつてかまはないんだけれど。」

「だから私が拵へると云つてるのに。」

信三郎は養家の家を抵當に入れることも考へてゐた。四五日經てばそれで二三百の金は出來るに違ひなかつた。

「何うにかして二三日かくれて辛抱してゐる間には私は拵へてくるつもりだから。」

然う云はれると後は何うなつても、一時その金で今の境遇を逃れて見やうかと云ふ氣にもなつてお照は迷つた。だがその前途は知れてゐた。前途のことを思ふと平氣な心持で男に縋ることもできなかつたが、

「よく考へてはつきりと心を決めてごらん。私には兎に角それだけの成算はあるのだから。」

と信三郎が頼母しく、男らしい様子で云つたのを見て、お照は心から嬉しさを覺えた。

そうしてその金で今度の話を救つて貰ふことにすると、お照は重荷が下りたやうに胸が安らかになつ

た。一度腹を定めた信三郎はおなじやうに心が活き〳〵としてきてすべてが伸びやかになつた。明日は早くその儘で國へ歸ることや、その間お照は、一度出たことのある小田原の知り人のところに隱れてゐることなどを二人は相談した。夜が明けたらお照も此家から小田原へ眞ッ直ぐに行かうと考へてゐた。金のないことに氣が付いたが、其れは持つてゐる小さい指輪を中途で何うにでもして行かうとお照は思つた。

床へ入つても二人は面白く昔の話をした。お照は時々小さく笑つた。二人が馴染み初めた頃は、信三郎にはまだ關係の絕れない女が居た。その女が他に男を持つたことをお照は探り出すと、信三郎の前にわざ〳〵その女を呼び出して、お照が素ッ破ぬいて女を泣かした事などがあつた。その時信三郎は、お照が一と目見て惚れ込むやうな好いた姿をして居た。お照はそんな幻を描いてゐた。そうしてお互に一日でも顏を見ないでは濟まされないやうになつた頃は若い盛りであつた。その翌る年の秋の末に太郎が生れた。狹い町で然う云ふうるさい浮名のひろがつた中を、お照は何うやら腕一とつで稼ぎ通した。

信三郎が寢入つてからも、お照は一人で目が冴えて眠られなかつた。そうして今夜に限つて自分の生んだ子供たちを淋しくお照は思ひ浮べてゐた。一番最初に生んだ子は女の子であつた。自分の年が十九、男は二十才であつた。その子は男の親の方に引取られてから三才で亡くなつた。亡くなるまでまだその土地にゐて、お照はその子の藥參りをしてやつた。それに琴江と云ふ名がついてゐた。

その次ぎの子も女の子であつた。その相手の男にも妻も子もあつて、二人はやがて別れてしまつた。その子は男の方に引取られてその家で育てられてゐた。その男と別れた當座、産後のお照は長い煩ひを

した。お照には何時までもその男が忘れられなかつた。

二十四の時に生んだその子はもう六才になつてゐる。お君とつけた名を取り代へたと聞いたばかりで、何と云ふ名がついてゐるのかお照は知らなかつた。信州の山の中に無事に育つてゐるその子の事などを、お照はそゞろに懐しく思ひ忍んでゐると、ふと太郎の顏が見えた。

九

曉方から眠りついたと思ふ暇もなくお照は信三郎に起された。その時に階下から調子高に物を云つてゐるお近の聲が聞こえた。

「おつかさんが來てるんぢやありませんか。」

信三郎は其所に起上つてお照の顏を見ながら默つてうなづいてゐた。お照は周章て起きた。さうして、母親が此所へ上つて來ない内にと思つて急いで仕度を濟ますと階下へ降りて行つた。

「お照。お前にも呆れたもんだな。」

お近は太郎を脊負つた儘で坐つてゐた。お照を見ると顏を顰めながら低い調子でお近は云つた。

「山岡屋のおかみさんは昨夜一時過ぎまでお前を待つてゐたんだよ。まさか昨夜は歸つてくるだらうと思つてゐるのに。」

お音は口を出さずに、火鉢の前で鷹揚らしく長煙管を取り上げてゐた。東の窓に朝日が眩ぶしくいつぱひに射してゐた。お照はその光りに眼を向けてゐられなかつた。

「今朝もおかみさんはもう家に來て待つてゐるんだよ。おかみさんにも氣の毒だあな。」

「直ぐ歸るよ。一と足先きへ行つておくれ。」
お照は立つた儘で考へながら云つた。
「直ぐと云つたつて駄目だよ。おつかさんと一所に歸んな。一と足先きも後もあるもんぢやないさ。」
お近は然う云つて動かなかつた。お照は默つて二階に引つ返して行つた。着物を着代へた信三郎が心配らしい顏をして其所に坐つてゐるのを見ると、
「あの通りおつかさんかやかましいから、一寸家へ行つて來ますがね。もう一度何うかして今日中に逢ひたいものだけれど。」
二人は少時考へてから、夜の六時頃に淺草橋で待ち合せて逢ふ約束をした。お照は信三郎を殘しておいて下に來た。
「あつちに行つたら身體を大切にして能くお稼ぎよ。」
お菅は歸る時一と言お照に云つたぎりだつた。お照は禮を云ふのも間の惡るい氣がしてお近と連れ立つて外に出た。
「太郎の親父さんだつて云ふぢやないか。」
五六間歩いて來てからお近が云つた。お菅が話したのだなとお照は思つたが、お照は返事もしないでゐた。空が眞つ蒼に晴れてゐた。日がちか／＼と地上に光りの波を描いてゐた。
「困つた人たちだな。」
お近がのろく歩きながら呟いてゐた。お照は電車に乗つてから、お近の脊中の太郎をあやし詰めにあ

やして歸つて來た。

　家の傍へ來ると、山岡屋の女房が門に出て、表の方を眺めてゐた。路次を入つて來た二人を見付けると、女房は笑ひながら先きに家内に入つて行つた。レウマチが一層募つて、仕事を休んで寐てゐた桝吉は、二人が歸つたと聞くと起きて來て火鉢の前に坐つた。

「やつぱり柏谷の家にゐたのよ。」お近が調子高な聲を出すと、

「そりや好かつた。」と桝吉が云つた。

「何しろ髪を結はなくちやいけないね。」とお照の後姿を眺めながら女房は云つただけであつた。女房は怒つた色も見せなかつた。やがてその家を聞いて自分で髪結を迎ひに出て行つた。

　お照は離れにも構はずに日當りの好い奥の坐敷へ入つて蒲團にくるまると、二日の寐不足と疲勞が出てお照はもう身體も動かせなかつた。太郎が何時の間にか室内に這つて來たのを、お照は引寄せてしつかりと抱き締めながら、いつそ斷念めて北海道へ行つて了はうか。それとも隙があつたら小田原へ身を隱さうかと、夢現のやうに思ひ煩つてゐる内に、針で刺されるやうな落着かない眠りにその儘落ちてしまつた。

髪結が來たと云つてお近に呼ばれた時は十二時を過ぎてゐた。お照はくら〳〵する頭を押へながら、漸くお近が出して呉れた鏡臺の前に坐つて彼方を見ると、山岡屋の女房が其所に居て笑つてゐた。

「お照さんは大分お疲れだと見えるね。」

　女房は袂から、根掛けの入つた袋を抛つてよこした。中から松葉色の細物が出た。女房は髪結に潰しに結ふやうに云ひ付けてゐた。お照はそんな髪にはしたくないと云つて爭つたけれ共女房はきかなかつた。

買物の重い髪ができた頃に、お近は太郎を脊負つた儘で大きな包みを抱へて戻つて來た。今日女房から受取つた金の中から、お近は女房と相談して入り用なものだけを、預けたところから抜いて來たのであつた。お照は其方には眼もやらなかつた。氣に入つたやうに出來なかつた髪を散々弄りちらしてから、お照はふいと湯に行つた。

その行きにも歸りにも、考へ込んでゐたお照はふつと一瞬間の身の自由をはげしく感じてくると、山り角などで迂亂に眼を配りながら幾度も足を止めて見た。

「今この隙に行つてしまはう。」お照は幾度も然う思つた。然う思ひつゞけながら、足は自然と家の方に吸ひつけられて、お照はやはり家に歸つて來た。

山岡屋の女房の姿は見えないで、お近が一人でお照の持ち物を始末しながら行李に入れてゐた。積まつた行李へ桝吉が手傳つて繩をかけてゐた。三味線も二挺、胴を折つて箱に入れてあつた。父親はその箱を又行李に入れてゐた。お近はお照に着てゆく着物を開いて、それだけを除けると後の品を又袋に詰めた。

お照は太郎を呼んで自分の膝の上に乘せながら、親たちが荷拵へするのを眺めてゐた。太郎が手に持つてゐた鹽煎餅を取つて、それを自分の口で養つてやつたり、自分の豚がどき／＼と胸に響くほど太郎を強く抱いたりした。弱々した蒼白い太郎の頬は、今日も食べ物の滓で黒く汚れてゐた。お照は又そわそわと太郎を負ぶつて玩弄など買ひに外に出て行つた。近所の女房たちに出逢つて、太郎にお愛想を云はれたりする間、お照は默つて立止つた儘で遠い空を眺めた。

夕方、お近の拵へてくれた膳に向つて、お照が朝からの飯を濟ましてゐるところへ、山岡屋の女房が

やつて來た。主人は明日の一番で立つことにしたので、今夜はお照にも主人の宿の方に來てゐて貰ひたいと云ふ主人の傳言を云ひに來たのであつた。お照は後から行くことに約束して、女房はお照の行李や千代田袋などを車に乘せて、自身で主人の宿の方に持つて行つた。

十

抱へ主の方から受取つた最後の金も、もう餘つ程減つてゐた。お照はその半分を母親に渡した時、自分が最初氣付いたやうにこの殘りの內から幾分でも信三郎に渡して、せめて國へ歸る身姿だけでも舊のやうに調へるやうにしやうとお照は考へてゐた。そうして一度信三郎に逢つてから、直ぐその足で小田原へかくれて了つても好いと思つた。

茶縞の荒いお召の上に黑の羽織を着て、久し振で仇な姿になつたお照は、コートも品の好いのを着て親たちに別れを告げた。もう六時を過ぎてゐるのでお照は氣が急いた。太郎を負ぶつたお近が路次の出外れまで送つて來た。

別れる時、太郎の手をしばらく口に含んでからお照は其れを放した。お照の眼に何と云ふこともなく涙が湧いてきた。

「明日の朝は何時だかな——おいらは太郎を連れて停車場へ行くからな。」

お照は然う云つた母親の聲を耳に殘しながら步いて行つた。

淺草橋へ來た時は何時頃か分らなかつたが、約束した場所に信三郎の姿は見えなかつた。お照は人通りの多い橋の上を二三度往き復りしてから、薄寒い氣に迫られなゞら明りの多い賑やかな町の方に知ら

ず〳〵歩いて來た。お照は信三郎の泊つてゐると云ふ親戚とかの家へも行き兼ねて迷つた。信三郎に堅く禁められてまだ一度もお照は其家へ顏を出したことがなかつた。

其邊にゐる車夫にでも賴んで、信三郎を呼び出して貰ふことに定めて、急いでお照は再び橋を渡り返して來た。暗い廣い道路を突つ切つて、灯のこまかな人道の方に移つて行かうとして横斜に歩みを早くしてくると先方も橋の方へ横斜に道路を突つ切つて來た男とお照は摺れ違つた。男は長く外套を被てゐた。その人は足をとめて振り返りながら、

「おや。小照。」と云つた。

小照、と云つた聲が耳にはいつてお照は立止つたが、お照にはその人が誰れだか思ひ出せなかつた。

「東京に來てゐるの。」男の顏に眼鏡が光つてゐた。能く見ると其れは藤枝と云ふ男であつた。小田原に居た頃、東京から始終遊びに來た人で、お照は能くこの人に呼ばれた。

「まあ。しばらく。」

お照が傍に寄つて、懷かしさうな挨拶をすると、男のきりつと緊まつた美しい顏に笑ひが溢れた。

藤枝は、お照が東京にゐる仔細を尋ねながら、お照と連れ立つて二三歩お照の行く方へ引つ返して來た。お照は身體が惡るくて、養生に親のところへ歸つてゐるのだと男に體よく告げた。小田原にゐた頃からお照の身體の弱いことを知つてゐた藤枝には、それが眞實らしく聞こえて女を氣の毒に思つた。

お照は藤枝に伴いてぶら〳〵と歩いた。藤枝は今でも小田原の親類へ時々出かけて行くと、その度に昔馴染の妓たちを呼んで遊ぶ話などをした。お照のゐた新菊の家には、その頃一所だつた妓たちが誰れ

も變らずに今も其所で稼いでる話を聞いて、お照は他人ばかりは變らない世の中だと思つた。自分が隠れてゐやうと思つた家は其家であつた。その頃十四だつた君子と云ふ半玉がもう一本になつて流行つてると云ふ話もなつかしかつた。自分が信州で生んだ子供と同じ名を戀ひしがつてお照はその君子を可愛がつてゐたのであつた。その時から四年經つた。藤枝は老けては見えたがこの頃まだ二十二三であつた。

何時の間にか厩橋も通り越して、雷門の方へとだん〴〵に二人は歩いて來た。ふと明りの工合ではつきりとお照の頭髮を見た藤枝は、

「病人にしちや變な頭に結つてるね。」と笑つた。

「今日、氣紛れにこんな髮にしたんですよ。馬鹿なことをしちやつて。飛んだところをあなたに見られましたね。」

お照は仕樣事なく然う云つて自分も微笑した。自分ながらお照は頭髮の廻りが田舍臭くてたまらない氣がした。

藤枝に連れられてお照は觀音の奥の大きな料理茶屋に入つて行つた。きり〳〵とした眼の動きの素ばしこい茶屋の女中にもお照は氣をおきながら、背の高い藤枝の後に隨いて狹い坐敷の一と間に通されて了ふと、萎縮んだ身體がほつと樂になつてお照は漸く自分に復つたやうな氣がした。お照はその儘縁側に立つて植え込みの奥の燈籠の灯の色を見詰めてゐた。その灯の色がお照には繪のやうに美しかつた。自分が歩いて來た何所の土地のお茶屋さんでゝ、こんなに奇麗な灯の色をその庭の内に見たことがないと思つた。灯は闇の中にしつとりと桃色に沈んで柔らかな美しい哀傷を含んでゐた。お照はその色にぼん

やりと見恍れてゐた。お照のその時の感情も、灯の色と同じやうに美しい哀傷を含んで沈んでゐた。

藤枝が半巾で鼻を拭きながら傍に來た。その半巾から強い香水の匂ひがお照の方に散つた。お照は唯若々しい憧がれ心地にぼつとしながら、やがて藤枝といつしよに坐敷の内に入つた。二人が向ひ合ふとお照は小田原で呼ばれた頃の藤枝の昔を思ひ返しながら、その時分に比べて同じやうな男の樣子などを眺めた。其の頃東京の財産家の息子と聞いて、色と慾から一生懸命になつた女もゐたが、藤枝は何時も奇麗に遊んで歸つて行つた。それを又一層意地にさわらして、東京にはどんなに奇麗なお馴染みがあるのだらうなどゝ云つて、羨しがる妓たちを見ると、お照はいつも馬鹿らしく思つた。お照は田舍藝者を藝者の數にも入れてゐないやうな藤枝の思ひ上つた樣子が時々癪にさわつて、お照は藤枝には態とつんとしてゐるやうな時があつた。お照が其樣ことを思ひ出してゐると、藤枝は二人ぎりでは淋しいと云つて、知つてる藝者に口をかけさせた。お照はぴりつとする程其れを不快なことに思つたけれ共、止める譯にも行かなかつた。さうして藤枝と云ふ客は、始終心の底で何となく人を調戯つてでもゐるやうに思つた昔の記憶が、お照の胸にまざ〳〵と返つて來て、お照は藤枝をふと恐い男のやうに思つた。つい今の先きの灯の色に惹入れられた物惱ましい情が消えて、お照は好い夢から覺めたやうに心が冷めたくなつた。

口をかけた藝者は直きに來た。十七八の、豐つくりとした藝者だつた。藤枝は女を見ると急に巫山戲だして女を笑はせた。それが、昔の自分たちのお座敷で見た時のお坊ちやんらしい藤枝と少しも變らないと思つてお照は見てゐた。

「ちよいと、惡るふざけはお止しなさいつてば。來る早々。」

藝者はきやつ〱と苦しがりながら、膝を崩して轉げ廻つた。大事の贅を消して若い藝者は藤枝に苦情を云つてゐた。

お照はこんな中に狹まれてゐるのが苦しかつたけれ共、歸るにも歸れない羽目になつて辛抱してゐた。一人で飮んだ醉ひが出てくると、お照は藝者の三味線を貸して貰つて久し振りで糸の音を彈いて見た。藤枝に望まれて二たつ三つ上品な古るい端ものをやつてゐると、この調子の底の方から淋しい〱思ひが湧いてきて、お照は涙がこぼれるやうな氣がしたので止した。藝者は感心して聞いてゐた。

自分も若い時に東京から出てゐたら、もうちつと人並みに世間も渡れて來たらうにと、お照は自分の昔を省みながら若い藝者の擧動を見た。十五の時に田舍に賣られてから自分はもう都の生粋な藝人仲間にも入れなくなつたとお照は思つた。相生と云ふところに行つた時、好い藝を持つた共所の老妓について執拗いほど自分の藝に丹精したけれ共、そんなものは何所の土地に行つても餘り役にも立たなかつたことなどを考へながら、お照はこの若い藝者の仕合せを密かに羨ましく思つた。

「今、東京ぢやどんな物が流行つてるんでせう。」

お照は迂濶り自分の地を出して云つたが、若い藝者は氣が付かずに、拙い自分の三味線の云ひ譯をしながら今の流行唄を彈いて聞かせた。お照には別に珍らしいと思ふものもなかつた。自分が彈いて、藝者に歌はせたりする頃には、お照も少し賑やかに浮いてきた。

「さあお歸り。」やがて藤枝は云つて、藝者の前に纒頭を投げ出してやつた。

「歸つてもいゝよ。」

「私まだ歸りませんわ。」
「お客が歸れつて云ふのに藝者が歸らないと云ふのは妙だね。おい。人の何とかの邪魔をするもんぢやないよ。」
「あゝ然う。氣が付きませんでしたわね。ぢや歸るわ。」
藝者はお照に優しい挨拶を殘して立つて行つた。
「御迷惑さま。」
後で藤枝はお照を見て笑つたが、
「何だか昔より陰氣になつたね。」と昔を思ひ出すやうにして云つた。お照は陰氣になつたと云はれて、急に手酌で酒を飮み初めた。それが藤枝の氣に入つて、藤枝はあとから〳〵と注いでやつた。
「陰氣になつたり――くすぶつたり、もう浮む瀨はありませんねえ。」
お照は笑ひながら云つたが、何となく男の優しい情に動かされて、その胸に最前のやうな柔らかな美しい哀傷が流れてきた。ぴたりと藤枝の顏を見詰めたお照の醉つた眼が、熱い戀を投げるやうに微動してゐた。

十一

お照は目が覺めた。顏を上げると、黑の塗り骨の行燈の中に電氣がぽつと點いてゐて、四邊を籠めるやうに薄暗く光りを漂はしてゐた。枕許の亂れ箱の中に脫ぎ捨てゝある着物が、自分のと藤枝のだとお照は不思議に見守りながら男の方をそつと見た。藤枝の半巾がそこいらに投げ捨てゝあると見えて、昨

夜の香水の匂ひが何所からともなく通つてきた。

お照はそつと起きて室の外に出た。緣側を傳つて行くと、小用場の傍の戸はもう殘らず明いてゐて、曉方の光りが射してゐた。高いアーク燈の灯がまだ夢を帶びながら薄褪めてゐるのが其所から見えた。

褞袍を引つかけた藤枝が後から來た。藤枝はお照を見るとお互の內密を忍び合ふやうな顏をして笑てつ通つて行つた。お照は一人で湯殿へ下りて行つた。

昨夜藤枝を引つ張つて、向島の土堤を歩いてゐた頃はお照はまだ足がふらつくほど醉つてゐた。川の水の上に月の光りが降りかゝつて、彼方河岸が濃い淺黃に霞んでゐた。灯がその中に染徹んでぽつとしてゐた。月の光りは神經質に二人の行手にも戰えてゐた。

「私は引つ張られて來たんだよ。」

「えゝ、私が引つ張つて來たんですともさ。」二人はこんな事を云ひながら、この家の門を入つた——

お照が座敷に戻つてくると、室內はまだその儘になつてゐた。薄暗い明りの影に、亂れ箱の赤い色などが媚いて、お照は昨夜の夢の情緒の中にその儘又引き入れられさうな氣がした。藤枝は床の上に座つて煙草を吸つてゐた。

「一度限りで逢はないつもりかい。」

少時してから藤枝が彼方を向いた儘で冗談のやうに云つたが、お照は默つてゐた。藤枝の後姿を此方から眺めてゐると、自分の戀ひ情のまゝ　、お照はさまざまな愛の手管が心の上に浮んでくるけれ共、お照はそれを思ひ捨てるやうにして藤枝の傍にも行かずにゐた。女中が來て、戸を門けてくれると、自

然とお照の心も白々とした。
それでも朝の酒に微醉つて、お照は晝頃までぐづ〳〵と藤枝と一所にゐた。藤枝が湯に入つた時に、お照は漸く思ひ切つて此家の勘定を濟ましたり、藤枝の歸る車まで云ひ付けておいて、藤枝の氣の付かない間に自分は先きに其家を出た。外は今日も晴れて凪立つてゐた。
歸途にお照は信三郎の宿を尋ねて、自分で寄つて見た。殘つてる金をすつかり渡して、奇麗に信三郎と別れて行かうとお照は考へてゐた。薄暗い格子の奥から大きな丸髷に結つた女が出て來て、
「信さんは今朝早く迎ひの人と一所に水戸へ歸りましたよ。」
と云つた。女は子供を抱きながら障子の傍に中腰になつて、外のお照の姿を見た。
「昨晩何所かへ出かけたやうな樣子でしたらうか。」
「昨夜は、なんでも九時頃に歸つて來たやうでしたが。」
お照は狹い土間の下駄箱の上に、石菖の鉢がのつてゐるのを淋しく見詰めて立つてゐたが、やがて其家をはなれた。うか〳〵と歩いて來ると偶然お菅の家の前に出てきた。お菅の家は誰れも居ないやうにひつそりと格子が閉まつてゐた。二階を見上げると、軒に日光を受けながら、白い障子が暗く陰氣に閉めきつてあつた。
お照の家では一同が寄つて騷いでゐた。お近も音吉も手分けして心當りを一軒づゝ探して歩いたりした。音吉は先きから先きを廻つてまだ歸らなかつたが、お近は勞びれ切つて今しがた歸つて來たばかりのところだつた。

「第一おつかさんが愚圖だからさ。」山岡屋の女房は顔色を變へて怒つてゐた。

「惡る足と逃らかつちまつたに定まつてゐるとも。何うも昨日からお照さんの樣子が可笑しいと思つてゐたが、私も長年世話をして手にかけてる子だし、何しろ信用しきつてるんだからね。まさか人を困らせるやうな事もしないだらうと思つてゐたんだのに、お照さんもよく〱魔がさしたと見える。——主人の方へ何う云つていゝか困つちまつたねえ。」

桝吉もぼんやりと火鉢の前に坐つてゐた。顏を仰向けて煙管の吸口を頰に當てゝは考へ込んでゐた。皺んだ咽喉から結喉が高く出てゐた。お近も女房の執り成しやうがなかつた。稲井町の家にはあれ限り來なかつたと云ふことが、お照の行方を一層むづかしいものに一同に思はせた。

そこへお照が昨夜の姿のまゝで歸つて來た。お照はみんなを見ると笑ひながら入つて行つた。

「おや、歸つて來たよ。」

女房は小聲で云ひながらお照を睨むやうに眺めたが、お照の傍に立つて來て、

「お前さん、狐でも憑いたんぢやないか。何うしたつて云ふんだい。」と怒罵つた。

「あんまり人を馬鹿にしてるぢやないか。私は主人にも面目がなくつて、取つなくつても好い機嫌を取つたりさ、ほんとにもう、何樣に氣を揉んでるか知れやしない。主人だつてお前さん、あんなに人の好い人だけれ共今日は火のやうに怒つてるよ。お前さんの爲に、一週間も無駄な宿賃を拂はせられてるぢやないか。お前さんもいゝ年をして、好い加減男にのろくなつてるもんだねえ。」

「何うも濟みません。昨夜思ひがけない人に逢つて。」

「思ひがけないも何もあるもんかね。」

「ほんとうに氣を揉ませたな。」

お近は溜息をつきながら女房に茶など汲んでやつた。お照は太郎を見付けると、急に抱き上げて、高い〳〵をしながら何時までもその顔を見てゐたが、胸がふさがつて涙が流れて來た。自分の顔に太郎の顔を押付けると、その涙で太郎の小さい顔が滑べつた。お照は太郎をそこに下ろして、半巾を出さうとすると藤枝の名刺と一所に藤枝の半巾が手に觸つたので、お照はその半巾を取り出して涙を拭きながら火鉢の前に來た。昨夜の香水の匂ひがお照の鼻に染みた。

「さあ早く支度をして。この上飛ばないやうに私はお前さんの腰に繩をつけて引張つて行くんだからね。」

お照は女房の言葉を聞きながら、父親に汲んで貰つた茶を飲んだ。

「ぢや行くよ。」お照は立ち際に紙入れにあつた金を殘らず母親にやつて「太郎のお小づかひだよ。」と云つた。お照は女房に連れられて直ぐに家を出た。

「おいら太郎を連れて停車場へ行くかな。」

「來ない方がいゝよ。却つて來ちやいけいよ。」と女房は邪慳に云つた。

「北海道へ行つたら、お照さんは又いろんな男に惚れこんで苦勞をするんだらう。」

とショールを巻きながら又お照に云つて女房は笑つた。

「男にでも惚れてゐなくつちや、とても生きちやゐられないから。」

お照は涙のにぢんでくる眼で明るい外を見ながら云つた。通りまで歩いて來てふと振返ると、曲り角の質屋の梅の木の下に、太郎を負ぶつたお近が見送つてゐた。

（終り）

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
仝　神田區裏神保町	上田屋
仝　京橋區尾張町	東海堂
仝　京橋區元數寄屋町	北隆館
仝　京橋區西紺屋町	良明堂
仝　日本橋區本石町	至誠堂
大阪市北區梅田町	盛文館
仝　東區京町堀	太華堂
仝　東區瓦町	東枝支店
京都市七條停車場前	三共社

○定價　金貳拾五錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢但支那を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓五拾錢	金貳圓拾錢
十二冊	金參圓	金四圓貳拾錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、卽ち一ヶ年通計十七册分の割合なれば一ヶ年分御註文の方は內國は金四圓二拾五錢外國は金五圓九拾五錢の割となる

送金注意

一誌代郵稅は一切前金とす、金切の場合は發送を止むべし

一郵便爲替にて御送金の場合は指定を**本鄕西片町十番地中央公論社**とし拂渡局は**東片町局**と指定あれば途中盜取さるゝ虞なし

一振替貯金口座は**東京三十四番**なり

一郵券代用は**一割增**の事

一集金郵便の便法を利用せらるゝ方は、**坐ながらにして誌代の拂込**をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし弊社は直ちに其取扱手續をなすべし

一金一圓迄　金六錢
一金五圓迄　金七錢
（集金委託料及送達料共）

一受領證請求は必ず返信料を要す

大正四年二月廿七日印刷納本
大正四年三月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　高木酉三

發行所　東京市本鄕區駒込西片町十番地
中央公論社
電話長下谷九一九
振替東京三十四番
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 5.25; Single copy 37 sen including
tage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.